

特別史跡

一乘谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅷ

第44次 第17次調査

2000

福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館

口 絵 1 第44次調査



全景（北から）



鉄砲関連遺物

口 絵 2 第17次調査



調査区全景 (南から)



蔵骨器

序

戦国大名・朝倉氏の城下町・一乗谷の繁栄ぶりを最も短い言葉で表現したものに、次の歌があります。

きてみれば柳さくらの花の園 都のけしきたちもをよばじ

これは、天文四年(1535)春、一乗谷を訪れた都の多芸な文化人で、公家の富小路資直が詠んだものでした。一乗谷の往來の賑やかさや景趣・人情に驚き、風流大守と称された四代孝景が泉殿で宴を開いてもてなした座敷の荘厳の立派さや花の咲き揃った花壇を愛でてのことでした。

この『一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ』は、第44次と第17次の発掘調査の報告ですが、その内容は南北幹線道路に面して、いろいろな職人や商人の町屋が軒を連ね、奥の山裾には寺院が集中するなど、先の歌を詠んだ公家の見た当時の町の賑わいを想起させるに充分なものでした。この報告書が戦国大名の城下町の実像を理解する上で、極めて貴重な情報を提供できたものと確信しています。本書が広く活用されて、戦国城下町の理解や研究の進展に役立つことを期待します。

最後になりましたが、事業の実施にあたりましては文化庁をはじめ、県・市関係者ならびに地元の皆様方よりひとかたならぬご指導・ご協力をいただき、感謝にたえないところです。今後とも変わらぬご指導・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長 青木豊昭

目 次

口 絵	
序	
目 次	5
図版目次	6-9
I 事業概要	
1. 調査目的	1
2. 調査の経過	1
3. 調査の方法と調査組織	3
4. 経 費	5
5. 報告書について	5
II 第44次調査	
1. 調査の経過と概要	7
2. 遺 構	10
3. 遺 物	19
4. 小 結	37
III 第17次調査	
1. 調査の経過と概要	39
2. 遺 構	42
3. 遺 物	51
4. 小 結	75
IV 考 察	
朝倉氏の信仰と一乗谷の社寺	81

図 版 目 次

口 絵 (カラー)

- 口絵 1 第44次調査 調査区全景 (北から)
第44次調査 鉄砲関連遺物
- 口絵 2 第17次調査 調査区全景 (南から)
第17次調査 蔵骨器

図 面

第44次調査

- 第1図 第44次調査土層図
- 第2図 第44次調査遺構詳細図 (1)
- 第3図 第44次調査遺構詳細図 (2)
- 第4図 第44次調査遺構詳細図 (3)
- 第5図 第44次調査遺構詳細図 (4)
- 第6図 第44次調査遺構詳細図 (5)
- 第7図 第44次調査遺構詳細図 (6)
- 第8図 第44次調査遺構詳細図 (7)
- 第9図 第44次調査遺構詳細図 (8)
- 第10図 第44次調査遺構詳細図 (9)
- 第11図 第44次調査遺構詳細図 (10)
- 第12図 第44次調査出土遺物 (1)
表土・糜土層
- 第13図 第44次調査出土遺物 (2)
区画44-1・2
- 第14図 第44次調査出土遺物 (3) 区画44-3
- 第15図 第44次調査出土遺物 (4)
区画44-4~9
- 第16図 第44次調査出土遺物 (5)
区画44-4~9
- 第17図 第44次調査出土遺物 (6) 区画44-10
- 第18図 第44次調査出土遺物 (7) 区画44-10
- 第19図 第44次調査出土遺物 (8) 区画44-11
- 第20図 第44次調査出土遺物 (9)
区画44-11・SS495・SS2501
- 第21図 第44次調査出土遺物 (10)
SD500・SD509
- 第22図 第44次調査出土遺物 (11) SD518
- 第23図 第44次調査出土遺物 (12) SD518
- 第24図 第44次調査出土遺物 (13)
SD518・SD2505
- 第25図 第44次調査出土遺物 (14) SD2508
- 第26図 第44次調査出土遺物 (15) SD2508
- 第27図 第44次調査出土遺物 (16) SD2508
- 第28図 第44次調査出土遺物 (17) SD2509
- 第29図 第44次調査出土遺物 (18)
SV2640・SF2552・SF2555・SF2556

第17次調査

- 第30図 第17次調査遺構詳細図 (1)
- 第31図 第17次調査遺構詳細図 (2)
- 第32図 第17次調査遺構詳細図 (3)
- 第33図 第17次調査遺構詳細図 (4)
- 第34図 第17次調査遺構詳細図 (5)
- 第35図 第17次調査遺構詳細図 (6)
- 第36図 第17次調査遺構詳細図 (7)
- 第37図 第17次調査遺構立面図 (1)
- 第38図 第17次調査遺構立面図 (2)
- 第39図 第17次調査遺構立面図 (3)
- 第40図 第17次調査遺構立面図 (4)
- 第41図 第17次調査遺構立面図 (5)
- 第42図 第17次調査出土遺物 (1)
表土・耕土
- 第43図 第17次調査出土遺物 (2) 遺構面
- 第44図 第17次調査出土遺物 (3)
古南北溝・青色整地土下遺構面 (1)
- 第45図 第17次調査出土遺物 (4)
古南北溝・青色整地土下遺構面 (2)
- 第46図 第17次調査出土遺物 (5) 褐色土
- 第47図 第17次調査出土遺物 (6)
木炭層 (1)

- | | | | |
|------|------------------------------|------|-----------------------------|
| 第48図 | 第17次調査出土遺物 (7)
木炭層 (2) | 第55図 | 第17次調査出土遺物 (14)
銅銭拓影 (3) |
| 第49図 | 第17次調査出土遺物 (8) 整地層 | 第56図 | 第17次調査出土遺物 (15)
銅銭拓影 (4) |
| 第50図 | 第17次調査出土遺物 (9)
南北溝SD500 | 第57図 | 第17次調査出土遺物 (16)
銅銭拓影 (5) |
| 第51図 | 第17次調査出土遺物 (10)
溝・石積施設・井戸 | 第58図 | 第17次調査出土遺物 (17)
銅銭拓影 (6) |
| 第52図 | 第17次調査出土遺物 (11)
その他の遺物 | 第59図 | 第17次調査出土遺物 (18)
銅銭拓影 (7) |
| 第53図 | 第17次調査出土遺物 (12)
銅銭拓影 (1) | 第60図 | 第17次調査出土遺物 (19)
銅銭拓影 (8) |
| 第54図 | 第17次調査出土遺物 (13)
銅銭拓影 (2) | | |

写真図版

第44次調査

- | | | | |
|--------|---|--------|--|
| PL. 1 | 調査区全景航空写真 | PL. 17 | 出土遺物 (4) 区画44-4~9 |
| PL. 2 | 調査区全景 | PL. 18 | 出土遺物 (5) 区画44-4~9 |
| PL. 3 | 区画44-1・44-2・44-3全景 | PL. 19 | 出土遺物 (6) 区画44-10 |
| PL. 4 | 区画44-4・44-5・44-6全景 | PL. 20 | 出土遺物 (7) 区画44-10 |
| PL. 5 | 区画44-7・44-8全景・区画44-1~7遠景 | PL. 21 | 出土遺物 (8) 区画44-11 |
| PL. 6 | 区画44-10・44-11・44-12全景 | PL. 22 | 出土遺物 (9)
区画44-11・SS495・SS2501 |
| PL. 7 | SI2532・SX2600・SX2633近景 | PL. 23 | 出土遺物 (10) SD500・SD509 |
| PL. 8 | SD2502・SX2566・SX2579・2580近景 | PL. 24 | 出土遺物 (11) SD518 |
| PL. 9 | SS495・SS2500全景 | PL. 25 | 出土遺物 (12) SD518 |
| PL. 10 | SS2501・SS495近景 | PL. 26 | 出土遺物 (13) SD518・SD2505 |
| PL. 11 | SD500・509・SA2557、SD2508・
SA2558・SV2562全景 | PL. 27 | 出土遺物 (14) SD2508 |
| PL. 12 | 石積遺構近景 | PL. 28 | 出土遺物 (15) SD2508 |
| PL. 13 | 井戸近景 | PL. 29 | 出土遺物 (16) SD2508 |
| PL. 14 | 出土遺物 (1) 表土・排土 | PL. 30 | 出土遺物 (17) SD2509 |
| PL. 15 | 出土遺物 (2) 区画44-1・2 | PL. 31 | 出土遺物 (18)
SV2640・SF2552・SF2555・SF2556 |
| PL. 16 | 出土遺物 (3) 区画44-3 | | |

第17次調査

- | | | | |
|--------|---------------------------------------|--------|--|
| PL. 32 | 調査区全景 | PL. 37 | SA488・523・524・525・526・
527・535近景 |
| PL. 33 | SV491・492・SB525・527・
535近景 | PL. 38 | 区画17-1全景、SB523・524・527・
531・532・535近景 |
| PL. 34 | SD500・502・509近景 | PL. 39 | 区画17-3全景 |
| PL. 35 | 区画17-1全景 | | |
| PL. 36 | SA487・SS496・SI520・SD503・
504・507近景 | | |

- PL. 40 SS498・SX543・544・606・
SF564・571・572・573・575・
576・SD515・517・518・
519・SB556・559・SE564近景
- PL. 41 井戸・石積遺構近景
- PL. 42 石積遺構近景
- PL. 43 第17次調査出土遺物 (1)
表土・耕土 (1)
- PL. 44 第17次調査出土遺物 (2)
表土・耕土 (2)
- PL. 45 第17次調査出土遺物 (3)
遺構面 (1)
- PL. 46 第17次調査出土遺物 (4)
遺構面 (2)
- PL. 47 第17次調査出土遺物 (5)
古南北溝・青色整地土下遺構面 (1)
- PL. 48 第17次調査出土遺物 (6)
古南北溝・青色整地土下遺構面 (2)
- PL. 49 第17次調査出土遺物 (7)
褐色土 (1)
- PL. 50 第17次調査出土遺物 (8)
褐色土 (2)
- PL. 51 第17次調査出土遺物 (9)
木炭層 (1)
- PL. 52 第17次調査出土遺物 (10)
木炭層 (2)
- PL. 53 第17次調査出土遺物 (11)
金属製品
- PL. 54 第17次調査出土遺物 (12)
木炭層 (3)
- PL. 55 第17次調査出土遺物 (13)
整地層
- PL. 56 第17次調査出土遺物 (14)
南北溝 (SD500) (1)
- PL. 57 第17次調査出土遺物 (15)
南北溝 (SD500) (2)
- PL. 58 第17次調査出土遺物 (16)
溝・石積施設・井戸 (1)
- PL. 59 第17次調査出土遺物 (17)
溝・石積施設・井戸 (2)
- PL. 60 第17次調査出土遺物 (18)
その他の遺物
- PL. 61 第17次調査出土遺物 (19)
木製品
- PL. 62 第17次調査出土遺物 (20)
石製品 (1)
- PL. 63 第17次調査出土遺物 (21)
石製品 (2)
- PL. 64 第17次調査出土遺物 (22)
石製品 (3)
- PL. 65 第17次調査出土遺物 (23)
銅銭 (1)
- PL. 66 第17次調査出土遺物 (24)
銅銭 (2)
- PL. 67 第17次調査出土遺物 (25)
銅銭 (3)
- PL. 68 第17次調査出土遺物 (26)
銅銭 (4)
- PL. 69 第17次調査出土遺物 (27)
銅銭 (5)
- PL. 70 第17次調査出土遺物 (28)
銅銭 (6)
- PL. 71 第17次調査出土遺物 (29)
銅銭 (7)
- PL. 72 第17次調査出土遺物 (30)
銅銭 (8)

挿 図

- 挿図1 第44次調査区周辺地形図
- 挿図2 第44次調査区グリッド設定図
- 挿図3 SA2557東壁・SI2533立面図
- 挿図4 第44次調査区画割図
- 挿図5 区画44-1出土取瓶実測図
- 挿図6 埴物師関連遺物写真
- 挿図7 区画44-10出土茶筌出土状況写真
- 挿図8 区画44-10出土茶筌一括出土遺物
実測図・写真
- 挿図9 区画44-11出土鉄砲関連部品
実測図・写真
- 挿図10 SD518出土木製品実測図・写真

- 挿図11 SD2508出土石製品実測図
 挿図12 SD2508出土石製品写真
 挿図13 第17次調査区周辺地形図 (1/2000)
 挿図14 第17次調査区グリッド設定図
 挿図15 第17次調査区区画割図
 挿図16 SD499北側備石立面図
 挿図17 SI520・SA487南面立面図
 挿図18 区画17-1主要建築遺構配地図
 挿図19 出土遺物割合比
 挿図20 遺物分布図 (南北溝以東褐色土中)
 挿図21 遺物分布図 (南北溝以東整地土)
 挿図22 遺物分布図 (南北溝以東木炭層)
 挿図23 遺物分布図 (南北溝以東遺構面)
 挿図24 線刻文土器・瓦質香炉類 (一括)
 挿図25 土釜・仏華瓶
 挿図26 瀬戸・美濃製品 (碗・皿)
 挿図27 青磁香炉・産地不明陶器
 挿図28 朝鮮製壺・砥石類
 挿図29 卒塔婆類 (一括)
 挿図30 卒塔婆
 挿図31 供養板碑

表

- 表1 遺構時期別分類一覧
 表2 第44次調査出土遺物一覧表
 表3 第17次調査出土遺物一覧表
 表4 遺物観察表
 表5 銅銭一覧表

付 図

- 付図1 一乗谷朝倉氏遺跡地形図
 付図2 第44次調査遺構全測図
 付図3 第17次調査遺構全測図

I 事業概要

I 事業概要

1. 調査の目的

一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名越前朝倉氏の城下町として広く知られている。一乗谷には当主の居館である朝倉館を中心として山城、上下の城戸、家臣団の武家屋敷や寺院・町屋群などが、極めて良好に遺存している。この遺跡を国民共有の文化遺産として保護するため、昭和46年、278.0haという広大な地域を特別史跡に指定し、その中心部にあたる平地部の24.0haが公有地化された。遺跡保護の目的は、単に遺構を保存するだけにとどまらず、遺跡を調査研究し、その成果を広く公開して、人々の歴史認識に資することも非常に大切なことと考える。こうした認識に立って一乗谷朝倉氏遺跡を「遺跡をして自ら語らせる」史跡公園とする計画を立案、着手した。この事業は昭和47年3月に策定された「朝倉氏史跡公園基本構想」と、それに基づいて立案された「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」により、計画的かつ継続的に実施され、遺跡を究明する発掘調査とそれに基づく環境整備が両輪となって進められている。

2. 調査の経過

一乗谷が朝倉氏の居城跡であることは古くからよく知られており、近世の地誌類にもその記述がみられる。昭和5年7月には朝倉館と湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園1.4haが国の史跡と名勝に、西山光照寺跡が史跡に指定され、その保護が図られることとなった。戦後、管理団体である足羽町は朝倉館唐門の修理（昭和38年）、英林塚の覆屋建設（昭和40年）の事業を実施すると共に、昭和42年には史跡の保存と活用を計るために朝倉氏遺跡整備事業委員会を設け、環境整備事業3カ年計画を立案して、まず湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の3庭園の整備を実施した。その間、昭和42年12月には山城跡、上下の城戸跡が史跡に追加指定され、指定面積は合計6.8haとなった。翌43年には、朝倉館の発掘調査が実施され、その結果極めて良好に遺構が残っていることが判明し、遺跡の重要性が改めて確認された。一方昭和44年には一乗谷地区の農業構造改善事業が始まり、上城戸以南の地区から工事が着手された。その結果、多量の遺物や遺構が露出し、遺跡は破壊の危機に直面した。この重大性に気づいた文化財関係者は、この事業の中止を求め地元ならびに関係機関と協議した結果、城戸の内と山城を含む周囲の山林の278.0haを国の特別史跡に格上げ指定し、城戸ノ内の住宅地を除く農地の大半を一括全面買収して遺跡を保護することとなった。以前から公有地化された分も含めて公有地面積は約25.0haとなった。広大な遺跡であることから足羽町が実施してきた発掘調査と環境整備を福井県が分担し、福井市（足羽町は昭和46年福井市に合併され、福井市が管理団体となった）はその保護と管理を分担して共同で保存と活用を計ることとなった。そこで県はこの事業の実施機関として昭和47年4月教育庁に朝倉氏遺跡調査研究所を設置、先の計画に基づき、朝倉氏遺跡研究協議会の指導のもとに事業を進めることとなった。

○第1次5カ年計画（昭和42～46年 発掘調査面積6,780㎡）

概要 当初は足羽町が3カ年計画として開始したが、特別史跡に昇格指定されたこととともない、4、

5カ年次から福井県が引き継ぎ実施した。南陽寺跡庭園・湯殿跡庭園・諏訪館跡庭園・朝倉館の発掘調査とその環境整備を主な内容とする。一乗谷の1/1,000の基本図も作成した。

○第2次5カ年計画（昭和47～51年 発掘調査面積18,989㎡）

概要 朝倉館とその漆のほか武家屋敷、寺院、町屋跡など性格の異なる屋敷跡の発掘調査を通じて一乗谷の概要をつかむことに主眼をおいた。環境整備はその地区の平面復元を行った。

『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ』を刊行（昭和50年3月）

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡発掘整備事業10周年記念展』を開催（於岡島美術記念館昭和51年10月）

○第3次5カ年計画（昭和52～56年 発掘調査面積29,310㎡）

概要 第2次5カ年計画で明らかとなった平井地区の武家屋敷群や道路、赤瀬・奥間野地区の町屋群や寺院群を広く面的に調査し、一乗谷の都市計画を解明することに主眼をおいた。環境整備はその面的な整備を行った。また、昭和56年には懸案となっていた出土遺物の展示等を目的とする福井県立朝倉氏遺跡資料館が開館した。

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡環境整備事業報告書Ⅰ』を刊行（昭和53年3月）

開館記念展示図録『一乗谷』を刊行（昭和56年8月）

○第4次5カ年計画（昭和57～61年 発掘調査面積16,513㎡）

概要 赤瀬・奥間野地区の調査を面的に拡大して、中小の武家屋敷や多数の町屋群を発掘し戦国城下町の基本的な性格をつかむことを目的とした。これらの地区を面的に平面復元するとともに、平井地区の武家屋敷を立体復原整備した。

『黒道跡江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』を刊行（昭和58年3月）

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ』を刊行（昭和59年3月）

開館5周年記念特別展「一乗谷と中世都市—まちなみとくらしの復元」開催（昭和61年8月）

同図録『一乗谷と中世都市』を刊行

同シンポジウム「一乗谷と中世都市 都市の構造と生活の復元」開催（昭和61年8月）

○中期第1次10カ年計画（昭和62年～平成8年 発掘調査面積34,353㎡）

概要 上下の城戸など谷内の要所の調査と庭園跡の再調査を行う。また、平井地区の町並み立体復原事業に先だって未調査の山裾側の武家屋敷群を調査する。これらの調査を通して史跡公園としての整備を充実させる。また、西山光照寺跡や御所・安養寺跡など城戸の外、山裾部の調査を行い、城戸の外を含めた一乗谷全体の理解を目的とする。

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ』を刊行（昭和63年3月）

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ』を刊行（平成2年3月）

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡環境整備事業報告Ⅱ』を刊行（平成4年3月）

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ』を刊行（平成5年3月）

『特別史跡—一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ』を刊行（平成7年3月）

第1回企画展「朝倉文化と茶の湯」開催（昭和62年8月）

第2回企画展「石の鬼 一乗谷の笏谷石」開催（昭和63年8月）同図録刊行

第3回企画展「一乗谷のくらしと木」開催（平成元年8月）同図録刊行

第4回企画展「一乗谷と越前焼」開催（平成2年8月）同図録刊行

- 開館10周年記念特別展「朝倉の遺宝」開催（平成3年8月）同図録刊行
- 第5回企画展「越前朝倉氏の誕生」開催（平成4年8月）同図録刊行
- 第6回企画展「一乗谷と職人」開催（平成5年8月）同図録刊行
- 第7回企画展「海を越えて来たやきもの」（平成6年8月）同図録刊行
- 第8回企画展「朝倉氏と織田信長」（平成7年8月）同図録刊行
- 第9回企画展「日本海交易と一乗谷」（平成8年8月）同図録刊行

○中期第2次10カ年計画（平成9～18年 発掘調査面積23,500㎡）

概要 既発掘調査地周辺の未調査地における調査および、雲正寺地区における町割の解明を目的とする。

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅵ』を刊行（平成9年3月）

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ』を刊行（平成11年3月）

『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅷ』を刊行（平成13年3月）

発掘調査開始30周年・特別史跡指定25周年記念特別展「眠りからさめた戦国の城下町」開催（平成9年8月）同図録刊行

発掘調査開始30周年・特別史跡指定25周年記念巡回展「越前朝倉氏・一乗谷」（平成10年7～10月）同図録刊行

第10回企画展「一乗谷の宗教と信仰」（平成11年8月）同図録刊行

第11回企画展「朝倉氏と戦国を生きた芸能者たち」（平成12年8月）同図録刊行

3. 調査の方法と調査組織

調査は、国の補助事業として福井県が直接実施している。その実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～昭和56年8月19日）と、これを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館が設置され、発掘調査および環境整備を行っている。また、その指導のため朝倉氏遺跡調査研究協議会が設置されている。なお平成4年4月館名を福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館と一部改称した。

本報告書に関係する年度の組織を以下に記す。

○昭和50年度（第17次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

- | | |
|-----|--------------------|
| 委 員 | 青園謙三郎（福井テレビ放送社長） |
| ＊ | 大久保道舟（福井県文化財専門委員会） |
| ＊ | 黒板 昌夫（国土館大学教授） |
| ＊ | 田治 六郎（大阪公園協会理事長） |
| ＊ | 戸塚 文子（作家） |
| ＊ | 松下 圭一（法政大学教授） |
| ＊ | 水上 勉（作家） |
| 委 員 | 城戸ノ内町内会長 |

専門委員

- ◇ 伊藤 滋 (東京大学助教授)
- ◇ 岸谷 孝一 (東京大学教授)
- ◇ 木原 啓吉 (朝日新聞社編集委員)
- ◇ 近藤 公夫 (奈良女子大学教授)
- ◇ 重松 明久 (福井大学教授)
- ◇ 田畑 貞寿 (東洋大学助教授)
- ◇ 鈴木 嘉吉 (奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長)

朝倉氏遺跡調査研究所

- 所 長 河原 純之 (考古)
- 次 長 藤原 武二 (造園)
- 文化財調査員 水藤 真 (歴史)
 - ◇ 水野 和雄 (考古)
 - ◇ 小野 正敏 (考古)
 - ◇ 岩田 隆 (考古)
 - ◇ 吉岡 泰英 (建築)
- 研究補助員 南 洋一郎 (考古)
- 事務補助員 吉越 強

○昭和57年度 (第44次調査)

朝倉氏遺跡調査研究協議会

- 青園謙三郎 (福井テレビ放送社長)
- 石井 暹 (東京大学教授)
- 岸谷 孝一 (東京大学教授)
- 木原 啓吉 (千葉大学教授)
- 近藤 公夫 (奈良女子大学教授)
- 重松 明久 (福井大学教授)
- 田畑 貞寿 (東洋大学教授)
- 坪井 清足 (奈良国立文化財研究所所長)
- 戸塚 文子 (作家)
- 水上 勉 (作家)
- 細田 一美 (城ノ戸内町内会長)
- 木村竹次郎 ((社)朝倉氏遺跡保存協会会長)

朝倉氏遺跡資料館

館長	藤原 武二(造園)
次長	中谷 賢(事務)
文化財調査員	水野 和雄(考古)
文化財調査員	小野 正敏(考古)
＊	岩田 隆(考古)
＊	吉岡 泰英(建築)
＊	南 洋一郎(考古)
＊	伊藤 正敏(歴史)
非常勤嘱託	青木 研吾(学芸)
＊	西村 広(事務)

また、発掘調査・遺物整理は多くの作業員の協力により進めることができた。以下にその名を記す。

(発掘作業) 木村正志、斎藤喜代松、谷口仁作、平鍋与津治、藤田忠、細田弥三郎、山根木茂麿、吉川齊、吉川宗男、谷口惣次郎、平井茂左衛門、福岡道藏、福岡義信、藤田武志、山口堅、石田カズキ、石田はまを、石田ミヨ子、石田艶枝、伊予ふじ子、梅田みさを、奥田恵美子、奥田まつえ、奥田ユリ、小林澄子、小林ヒサツ、田中和子、田中トシ子、戸田起世子、福岡敏子、福岡まつ子、前田しなえ、三崎チエ子、山口さだを、今宮ハギ、上坂和子、奥田末子、岸田あや子、小林末子、吉川サダ子

(遺物整理) 河村俊彦、朝倉八重子、細田みどり、上都由利子、川中三恵子、高木愛子、辻岡幸子、藤田恵美子、牧野篤子、斎藤真由美、佐々木照美

4. 経 費

本報告書に関係する発掘調査費および印刷製本費は以下の通りである。

○昭和50年度(第17次調査)

発掘調査経費22,000千円(発掘調査面積2,050㎡)

○昭和57年度(第44次調査)

発掘調査経費(新設県道調査費を含む)35,000千円(発掘調査面積2,600㎡)

○平成12年度(報告書作成年度)

印刷製本費1,800千円

5. 本報告書について

内 容 本報告書は、国庫補助事業として福井県が昭和50年度および昭和57年度に実施した第17次調査、第44次調査の報告書である。各年度ごとに概要を報告しているが、内容については本報告書が優先する。本書の構成は4章からなり、Ⅰは全体の事業概要、Ⅱは第44調査、Ⅲは第17次調査、Ⅳは考察を記した。

執筆 本報告書は、各調査次の諸記録を基に、館長青木豊昭の指導の下に以下の分担により執筆し、編集は水村伸行があたった。また、Ⅲ-4については吉岡泰英氏（現福井県立若狭歴史民俗資料館）にお願ひした。Ⅰ水村伸行、Ⅱ-1・2・4水村伸行、3宮永一美、Ⅲ-1・2佐藤圭、3南洋一郎、4吉岡泰英、Ⅳ佐藤圭

図面 遺構平面図は第17次調査については発掘調査時に調査員が作成したものであり、第44次調査についてはアジア航測（株）に委託した航空写真測量により作成したものである。遺物実測図については、担当者とともに遺物整理作業員があたった。また、挿図として使用した地形図は、昭和44年に足羽町がパシフィック航業（株）に委託して作成した基本図（1/1,000）およびその修整図である。

その他 本報告書の遺構図に用いた座標は「第Ⅳ系」である。

また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類による。

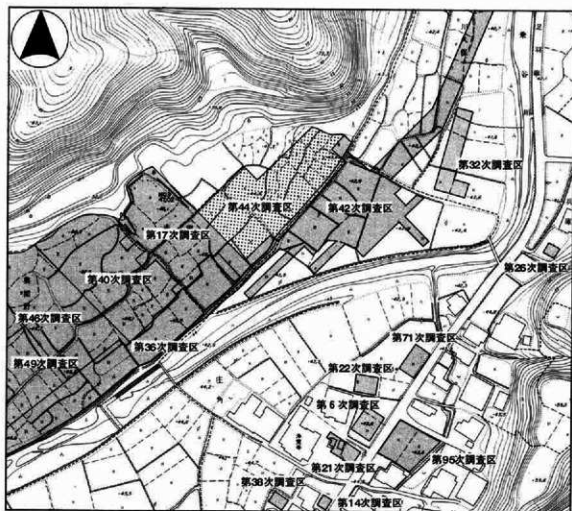
SA：土塁・塀・橋、SB：建物、SD：溝、SE：井戸、SF：石積施設、SG：庭園、SI：門、SK：土城、SS：道路・通路、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他

Ⅱ 第 44 次 調 査

Ⅱ 第44次発掘調査

1. 調査の経過と概要

今回報告する第44次調査地区は、福井市城戸ノ内町字赤湯に所在し、調査面積は約2,600㎡を測る。赤湯地区は上城戸・下城戸に区切られた本遺跡のほぼ中央部に位置し、南側には足羽川の支流である一乗谷川が流れ、北側は福井平野と面する御茸山に挟まれた地点である。義景館跡からは北東約400mを測る。本地区における発掘調査は、挿図1に示されるように面的にまとまった調査が継続的におこなわれており、平井地区（『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ～Ⅵ』）と並んで町並みの様相がもっとも解明されている地区である。本調査開始以前には本調査区西側において第17・36次調査が、東側においては第42次調査がおこなわれており、それらの調査結果から西側の山裾には比較的大区画である寺院が存在し、東側には南北幹線道路を基準として小区面の区割りが連続する町屋群が展開されていることが判明していた。これらの調査結果を受け、本調査も南北幹線道路から北側の町割りの構造解明を主目的として調査に着手した。

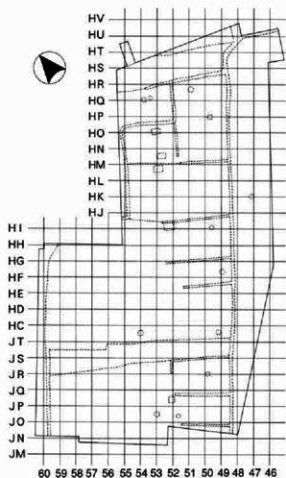


挿図1 第44次調査区周辺地形図 (1/2000)

第44次調査日誌抄

1982年

10. 4～15 電源用配電工事、排土工事打合せ、器材点検および現場設営。
- 16 下草刈り。
- 18 水田用石垣除去。
- 19 表土剥ぎ開始。
- 21 現場遠景撮影。上殿より。
- 27 3m方眼にてグリッドの設定をおこなう。
- 29 石列や砂利敷など遺構が検出されはじめる。42次調査により確認した南北幹線道路 S S 495を検出。
11. 4 表土剥ぎが半分程度終了する。町屋の礎石建物である S B 2520を検出する。また、S D 2504・2505を検出したことから町屋の区画割の一部を確認した。これらの区画は焼土により覆われている。
- 6 遺構面が浅く保存状態が良好であることが判明。八王子市職員来跡。
- 9 S D 2507を検出する。
- 15 水田石垣の下より、区画に伴う石垣および、S S 495の西側溝である S D 518を検出する。
- 16 表土下に炭層が存在し、その直下より良好な遺構群が検出される。タメマス S F 2555・礎石建物 S B 2527等を確認する。
- 18 表土剥ぎが終了する。S S 495に直交する全面砂利敷きの道路 S S 2501とその南側溝である S D 2508を検出した。また、S S 2501の北側に石列 S X 2636を確認した。
- 27 久しぶりの晴天により、調査を再開。S S 495の西側を中心に調査を進める。S B 2520および S E 2537を検出。
- 29 調査区南側の一部では遺構が検出されなかったことから、下層に掘り下げをおこなう。S S 495に直交する東西道路 S S 2500を焼土下にて検出。
12. 3 J R 56グリッド付近において、初めて中層遺構面と考えられる面を検出した。
- 8 調査区南西部において17次調査において検出している S D 500・509の延長部を検出した。
- 9 調査区南西部において S B 2529を検出。さらにその周辺を一段掘り下げをおこない S S 2500のレベルでそろえる。
- 10 昨日に引き続き調査区南西部の調査を継続する。下層にて礎石建物 S B 560を検出。下層を覆う層は焼土層である。
- 14 S B 560付近の調査を継続する。S E 2549を検出。



挿図2 第44次調査区グリッド設定図

- 17 本年の発掘調査を終了する。
- 1983年
4. 1 本日より調査を再開する。午前は現場の石出しをおこない、午後は調査区南部の清掃をおこなう。
- 5 昨年末に引き続き下層遺構の検出をおこなう。焼土下より S B 2518・S D 1856・1857・S E 2534を検出。
- 6 J R 49・J N 49グリッドの下層遺構を覆う層である焼土層より、瀬戸茶入れおよび黄瀬戸碗の完形が出土。S B 2519・S E 2356・S X 2570・S F 2551を検出。
- 7 昨日検出した S X 2570が東西方向に帯状に広がることが確認された。
- 8 S D 2503を検出。また、S B 560北側の焼土層を除去し下層面を検出する。
- 9 S D 2541・S E 2514を検出する。S S 2500の砂利面を精査する。
- 13 越前焼大甕埋設遺構 S X 2576の検出作業をおこなう。S S 2500が S S 495と接続することが確認された。
- 14 S S 495に面する町屋の検出作業をおこなう。前日に確認した S X 2576に関係する礎石建物 S B 2520を確認した。H D 57グリッド付近において関係の笏谷石製の炉壇石が出土。
- 18 S X 2621・2622を検出。下層の埋土より特等の金属製品が出土。
- 21 雨で水没した調査区の復旧作業をおこなう。
- 25 S S 495に面する町屋の調査を引き続き継続する。S D 2505・2506・S B 2523・S V 2560を検出する。本区画も埋土は焼土層である。
- 26 S D 2506北側の区画の調査を進める。となりの区画との境である S D 2507を検出するが、本区画は削平が大きく遺構の残存状態は良くないことが判明した。
5. 2 調査区北側の遺構確認を開始。
- 4 調査区北端において東西方向に延びる砂利敷き、および S E 2542・2543・S B 2524等の遺構を検出する。
- 6 東西方向に延びる砂利敷きの南側に S D 2508を検出したことから、本砂利敷きは S S 495に接続する東西道路であることが確認された。S D 2508内から「極楽寺」銘の漆椀が出土。
- 9 遺構面の調査を終了する。

2. 遺 構 (第1~11図、P.L. 1~13)

今回の調査区は、西側が第17・36次調査区に東側が第42次調査区にそれぞれ隣接しており、特に第17次調査区とは調査区境界上に位置する遺構の接続も確認されていることから、本書収録の第17次調査区もあわせて参照されたい。本調査区において検出された主な遺構は、道路3、石組溝27、土塁および石列8、礎石建物15、門2、井戸17、石積施設7、大甍埋設遺構1(甍敷11)である。時間差を示す遺構面については一乗谷の滅亡時であると想定される上層遺構面については後世の削割が進んでいたことから良好な状態であったとは言えず、主にその下の遺構面である中層遺構を良好な状態で検出することができた。また、場所によっては更にその下層に属すると想定される下層および最下層の遺構も一部において検出されている。なお、本報告における上層、中層、下層、最下層という用語については本調査区においてのみに適用されるものであり、本遺跡全体の層序を示すものではないことをお断りしておく。

S S 495 本道路は一乗谷の城下町を南北に縦断する幹線道路である。本道路はすでに第17・36・42次の発掘調査により検出されており、新しい時期の町割の骨格をなす道路であることが確認されている。幅員は両側の側溝を含んで約8.5m、路面だけで約8.0mを測り、路面は全面砂利敷き舗装が施されている。また、第1図に示す道路断面の観察結果から、4回にわたる改修がおこなわれたことが判明した。また、今回の発掘調査では道路内下層より井戸 S E 2550 が検出されている。S S 495 と下層より検出した S E 2550 との関係はセクション図により復元すると、S S 495 が新設された段階では道路幅が狭く2.0m 強の道路幅しかなく、東側には S E 2550 が存在していたものと想定される。その後最初の改修がおこなわれた段階において S E 2550 が廃棄され道路幅も約8.0mへと拡張されたものと想定され、以後3回の改修がおこなわれたものと考えられる。

S E 2550 S S 495 内下層より検出された井戸であり、直径0.6mを測る。先に述べたように、本井戸は S S 495 の拡張ともない廃棄されたものと考えられる。

S S 2500 S S 495 に接続する東西道路であるが、S S 495 とは直角には接続せずに南方向へ約7° 振れている。西端1.5mでは他の遺構との関係から道路面が未検出となっているが、道路正面の区画に伴う門 S I 2533 まで続くものと考えられることから、延長33.0mを測るものと想定される。幅員は不明な点が多いが S D 2503 と S E 2537 との配置関係から、3.5m前後を測るものと考えられる。S I 2533 の東6.5mの地点には掘立柱の門状遺構である S I 2532 が存在する。また、道路セクション面による観察によれば、3回の改修が認められ4面の道路面を確認することができた。

S I 2532 S S 2500 の西部において検出された門状の遺構である。道路面に穿たれた柱穴内には直径0.4~0.5mを測る丸太状を呈する柱材が残存していた。柱間は2.9mを測る。

S S 2501 S S 495 に接続する砂利敷の東西道路であるが、S S 495 とは直角には接続せずに南方向へ約10° 振れている。幅員は約5.0mを測る。しかし、東側においては、後に北側の区画である区画44-12が道路内に区画を延ばしてきたため、約3.5mまで縮小されている。道路内には一時期 S D 2510・2517 が作られているが、後に廃棄されている。本道路も3回ほど改修されており、4面の道路面を確認することができた。

S D 1855 第42次調査時に確認されている溝であり、幅0.6mを測る。南側は S D 518 に、北側は S D

1853・1854にそれぞれ接続する。

S D 2510 東西道路 S S 2501内に設置された幅0.3mを測る東西溝である。本溝は後に同路面と同じ砂利により埋められ廃棄されている。

S D 2517 S D 2510に接続する幅0.2mを測る南北溝であるが、約2.5mを検出したにすぎない。S D 2510と同様に後に廃棄され道路面となっている。

S V 2563 調査区北端で確認された東西方向の石列であり、延長約3.0mを検出した。S S 2501と北側の区画の境界石と考えられる。

S A 2557 調査区西側で検出した南北方向の土塁であり、延長約11.0mを測る。南側は第17次調査時に一部を確認しており、北側には門 S I 2533が接続する。挿図3に示すように大部分は最上段が崩落していたものの、S I 2533の袖石および裾一部に残存していた4段目の状態から4段積の石垣であったものと

46.0m



46.0m



46.0m



46.0m



0 3 m

挿図3 S A 2557東壁・S I 2533立面図

想定される。本土塁の東側にはSD509、西側にはSD500をそれぞれ有している。

SI2533 間口3.0mを測る大型の門であり、南側をSA2557に、北側をSV2640に接続している。前面にはSD509が流れている。

SV2640 SI2533より北側に延びる石列であり、約16.0mを検出した。西側が未調査区のため判然としないが、SA2557と対になる土塁の可能性が高いものと想定される。

SD500 SA2557の西側を流れる溝であり、幅0.5mを測る。本溝は第17次調査においても検出されており、区画の境界に伴う基準的な溝であることが確認されている。

SD509 SA2557の東側を流れる溝であり、幅0.5mを測る。SI2533の前面までは確認できたものの、それより北側については確認し得なかった。本溝は第17次調査においても極一部が検出されている。

区画44-1

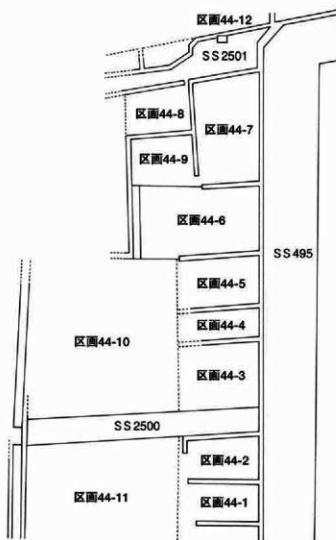
南北幹線道路であるSS495に面する区画であり、南側は17次調査区と接する。南側はSD1856に、北側はSD1857に明瞭に区画されているが、西側の境については判然としないものの、北西隅にSF2551が存在することから、同遺構の西側が区画境になるものと想定される。このことから区画44-1は南北6.0m、東西12.0mは測るものと考えられる。

SD1856 延長9.0m、幅0.3m前後を測る溝であり、西から東へ流路をもちSS495の西側側溝であるSD518に接続する。側石の多くは抜き取られているが、底部に礎石と考えられる石が3個ほど点在することから、当初の区画より一時期新しい時期の遺構である可能性が高い。

SD1857 延長10.4m、幅0.3m前後を測る。西から東へ流路をもち、その東端でSD518に接続する。本溝によって44-1と44-2が区画されている。

SB2518 前述のSD1856と1857によって区画された中に建つ礎石建物であり、東西は推定約9.0m、南北4.8mを測る。建物内には後述する井戸SE2534を設置している。

SF2551 本区画の北西隅に位置し、SB2518に隣接する遺構である。本遺跡においてケマラスと称している石積み施設であり、内法で長軸0.9m、短軸



挿図4 第44次調査区画割図

0.7mを測る。形状および区画内の位置関係により便所施設と想定される。

S E 2534 S B 2518内、南西隅に位置する井戸であり、直径0.6mを測る。

S E 2535 本区画の北東隅において検出された井戸であり、直径0.8mを測る。S B 2518面より下層において検出された下層遺構であることから、S D 1856底部において検出された礎石と同時期の遺構と想定される。

区画44-2

区画44-1の北隣の区画である。南側の境界はS D 1857であり、区画44-1と共有している。北側の境界はS D 2503であり、S S 495と直交する道路S S 2500に面している。すなわち本区画はS S 495とS S 2500の交差点に位置している。西側の境界はS V 2559と考えられることから、東西約12.0m、南北6.5mを測る区画であると考えられる。

S D 2503 本区画の西側裏手から延びる溝であり、2.0mほど北に延びたのち、直角に東方向へ屈曲したのち10.5m延びS D 518に接続する。幅は0.3mを測る。最終期には埋められ、廃棄されている。

S B 2519 東西8.8m、南北3.7mを測る礎石建物であり、建物内には井戸S E 2536を設置している。北端はS D 2503までが区画として作られているのであるが、砂利敷遺構であるSX2570が存在しているため、建物としては最終段階まで、区画全体を使用できない状態であったものと想定される。

S X 2632 区画44-2への出入口と考えられ、幅約2.0mを測るが、遺存状態は不良である。

S E 2536 S B 2519内北側に設置された井戸であり、直径0.6mを測る。

S F 2552 本区画の南西隅において検出された石積み施設であり、内法で長軸1.2m、短軸0.9mを測る。検出段階で大部分の石が欠失していた。区画内の位置関係から想定すると便所施設の可能性があるものと考えられる。

S X 2569 S F 2552の北側に隣接して検出された石組み施設であり、人頭大の石を不規則に設置しているものの性格については不明である。

S D 2502 本区画の入口中央付近において検出された東西方向の溝であり、延長1.0m、幅0.3mを測る。検出状態から下層遺構の溝であると考えられる。

S D 2564 後述するS X 2570を横断する形で検出された南北方向の溝であり、延長1.6m、幅0.3mを測る。下層遺構である。

S X 2570 S B 2519とS D 2503に挟まれた形で検出された東西方向に延びる砂利敷遺構であり、東西8.5m、南北1.6mを測る。前述した下層遺構であるS D 2502と関連する遺構であると考えられることから、古い段階の東西道路の一部であったと想定することができる。

区画44-3

S S 495とS S 2500との交差点の北側に位置する区画である。北側はS D 2504により区画されていることが明瞭に認められるが、西側の境界は不明な点が残る。しかし、南北方向の溝であるS D 2515、および石垣状遺構であるS X 2578が検出されていることから、この付近を区画の西限と想定することができる。このことから本区画は東西12.0m、南北9.5mを測る、やや大きめの区画であったと考えられる。

S D 2504 本区画と区画44-4の境界になる東西溝であり、延長9.2m、幅0.2mを測る。東端ではS D 518に接続する。側石にはところどころに大きめの石を配置しており、この石が礎石建物の礎石をも兼用し

ている。

S B 2520 大ぶりの礎石を持つ、東西5.6m、南北9.2mを測る建物である。建物内に井戸 S E 2537をもつ。

S E 2537 S B 2520内南隅に設置された井戸であり、直径0.7mを測る。

S E 2538 下層遺構の井戸であり、上面の石積みは倒壊していた。直径0.8mを測る。

S X 2576 S B 2520の裏側に設置された越前焼大甕埋設遺構である。11ヶ所の埋設ピットを検出したものの1ヶ所のみ大甕が残存していたほかは、すべて抜き取られていた。設置のしかたは整然としたものではなく、不規則な形態を呈している。本遺構を覆うようなプランを持つ礎石およびピット等が検出されていないことから、露出もしくは簡易的な構造をもつ覆屋で覆われていたものと考えられる。

区画44-4

44-3区画の北隣の区画であり、南側の境界は S D 2504である。北側の境界は S D 2505であり、区画44-5と共用している。西側の境界については判然としないが、周囲の状況から判断して区画44-3と同じ付近と想定されるため、本区画は東西12.0m、南北5.0mを測るものと考えられる。

S D 2505 本区画と区画44-5の境界になる東西溝であり、延長12.5m、幅0.2mを測る。東端では S D 518に接続する。側石のところどころにやや大きめの石を用いていることから、S D 2504と同様に側石と礎石を兼用しているものと考えられる。

S B 2522 区画溝の側石と礎石を兼用していることから、区画いっぱい建てられていたと想定される礎石建物である。東側に井戸 S E 2539を設置する。後述する S X 2633との関係から、井戸付近が入口であったものと考えられる。

S E 2539 S B 2522の内部東側に設置された井戸であり、後述する出入口正面に位置する。直径0.7mを測る。

S X 2633 S 495の西側の側溝内において検出された石敷き遺構である。石材は笏谷石の切石を用いており、延長1.9m、幅0.3mを測る。また、笏谷石の切石は底石のみではなく、西側の側石にも用いているなど、通常の側溝の構造とは異なっていることから、本区画への出入口施設の一部と考えられる。

区画44-5

区画44-4の北隣の区画であり、南側の境界である S D 2505は区画44-4と共用している。北側は S D 2506により区画されているものの、西側の境界については判然としない。しかし、他の区画との関係から、S F 2553の西側付近が境界であったと考えられる。このことから本区画は、東西12.5m、南北7.5mを測るものと想定される。また、南北主要道に面する位置には出入口施設と想定される S X 2634を有している。

S D 2506 本区画の北を画する東西溝であり、S F 2553付近より東へ流路をもち S D 518に接続する。延長11.0m、幅0.3mを測り、東半分では底部に扁平な石を敷き詰めている。また、側石の一部にはやや大型の石を用いており、側石と礎石を兼用させている。

S B 2523 区画溝の側石と礎石を兼用していることから、区画いっぱい建てられていたと想定される礎石建物であり、東西11.5m、南北7.3mを測る。建物内北側には井戸 S E 2540を、北西隅には石積み遺構である S F 2553を設置している。

S E 2540 S B 2523内部北側に設置された井戸であり、直径0.6mを測る。

S F 2553 S B 2523内部西北隅において検出された、石積み遺構である。当初は長軸1.5m、短軸1.0mを測る長方形を呈するプランであったが、途中で長軸を0.5m縮小する作り変えをおこなっており、最終段階では長短1.0mを測る正方形プランに変更されている。

S X 2634 本区画の東面ほぼ中央の位置に検出された踏石状の施設であり、南北主要道の西側側溝であるS D 518を跨ぐ形式をとっている。扁平状の石6枚を持って構成されており、延長3.6m、幅0.9mを測る。S B 2523の出入口施設と考えられる。

区画44-6

区画44-5の北隣の区画である。南側の境界であるS D 2506は区画44-5と共用しており、北側はS D 2507によって区画されている。しかし、S D 2506・2507ともに本区画の西側半分においては認められず、かわりにS V 2560・2561によって区画される。西側はS A 2558によって区画されていることから、本区画は東西18.5m、南北10.0mを測る大きな区画であったことが判明した。しかし、礎石等が検出されなかったことから、建物の配置状況などについては不明である。また、東側半分については、削平を受けており一時期古い遺構面を検出している。

S D 2507 東西方向を向く北側の区画溝であるが、区画44-7との共有部分である東側半分のみしか構築されていない。延長9.0m、幅0.2mを測る。

S V 2560 S D 2506の延長上にある東西方向の石列であり、南側は区画44-10になる。延長5.4mを測り、西端ではS D 2508と接続する。

S V 2561 S D 2507の延長上にある東西方向の石列であり、北側は区画44-9になる。延長9.0mを測り、西端ではS D 2508と接続する。

S A 2558 区画の西側境界の南北土塁であり、延長約10.5m、幅約1.0mを測る。北隣の区画44-7には認められず、本区画のみに存在する土塁であることから、特異な存在の土塁である。北側にはS D 2508が存在する。

S E 2541 区画内北東隅において検出された井戸であり、直径0.7mを測る。本井戸は下層遺構整地土下より検出されていることから、最下層の遺構であることが確認されている。

S F 2554 S V 2561中央付近において検出された石積み遺構であり、下層の遺構である。長軸1.6m、短軸1.0mを測る。

S X 2587 性格不明の不成型を呈した土壌であり、下層遺構である。

区画44-7

区画44-6の北隣に位置する区画であり、東側が南北主要道S S 495、北側がS S 495に直交する道路であるS S 2501に面している。すなわち、本区画はS S 495・2501の交差点南側に位置する。区画南側の境界はS D 2507を区画44-6と共用し、北側の境界はS S 2501の南側側溝であるS D 2508、西側の境界はS D 2508・2512により各々区画されており、東西9.5m、南北16.0mを測る。しかしながら、礎石建物S B 2524の北側に別の礎石建物であるS B 2525が検出されているため、この2棟間において区画が2分される可能性も想定することができる。本区画北半分においてS E 2542・2543・2544の3基の井戸が検出されている。このうちS E 2544は下層遺構の井戸である。

S D 2508 区画44-8より流れ出るS D 2508は、本区画西側中央にてS D 2512と合流し直角に流路を変え北方へ流れる。その後、S S 2501へ突き当たったのち再度流路を東方へ変え直進し、S D 518に接続する。S S 2501に平行する部分においては道路南側の側溝として機能している。

S D 2512 本区画と区画44-9とを区画する南北溝であり、延長6.5m、幅0.2mを測る。北端でS D 2508と接続する。

S B 2524 西側の礎石が比較的良好に残っていたものの全体的には不明瞭な部分が多い。推定で東西6.9m、南北8.4m前後を測る。建物内北側には井戸S E 2542を設置している。

S B 2525 S B 2524の北側において検出された礎石建物であるが、残存状態が不良であることから詳細については不明である。

S E 2542 礎石建物内北側において検出された井戸であり、直径0.5mを測る。検出時に上部の積石は井戸内部に崩落していた。

S E 2543 区画内北西において検出された井戸であり、直径0.6mを測る。

S E 2544 区画内東側で確認された井戸であり、直径0.7mを測る。検出時には上面の積石は全て崩落しておりピット状を呈した形で検出された。本井戸は下層遺構のものである。

区画44-8・9

区画44-7の西側に隣接した区画である。当初はS D 2508により区画8と区画9の2区画に分けられていたが、区画整理をおこなった際にS D 2508を埋立て1区画に統合している。北側は東西道路であるS S 2501に面しており、南側はS V 2561により区画6と分離されている。西側についてはS D 2508を検出していることから、調査区境界を区画端とすることができる。2区画をあわせた大きさは、東西9.5m、南北14.5mを測る。最終期の遺構として礎石建物S B 2527とその付属施設を検出している。

S D 2511 S S 2501の南側側溝であり、延長4.0mを検出することができた。幅は0.2mを測る。西端についてはS X 2600により切断されている。東端については、S D 2508の側石により明瞭に切断されているため、当初は接続していたものの、最終期においては流路としての機能を有していなかったものと考えられる。

S B 2527 良好な状態で検出された礎石建物であり、東西3.8m、南北8.5mを測る。本建物は区画44-8と9が統合された後の礎石建物である。北面には東西道路S S 2501からの入口であるS X 2600が位置し、入口を入った東側には井戸S E 2546を設置している。また、戸外には石積遺構であるS F 2556が付属する。

S E 2546 区画内のほぼ中央で検出された井戸であり、直径0.5mを測る。上面まで遺存しており、前述したS B 2527に伴うものと考えられる。

S E 2547 S E 2546の東に隣接するように検出された。直径0.5mを測るが、上面は削られた状態で検出されている。

S X 2600 S S 2501からS B 2527への入口施設と考えられる。間口は2.0mを測り、道路側には6枚の笏谷石製の板石を敷き、建物側には河原石を1ないし2石積上げ高くしている。

S F 2555 区画9南東隅において検出された石積遺構であり、長軸1.5m、短軸1.0mを測る。石を4段に積上げ構築している。

S F 2556 長軸1.7m、短軸1.0mを測る石積遺構であり、5段に積上げ構築している。S B 2527の南東コ

一ナーの礎石が本遺構の一部を併用していることから、S B2527の付属施設であると想定される。

区画44-10

南北主要道であるS S495に直交するS S2500の北側に面する区画であり、東隣は区画44-3～5である。区画44-3との境界は明瞭でないものの南北溝であるS D2515が確認されていることから、おそらく本溝が東側の境界と想定され、西側については調査区西端において、石垣S V2640が検出されていることから、本石垣が西の境界を示すものと考えられる。北側の境界については調査区内において区画を示す明瞭な遺構が確認されなかったことから、調査区域外に延びているものと想定されるが、周辺の状況より判断すると区画44-5と6の境界であるS V2560が西方へ延びていることから、その延長が本区画の北の境界を示すものと考えられる。これらのことから、本区画は東西21.0m、南北推定23.0mを測る大型の区画であったものと考えられる。遺構は大きく上層と中層に分類されるが、上層の遺構は大きく削平を受けていたことから遺存状態は不良であった。中層遺構において礎石建物であるS B2530とその付属施設を確認している。上層・中層ともに遺構は区画内南半分において確認されていることから、建物の裏側にあたる区画内北側は広場的な空間であった可能性が高いものである。

S D2514 区画内東で検出された東西溝であるが、延長2.2mを検出したのみであり、幅は0.4mを測る。上層の遺構である。

S D2515 区画44-3との境界において検出された溝である。延長2.2mを検出したのみであり、幅は0.2mを測る。上層の遺構である。

S E2548 区画内東南で検出された石積井戸であり、直径0.6mを測る。天場石より遺存していたものの、安全上のため完掘はしていない。上層の遺構である。

S X2621～2627 上層の遺構群に伴う石列であるが、いずれも一部分を残す以外は削平を受けているため詳細については不明である。

S B2530 東西7.4m、南北6.6mを測る礎石建物であり、西側には庇状の張り出しが認められる。東西方向については、南北の礎石列により東端を推定したものの、東側に検出された上層遺構の下に更に延びる可能性も考えられる。建物内北側において炉跡であるS X2628・2629が検出されていることから、内部は二分されていたものと考えられ、北側については土間状の空間であったものと想定される。南側については根太柱の部材が一部に確認されたことから床張であったものと考えられる。また、一部の礎石には真墨や墨書が確認された。本遺構は中層の礎石建物である。

区画44-11

南北主要道であるS S495に直交する道路S S2500の南側に位置する区画であり、区画44-1・2の西側に隣接する。本区画の南側部分については第17次発掘調査時において調査されているため、本書収録の該当ページもあわせて参照されたい。本区画は西側を土塁S A2557により、北側は道路S S2500により明瞭に区画されているものの、東側についてはやや明瞭さに欠ける。しかし、隣接する区画44-1・2内における遺構配置関係から、S V2559およびS F2551西側付近が境界であったものと考えられる。南側については第17次の項において示されているとおり不明であることから、本区画の南北長は不明であるものの、区画全体としては大型の区画である。遺構面としては上層と中層の2面を確認することができたが、上層は後世の改変が大きく遺存状態は不良であった。主な遺構としては上層にS B2529、S E2549を、

中層にS B 560を検出することができた。また、昭和50年度におこなわれた現状変更に伴う立会い調査において、本区画より鉄砲関連の一括遺物が出土しているが、今回の発掘調査においては関連遺構の検出はおこなえなかった。出土位置はS E 2549の周辺であり、掘削深度から想定して上層の遺構に伴うものと考えられる。

S B 2529 区画内西側において検出された上層の礎石建物であるが、西側の一部が検出されたにすぎない。しかし、中層で検出されたS B 560と方位、大きさともに類似していることから、S B 560と同規模程度の建物であったものと想定される。S B 560とは、0.7mほど高いレベルで検出されている。

S E 2549 区画内東側において検出された井戸であり、直径0.8mを測る。上層の遺構である。

S B 560 東西9.8m・南北推定17.0mを測る大規模な礎石建物である。南側には庇状の施設が付属することが礎石列より確認されている。建物の方位は他の区画の方位より南方向へ約7度ずれているが、これは道路S S 2500が方位を南に振っていることに起因しているものと考えられる。

S X 2610 下層において確認した砂利敷きであり、東西1.0m、南北1.3mの範囲わたり確認したが、その性格については不明である。

区画44-12

南北主要道であるS S 495に直交する道路S S 2501の北側に位置する区画であるが、調査区北端に区画の一部を確認することができたのみであり、区画の大部分は調査区北側に延びている。区画内には礎石建物S B 2526が検出されている。本区画は当初S D 1854を東側の境界に、S D 2509を南側の境界としていたが、南側については区画削の拡張をおこない最終期にはS X 2636がS S 2501との境界となっている。

S D 2509 本区画当初の南側境界溝である。西側がS F 2641により切断されているため詳細については不明であるが、延長5.0mを検出することができた。幅は0.3mを測る。最終期には本区画の拡張に伴い埋められ廃棄されている。

S X 2636 最終期における本区画とS S 2501を区画する石列であり、当初のS S 2501を侵食する形で設置されている。遺存状態は不良であったが延長6.5mにわたり検出した。

S B 2526 礎石建物の一部を検出したものの、大部分が調査区域外のため詳細については不明である。

S F 2641 本区画の西端において検出された、正方形プランを呈する石積遺構である。大きさは0.9m四方を測り、石積は4段である。S S 2501を壊して構築されていることから、本区画の拡張に伴い設置された遺構であることが確認された。

3. 遺物

ここで取り扱う遺物は、第44次調査区より出土した遺物群である。総点数は29,778点であり、面積約2600㎡あたりの密度は11.45点/㎡となる。出土点数の面積あたりの割合は、他の調査区と比較しても高いものではないが、遺構的に12区画を検出したことから、遺物の内容は多様で、出土遺物から住人の職業を推測することのできるものがあった。また、金属製品・石製品・木製品が多種出土した。遺物の種類・数量については表2を参照。整理の方法は、表土・廃土層からの遺物をまとめ、遺構面からの遺物については区画ごとによって扱った。また石組溝や石積施設などの遺構内から出土したものについては、遺構ごと一括遺物としてまとめた。遺物の分類については既刊の報告書を踏襲し、越前焼大甕・播鉢の分類は「黒道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」1983年、土師質皿は「朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ」1979年、染付は「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 1982年、による。

表土・廃土層出土遺物 (第12図)

ここでの遺物は、表土と第17・24次の廃土の土層からの出土であるため遺物は少なく、また、器種のまとまりはない。しかし青磁輪花碗や口縁を面取りした白磁皿など、一乗谷でも出土例の少ない遺物が含まれる。また調査終了後、表面採集した遺物についても出土位置不明のため、ここでまとめて報告する。

越前焼 (500)は口径20.2cmを測る越前焼壺である。大きく膨らんだ肩部から、口縁部が短く立ち上がる。(501)は広口の壺で焼成不良。(502)は口径14.8cm、器高6.1cmを測る鉢。(503)はⅣ群の播鉢(504)・(505)はⅢ群aの播鉢で、(505)は口径34.0cmを測り、10条1単位の播目を有する。

土師質土器 (508)はB類の皿。(506)・(507)・(509)はC類の皿。(510)はD類の皿で、口径11.0cm、器高2.5cmを測る。(511)も口径13.6cmを測るD類の皿。

瀬戸・美濃焼 (512)は口径3.4cmを測る小型の鉄軸壺で、茶入と思われる。(513)は広口の鉄軸壺である。(516)は口径8.4cmを測る小型の鉄軸碗である。(517)は口径10.3cm、器高2.5cmを測る鉄軸皿。

中国製陶磁器 (518)は青磁輪花碗で、口径14.8cmを測る。器壁は薄く、淡青色の青磁釉が薄くかかる。(519)は底径18.0cmを測る青磁盤。(528)は青磁角坏。同様のものが西山光照寺からも出土している。(520)は口径12.0cmを測る白磁皿で、口縁を八角形に面取りしてある。(529)は外面胴部に芭蕉葉文の描かれる染付碗。(530)は唐草文の描かれる染付碗。(531)はD群の染付碗で、外面口縁部に波濤文帯、胴部にアラバスクが描かれる。(522)は見込みに玉取獅子の描かれた染付皿。(523)は口径10.6cm、器高3.3cmを測る赤褐色のC群染付皿。(532)は外面に唐草文が描かれるB群染付皿。(533)は黒軸碗。胎土は灰黒色で堅緻。

朝鮮製陶磁器 (524)は蕎麦軸のかかる碗。

金属製品 (525)は銅製の蓋で、上面は金箔を貼り唐草文様を彫っている。

石製品 (526)は硯の転用品で、中央部を削って穴を開けている。用途は不明。(527)は3足を有する円面硯で中国製の硯と思われる。直径18.6cm、高さ2.3cmを測る。中央部分に3方向への擦痕が見られる。

区画44-1・2出土遺物 (第13図)

この2つの区画は南北道路 S S 459面する小区画で、ともに間口約6~6.5m、奥行約12mと小規模であることから、2区画分をまとめて述べる。区画44-1からは多量の鉄滓が出土したほか、羽口や取瓶も出土したことから、鋳物師の住居と推定される。区画44-2からは完形の鉄軸茶入が1点出土した。

越前焼 (534)の壺は口径19.5cmを測る。(535)は口縁部が内湾している鉢で、口径17.4cm、器高5.7cmを測る。底部に蓮目痕が付く。(536)~(538)はⅢ群の播鉢。(539)は口径39.8cm、器高16.9cmを測るⅣ群の播鉢で、6条1単位の播目が密に引かれる。(536)は口径19.8cmを測る桶。

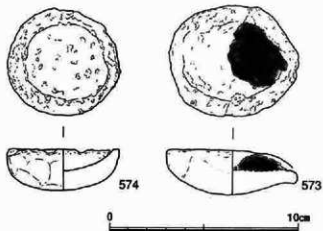
土師質土器 (541)は口径6.2cm、器高1.3cmで、口縁部に直径3mmの穿孔を有する。区画44-1の整地層から出土した。(541)~(543)はC類に属する。(544)・(545)はD₁類の皿。(546)は完形の土鈴。

瀬戸・美濃焼 (547)~(549)は口縁部をわずかに外反させる鉄軸碗。(550)~(552)は完形の黄瀬戸平碗で、区画44-1の南側に接する区画から3点まとめて出土した。大きさはほとんど同じだが、(552)がわずかに大きく、口径13.6cm、器高4.6cmを測る。高台から口縁部に向って直線的に開く平碗は一乗谷では出土点数が少ない。外面は下半部から高台にかけてはシブ鉄が塗布されている。(565)は口径12.2cm、器高6.4cmを測る鉄軸碗。(553)は完形の鉄軸茶入で、口径3.3cm、器高7.6cmを測る。区画44-2出土。(554)は口径5.4cm、器高1.6cmを測る灰釉小皿である。萁筒底で、見込みに印花文を有する。(566)は見込みに印花文を持つ端反の灰釉皿。

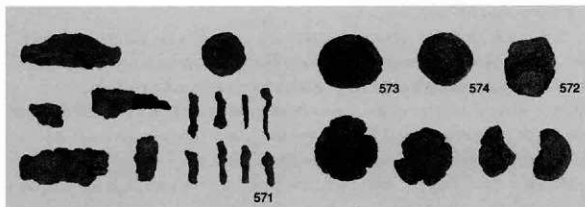
中国製陶磁器 (555)は線描蓮弁文の青磁碗で、オリーブ色の釉がかかる。(556)の青磁碗は、線描蓮弁文を有するが、青灰色の釉が厚くかかりほとんど見えない。(557)は口径14.6cm、器高3.0cmを測る青磁皿で、高台内には白磁釉がかかる。(567)は青磁の菊皿。高台内には白磁釉がかかる。(558)は青磁の盤。(559)・(560)・(568)は端反の白磁皿。(561)は白磁杯。(562)は口径12.0cm、器高6.4cmを測る染付碗で、底部の彫らむ、E群の幾頭心型の碗。見込みに座した人物像が描かれる。高台内には「長命富貴」の銘を持つ。(563)は口径13.0cm、器高2.9cmを測るB群染付皿で、見込みに玉取獅子が描かれる。(569)はE群染付皿で、外面は竹が描かれる。(570)は染付壺。

金属製品 (564)は銅製の環付きの飾金具で、菊花状の金具を環の付いた金具で挿してある。(571)は区画44-1からまとめて出土した鉄滓。

その他 (572)は吹子の羽口。(573)は取瓶で、片口が作られる。内面に解けて固まった金属が付着した状態で出土した。(574)は口径5.9cm、器高2.2cmを測り、金属滓や煤が内面に付着する。部分的に靛青が認められることから、解かされた金属には銅が含まれていたことがわかる。胎土は灰黒色で大粒の白石粒が混じる。外面は指で押して調整しており、内部は高温の溶解液に接するため、解けて細かく軽石状に穴があく。ほぼ同じ大きさのものが、全部で6個体出土した。(571)の鉄滓と一括で出土したため、これらの遺物から区画44-1は鋳物師の住居と推定される。



挿図5 区画44-1出土取瓶実測図



挿図6 鋳物師関連遺物写真(鉄滓・取瓶・羽口)

区画44-3出土遺物 (第14図)

この区画には越前焼大甕埋設施設 S X 2576 があり、埋設されていた大甕のほか、礎石建物 S B 2520 周辺から越前焼・土師質土器・瀬戸美濃焼・中国製陶磁器・金属製品等が出土した。

越前焼 S X 2576 からは、計10基の掘り方を検出したが、底部が遺存していたのは(576)の1基だけで、他はすべて抜き取り穴であった。(575)は3号甕で、口縁が三角に肥大するIV群 a に属する大甕。口径63.0cmを測り、胎土は灰色で肩部にヘラ記号を有する。(576)は5号甕で、底径33.0cmを測り、赤褐色で焼成良好。(577)は口径80.8cmを測り、暗紫褐色で焼き締まっており、肩部にヘラ記号と「本」と格子目のスタンプを持つ。(578)は口縁部が長く立ち上がる。(579)・(580)はともに口縁が肥大するIV群の甕。(581)は口径12.5cmを測る甕で、胎土は黄褐色を呈し、やや焼成不良。(582)は口径39.5cmを測るIV群の播鉢で、口縁は内傾し、10条1単位の撞目を有する。3号甕ピットから出土した。(583)は同じくIV群の播鉢で口径28.8cm、器高7.6cmを測る。外面や底部にヘラ記号を有する。胎土は灰黒色で焼成良好。9条1単位の撞目を持つ。

土師質土器 (584)はB類の皿で、口径6.8cm、器高2.1cmを測る。(585)～(587)はC類の皿である。(587)は底部に穿孔を有する。同様の皿が1区や10区からも出土している。孔は器壁内面から打ち付けて、器壁がはがれて薄くなったところで、鎌状のもので貫通させている。(588)・(589)はD類皿。(590)もD類皿で、口径12.8cm、器高2.3cmを測る。(591)は耳皿で器高1.2cmを測る。(592)は羽釜で口径14.2cmを測る。羽部にわずかに煤が付着する。

瀬戸・美濃焼 (593)は鉄軸碗。(594)は下層の石組施設出土で、口径9.4cm、器高2.4cmを測る。全体に灰釉が施され、見込みにはカタバミの印花文を有する。高台は付高台で、底部には砂の輪トチン痕が残る。(595)は同じく付高台の灰軸皿で口径12.0cm、器高2.8cmを測る。

中国製陶磁器 (596)は基筒底の染付皿である。口径11.2cm、器高3.0cmを測り、見込みには「壽」を人形化した吉祥字が描かれている。

金属製品 (597)は刀装具の冑金で、長さ2.8cm、最大幅3.2cmを測る。(598)は銅製紅皿で腐食が激しい。口径4.4cm、器高1.3cmを測る。下層炭層から出土した。

石製品 (599)は整地層から出土した砥石で、上下面・側面ともによく使用されている。

木製品 (600)はヘラ状に加工された木製品で、長さ19.0cmを測り、柄と思われる部分に2か所釘穴がある。

区画44-4～9出土遺物 (第15・16図)

4～9区についてはそれぞれの区画ごとでは遺物量が少ないため、まとめて述べる。越前焼・瀬戸美濃焼・中国製陶磁器のほか、金属製品には銅製匙や刀装具や金箸などが出土した。

越前焼 (601)・(602)は中壺の口縁。(603)は、口径19.2cmを測る壺で、頸部が短く立ち上がり、肩部に突帯がめぐる。胎土は灰色で焼成良好。(604)の壺は、口径10.3cmで、区画44-8トレンチより出土した。(605)は口径6.0cmの小壺で、口縁部はやや外側に開きながら短く立ち上がる。肩部にヘラ記号を有す。(606)は口縁部が真っ直ぐ立ち上がるタイプの壺で、口径14.0cmを測る。(607)は口縁部が内湾する鉢で、胎土は灰黒色で硬く焼き締まっている。区画44-6トレンチより出土。(608)は口径が50.0cmを超える大平鉢で、内面には粘土粒の接合部分に指頭圧痕が残る。(609)はⅢ群 a の播鉢で、10条1単位の播目を有す。(610)はⅢ群 b の播鉢で、口径31.4cmを測り、12条1単位の播目を持つ。胎土は黄白色。(611)は底径20.0cmを測る桶で、火桶として使用した痕跡は見られない。腰部に工具で押して模様を付けた突帯がめぐる。胎土は橙色でやや焼きが甘い。(612)は底部からわずかに開きながら真っ直ぐ立ち上がる筒型の桶。内外面ともに火を受けた痕はない。(613)は薬研で胎土は灰色で焼成良好。内面は磨耗している。区画44-6トレンチより出土。

土師質土器 (614)は耳皿で、口径6.1cm、器高1.1cmを測る。区画44-8トレンチより出土した。(615)は底部から口縁を真っ直ぐ立ち上げたG類の皿で、側面を指で強くナデ調整している。口径5.0cm、器高1.4cmを測る。胎土は白く細かい。(616)・(617)はB類の皿で区画44-4より出土。ともに口縁に1カ所テール痕が残る。(618)～(620)はC類の皿。(620)は口径7.2cm、器高1.5cmを測り、底部に「南無妙法蓮華□」と墨書される。区画44-7のトレンチ出土。(622)は口径10.3cm、器高2.3cmを測るD₁類皿。(623)は土釜の底部で、内面には布を押し当てて成形している。底部に「×」のヘラ記号を有す。(624)は口径2.4cm、器高2.9cmを測る小壺で、胴部から口縁にかけてナデ調整し、底部は指で押して形を整えている。

瀬戸・美濃焼 (625)は鉄軸壺で口径14.0cmを測る。(626)も鉄軸壺。割れ口に漆で接合した痕がある。胎土は灰色で細かく焼成良好。(627)は口径11.5cm、器高5.9cmを測る鉄軸碗である。腰部下まで軸がかかり、以下高台にかけてはシブ鉄が施される。(665)も鉄軸碗。(628)は口径7.0cmを測る円錐型の鉄軸瓶で、同一固体の底部も出土しているが器高は不明。口縁部には削って4本の沈線を作る。花生と考えられるが、掛ける孔の部分は出土していない。内外面とも施軸され、口縁は軸が掻き取られ露胎となっている。(629)は灰軸皿で、口径10.6cmを測る。

瓦質土器 (630)は瓦燈の蓋。(631)は桶か。口径13.0cmを測る。

中国製陶磁器 (632)は無文の青磁の碗で、口径11.4cmを測る。外面腰部を削ぐ。(633)は口径12.6cm測る青磁碗で、体部には線描蓮弁文を有し、見込みには弧線を刻む。胎土は灰色で、軸は青灰色を呈す。(634)は青磁の菊皿で、口径10.0cm、器高2.6cmを測る。(635)は口径11.2cm、器高2.7cmを測る青磁桜花皿で、区画44-7から出土した。見込みは軸が丸く掻き取られている。(636)は口径11.8cmを測る青磁皿で、体部に鎗状の蓮弁文がめぐる。胎土は灰色で青緑色の軸が厚かかる。(666)は獣足の付く青磁香炉で、底部、内面は露胎。外面は貫入の多い灰青色の軸がかかる。(667)は青磁人形と思われ、内面は露胎。(637)は口径8.8cm、器高2.3cmを測る白磁皿で、見込みと高台は露胎。(638)・(639)はともに切り高台の白磁皿だが、(638)は高台が露胎であるのに対し、(639)は全体に施軸されている。口径9.2cm、器高2.0cmを測り、腰部にヘラ削りが見られる。また割れ口に黒漆の補修痕有り。(640)～(642)は端反白磁皿で、(641)は口径18.0cm、器高3.9cmを測る。区画44-7遺構面出土。(643)は同じく7区出土の白磁皿。(644)は

口径15.8cmを測るC群の染付碗で、外面には唐草文のくずれた文様が描かれる。(645)は萐苜底の染付皿で、見込みには花文が、外面には芭蕉葉文が描かれる。口径10.2cm、器高3.0cmを測る。(646)は口径8.8cm、器高2.1cmを測る端反のB群染付皿である。外面には牡丹唐草、見込みには花文が描かれる。胎土は白色で焼成良好。(668)は外面に牡丹唐草の描かれる染付皿。

朝鮮製陶磁器 (647)は口径14.0cmを測る朝鮮半島製の白磁碗である。胎土は灰色で、完全に磁器化しており、灰白色の釉が厚くかけられる。

金属製品 (648)は紙状の飾金具。(649)は区画44-5遺構面出土の錠前で、半欠損。(650)は鉄製小柄で、残存長14.8cm、柄の長さは7.0cmを測る。区画44-8トレンチ出土。(651)は銅製刀装具で、鞘の胴部に取り付ける黄金具と思われ、鞘中は約4.0cm。区画44-5遺構面出土。(652)は銅製匙で、残存長10.6cmを測る。厚さ約0.7mm。(653)・(655)・(656)は鉄製釘。(654)は鉄製金箸。(657)は銅製金箸で、ともに意図的に曲げられている。(657)は保存度良好で総長約17.8cm。

骨製品 (658)は区画44-7トレンチ出土の骨製品。厚さ約0.2cmで縁に痕痕がみられることから、扇子の骨か。

石製品 (659)は水晶製舍利塔。上部は欠損。(660)は完形の硯で、墨の痕跡が残る。長さ15.8cm、幅9.7cm、厚さ2.2cmを測る。(661)～(664)は砥石。(663)はよく使用され、中央部は磨り減っている。

区画44-10出土遺物 (第17・18図)

東西道路S S2500北側に面するこの区画からは越前焼・土師質土器・中国製陶磁器はもちろん多種の金属製品や石製品・木製品が出土した。それらの多くは礎石建物S B2530を覆う整地層と、下層の炭層から出土している。特に建物北西隅からは、茶筌・漆皿などが一括で出土した。金属製品には小札や小柄など武具が含まれる。

越前焼 (669)・(670)は短く立ち上がる頸部を持つ同型の壺。ともに肩部にヘラ記号を有する。(669)のお歯黒壺は完形で、口径5.0cm、器高10.3cmを測る。中に錆びた鉄片が塊となって入った状態で出土した。(711)は鉢。(671)・(672)はIV群に属する襷鉢。(672)は口径27.2cm、器高8.3cmを測り、8条1組の襷目は粗雑に密に引かれる。

土師質土器 (673)は口縁部に穿孔のあるC類の皿で、口径6.5cm、器高1.4cmを測る。器壁は薄く作られ、胎土は白く細かい。(680)は見込みに穿孔がある。孔の開け方は区画44-3出土の(587)と同じ。(675)はB類の皿で、口径7.0cm、器高1.9cmを測る。内面に布を当てて成形しているため布目が残る。(676)・(677)はC類の皿。(679)～(682)はC類皿。(683)～(687)はD類皿。(688)は口径16.8cm、器高2.8cmを測るD類の皿。(689)は口径2.3cm、器高2.8cmを測る完形の小壺。(690)は口径12.0cmを測る羽釜。(691)は土鈴で、紐通し孔が欠ける。

瀬戸・美濃焼 (692)は口径11.0cm、器高8.1cmを測る鉄軸碗である。胎土は肌色でボソボソしている。鉄軸の発色は良好で胎色を呈す。(693)は口径12.2cm、器高5.8cmを測る鉄軸碗。軸は錆色を呈し、発色不良。(694)は口径4.8cmを測る鉄軸瓶。(695)は肩部に取手の付く鉄軸壺か。(696)は口縁部に鉄軸のかかる鉢で、内外面ともに口縁部以下は黒漆が塗布されている。口径17.0cmを測り、片口が作られる。(697)は口径10.6cmを測る灰軸碗。(698)は口径5.0cmを測る魚形の灰軸皿。萐苜底の小皿の口縁部に目・鱗・口となる粘土片を貼り付けて成形している。第17次調査区からも同様の遺物が出土した。(699)は口径11.0cm、器高2.6cmを測る端反の灰軸皿。貼付け高台を持ち、胴部はヘラ削りで成形される。胎土は

黄土色で粗い。(700)は灰釉蓋か。紐通しの孔が肩部に付く。同型のものが第43次調査でも出土している。

瓦質陶器 (701)は口径6.6cm、器高4.9cmを測る香炉である。3足が削り出され、外面はヘラ磨きされる。

中国製陶磁器 (702)は口径10.8cm、器高6.4cmを測る青磁碗で、外面は線描蓮弁文、見込みに「金堂□□」の銘が押される。(703)の青磁碗は、口径14.0cm、器高5.6cmを測る。内外面ともに無文で、見込みに1条沈線がめぐる。高台内にはヘラで抉り取られる。釉薬は明緑色を呈し、ムラなく全体に薄く施釉される。胎土は黒っぽい灰色で堅緻である。破片に黒漆による補修痕がある。(704)の青磁碗は口径14.0cm、器高5.5cmを測り、胎土は赤みがかった肌色で、灰緑色の釉薬が生地の赤味が透けるほど薄くかかる。見込みに擦痕が認められる。(705)の白磁坏は見込みに「寿」、高台内に「福」の文字が書かれる。(706)は切り高台の白磁皿で口径7.5cm、器高1.6cmを測る。内外面全体に施釉。(707)の染付碗は、口縁に界線がめぐり、外面胴部は唐草文が描かれる。(708)は基筒底で口縁部に菊爪状の切り込みが入る染付皿で、口径6.8cm、器高1.8cmを測る。見込みに十字花文が描かれる。(709)はC群の染付皿で、口径10.4cm、器高3.2cmを測る。見込みに花捻文、外面には芭蕉葉文が描かれる。(710)はB群の端反染付皿。見込みにアラベスクと梵字、外面は唐草文が描かれる。(712)・(713)はともにC群染付皿。

金属製品 (714)～(719)は鉄釘。(720)～(722)は銅製飾金具で、家具の隅金具か。表面にわずかに鍍金が残る。(722)は総長16.3cm、幅0.9cmを測り、鋸孔が3カ所開く。(723)は環付金具で、留め金の部分は、一枚の金属板を座金に通して先端部を広げて留める。(724)は釦金具。(725)～(727)は錠。(728)～(731)は軸。(728)は長さ3.8cm、幅1.0cmを測り、紐通し孔には漆の痕跡がある。保存状態良好。(732)は小札で、錆が激しい。(733)～(736)は小柄。(733)の小柄は茎部のみ残存し、腐食が著しい。(734)は銀装小柄で、刀部は腐食が激しい。(737)は長さ16.8cmを測る銅製匙。柄の先端部に孔が開く。(738)は金箸で、意図的に曲げている。

骨製品 (739)は鹿角製胸石。(740)の胸石は両面に5つの孔があるが、貫通はさせていない。

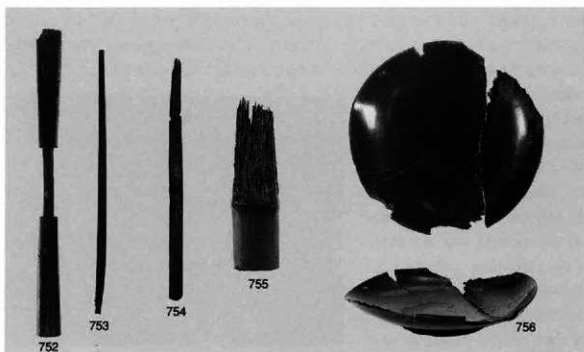
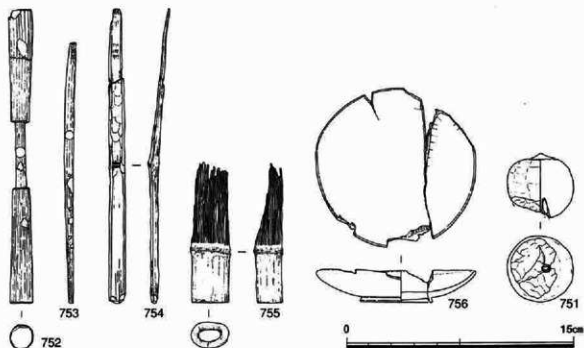
石製品 (741)・(742)は砥石。(743)は一辺39.0cmを測る笏谷石製の方形盤で、器高14.0cm。S B 2530出土で、口縁部、底部に煤が付着していることから、火鉢として使用されたものと思われる。(751)は笏谷石製品で、直径5.4cmを測る。上下に欠けた痕があり、もとは宝珠形かと思われる。下部に穴が穿たれ、釘のような金属が入った状態で出土した。茶筌などの木製品といっしょに出土した。

木製品 (744)は黒漆塗の蓋で、中央に摘みがあるが、欠損している。(745)は口径9.5cm、器高2.8cmを測る黒漆皿。見込みに朱漆で丸を3つ組み合わせた家紋のような模様が描かれる。(746)は椀鉢で、材質はツグと考えられる。全体的に黒ずんでいるが漆を塗布した痕跡は見られない。梅菌は8本。(747)は雪下駄で、長さ16.5cm、幅7.0cmを測る。裏面は火を受けて炭化している。緒孔には炭化した緒の残りが詰まっていると思われる。(749)は蔓草の文様の蒔絵が施された漆



挿図7 区画44-10出土茶筌出土状況写真

製品で、表面は黒漆の無地。(752)・(753)・(755)・(756)はS B 2530北西隅よりまとまって出土した。(752)は笠杵型の木製品で、長さ23.3cmを測る。(753)は箸で、部分的に黒漆が残る。(754)は竹製品で、先端部は腐って先細りわずかに欠けていると思われ、残存長さ23.5cm、幅1.3cmを測る。ほぼ中心に竹の節があり、側面の角は削られ、節より先端部にむかって表を削る。形から茶杓と考えられる。(755)は(754)と並んだ状態で出土した茶筌。残存長11.1cmを測る。土の重みで全体的に少しつぶれ、穂先もつぶれるがほぼ全容を保つ。(756)は口径12.7cm、器高2.5cmを測る漆皿。内外面に黒茶色の漆が塗布され、高台内のみ黒漆が塗られる。木地は保存良好で、漆膜もヒビや傷が少なく光沢が残る。破片の割れ口には漆の補修痕が認められる。



押図8 区画44-10出土茶筌一括出土遺物実測図・写真

区画44-11出土遺物 (第19・20図)

この区画は、東西道路S S2500南側に面する広い区画で、礎石建物S B560にともなって、まとまった遺物が出土した。特に区画東南に位置する井戸S E1350の横からは鉄砲玉・火縄挟み・鉛地金などが一括出土している。その他、中国製陶磁器や墨や硯なども出土した。

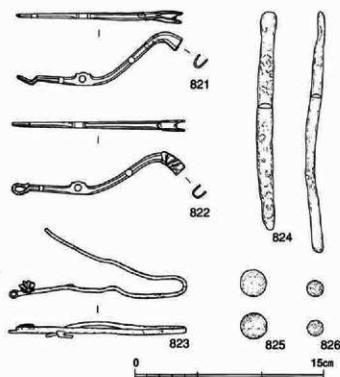
越前焼 (757)は口径10.0cmを測る壺である。(759)は肩部に突帯のめぐる壺。口径18.6cm、器高30.7cmを測る。胎土は黄褐色で、やや焼成不良。S E2549北側の整地層から出土した。(760)は口縁の内湾する鉢で、口径13.2cm、器高5.6cmを測る。(761)の鉢は口縁が三角に肥大する。(762)は口径26.0cmを測る平鉢。(763)はⅢ群bの襷鉢で、胎土は赤褐色で焼成良好。6条1組の襷目を有す。(766)も同じくⅢ群bの襷鉢。(764)・(767)・(768)はⅣ群の襷鉢。(769)は口径19.6cm、器高4.8cmを測る卸皿。(765)もⅢ群bで、7条1組の襷目が入る。胎土は黄褐色で焼成良好。(770)は鉢の口縁部の破片を打ち欠いて作った円盤状製品で、直径約5.0cm、厚さ1.0cmを測る。

土師質土器 (771)は口径4.8cm、器高7.3cmを測る小壺で、胎土は黄白色で粗く、表面の調整も粗雑で、焼成不良。(772)～(774)はC,類の皿。(775)はB類皿で、口径8.4cm、器高2.3cmを測る。口縁は大きく波打つ。(777)は口径9.2cm、器高2.4cmを測るC,類皿で、器壁は厚く、ケール痕が口縁全体に付く。(778)～(785)はD,類皿。(782)は口径13.4cm、器高2.2cmを測る。器壁は薄く均一に作られる。胎土は白い生地と赤みの強い生地がマーブル状に混ざる。(786)は底部を尖り気味に成形した小壺。(787)は灯芯押。円盤の真ん中に孔を明け、縁が薄くなるよう削られる。

瀬戸・美濃焼 (788)は鉄軸壺で、口径13.8cmを測る広い口縁部から肩部はわずかに膨らむ。シブ鉄が全体に施され、その上から内面口縁部と外面に鉄軸がかかる。(789)は底径6.2cmを測る鉄軸壺。内面と外面腰部までは黒く発色する鉄軸がかかり、底部にかけては露胎。(790)は口径11.2cm、器高2.5cmを測る端反の灰軸皿。

中国製陶磁器 (791)は口縁に雷文帯の線刻される青磁碗。(792)は口径13.8cm、器高6.2cmを測る青磁碗である。内外面ともに無文。見込みは中央部が厚くなっている。胎土は黄灰色で焼きなまっておき、口縁部は赤みがかかる。釉薬は淡灰緑色を呈し貫入が認められる。(793)は口径14.4cm、器高8.1cmを測る青磁丸碗。(794)の青磁碗はS B560の下層焼土層出土で、口径14.4cm、器高5.3cmを測る。(795)の青磁碗は口径14.8cmを測り、外面口縁には雷文帯がめぐり内面には唐草文が線刻される。胎土は灰色で、釉は淡青緑色を呈する。(819)は無文の青磁碗。(796)の青磁盤は椀花皿型で、内面は口縁部から胴部にかけて弧線が線刻される。口径23.0cmを測る。(797)・(798)は青磁椀花皿。(799)は口径10.0cmを測る白磁皿。外面胴部には沈線がめぐる。(800)は端反の白磁皿で、(801)・(802)は底部から口縁にむかって直線的に開く白磁皿。(803)は白磁碗。器壁は薄く、釉は火を受けてくすんでいる。定窯の白磁印花文碗か。区画44-6より出土した口縁破片と同一固体と思われる。(804)～(807)は底部から口縁部に直線的に、わずかに外反しながら立ち上がる同型の白磁杯で、(805)は口径6.6cm、器高4.0cmを測る。(808)は口径5.4cm、器高3.8cmを測る染付杯。(809)はB群の染付皿で、外面胴部には複雑な唐草文が描かれ、見込みにはアラベスクが描かれる。絵柄は簡略化されず、細密に描かれる。口径14.4cm、器高3.4cmを測る。(810)は萐筍底のC群染付皿で、見込み中央に鉄分を含んだ土の魚文を置いている。(811)は端反のB群染付皿。(820)は外面が無文の端反染付皿。

金属製品 (812)は環状金具。(813)の金製飾金具は、椀の形で、真ん中に菊模様を打ち出している。(814)は鏡。(815)・(816)は鉄釘で腐食が進んでいる。(821)・(822)は火縄挟みで、保存状態は非常に

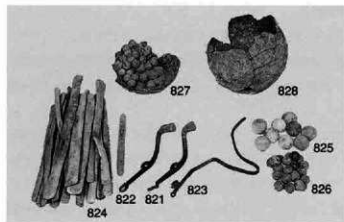


良い。(823)は弾金で、蝶の細工がされる。銅製で表面に部分的に緑青が見られるが、保存状態は良好。引金を引くと、弾金の止め金がはずれ、バネで火縄鉄が持ち上がり、火袋に着火する。

(824)は鉛の地金で、重さの合計は約1貫目であった。(825)は大きい方の弾丸で、1発あたりの重さが45g~50gで、直径2.0~2.1cmを測る。51発出土した。(826)は小さい弾丸で重さは約8gで、211発出土。(827)・(828)は埴塼。中に解けかかった弾丸が入った状態で出土した。材質は金属なので、埴塼の本体はなくなり、内面に付着した金属が固まったものと思われる。

石製品 (817)の硯は幅5.4cmを測る。両面とも劣化して剥離が激しい。

その他 (818)は墨で、一乗谷の出土は2例目。第40次調査でも出土している。幅2.0cm、厚さ1.1cmを測り、上部欠損。表面に龍らしき模様が見えることから、興福寺製の「二諦坊墨」か。



挿図9 区画44-11出土鉄砲関連部品実測図・写真

S S 495・S S 2500・S S 2501出土遺物 (第20図)

S S 495は区画44-1~7が面する南北道路だが、道路遺構ということで遺物は少なく、また破片の小さいものが多かった。S S 2500・S S 2501はS S 495に交差する東西道路で、同じく遺物量は少ないため、道路遺構出土の遺物をまとめて報告する。

越前焼 (829)はⅢ群甕。胎土は灰色で焼き締まっている。(830)・(831)はⅣ群播鉢。

瀬戸・美濃焼 (832)は口径7.8cmを測る灰軸香炉。口縁部は内側に折り込まれ、口縁、胴部、腰部には竹の節を模したように沈線がめぐる。内面は露胎。

中国製陶磁器 (833)は口径12.0cmを測る青磁椀花皿。(834)は口径12.0cm、器高2.8cmを測る端反の白磁皿。(835)はS S 495から出土した白磁坏。見込みは輪状に軸が掻き取られる。

金属製品 (836)の銅製匙はS S 2501より出土し、長さ14.2cmを測る。傷みが激しく柄はねじれている。

石製品 (837)の硯は、魚や波模様などが丁寧に彫刻される。

S D500出土遺物 (第21回)

南北溝 S D500は土塁 S A2557内側に設けられた溝で、調査区東端に位置する。遺物は調査区を接する第17次調査区のものと同接関係にあるものもあった。

越前焼 (838)は口径28.6cm、器高12.0cmを測る鉢。(839)はⅢ群bの擂鉢で口径28.2cm、器高10.0cmを測る。9条1組の擂目を有す。

瀬戸・美濃焼 (840)は外面の鉄軸が禾目状に発色する鉄軸碗。

中国製陶磁器 (841)は端反白磁皿。(842)は白磁壺で第17次調査出土の遺物と接合関係にある。底部は露胎で、外面に模様が型押しされる。(843)の染付皿は、見込みに花文、外面に牡丹唐草が描かれるB群皿。(844)は口径9.4cm、器高2.4cmを測り、外面は無文の染付皿。(863)は華南彩軸陶器の皿。

朝鮮製陶磁器 (845)は蕎麦茶碗。高台皿付は軸葉が削り取られる。胎土は黄土色で、胴部は刷毛で塗られた軸葉が茶白色に発色する。

S D509出土遺物 (第21回)

南北方向溝 S D509は区画44-11の西境界となる溝で、越前焼や木製品も出土した。また位置的に接しているため第17次調査区出土の遺物と接合するものがあった。

越前焼 (846)は口径20.8cm、器高3.7cmを測る皿。底部は中央部が盛り上がる。胎土は赤褐色で焼成良好。底部には板目が付き、T字のヘラ記号を有す。(847)・(848)はⅣ群の擂鉢。擂目は重ねて密に引かれる。

土質瓦器 (849)は口径6.8cm、器高1.6cmを測るG類皿。(850)は口径6.2cm、器高3.1cmを測るB類皿。(851)はC類皿。(852)はB類皿としては大きめで、口径9.3cm、器高2.1cmを測る。(853)は口径11.2cm、器高2.7cmを測るD類皿。

瀬戸・美濃焼 (854)は口径11.4cmを測る黄瀬戸丸碗で、外面胴部下まで灰緑色の軸葉がかかり、以下はシブ鉄が塗られる。(855)は鉄軸壺で、内面は鉄軸が施軸されるが、外面は丁寧に磨かれ露胎になっている。肩部に沈線が1本めぐり鉄軸が残る。(856)の灰軸皿は見込みに梅花の印花文を有す。

中国製陶磁器 (857)はC群の染付皿で、見込みには花文、外面口縁部には波濤文帯が描かれる。(858)もC群染付皿で、口径11.6cm、器高2.4cmを測る。

金属製品 (859)の鉄は頸部に線刻を施す。

木製品 (860)の木製品は残存長10.3cmを測り、釘穴が2カ所あり貫通する。(861)は残存長17.4cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmを測るヘラ状木製品。(862)は(861)とともに出土した。長さ17.7cm、一辺1.1cmを測り、二辺には黒漆が塗布される。釘穴有り。

S D518出土遺物 (第22～24回)

この溝は南北方向道路 S S495の西側溝で、区画44-1～7と接する。遺物量は多く、中国製陶磁器には青磁の蓋や黒軸茶入なども含まれていた。石製品には盤や石仏があった。

越前焼 (864)は口径11.4cmを測る壺。胎土は灰色で焼き締まっている。(865)は口縁が内湾する鉢。(866)も口縁が内湾し、口径14.0cm、器高5.6cmを測る鉢。底部には蓮目の痕が付く。(867)は口径32.4cm、器高10.3cmを測るⅣ群の擂鉢。胎土は黄褐色でやや焼成不良。(868)もⅣ群擂鉢で、色調は暗赤茶色で焼成良好。(869)は口径38.8cm、器高15.0cmを測るⅣ群擂鉢。9条1組の擂目が乱雑に引かれる。胎土は黄

白色で焼きがあまく、摺目の磨耗が激しい。

信楽焼 (870)は壺の口縁部か。胎土は白石粒を多く含みボソボソしている。

土師質土器 (871)は口径5.8cm、器高1.4cmを測るC類皿で、(872)もC類で、胎土はともに白っぽい。(873)のB類皿は口縁にタール痕有り。(876)のB類皿は、口径8.8cm、器高2.3cmを測り、内面に肘を押し当てた痕が残る。(875)は口径10.4cm、器高2.4cmを測り、内外面にタール痕有り。(879)は直径2.0cm、厚さ0.3cmを測る灯芯押。中央に径0.3cmの孔を開け、縁は斜めに削られている。(880)は口縁部を欠く土釜。(881)は器台型の土器。

瀬戸・美濃焼 (882)は黒褐色に発色する鉄釉碗。(884)は胎色の鉄釉がかかる碗で、口径13.7cmを測る。(883)は鉄釉平碗で、高台内の削りは浅い。(885)は口径10.6cm、器高2.7cmを測る鉄釉皿。全面に鉄釉が二重にかけられる。見込みと高台内にトチン痕有り。(886)は鉄釉瓶。(887)は器壁を厚く作る端反の鉄釉皿。釉薬は内面口縁部だけに薄くかかり、以下は露胎。(888)は口縁の内湾する鉄釉皿で、口径11.1cm、器高2.7cmを測る。高台や見込みに軸が厚く垂れる。(889)・(890)も同形の鉄釉皿で、見込みに菊花の印花文を持つ。内面は菊皿状に削られる。高台内には輪トチン痕が残る。(891)は口径9.0cmを測る端反の鉄釉皿。釉は火影れを起こし変色している。

国産陶器 (892)は口径11.0cmを測る鉢。器壁は薄く、内外面とも露胎で、口縁部と胴部に1本づつ沈線がめぐる。

瓦質陶器 (893)は瓦燈の蓋。外面は磨かれるが、内面には指頸圧痕が残る。胎土は肌色で、表面の色調も黄褐色を呈す。

中国製陶磁器 (894)は聞香用の青磁香炉。筒型で、腰部に3ヶ所、簡略化した小さい足が貼り付けられる。割れ口には黒漆の補修痕がみられる。(895)は胴部に沈線のめぐる青磁香炉。オリーブ色の釉がかかる。(869)は青磁壺の蓋。(897)は胴部に線描蓮弁文、見込みに印花文を持つ青磁碗。胎土は灰色を呈し、釉は暗灰緑色に発色する。(898)は腰部に稜を持つ青磁碗。見込みに印花文有り。高台畳付も含めて、淡緑色の釉がかかる。高台内は輪状に釉が掻き取られる。(899)は口径14.2cmを測る青磁碗で、内外面とも無文。胎土は灰黒色を呈す。(900)の青磁碗は器壁が薄く釉薬は淡緑色を呈す。(901)は口径14.2cmを測る端反の青磁皿。腰部に稜を持ち、口縁部は外反する。内面は淡緑色の釉の上から口縁が見込みに向かって白磁釉で線描きして模様を付けている。(902)は口径10.4cm、器高2.9cmを測る萐筒底の青磁皿。(903)は口径6.6cm、器高1.3cmを測る白磁皿。見込みは釉が輪状に掻き取られ、底部も露胎。(904)は口縁が外反する白磁皿。萐筒底で底部は器壁が薄い。(905)は白磁の菊皿で、口径10.3cm、器高2.9cmを測る。胎土は赤みがかり、黄白色の釉はたっぷりとかかるものの、縮縮みがみられる。(906)の端反白磁皿は、口径11.8cm、器高3.1cmを測る。(907)は口径14.2cm、器高3.5cmを測る萐筒底の白磁皿。胎土は白く完全に磁器化しており、乳白色の釉がかかる。(908)の染付碗は口径9.2cmを測り、内外面口縁部に1本の界線がめぐり、内面胴部に梅花が描かれる。また外面胴部には白磁釉の下に線描が見えるが、文様は部分的なため不明。呉須は濃く発色する。(919)の染付碗も外面に線描が認められる。(909)は底径11.0cmを測る染付皿で、高台から稜を作らず直線的に外反しながら立ち上がる。見込みに動物が、外面胴部には複雑な唐草文が描かれる。釉薬は灰色がかって発色し、呉須の色合いも深い。(910)は萐筒底の染付皿で見込みに花文が描かれる。(920)は見込みにアラベスクが、(921)は十字花文が描かれる。(911)は口径3.0cmを測る黒釉茶入。外面には黒褐色の釉がかかるが、火影れを起こしている。胴部に沈線が1本めぐる。(912)は銅緑釉皿で、胎土は黄白色で焼成不良。釉薬は二次的に火を受けたため

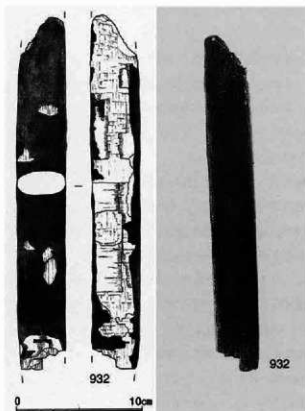
か、白っぽく、釉縮みもみられる。

朝鮮製陶磁器 (913)は口径8.6cmを測る蕎麦釉瓶である。

金属製品 (914)は長さ3.2cm、幅2.9cmを測る刀装具。貴金具と考えられ、保存状態は良好。

石製品 (915)の砥石は欠けているため長さなどは不明。表面に研磨する際に付いた擦痕が認められる。(916)・(917)は未成形の砥石。表面には石を切り出し、加工したときのノミ痕が残る。(918)は笏谷石製の盤。楕円形で、4カ所足が削り出される。側面はすべて打ちかれており、S D 518の底石に転用されていた。幅約61.0cmで、残存高7.2cmを測る。(922)は笏谷石製の石仏。残存長37.7cm、幅25.0cmを測る。中央に地藏菩薩立像が彫り出され、右端に「妙眼童女」、左端に「(年か)六月十六日」と線刻される。保存状態良好で、手に乗せる宝珠には金箔が残り、衣文や法名の線刻には金箔を貼る際の接着剤と思われる朱漆が残存する。(923)は笏谷石製のバンドコ蓋で、四角張った楕円形のもの。中央部に窓を3つ開ける。(924)は笏谷石製バンドコの手で同じく楕円型。

木製品 (932)は黒漆が塗布される木製品。残存長28.0cm測り、両端とも欠損。断面は楕円形。下地のうえに黒漆を塗り、さらに本漆を重ね塗りしており、良質の作りをしている。



挿図10 S D 518出土木製品実測図・写真

S D 2505出土遺物 (第24図)

区画44-4と44-5の境界である東西方向溝S D 2505から出土した遺物をまとめる。

越前焼 (925)は口径38.8cmを測るIV群播鉢。10条1組の撞目を有す。

土師質土器 (926)・(927)はC類皿で、ともに口縁部全体にタール痕が付く。

中国製陶磁器 (928)は口径12.2cm、器高2.3cmを測る柴付皿で、見込みに花文が描かれ、外面は無文。釉は火影れを起こしている。

S D 2506出土遺物 (第24図)

区画44-5と44-6の境界、東西方向溝S D 2506から出土した遺物を述べる。

越前焼 (929)は口径24.0cm、器高8.7cmを測る鉢。胎土は灰色を呈し、焼成良好。

S D 2507出土遺物 (第24図)

区画44-6と44-7・9の境界、東西方向溝S D 2507から出土した遺物を述べる。

越前焼 (930)はIII群の甕。胎土は灰黒色で焼成良好。

中国製陶磁器 (931)は口径12.8cm、器高3.1cmを測る端反の白磁皿で、釉は貫入が多く、灰色がかかる。

2次的に火を受けて火膨れを起こしている。

S D2508出土遺物 (第25～27図)

S D2508は西山裾から、区画44・6・9の西境界として進み、区画44・7・8・9の境界になる形で鍵状に設けられ、S S2501の南側溝となっている。出土した遺物は越前焼・瀬戸美濃焼・中国製陶磁器のほか、漆内ということで、木製品に漆輪や灯明台など保存状態の良い遺物があった。また、石製品にも甌草形や楕円形の盤があった。

越前焼 (933)は口径38.2cmを測る中甕で、肩部にはヘラ記号を有す。肩部まで降灰があり、焼色は暗褐色を呈し焼成良好。(934)は口径14.9cmを測り、肩部に耳が付く双耳の壺。肩部にヘラ記号も有す。(935)は底径20.6cmを測り、腰部が大きく膨らむ徳利形の壺である。(936)は口径13.4cmを測り、口縁部はわずかに開きながら4.0cmほど立ち上がる。(937)は口径6.0cmを測る片口の壺。(938)は口径9.2cmを測り、胎土は灰色で焼き締まっている。(939)は口縁部が断面三角形の広口壺で、胎土は黄褐色でやや焼成不良。(940)は口径12.3cmを測り、口縁部が短い広口の壺で、肩部にヘラ記号を持つ。(941)口径15.4cm、器高6.9cmを測る鉢で、口縁部は内湾する。(942)は口径32.8cmを測る大型の鉢。(943)は口径25.2cm、器高9.6cmを測るⅣ群の播鉢。8条1組の播目を有し、胎土は赤褐色。(944)は同じくⅣ群の播鉢で、口径32.8cm、器高10.5cmを測る。9条1組の播目を有すが、胎土は黄土色で焼成不良のため内面下半は播目が磨耗している。(945)は口径19.0cm、器高4.2cmを測る脚皿。(946)は口径19.4cm、器高19.0cmを測る桶で、外面はきれいにナデ調整されており、内面は粘土紐の輪積み痕が良くわかる。胎土は黒褐色で硬く焼き締まっている。火桶として用いられたものか。

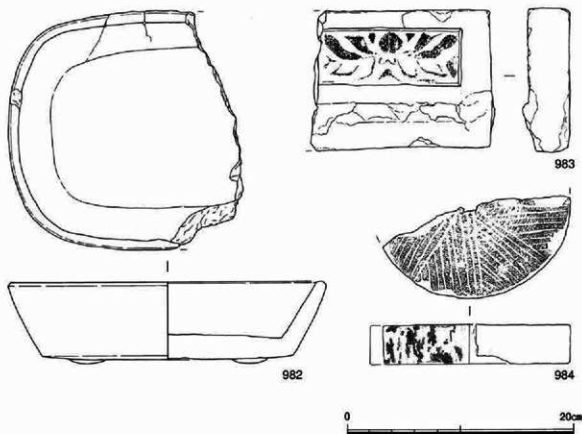
土師質土器 (947)～(949)はB類の皿で、(947)は口径4.6cm、器高1.5cmを測る。小型だが口縁にはタール痕が認められる。(949)は口径6.9cm、器高1.9cmを測る。(945)～(952)はC類の皿で、(952)は口径8.9cm、器高2.2cmを測る。口縁は摘み上げて成形され、タール痕が全体に付く。(953)は口径8.5cm、器高2.3cmを測るB類の皿で、掌で成形したあと、口縁部を一部指で内側に押し込んでいる。(954)は口径10.6cm、器高2.3cmを測るD類の皿で、器壁は厚く、外面は丁寧な指で押しつけて形を整えている。

瀬戸・美濃焼 (955)～(958)は鉄軸の碗である。(955)は口径8.4cmを測る小型の碗で、胎土は灰色で細かい。(956)は口径11.6cm、器高6.4cmを測り、腰部下まで鉄軸がかかり、高台にかけてはシブ鉄が施される。胎土は黄白色で粗い。(957)は口径11.4cm、器高5.9cmを測り、腰部までは鉄軸がかかり、高台は露胎である。胎土は灰色で焼成不良のためボンボンしている。(959)は口径5.0cm、器高1.6cmを測る小型の鉄軸皿。萐筒底で、高台置付・高台内含め全体に鉄軸がかかる。(960)は底径4.2cmの鉄軸壺で、芋子型の茶入と思われる。外面は釉の潤離が激しい。(961)は鉄軸壺で、底径5.8cmを測る。胎土は灰色で非常に細かく焼き締まっている。鉄軸も黒く均一に発色し、外面底部は露胎。(962)は口縁の内湾する鉄軸皿で口径10.7cm、器高3.2cmを測る。外面はヘラ削りされ、高台は削り出し。口縁にタール痕が認められることから、灯明皿として転用されたものと思われる。(963)の鉄軸皿は見込みに菊花の印花文を有し、(964)は内面を菊皿状に削ぐ鉄軸皿。(965)は口径5.5cm、器高2.5cmを測る鉄軸杯で、口縁は外反し、外面はヘラ削りされる。内面から外面腰部下まで軸がかかるが、残りは露胎で轆轤目を残す。胎土は灰色を呈し粗い。

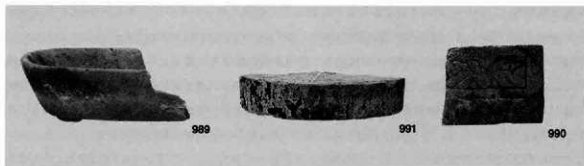
国産陶器 (966)は口径16.6cm、器高5.3cmを測る無施釉の鉢である。胎土は灰色がかかった黄褐色できめ細かく、焼き締まっている。高台は削りだして、肩部から口縁部はまっすぐ立ち上がる。

中国製陶磁器 (967)は外面を口縁から高台にむかって鐘状に削った青磁碗である。(968)は線描蓮弁文の青磁丸碗。(969)は口縁部のみ菊花型に切りこみを入れた白磁皿で、口径11.8cm、器高2.7cmを測る。(970)の白磁皿は口径12.0cm、器高3.0cmを測り、高台登付の軸は削り取られ、軸葉はわずかに灰色を呈する。(971)は端反の白磁皿。(972)は見込みに踊る人物像の描かれるE群の染付碗。高台内には「大明年造」の銘が書かれる。(973)は見込みに蟹が描かれる染付碗で、高台がやや裾広がりに作られる。外面には軸輪みがみられる。(974)は口径10.0cm、器高3.0cmを測る蒼物底の染付皿である。見込みに花文が描かれる。胎土は黄褐色で完全には磁器化していない。(975)は、口径10.8cm、器高2.6cmを測る染付皿で、口縁部が内湾するE群の皿だが、見込みにB群に多い玉取獅子が描かれる。外面の牡丹唐草も様式化されたものとは異なる。文様は呉須の色調が黒っぽく、はっきりとしてくずれが見られない。(976)は端反のB群の染付皿で、見込みに十字花文、外面には牡丹唐草が描かれる。(977)は見込みに山水人物が描かれるE群の皿である。口径は12.4cm、器高2.4cmを測る。(978)は胴部から折れて口縁部がほぼ水平に広がるF群の染付皿で、口径は16.0cm、器高3.0cmを測る。(979)は口径が25cmを超える染付の大皿で、底径17.8cmを測る。見込みに玉取獅子が描かれる。(981)は染付皿。

石製品 (982)は笏谷石製のバンドコの蓋である。楕円形で、幅12.8cm、奥行き11.2cmを測る小型のもので、中央部に3カ所窓を設け、孔は内外両側からノミで開けている。(983)は硯で、裏面を欠くため厚さは不明。(984)・(985)はともに笏谷石製の盤で、(984)は瓢箪型のもの。底部に3つの丸い足を削り出している。器高11.0cmを測る。内面ともに滑らかに仕上げられる。(985)は円形盤で、直径39.6cmを測る。底部には円形の穿孔がうがたれ、3足が削り出される。内面の仕上げはノミ痕が粗い。(986)は笏谷石製の風炉で、3足を有す。内面はノミ痕が残るが、外面は丁寧に磨かれ、滑らかに仕上げられている。



押図11 S D2508出土石製品実測図



挿図12 S D2508出土石製品写真

(987)・(988)は砥石で、(988)は残存長17.5cmを測る。上下面ともによく使用されている。(989)は楕円形の笏谷石製盤で、4足が削り出されている。内外面ともに丁寧に磨かれている。最大幅21.0cm、器高7.2cmを測る。(990)は石塔基壇部分の石材の一部と思われる。厚さ3.7cm、蓮華座の彫刻が施される。(991)は笏谷石製の臼で、直径17.6cm、厚さ3.5cmを測る。側面には漆が塗布されており、搦目は使用したため磨り減っている。

木製品 (992)は灯明台で、長さ15.7cmの板材2枚の中央部分に、切り込みを互い違いに入れ、組み合わせている。皿受け部分の直径は9.6cmを測り、C類の皿に合致する。(993)は高台内に朱漆で「極楽寺」と書かれる漆椀で、口径15.0cm、器高7.3cmを測る。内面は朱漆、外面は黒漆が塗られ、出土時は木地も良く残っていた。区画44-7と8の境界となる溝内から出土したが、「極楽寺」は実在の天台宗寺院として名が知られており、所在地は文献資料によると東新町か天沢寺付近と、いずれも城戸の外とされ、第44次調査区の赤沼地区とは位置的に隔たりがある。(994)は内面に草花文や朱漆で描かれる黒漆椀。口径13.4cm、器高4.8cmを測り、高台内にヘラ記号を有す。(995)は高台内に朱漆の銘を持つ黒漆椀で、内面は二次加熱で焼けこげている。

S D2509出土遺物 (第28図)

この溝は、東西方向道路 S S2501の北側溝で、出土遺物には下駄・櫛・曲物・人形など多種の木製品があった。

越前焼 (996)は口径30.0cmを測る甕である。口縁部は肥大し、腰部下まで降灰がある。内面表面は全体的に剥離が激しく、外面も口縁から肩部にかけて釉薬が剥けている。胎土は灰色で焼成良好。(997)は口径15.0cmを測る甕。

土師質土器 (999)はD類の皿で、口径8.4cm、器高2.4cmを測る。タール痕が全体に付き、よく使用されている。(1000)もD類の皿で口径11.8cm、器高2.4cmを測る。見込みも指でナデ調整している。

瀬戸・美濃焼 (1001)は鉄軸碗で、口径12.0cmを測る。釉薬は銀色味を帯びて発色している。(1002)は肩部が大きく膨らむ鉄軸壺で、頸部は立ち上がらず、口縁を丸く作る。肩部に4カ所耳が付く。

中国製陶磁器 (1003)はB群染付皿で、見込みに十字花文、外面に牡丹唐草が描かれる。胎土は白色で完全に磁器化しており、高台には砂が付く。

朝鮮製陶磁器 (1004)は口径8.6cmを測る瓶である。胎土は灰黒色で灰緑色の釉がかかる。

金属製品 (1005)～(1007)は鉄釘。(1008)・(1009)は環状金具。(1010)は鏡。(1011)は小柄の柄で、表面には金箔が残り、唐草文が線刻される。

石製品 (1012)は粉引白の下白。砂岩製で直径27.2cmを測る。

木製品 (1013)は露卯下駄で、長さ20.6cm、幅8.8cmを測る。SD2509からは上臼も1点出土しているが、石材が異なる。前の歯は、抜けるのを防ぐためか木釘が打ち込まれている。(1014)は曲物の蓋。直径8.5cm、厚さ0.6cmを測る。中央に桜樹皮を通す。(1015)・(1016)は折敷。(1017)・(1018)は人形の一部か。(1019)の櫛は半分炭化している。櫛歯は44本。(1020)は竹製品。(1022)・(1023)・(1027)は箸で、(1024)は真ん中に孔が開けられ、筒状になっている。(1026)は長さ22.5cmを測るヘラ状木製品。

S V 2640出土遺物 (第29図)

区画44-10の西端境界となるS V 2640より出土した遺物について述べる。

土師質土器 (1030)はB類の皿。(1031)は羽釜で口径9.8cmを測る。羽部より下部は内外面ともに指頭圧痕が残る。

中国製陶磁器 (1065)は口縁部にねずみの絵が描かれたF群の染付皿。

金属製品 (1032)の飾金具は表面に漆を塗布した痕跡がある。(1033)は唐草模様彫刻が施された銅製飾金具、両端に留め孔がある。長さ16.7cm、幅0.8cmを測る。

S F 2552出土遺物 (第29図)

区画44-2の西南隅に設けられた石積施設S F 2552から出土した遺物について述べる。

越前焼 (1034)は円盤状の用途不明の製品で、壺の破片を打ち欠いて丸く成形している。直径4.0cm、厚さ1.2cmを測る。(1035)は口縁の肥大していない壺。

土師質土器 (1036)・(1037)はC類の皿で、(1030)はD類皿で口径13.6cm、器高2.3cmを測る。

S F 2555出土遺物 (第29図)

区画44-9の南隅に設けられた石積施設S F 2555から出土した遺物について述べる。

越前焼 (1039)は口縁部が三角に肥大する壺で、内面に銘が付着する。(1040)はいわゆるお歯黒壺で口径6.4cmを測る。(1041)は口径14.0cmを測る口縁が内湾する鉢。

土師質土器 (1042)は口径6.8cm、器高1.6cmを測るB類の皿。両面に布を当ててひねりながら成形している。(1043)は口径9.0cm、器高2.3cmを測るC類の皿で、口縁全体にタール痕が付く。(1044)は小型の土釜。

瀬戸・美濃焼 (1045)は鉄釉の碗で、口径11.4cmを測る。(1046)は端反の灰釉皿で口径9.1cmを測る。

中国製陶磁器 (1047)は茶筒底の青磁皿。(1048)も口径10.0cm、器高3.0cmを測る茶筒底の青磁皿。(1049)は口径9.2cmを測る青磁香炉で、体部には3本の界線がめぐる。内面は見込みが露胎になっている。(1050)は端反の白磁皿である。(1051)は口径6.0cm、器高3.5cmを測る白磁杯。高台内に「大明年造」の銘が書かれる。(1052)はB群染付皿で、見込みにはアラバスクと梵字、外面胴部には密な唐草文が描かれる。(1066)は同じく見込みにアラバスクの描かれる染付皿。

金属製品 (1067)～(1069)は鉄釘。

S F 2556出土遺物 (第29図)

同じく区画44-9の北半に設けられた石積施設S F 2556から出土した遺物について述べる。

越前焼 (1053)は底径10.4cmを測る壺で、胎土は黄白色で焼成不良。(1054)は口径18.8cm、器高7.1cmを

測る鉢。(1055)は口径19.0cm、器高16.5cmを測る鉢で、底部からやや開きながら直線的に立ち上がり口縁部で内湾する。(1056)は大平鉢。(1057)は口径24.4cm、器高3.0cmを測る御皿。(1064)は竹を模した筒型の花生か。

中国製陶磁器 (1058)は口径11.0cm、器高6.8cmを測る青磁碗。外面は線描蓮弁文が施される。(1059)は口径16.0cm、器高5.3cmを測る束付鉢。外面は口縁部に2条、高台部に3条の界線がめぐり、胴部には草花文が描かれる。呉須の発色は良く、にじみもない。高台内はヘラで抉り取った痕がある。

骨製品 (1060)は鹿骨製の駒石。直径1.8cm、厚さ0.3cmを測る。中央部に裏表とも丸くへこみを付ける。

金属製品 (1061)・(1062)は鉄製釘。腐食が激しい。

木製品 (1063)は露卯下駄で、長さ21.5cm、幅9.0cmを測る。残存している歯は極端に短いため、使用で磨り減ったのではなく、意図的に短くして転用したとも考えられる。

4. 小 結

遺 構

今回の発掘調査により報告した遺構を時期別に位置付けると、大きく4時期に分類されることは先に述べたとおりである。本稿ではこれら時期別の変遷についてまとめをおこなうこととする。各遺構の時期別分類は表1を参照されたい。

最下層 最下層の遺構群は調査区内においても極少数を検出したのみである。S S495は当初幅員約2.0m強の道路であり、また、道路脇には井戸S E2550が構築されていたことから、当初の町割がその後の町割と大きく異なっていたことを確認することができた。この古い町割については出土物が認められないことから具体的な時期については不明である。

下層 町割が大きく変わる段階であると考えられる。S S495はこの段階において大幅に改良され、幅員が約8.0mへ拡張され、その周囲に間口5.0～10.0mの小区画を有する町屋が配置される。また、最下層の段階では不明であったS S495に直交する道路であるS S2500・2501が側溝を含めて200尺(0.303m=1尺)の間隔で設定され、特にS S2500の両側には区画44-10・11といった大型の区画が設けられる。この東西道路であるS S2500の初期段階の南側側溝と想定される溝S D2502が区画44-2において検出されていることから、本道路はのちの中層で見られるような幅3.5m前後を測る道路ではなく、幅6.0mの比較的広い道路であったものと想定される。このことは、中層の遺構であるS D1856の底面で礎石が確認されていることから、区画44-1・2の様相は下層段階では中層段階の区画割と異なっており、このことが先に述べたS D2500の下層段階での幅員と連動しているものと考えられる。

中層 本調査区においてももっとも良好な状態で検出された遺構群であり、調査区全体で確認することができた。前段階から引き続きS S495・2500・2501が骨格をなすことには変わりはないが、S S2500の幅員が3.5m前後へと縮小され、これに伴い区画44-1・2の区画割が変更されている。また、区画8・9は中央を流れるS D2508の存在から当初は2区画であったものと考えられ、時期は不明ながら後に1区画に統合し、礎石建物であるS B2527を設けたものと考えられる。この再区画以前の区画9についてはおそらく区画44-7と同一の区画であったものと想定される。S D2512はこれらの区画を再区画する際に設けられたものと考えられる。

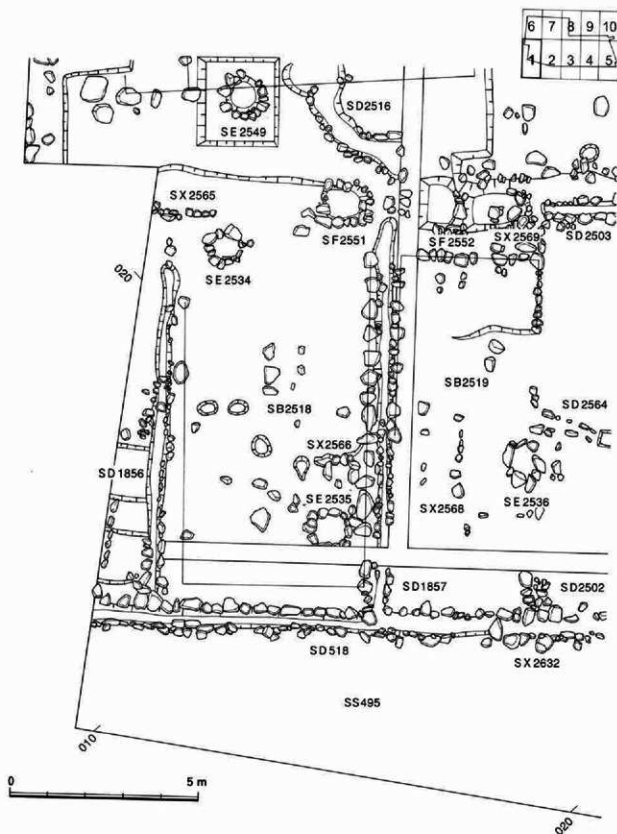
上層 上層遺構は耕作土下において検出された遺構であるが、後世の改変が大きく遺存状態は極めて不良であった。遺構は調査区内西側において極めて限定的に検出されたのみであり、建物の配置状況などの詳細については不明である。しかし、S S495・2500・2501、S A2557・S V2640など本調査区の骨格をなす遺構は前時期より引き続き存続していたものと考えられることから、区画割については中層段階とは大きく異なることはないものと想定される。

以上、遺構の変遷についての概要を述べてきたのであるが、その結果、最下層から下層への区画割変更の時期に一つの大きな画期を見出すことができたものと考えられる。今後は、本画期が城下町一乗谷の中で、どのような位置付けが可能であるのか検討課題として残るものと考えられる。

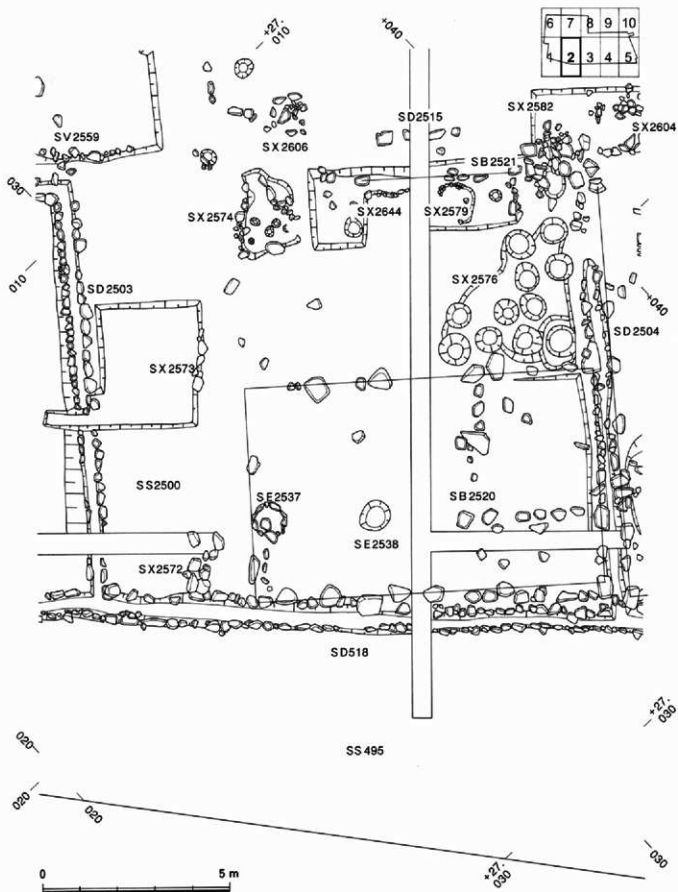
遺構名	上層	中層	下層	最下層	備考	遺構名	上層	中層	下層	最下層	備考
SS495	○	○	○	○		区画44-6					
SE2550				○		SD2507		○	○		
SS2500	○	○	○			SV2560		○	?		
SI2532	○	?				SV2561		○	?		
SS2501	○	○	○			SA2558			?		
SD1855	○	○	?			SE2541				○	
SD2510		○				SF2554			○		
SD2517		○				SX2587			○		
SV2563		○									
SA2557	○	○	○			区画44-7					
SI2533	○	○	○			SD2508		○	○		一部は中層で調査
SV2640	○	○	○			SD2512		○			
SD500	○	○	○			SB2524		○			
SD509	○	○	○			SB2525		○			
						SE2542		○			
						SE2543		○			
区画44-1						SE2544			○		
SD1856		○									
SD1856内礎石			○								
SD1857		○				区画44-8-9					
SB2518		○				SD2511		○			
SF2551		○				SB2527		○			
SE2534		○				SE2546		○			
SE2535			○			SE2547		○			
						SX2600		○			
						SF2555		○			
区画44-2						SF2556		○			
SD2503		○									
SB2519		○									
SX2632		○				区画44-10					
SE2536		○				SD2514		○			
SF2552		○				SD2515		○			
SX2569		○				SE2548		○			
SD2502			○			SX2621		○			
SD2564			○			SX2622		○			
SX2570		○	○			SX2623		○			
						SX2624		○			
						SX2625		○			
区画44-3						SX2626		○			
SD2504		○	?			SX2627		○			
SB2520		○	?			SB2530		○			
SE2537		○									
SE2538			○								
SX2576		○	?			区画44-11					
						SB2529		○			
区画44-4						SE2549		○			
SD2505		○	○			SB560			○		
SB2522		○	○			SX2610				○	
SE2539			○								
SX2633		○	○			区画44-12					
						SD2509			○		
区画44-5						SX2636		○			
SD2506		○	○			SB2526			○		
SB2523		○	○			SF2641		○			
SE2540		○	○								
SF2553		○									
SX2634		○	○								

表1 遺構時期別分類一覧

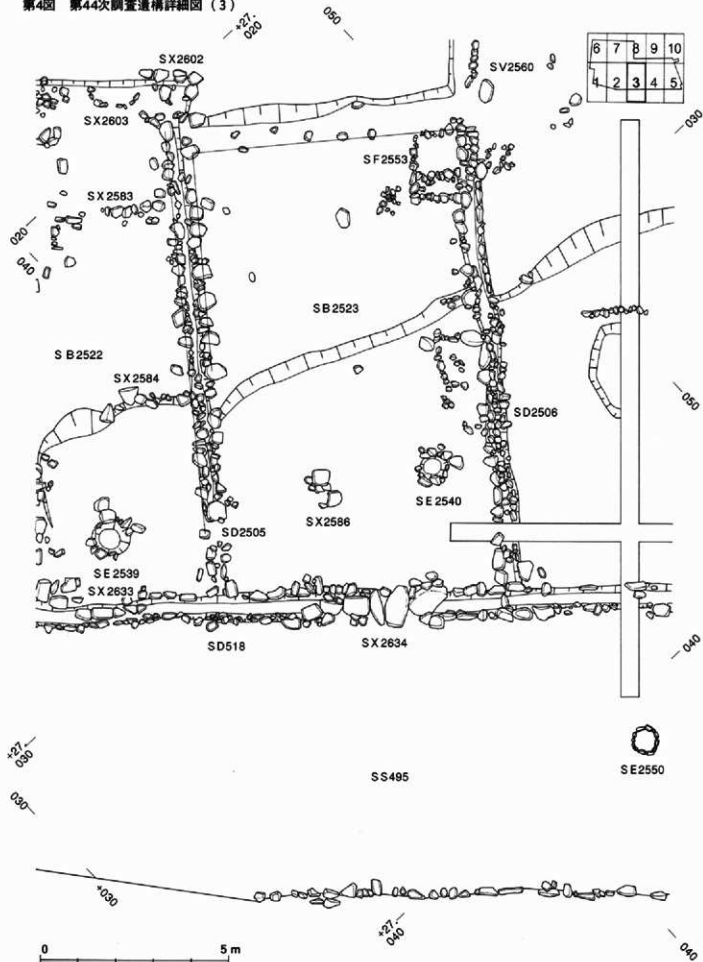
第2図 第44次調査遺構詳細図(1)



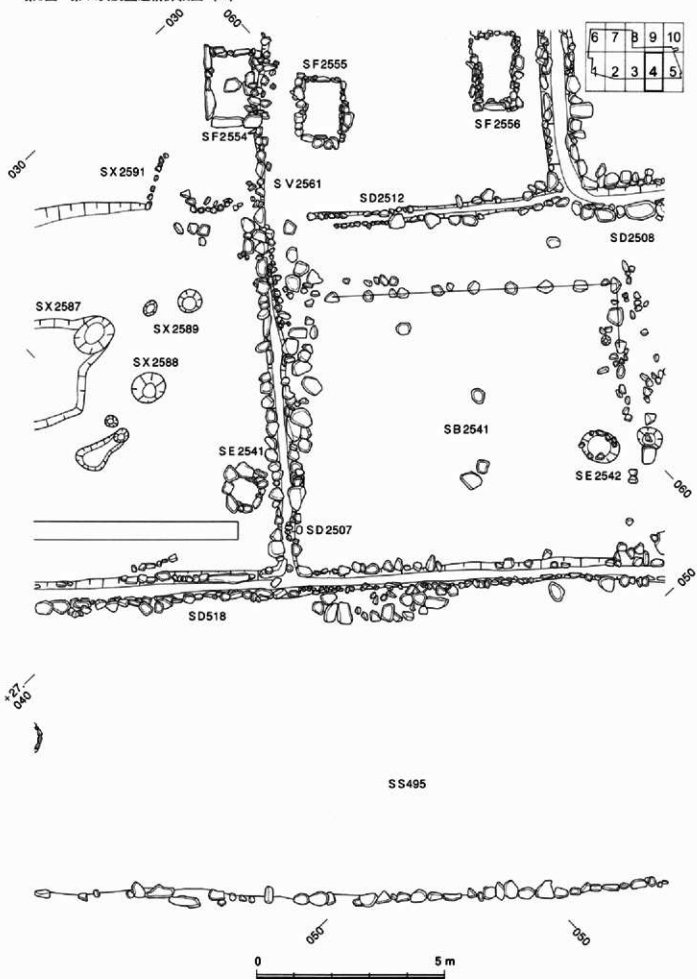
第3図 第44次調査遺構詳細図(2)



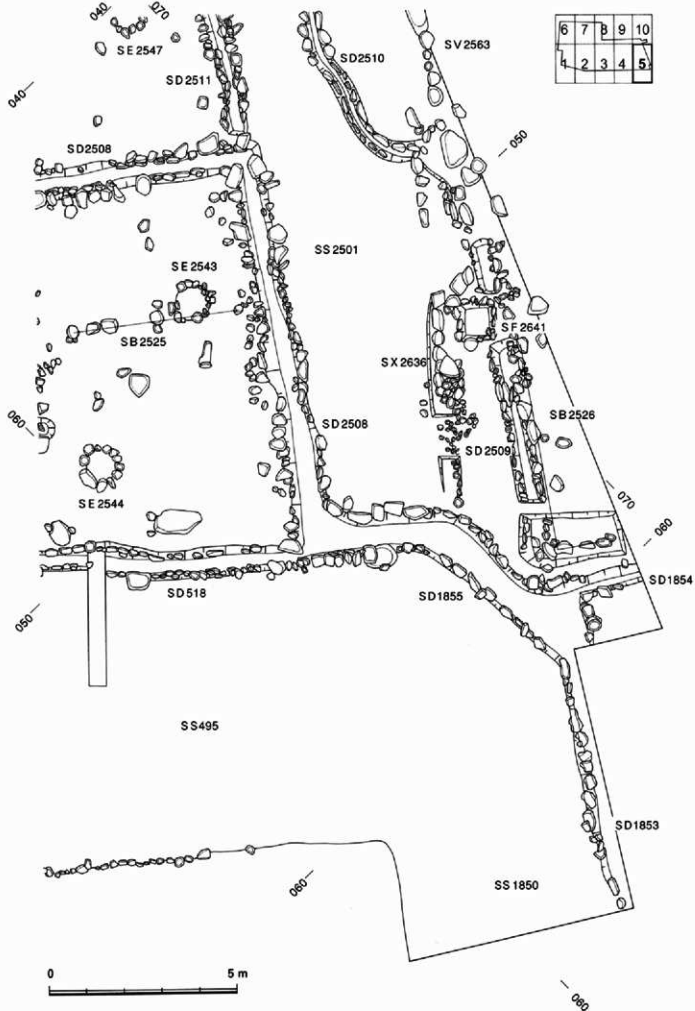
第4図 第44次調査遺構詳細図 (3)



第5図 第44次調査遺構詳細図(4)

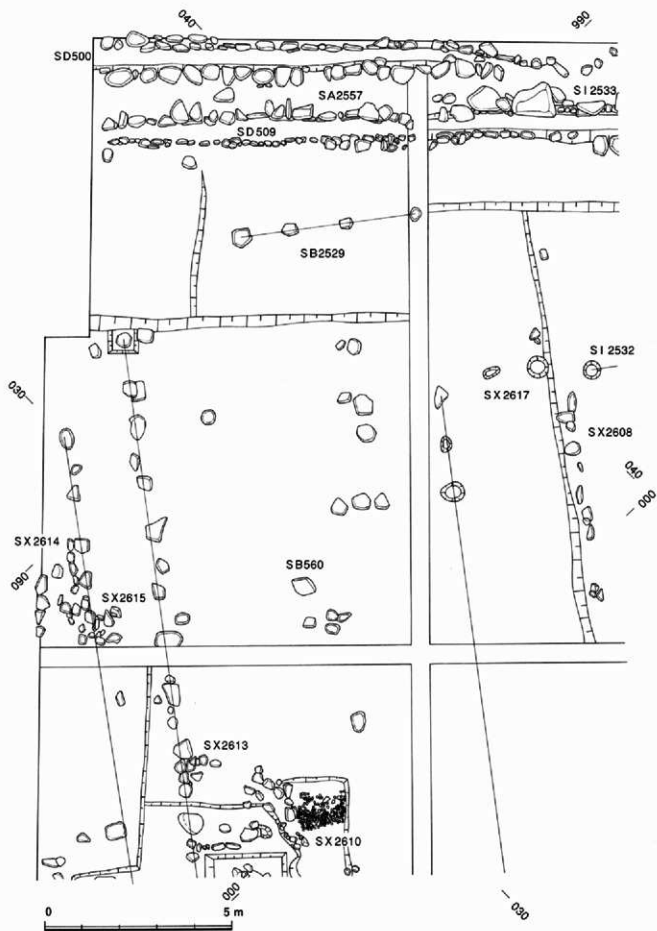


第6図 第44次調査遺構詳細図(5)



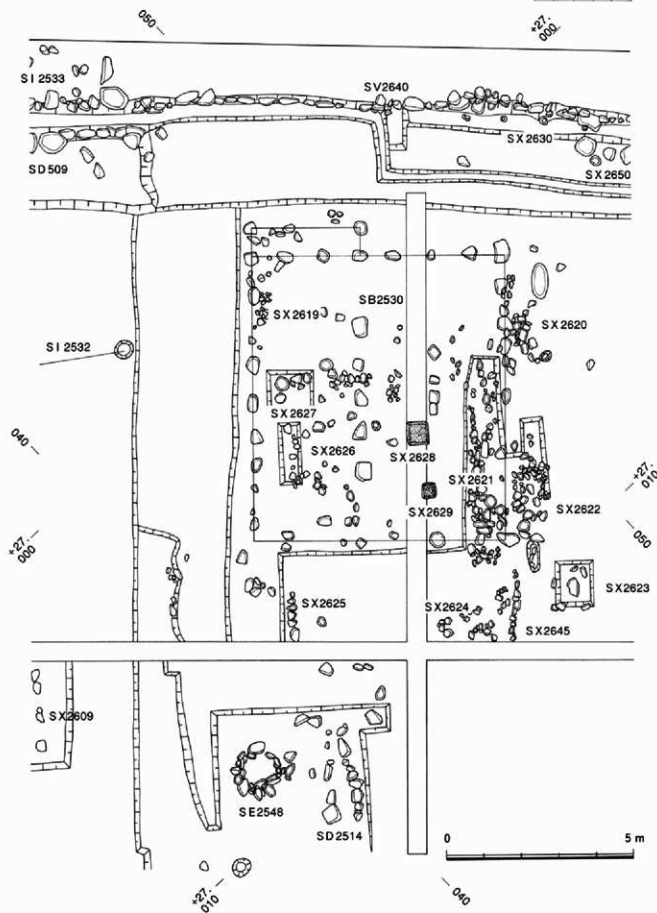
第7図 第44次調査遺構詳細図(6)

6	7	8	9	10
1	2	3	4	5

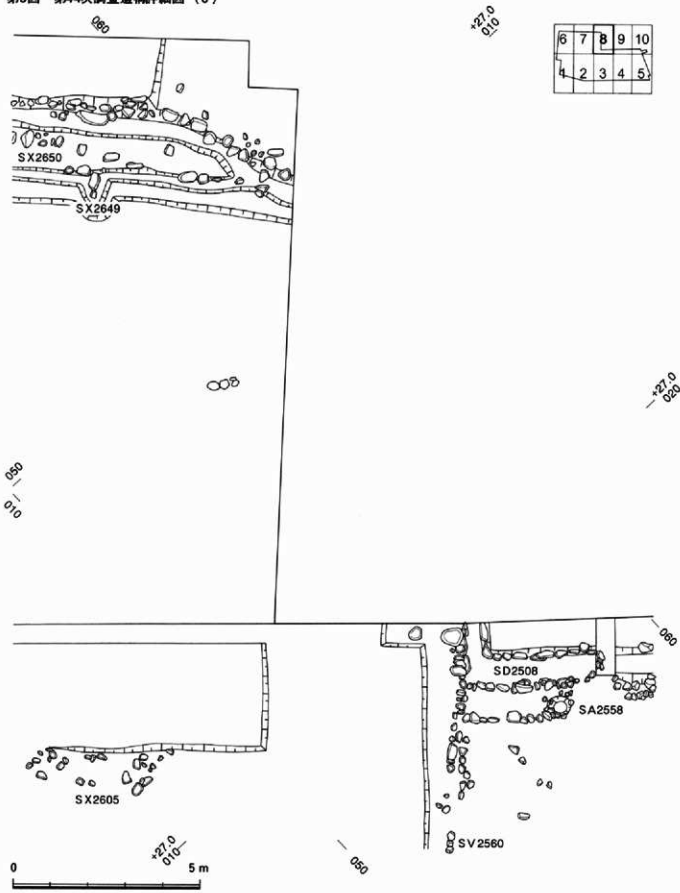


第8図 第44次調査遺構詳細図(7)

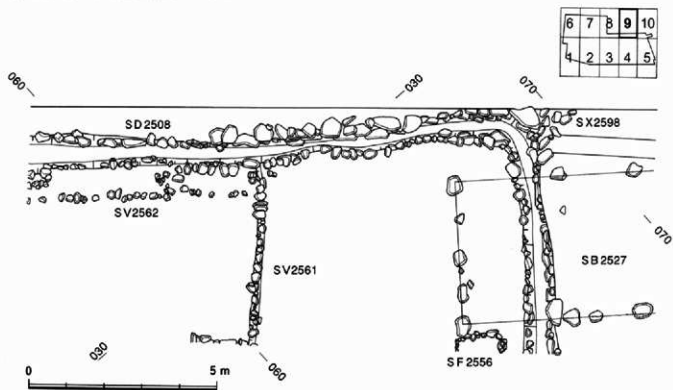
6	7	8	9	10
4	2	3	4	5



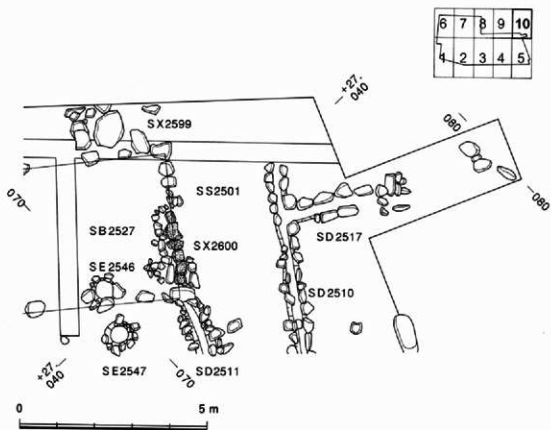
第9図 第44次調査遺構詳細図(8)

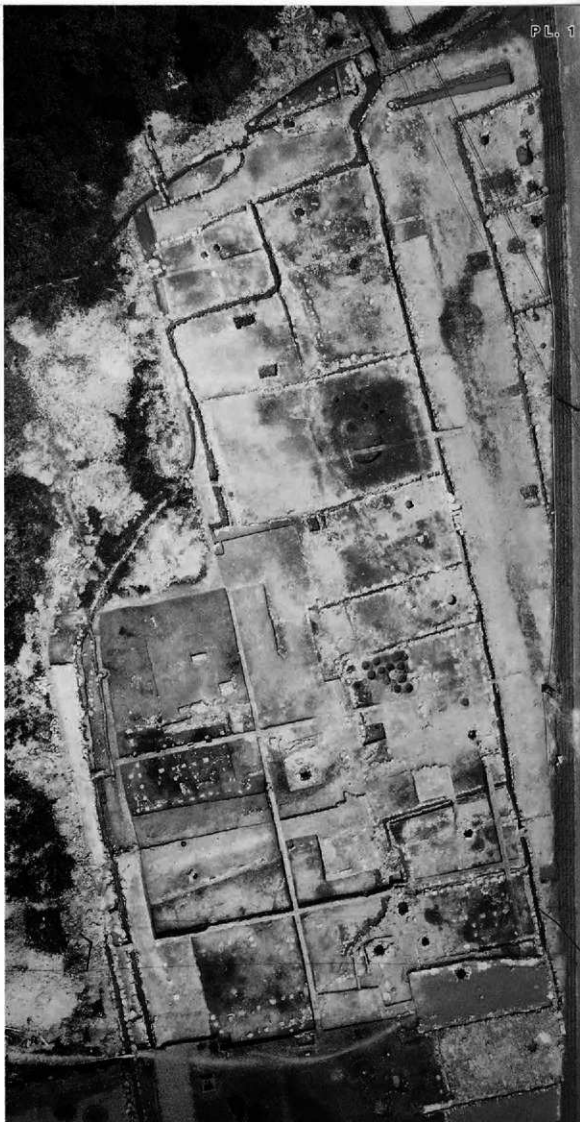


第10圖 第44次調査遺構詳細図（9）



第11図 第44次調査遺構詳細図 (10)







調査区全景
(北から)



調査区全景
(南から)



調査区全景
(南から)

区画44-1全景
(東から)



区画44-2全景
(東から)



区画44-3全景
(東から)





区画44-4全景
(東から)



区画44-5全景
(東から)



区画44-6全景
(東から)



区画44-7全景
(東から)



区画44-8全景
(東から)



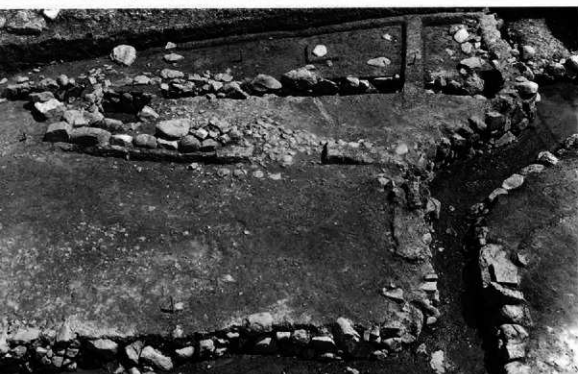
区画44-1～7透景
(北から)



区画44-10全景
(北から)



区画44-11全景
(北から)



区画44-12全景
(南から)

S 12532近景
(東から)



S X 2600近景
(北から)



S X 2633近景
(東から)





S D2502近景
(東から)



S X2566近景
(西から)



S X2579・2580近景
(東から)



S S495全景
(北から)



S S2500全景
(東から)



S S2501 全景
(東から)



S S495・2501
交差点近景
(東から)



S D 500・509
S A 2557全景
(南から)



S D 2508・S A 2558
S V 2562全景
(南から)



◀ SF 2551
(東から)
▶ SF 2552
(南から)



◀ SF 2553拡張前
(東から)
▶ SF 2553拡張後
(東から)



◀ SF 2554
(南から)
▶ SF 2555
(南から)



◀ SF 2556
(南から)
▶ SF 2641
(北から)

- ◀ S E2534
(東から)
▶ S E2536
(東から)



- ◀ S E2538
(東から)
▶ S E2539
(東から)



- ◀ S E2540
(南から)
▶ S E2541
(西から)



- ◀ S E2544
(西から)
▶ S E2548
(東から)

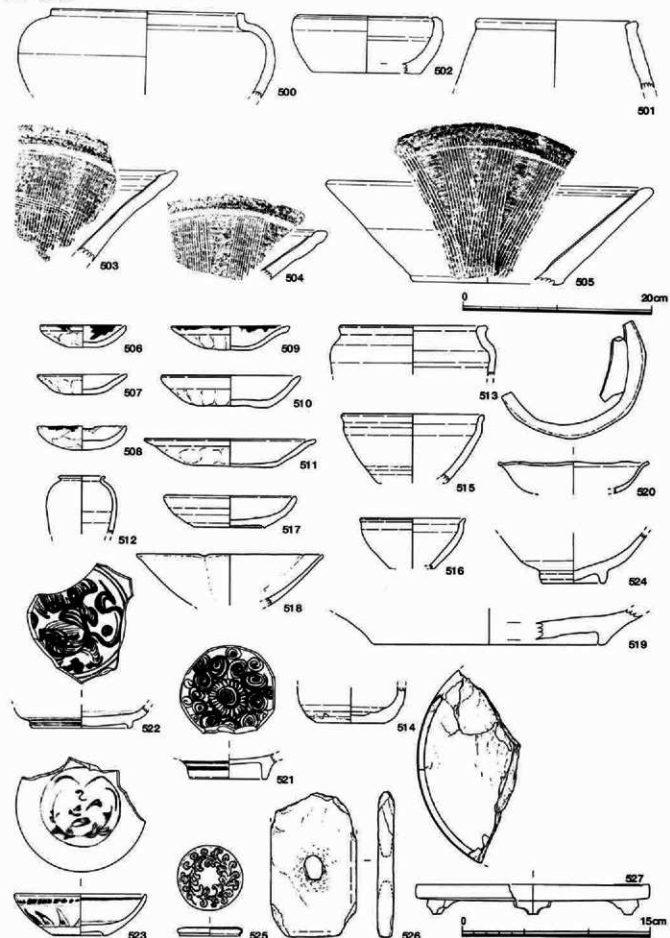


- ◀ S E2550
(北から)
▶ S E2544
(西から)

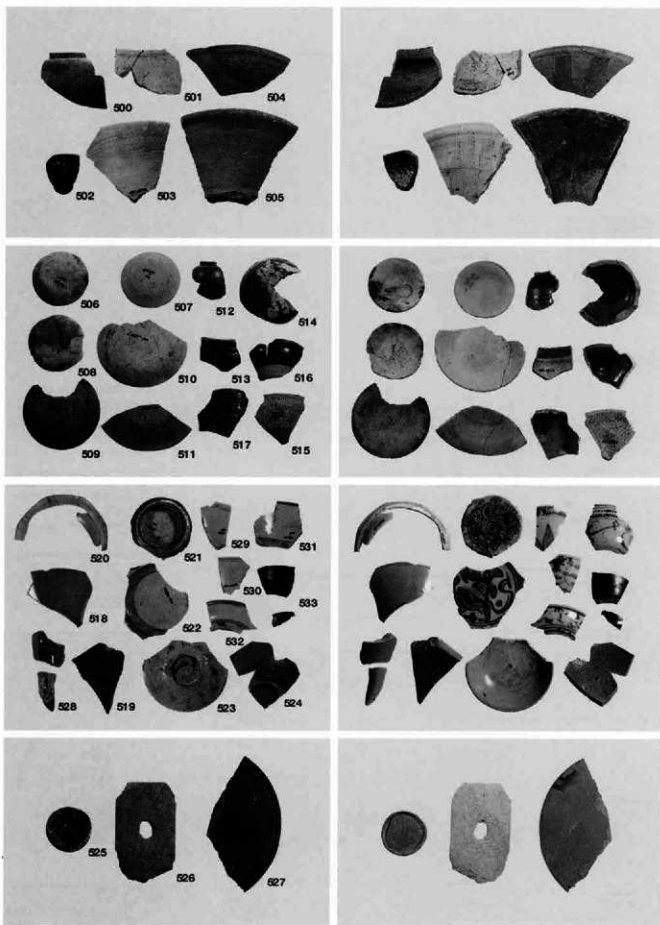


第12圖 第44次調査出土遺物(1)

表土・灰土層



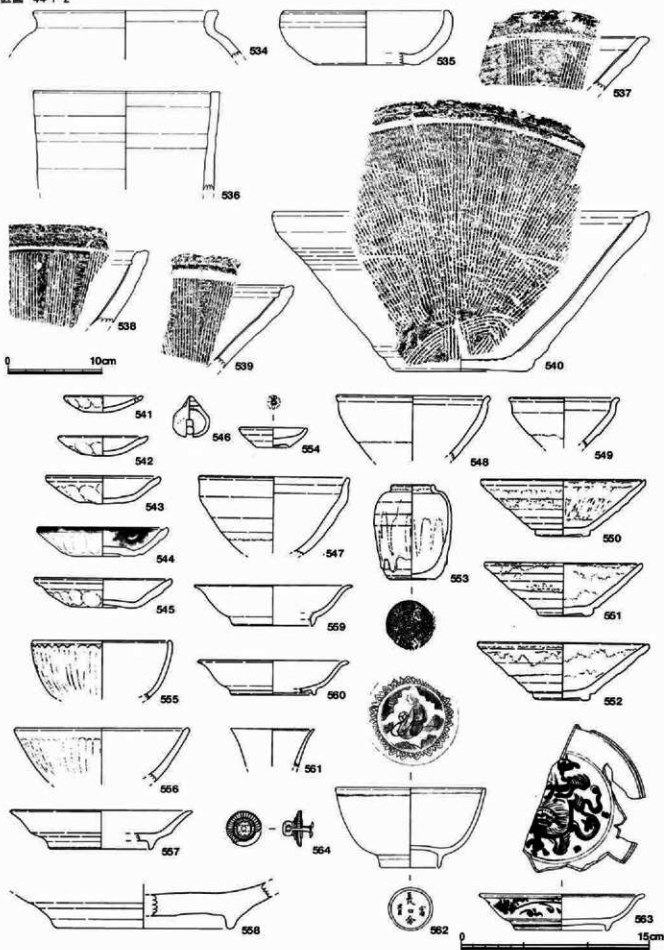
越前焼壺500・501 鉢502 襷鉢503~505 土師質皿506~511 鉄胎壺512~514 碗515・516 皿517 青磁碗518 壺519
白磁皿520 染付碗521 皿522・523 朝鮮製碗524 金屬製品銅製蓋525 石製品甌526・527



表土・灰土層 越前焼壺500・501 鉢502 播鉢503~505 土師質皿506~511 鉄輪壺512~514 碗515・516 皿517 青磁碗518
 盤519 角坏528 白磁皿520 染付碗521・529~531 皿522・523・532 黒釉碗533 朝鮮製碗524 金属製品銅製蓋525
 石製品硯526・527

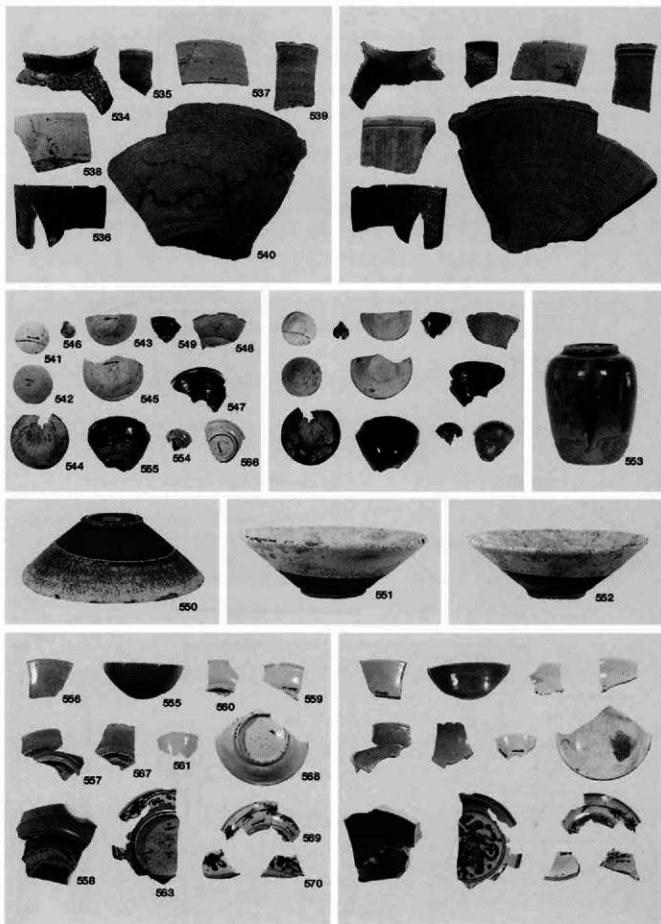
第13図 第44次調査出土遺物 (2)

区画 44-1・2



越前焼壺534 鉢535 播鉢537~540 桶536 土師質皿541~545 土鈴546 鉄軸碗547~552 茶入553 灰軸皿554

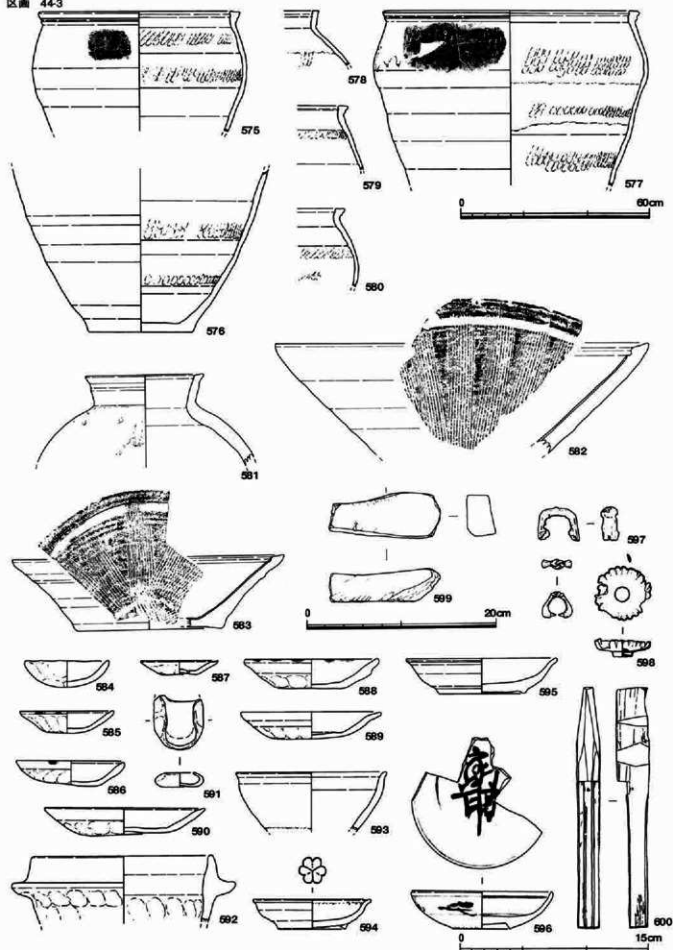
青磁碗555・556 皿557 盤558 白磁皿559・560 坏561 染付碗562 皿563 金属製品跡金具564



区画44-1・2 越前焼池534 鉢535 撞鉢537~540 桶536 土師質皿541~545 土鈴546 鉄軸碗547~552・565 茶入553
 灰軸皿554・566 青磁碗555・556 皿557・567 盤558 白磁皿559・560・568 坏561 染付皿563・569 壺570

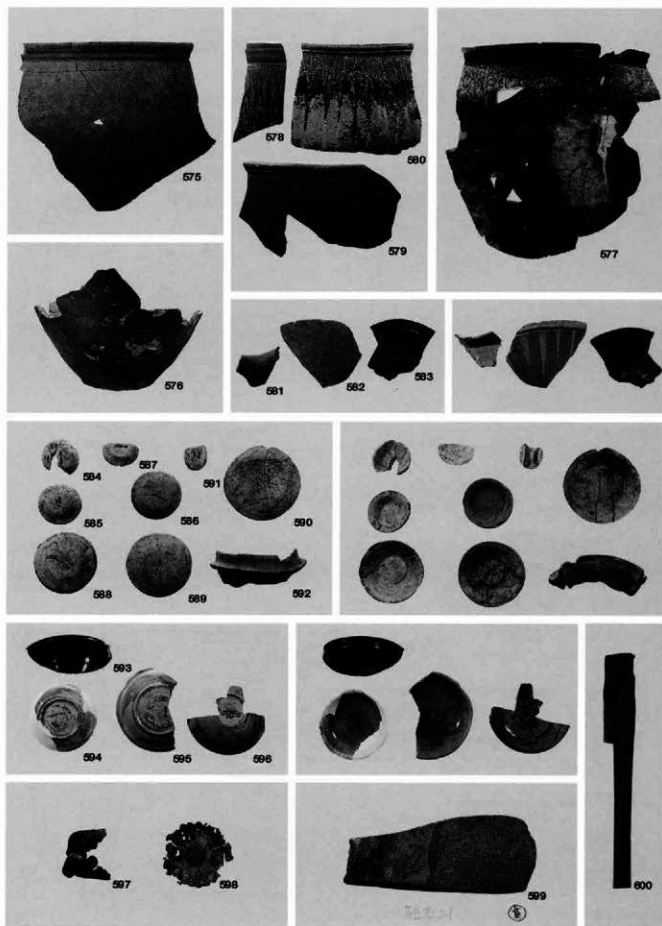
第14圖 第44次調査出土遺物(3)

区画 44-3



越前焼大壺575~580 壺581 播鉢582・583 土師質皿584~590 耳皿591 羽釜592 鉄軸碗593 灰軸皿594・595

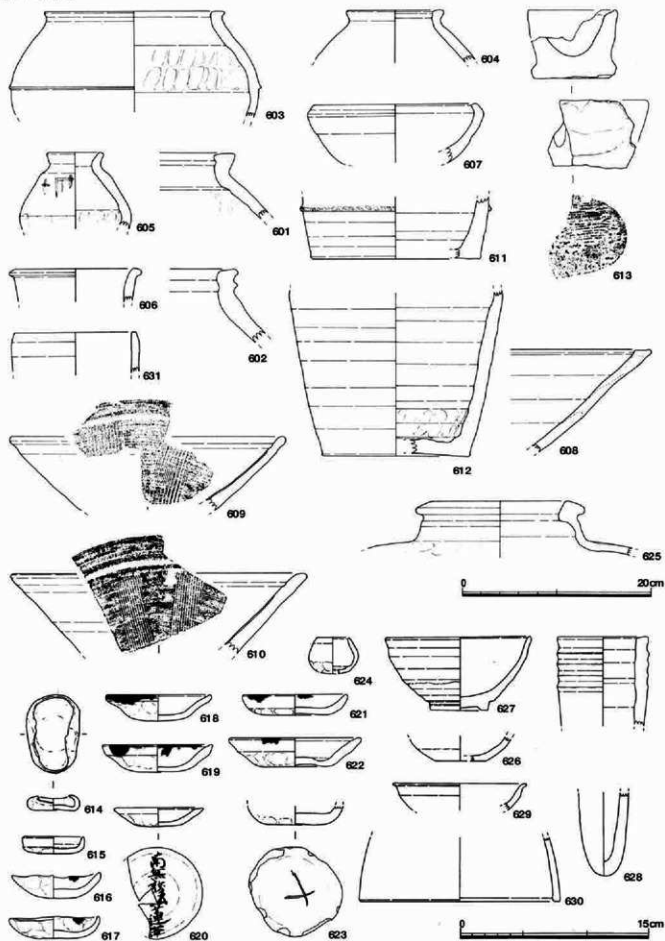
塗付皿596 朝鮮製碗524 金屬製品刀裝具597 紅皿598 石製品砥石599 木製品不明600



区画44.3 越前焼大甕575~580 壺581 播鉢582・583 土師質皿584~590 耳皿591 羽釜592 鉄輪碗593 灰輪皿594・595
 染付皿596 金属製品刀装具597 紅皿598 石製品砥石599 木製品不明600

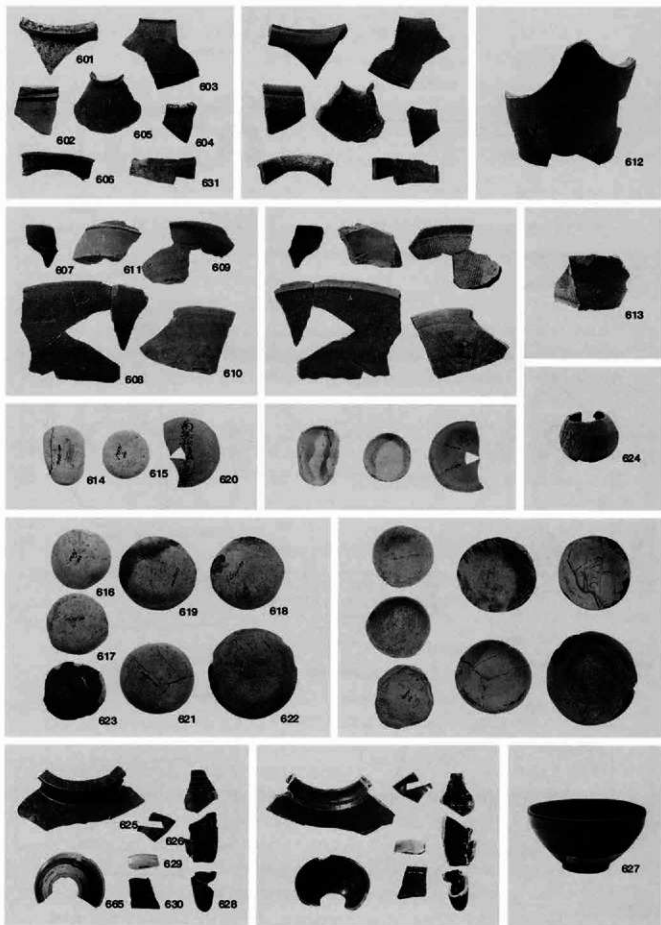
第15圖 第44次調査出土遺物(4)

区画 444~9



越前焼壺601・602 壺603~606 鉢607・608 播鉢609・610 桶611・612 美研613

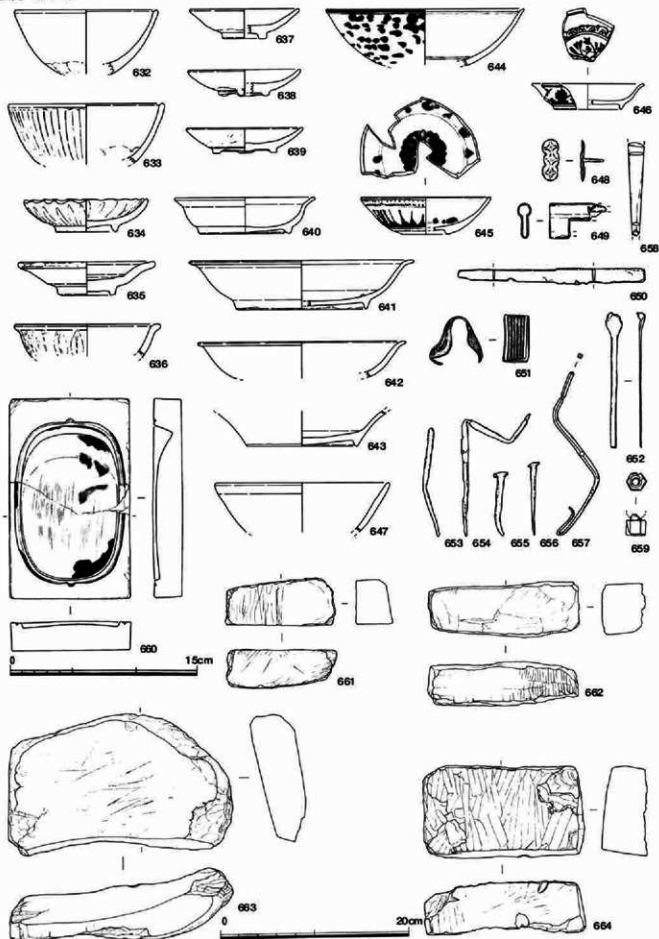
土師質耳皿614 皿615~622 土釜623 小壺624 鉄輪壺625・626 碗627 瓶628 灰輪皿629 瓦質瓦器630 桶631



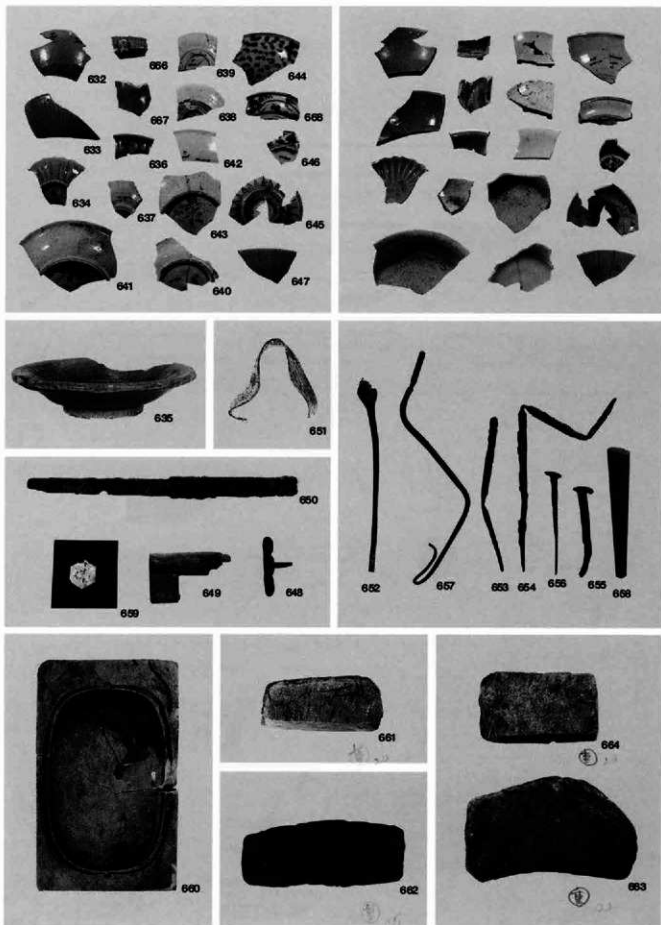
区商44-4-9 越前焼美601・602 壺603～606 鉢607・608 播鉢609・610 桶611・612 薬研613
土師質耳皿614 皿615～622 土釜623 小壺624 鉄軸壺625・626 碗627 瓶628 灰軸皿629 瓦質瓦燈630 桶631

第16回 第44次調査出土遺物(5)

区画 44-4~9



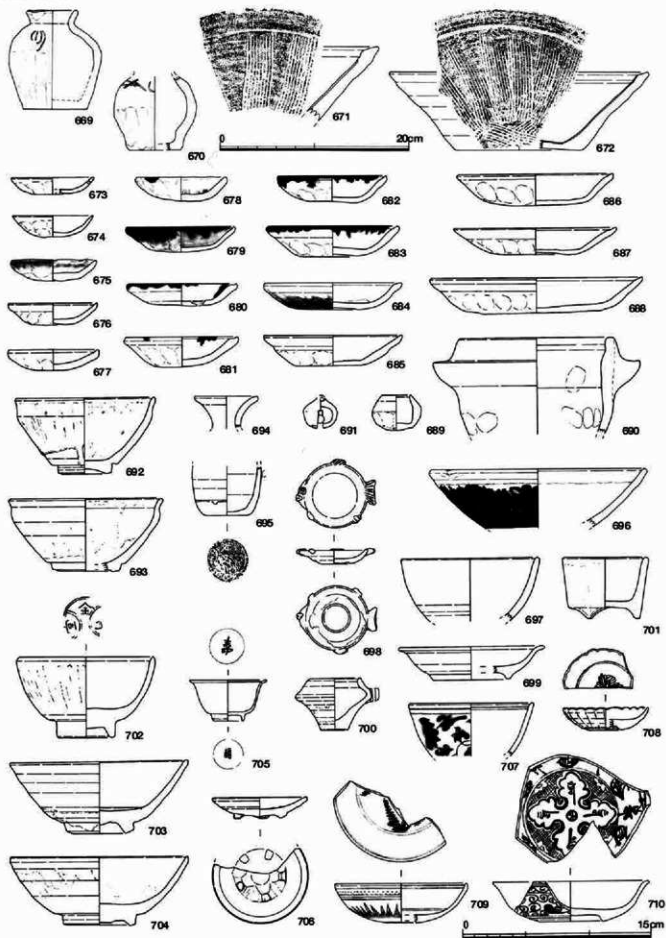
青磁碗632・633 皿634~636 白磁皿637~643 染付碗644 皿645・646 朝鮮製白磁碗647 金屬製品飾金具648 鏡649
小柄650 刀道具651 匙652 釘653~656 金箸654・657 骨製品不明658 石製品水晶製舍利塔659 硯660 砥石661~664



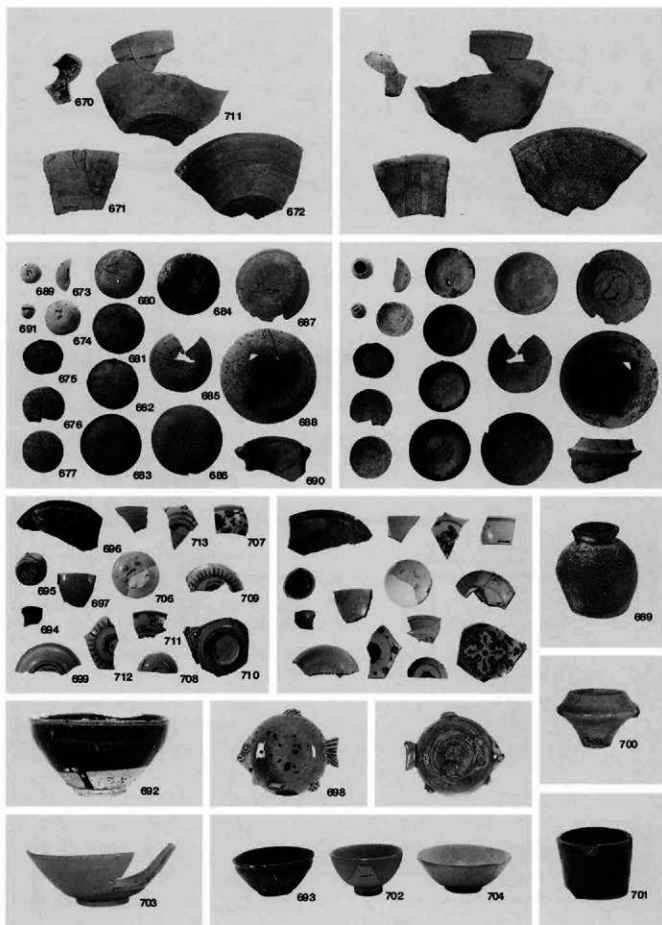
区画44-4~9 青磁碗632・633 皿634~636 香炉666 人形667 白磁皿637~643 染付碗644 皿645・646・668
 朝鮮製白磁碗647 金属製品鉤金具648 鏡649 小柄650 刀装具651 匙652 釘653・655・656 金箸654・657 骨製品不明658
 石製品水晶製舍利塔659 硯660 磁石661~664

第17図 第44次調査出土遺物(6)

区画 44-10



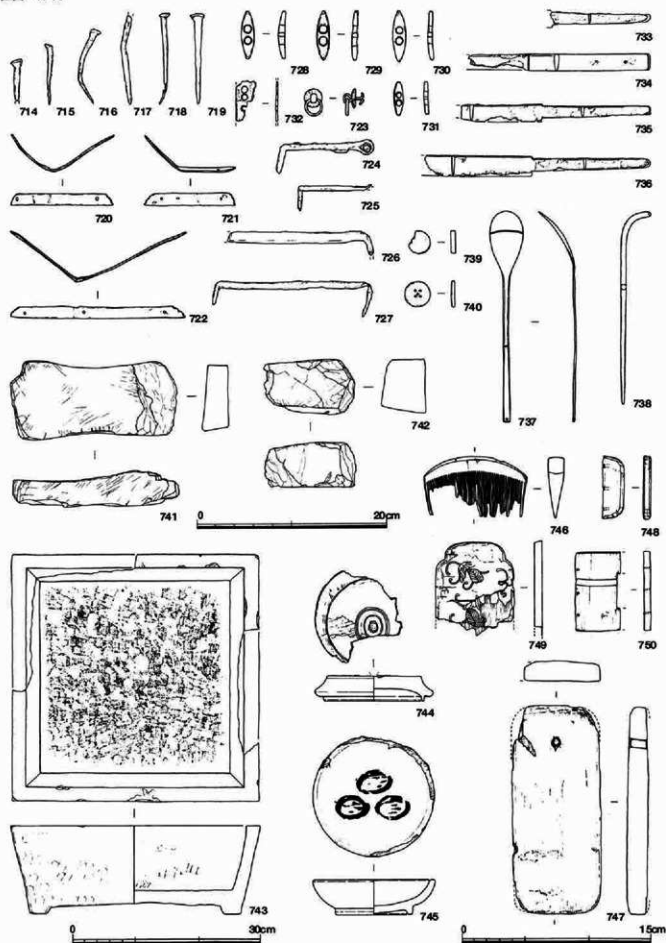
越前焼壺669・670 播鉢671・672 土師質皿673～688 壺689 羽釜690 土師691 鉄輪碗92・693 瓶694 壺695 鉢696
 灰輪碗697 皿698・699 蓋700 瓦質香炉701 青磁碗702～704 白磁坏705 皿706 染付碗707 皿708～710



区画44-10 越前焼壺669・670 鉢711 播鉢671・672 土師質皿673～677・680～688 壺689 羽釜690 土鈴691
 鉄輪碗692・693 甕694 壺695 鉢696 灰輪碗697 皿698・699 蓋700 瓦質香炉701 青磁碗702～704 皿706
 染付碗707 皿708～713

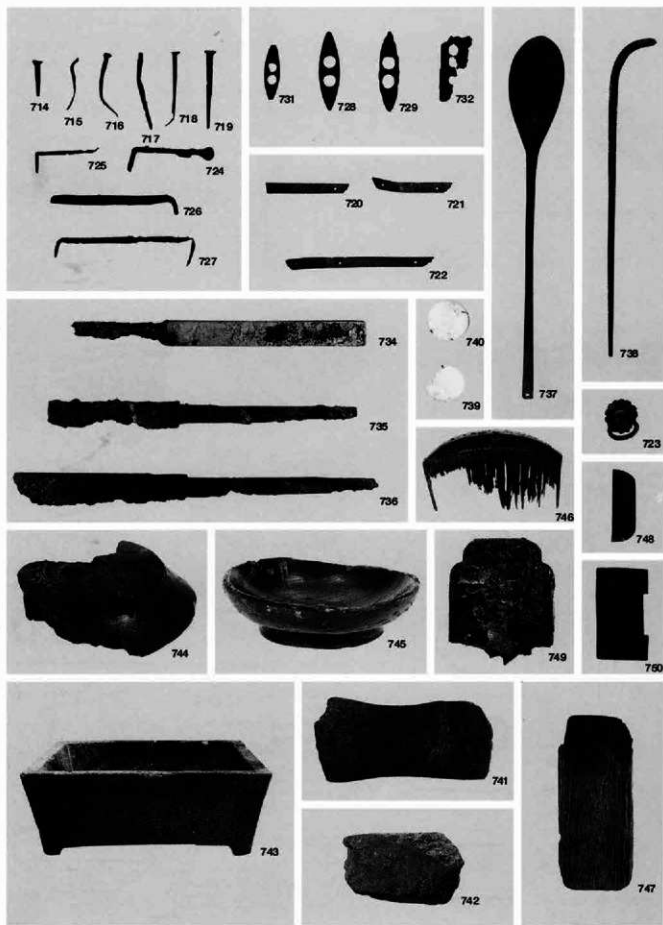
第18図 第44次調査出土遺物(7)

区画 44-10



金属製品 釘714~719 鉤金具720~723 釧止724 鏝725~727 棒728~731 小札732 小柄733~736 匙737 金箸738

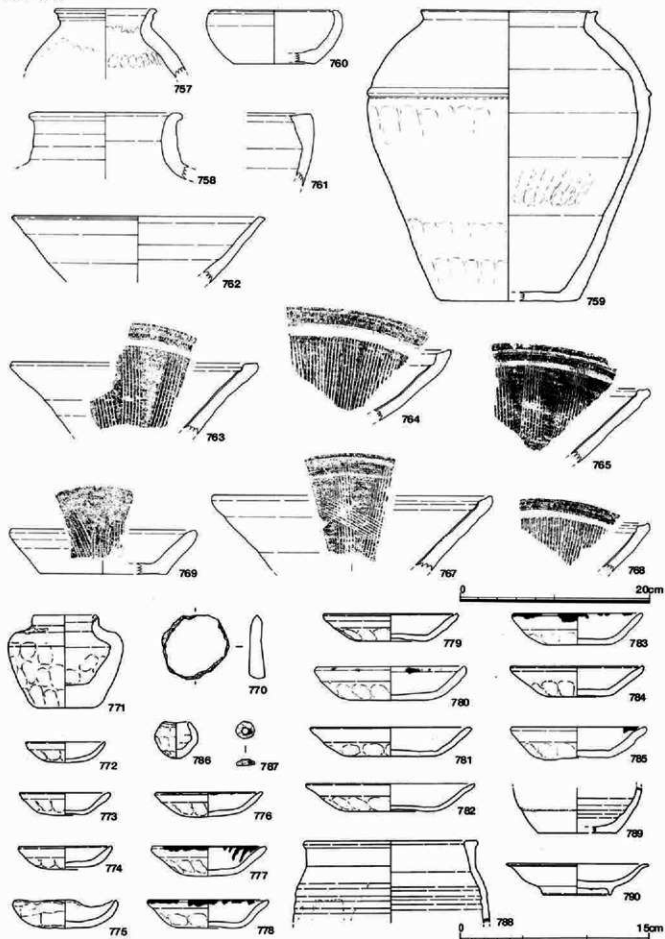
骨製品 胸石739・740 石製品 砥石741・742 甕743 木製品 甕744 皿745 櫛746 下駄747 不明748~750



区画44-10 金属製品釘714~719 飾金具720~723 鋸止724 鏡725~727 鞆728~731 小札732 小柄734~736 匙737
 金箸738 骨製品胸石739・740 石製品砥石741・742 盤743 木製品蓋744 皿745 櫛746 下駄747 不明748~750

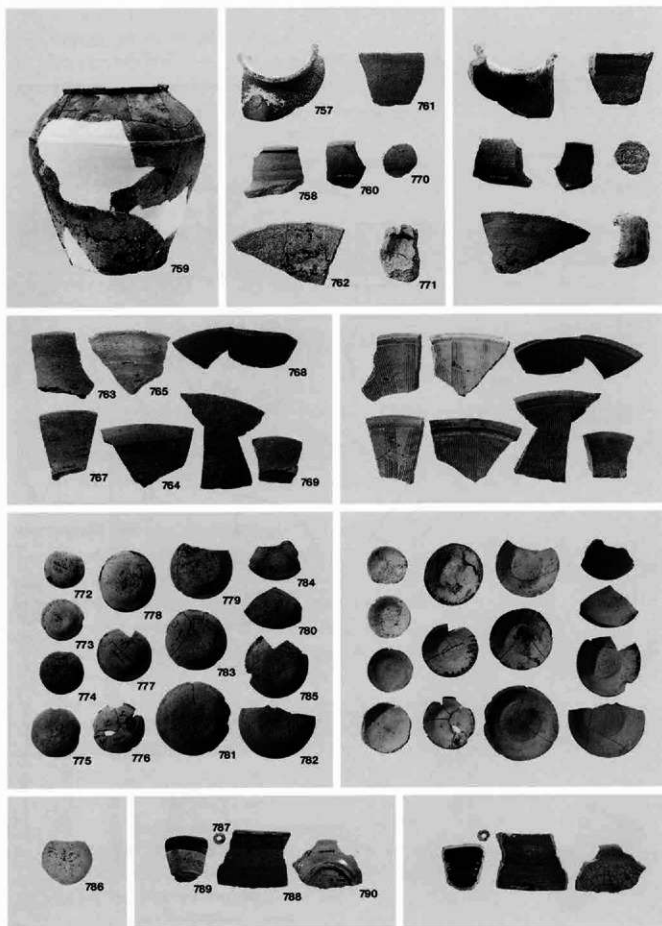
第19図 第44次調査出土遺物(8)

区画 44-11



越前焼密757-759 鉢760-762 播鉢763-768 銅鉢769 不明770 土師質皿772-785 小壺771・786 灯芯押787

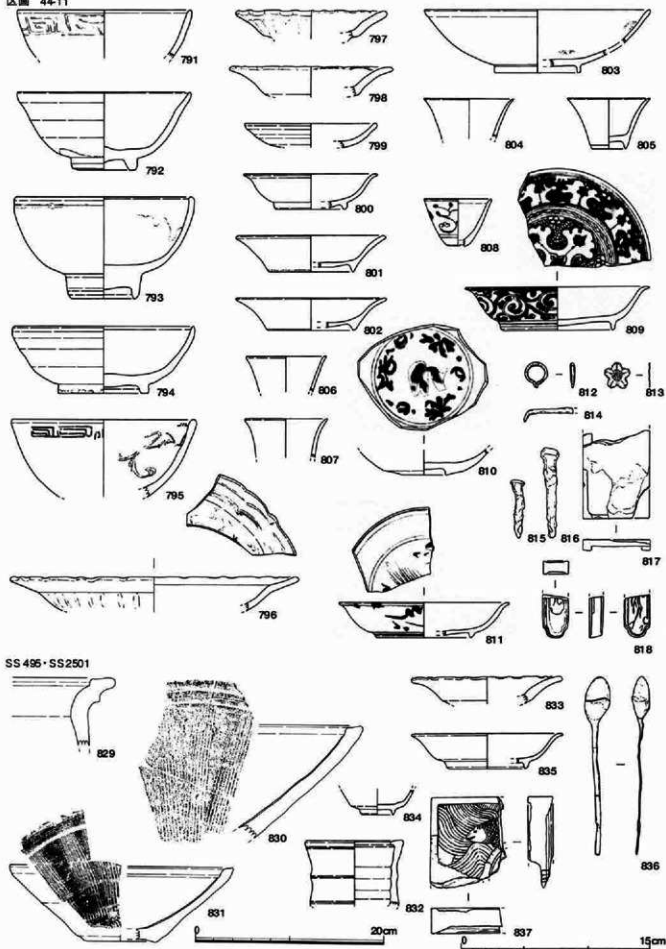
鉄軸壺788-789 灰輪皿790



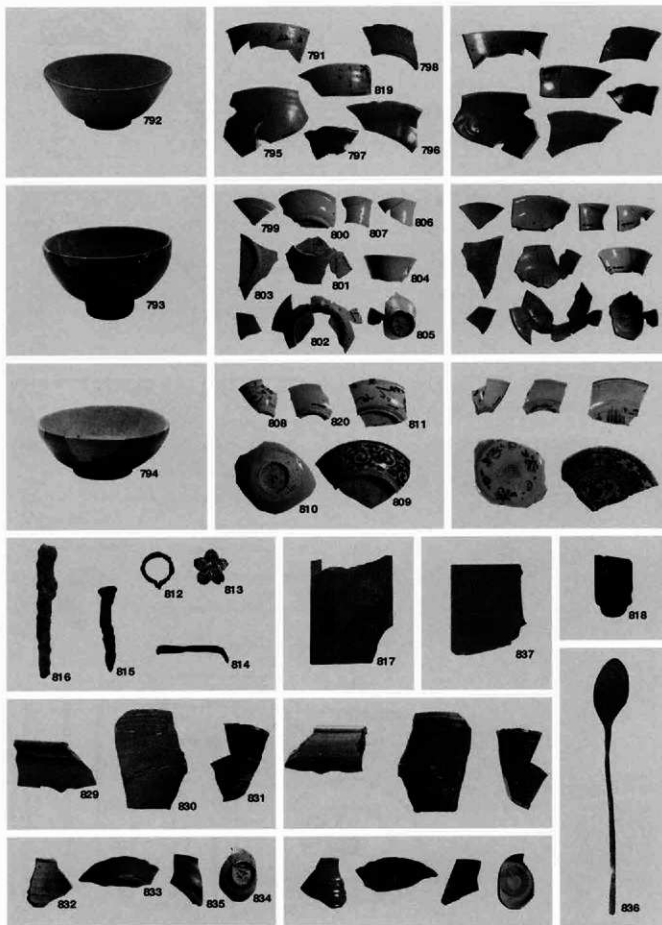
区画44-11 越前焼壺757~759 鉢760~762 播鉢763~765・767・768 銅皿769 不明770
土師質皿772~785 小壺771・786 灯芯押787 鉄輪788・789 灰軸皿790

第20図 第44次調査出土遺物(9)

区画 44-11



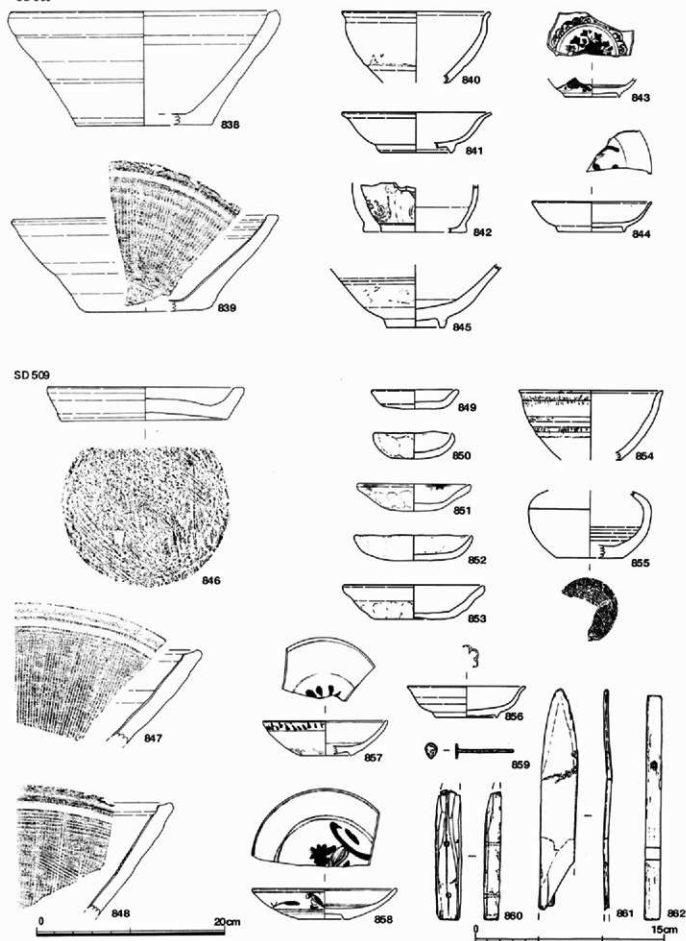
越前焼壺829 播針830・831 灰釉香炉832 青磁碗791~795 盤796 皿797・798・833 白磁皿799~802・835 碗803
 坏804~807・834 染付坏808 皿809~811 金屬製品飾金具812・813 鏡814 釘815・816 匙836 石製品硯817・837
 その他墨818



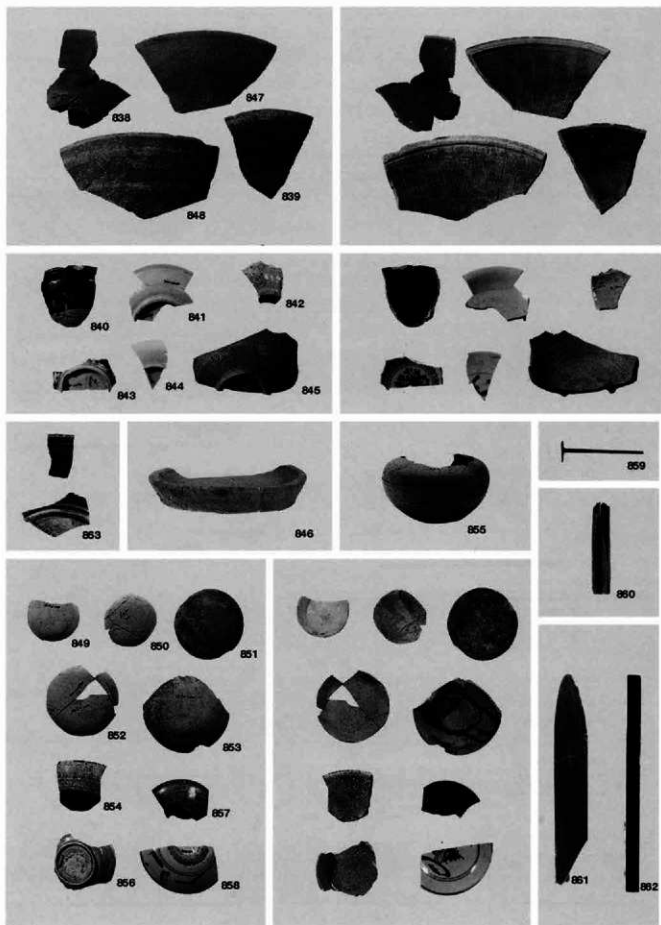
区画44-11 青磁碗91~795・819 釜796 皿797・798 白磁皿799~802 碗803 坏804~807 染付坏808 皿809~811・820
 金属製品類金具812・813 鋸814 釘815・816 石製品硯817 その他墨818
 SS495・SS2501 越前焼甕829 撰鉢830・831 灰粉香炉832 青磁皿833 白磁皿835 坏834 金属製品匙836 石製品硯837

第21圖 第44次調査出土遺物 (10)

SD 500



越前焼鉢838 掃針839・847・848 皿846 土師質皿849～853 鉄軸碗840・854 壺855 灰軸皿856 白磁皿841 壺842
 染付皿843・844・857・858 朝鮮製碗845 金属製品削859 木製品不詳860～862



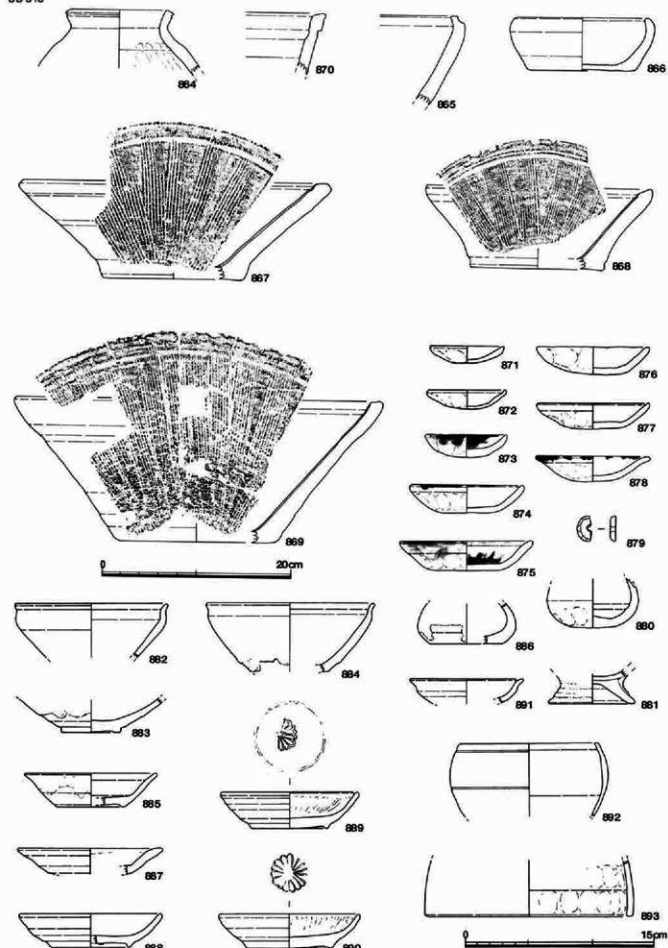
SD500 越前焼鉢838 播鉢839 鉄軸碗840 白磁皿841 壺842 染付皿843・844 朝鮮製碗845

SD509 越前焼皿846 播鉢847・848 土師質皿849～853 鉄軸碗854 壺855 灰軸皿856 染付皿857・858 金屬製品鉄859

木製品不明860～862

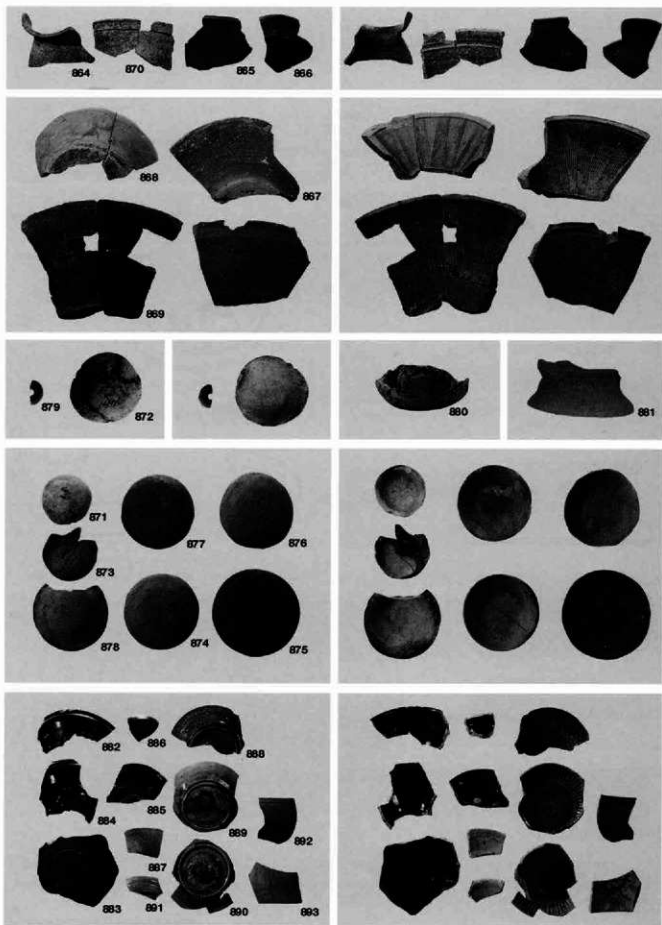
第22圖 第44次調査出土遺物 (11)

SD 518



越前焼壺864 鉢865・866 推鉢867・869 信楽壺870 土師質皿871~878 灯芯押879 土釜880 器台881

鉄軸碗882~884 皿885 煎886 灰軸皿887~891 国産陶器鉢892 瓦質瓦指893

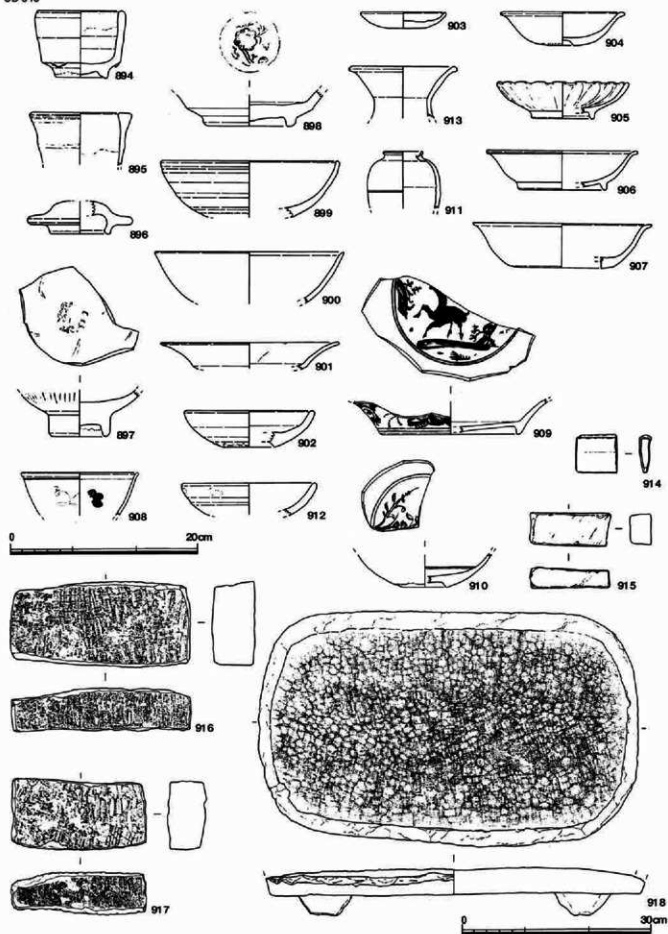


SD518 越前焼密864 鉢865・866 摺鉢867~869 信楽壺870 土師質皿871~878 灯芯燗79 土釜880 器台881

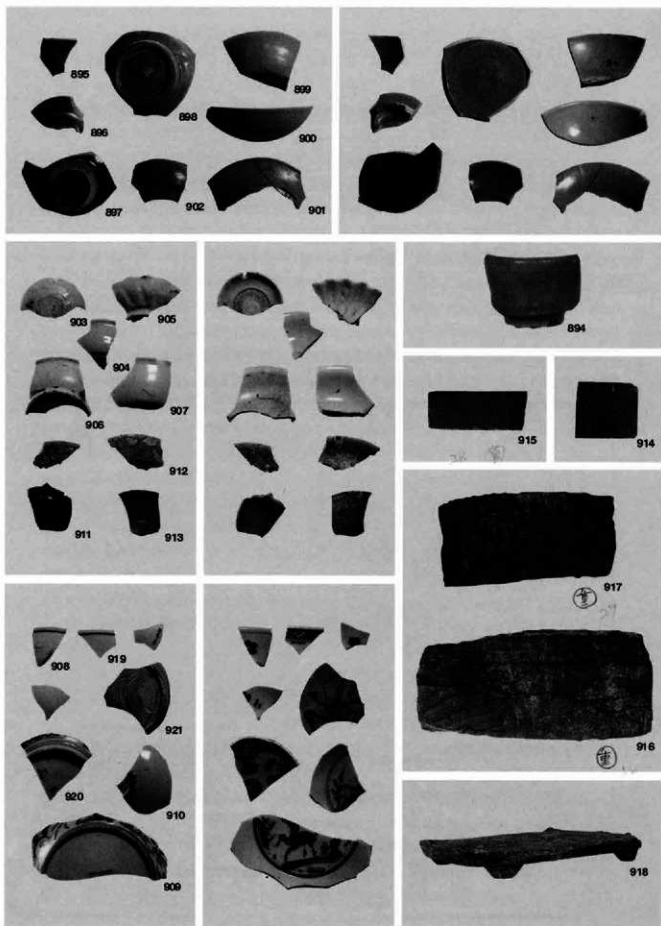
鉄軸陶882~884 皿885 瓶886 灰軸皿887~891 国産陶器鉢892 瓦質瓦器893

第23圖 第44次調査出土遺物 (12)

SD518

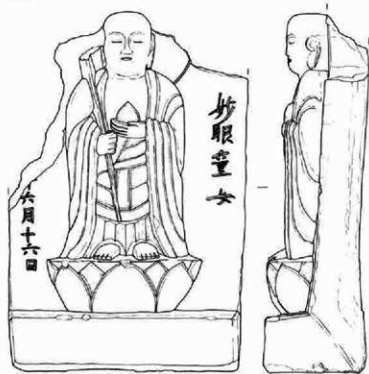


青磁方894・895 蓋896 碗897~900 皿901・902 白磁皿903~907 染付碗908 皿909・910 黒軸茶入911
銅練輪皿912 朝鮮製磁913 金屬製品刀道具914 石製品砥石915~917 盤918

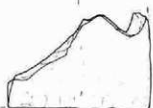
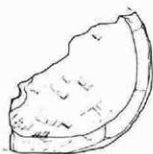


SD518 青磁香炉894・895 蓋896 碗897～900 皿901・902 白磁皿903～907 染付碗908・919 皿909・910・920・921
 黒釉茶入911 銅線軸皿912 朝鮮製瓶913 金屬製品刀装具914 石製品砥石915～917 盤918

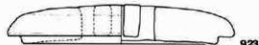
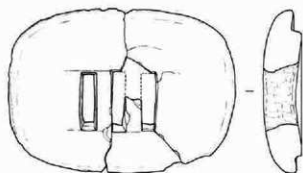
S D518



922



924



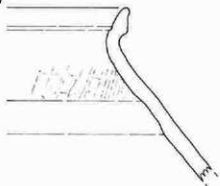
923

S D2506



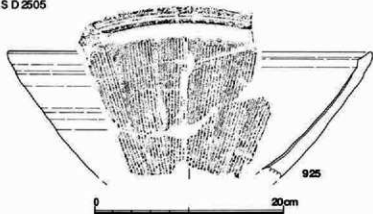
929

S D2507



930

S D2505



925

0 20cm



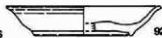
931



927

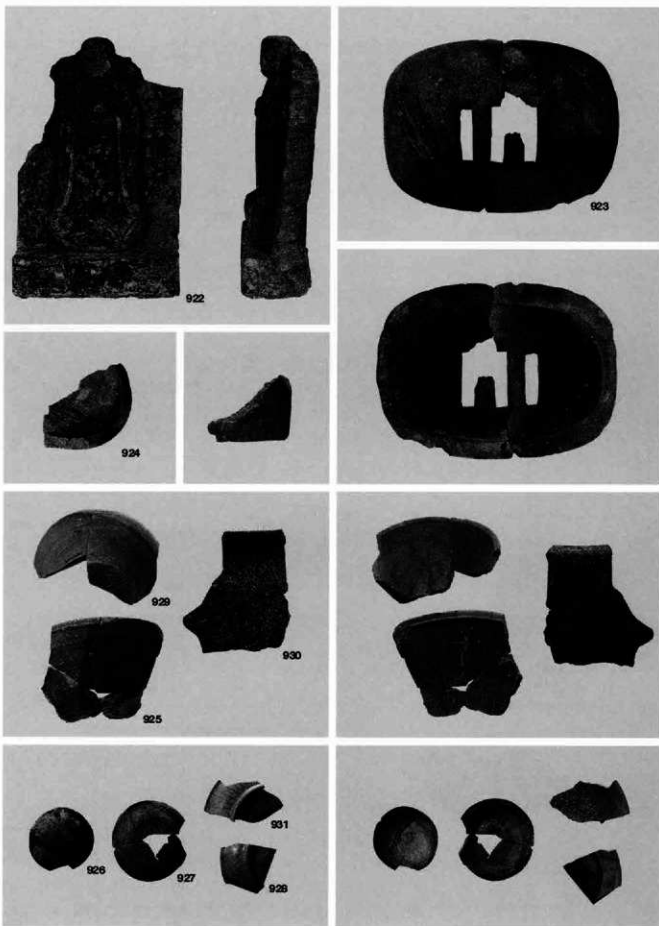


926



928

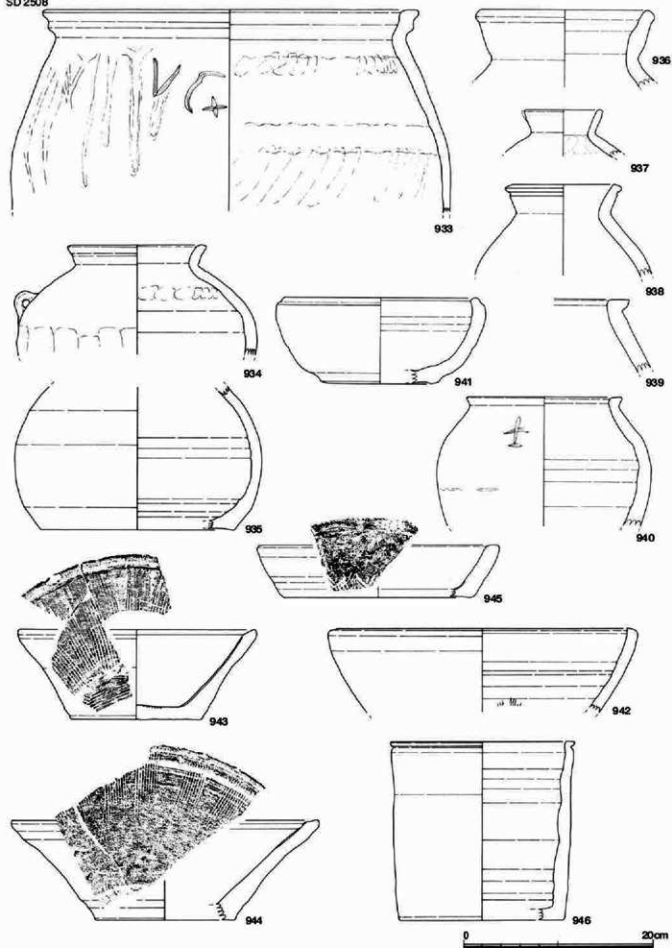
0 15cm



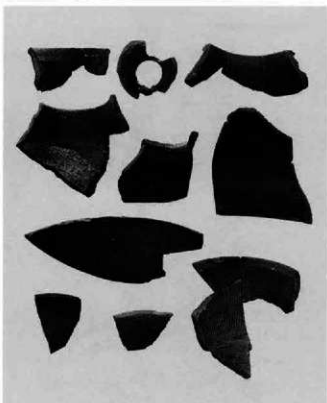
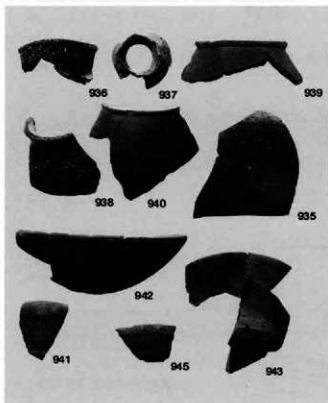
SD 518 越前焼壺930 鉢929 摺鉢925 土師質皿926・927 白磁皿931 染付皿928 石製品石仏922 バンドコ923・924

第25圖 第44次調査出土遺物 (14)

SD 2508

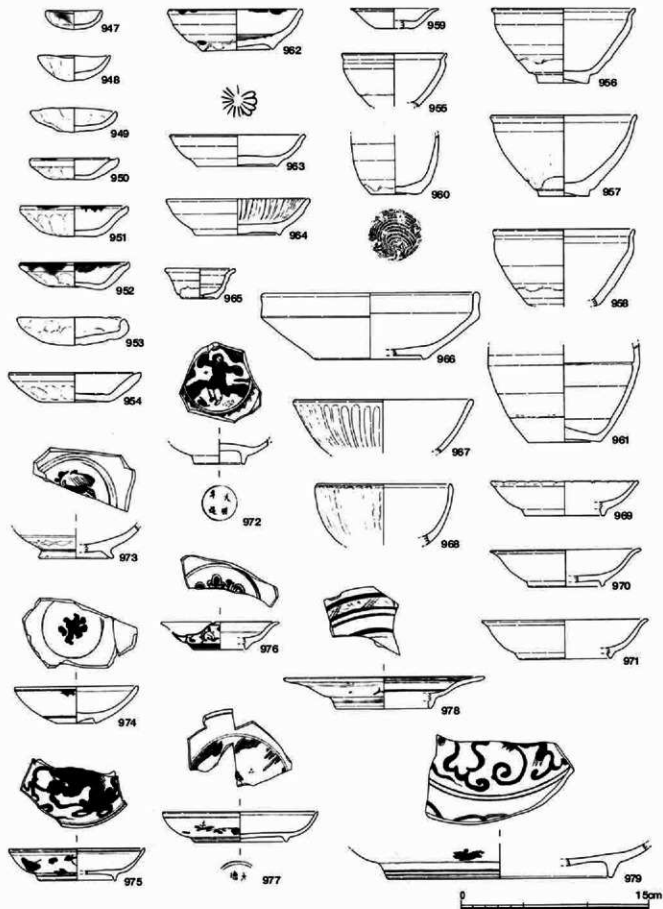


越前焼罎933 壺934~940 鉢941・942 椀鉢943・944 卸皿945 桶946

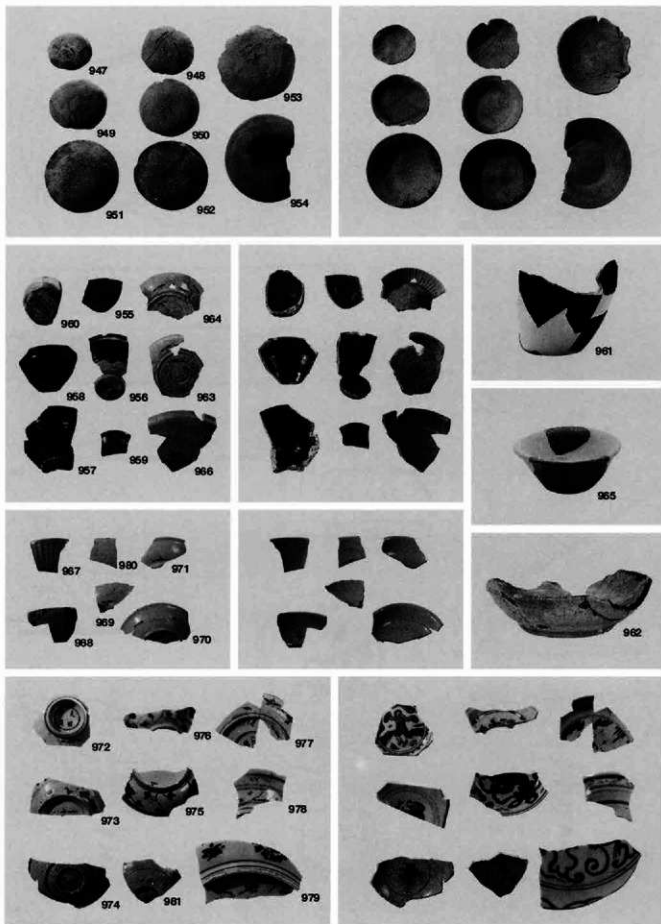


第26圖 第44次調査出土遺物 (15)

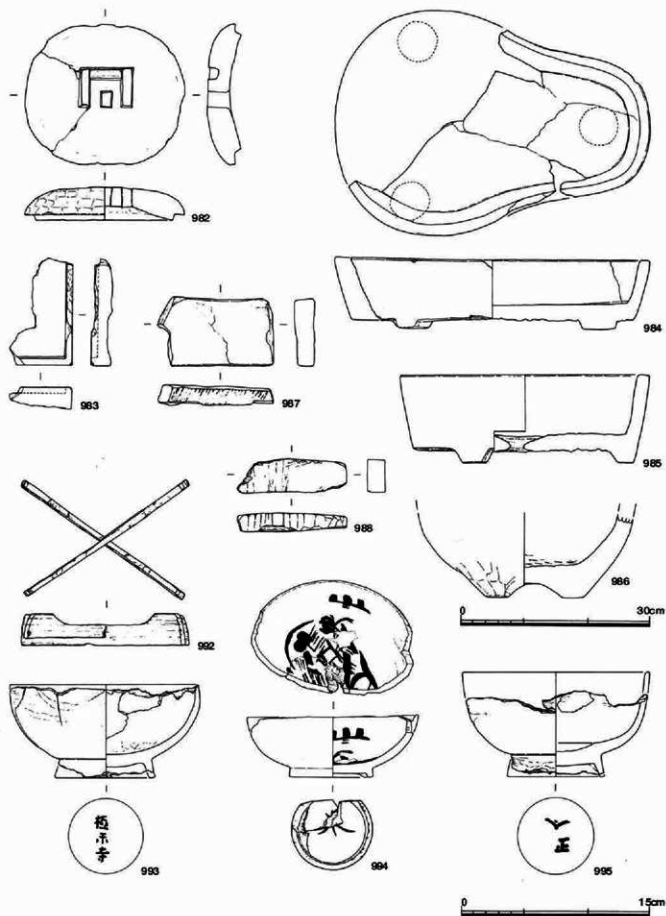
SD 2508

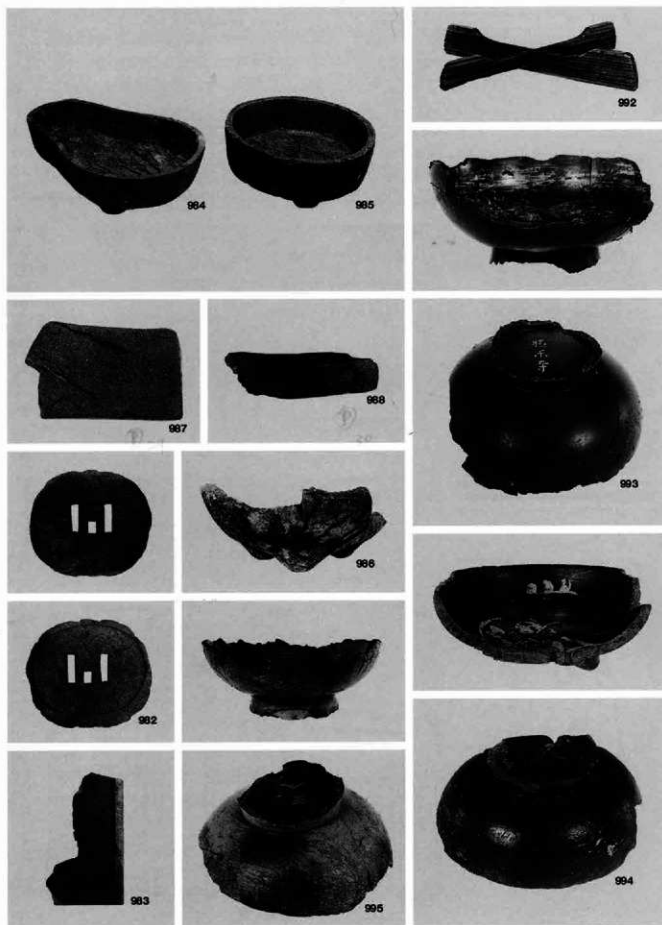


土師質皿947～954 鉄輪碗955～958 皿959 壺960・961 灰輪皿962～964 埴965 圓座陶器鉢966 青磁碗967・968
白磁皿969～971 染付碗972・973 皿974～979



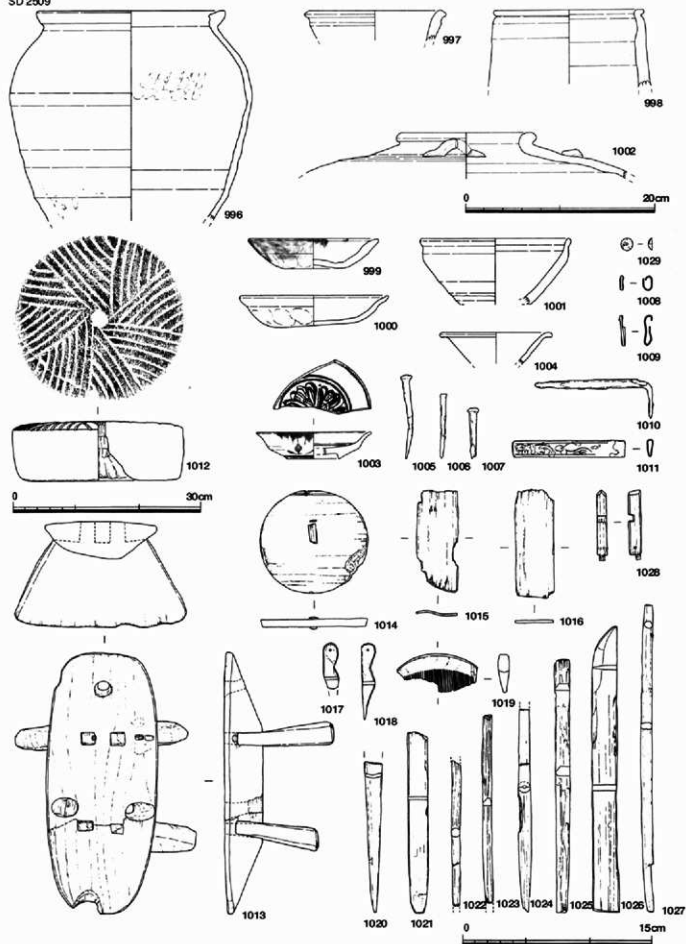
SD 2508 土師質 皿947~954 鉄輪碗955~958 皿959 甕960・961 灰釉皿962~964 坏965 国産陶器鉢966
 青磁碗967・968・980 白磁皿969~971 染付碗972・973・981 皿974~979



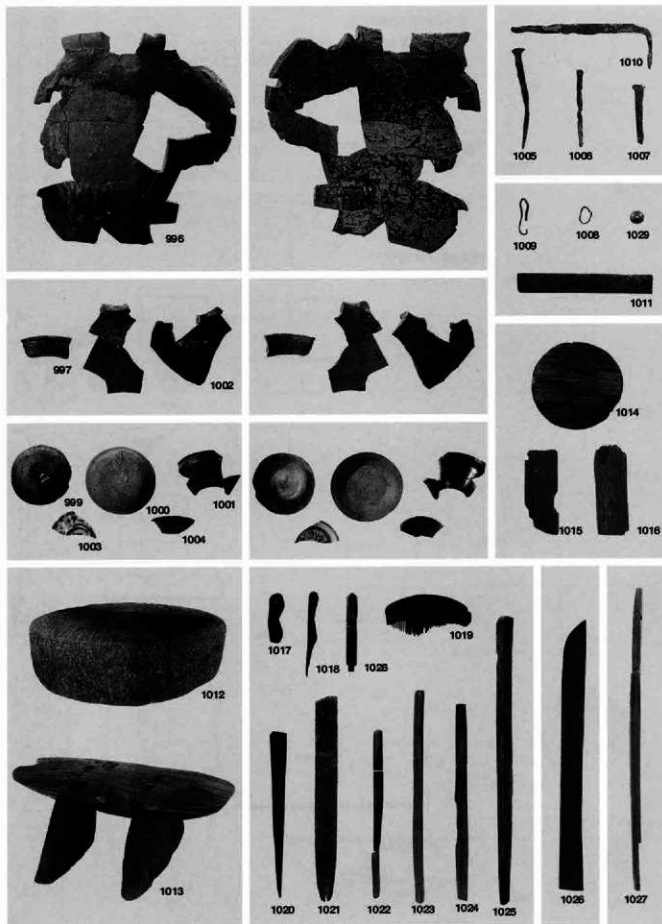


SD2508 石製品バンドコ982 碗983 盤984・985 風鈴986 砥石987・988 木製品灯明台992 碗993~995

SD 2509



越前焼壺996 壺997 桶998 土師質皿999・1000 鉄軸陶001 染付皿1003 タイ製壺1002 朝鮮製瓶1004
 金属製品釘1005~1007 環状金具1008・1009 鏡1010 小柄011 不明1029 石製品臼1012 木製品下駄1013 曲物蓋1014
 折敷1015・1016 人形1017・1018 櫛1019 竹製品1020 箸1022・1023・1027 笄状木製品1021・1026 不明1024・1025・1028

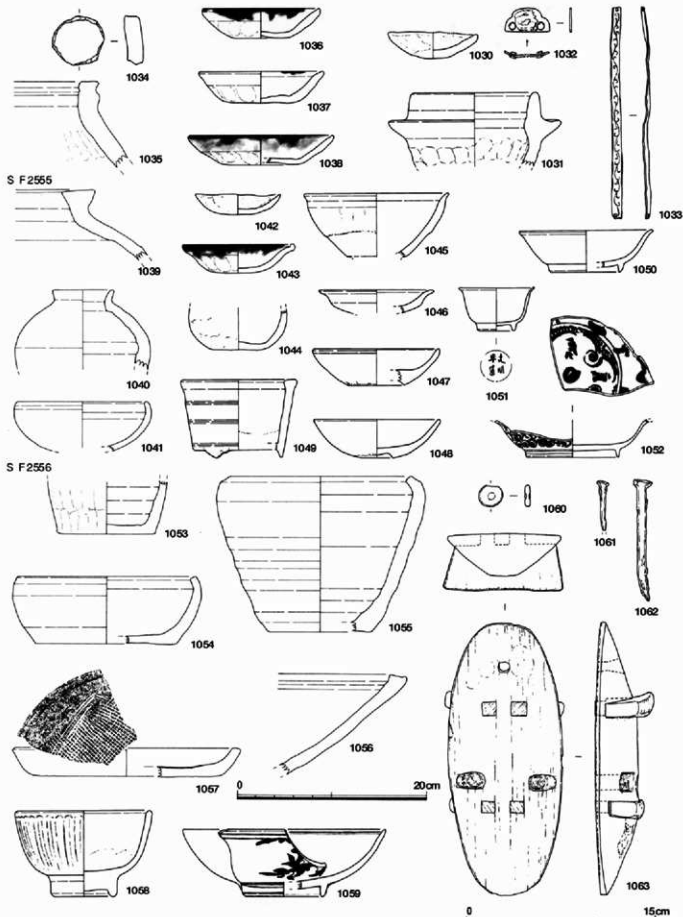


SD2509 越前燒壺996 壺997 土師質皿999・1000 鉄輪碗1001 染付皿1003 タイ製壺1002 朝鮮製瓶1004
 金属製品釘1005~1007 銀状金具1008・1009 鏡1010 小柄1011 不明1029 石製品臼1012 木製品下駄1013 曲物蓋1014
 折敷1015・1016 人形1017・1018 櫛1019 竹製品1020 箸1022・1023・1027 笊状木製品1021・1026 不明1024・1025・1028

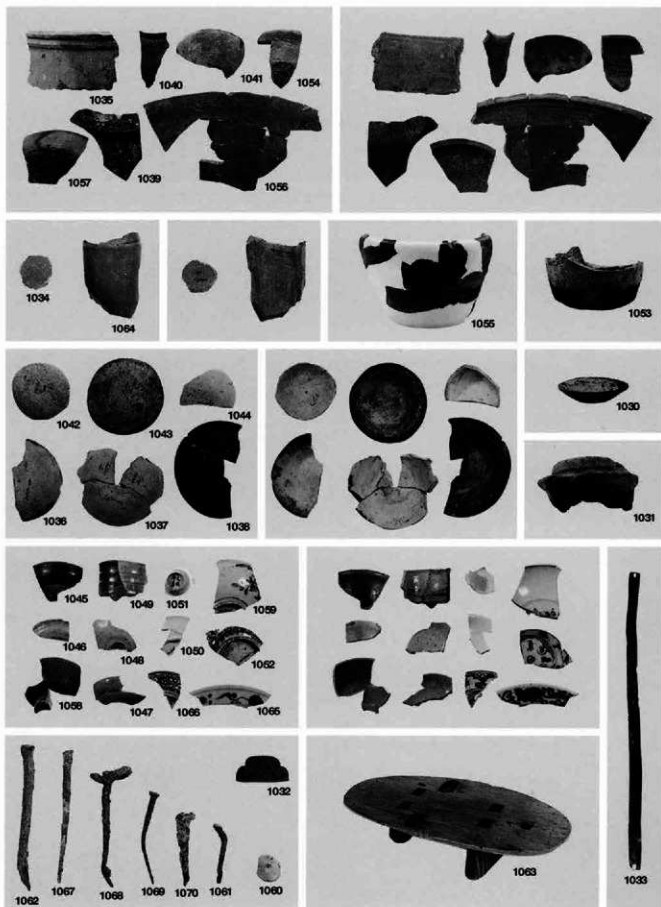
第29図 第44次調査出土遺物 (18)

S F2552

S V2640



越前焼壺1035・1039 壺1040・1053 鉢1041・1054~1056 鉢1057 不明1034 土師質皿1030・1036~1038・1042・1043
土釜1031・1044 鉄輪碗1045 灰輪皿1046 青磁碗1058 皿1047・1048 香炉1049 白磁皿1050 坏1051 梁付鉢1059 皿1052
骨製品駒石1060 金属製品飾金具1032・1033 釘1061・1062 木製品下駄1063



SV2640 土師質皿1030 土釜1031 染付皿1065 金属製品飾金具1032・1033 SF2552 越前焼壺1035 不明1034

土師質皿1036~1038 SF2555 越前焼壺1039 壺1040 鉢1041 土師質皿1042・1043 土釜1044 鉄軸碗1045 灰軸皿1046

青磁皿1047・1048 香炉1049 白磁皿1050 坏1051 染付皿1052・1066 金属製品針1067~1070 SF2556 越前焼壺1053

鉢1054~1056 銅皿1057 甌1064

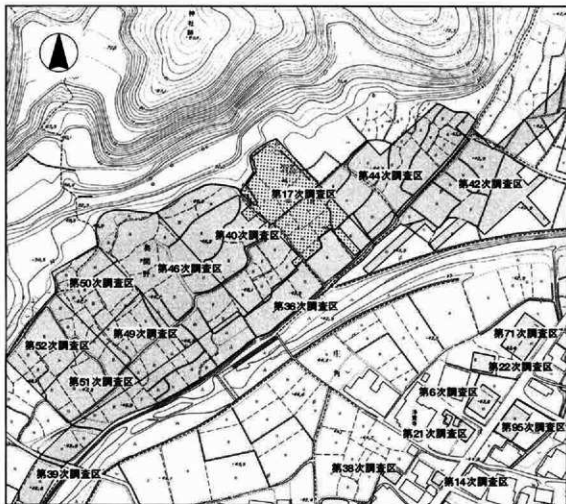
Ⅲ 第 17 次 調 査

Ⅲ 第17次調査

1. 調査の経過と概要

今回報告する第17次調査地は一乗谷朝倉氏遺跡の中央部、福井市城戸ノ内町字赤沼地係に所在する。この調査地は城戸ノ内の谷の最も広くなった部分の北よりの赤沼・奥岡野・吉野本地区にあり、一乗谷川西側の山原にあたり、朝倉義景館の北約400mに位置する。この赤沼・奥岡野・吉野本地区は武家屋敷・寺院・町屋等の遺構が良好に残存し、全面的な発掘調査により、一乗谷の町割に関する重要な資料が得られたところである。

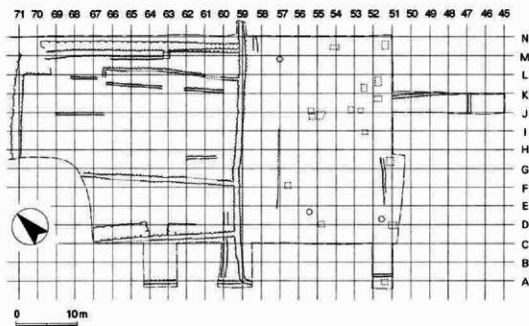
第17次調査は福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所によって昭和50年度に実施された。その後計画調査や現状変更に伴う調査によりこの第17次調査地に隣接する場所が発掘調査された。すなわち県道鯖江・美山線改良工事に伴う調査として、この第17次調査地の東側が発掘調査され、第40次調査ではこの第17次調査地の南側、第44次調査ではこの第17次調査地の北側の一部が発掘調査されている。さらにその後昭和60年度までこの赤沼・奥岡野地区一帯の調査が継続された。



挿図13 第17次調査区周辺地形図 (1/2000)

この第17次調査はそれまでに行われた朝倉義景館の調査や武家屋敷群の調査の成果を受けて、地元で「サイゴージ」と通称される寺院推定地の実体を明らかにするために実施された。調査は昭和50年9月30日より開始し、冬季をはさんで翌昭和51年3月31日を以って発掘作業を終え、約2,050㎡の発掘調査を実施した。その結果検出された遺構群により寺院跡であることを確認し、石仏・塔婆など大量の遺物が出土した。

調査区の設定は、約30mの間隔で残存していた東西方向の2つの土塁のうち北側の土塁を基準として東西63m南北33mの範囲に3mグリッドで地区を設定した。また周囲の道路との関係を確認するためにこの範囲から外に4本の拡張トレンチを設けた。これらの地区の方位は、北側土塁の方向を東西方向の基準としたので実際の方位よりは46° 28' 22" 時計回りに振れているが、今回の報告では特にことわらない限り、この基準によって方位を示すものとする。なお、グリッドの位置については、北側土塁の中央部東よりに設置されている基準点No.9をM63とした。このNo.9の位置は発掘調査当時の成果によれば、X=44.09 Y=26.971.05 H=47.02の値を得ている。



挿図14 第17次調査区グリッド設定図

第17次調査日誌抄

昭和50年（1975）	26日	調査区東南端南方に幅3.0m長さ7.0mのトレンチを設定。砂利敷S S494・溝S D501、石積施設S F581を検出。
9月30日		調査区内の除草。地区核打ち作業。北土塁S A488に沿ってグリッドのラインを設定した。
10月1日	27日	調査区東端の東方にJ列にそって幅3.0m長さ18.0mのトレンチを設定し遺構検出にかか
6日		る。
8日	30日	調査区南端中央部の59列に幅3.0m長さ7.0mのトレンチを設定し、遺構検出。
		11月1日
		北土塁S A488の西側部分の検出。南北溝S D500の精査。
9日		4日
10日		東西トレンチの精査、その北に井戸S E564を検出。
14日		5日
15日		北土塁S A488の西端に門S I522を検出。
16日		10日
17日		東西溝S D504の検出。
18日		11日
20日		石積施設S F575検出。南北溝S D500の精査。
21日		12日
22日		門S I520の正面南方に幅5.0m長さ7.0mのトレンチを設定。溝S D501を検出。
23日		17日
25日		調査区東北端部の炭層の遺構検出に入る。次いで南北溝S D500以東の精査を続ける。この間に上層の遺構写真の撮影。
		26日
		南北溝S D500以西の下層遺構の検出を東側から順次始める。
	12月1日	下層の東西溝S D506の検出。
	3日	下層の東西溝S D507の検出。
	6日	下層の東西溝S D502の検出。

2. 遺 構 (第30～41図、P L. 32～42)

発掘調査の結果検出された遺構は、道路6、土塁2、石垣4、門3、礎石建物20、掘立柱建物2、溝20、井戸3、石積施設16等である。

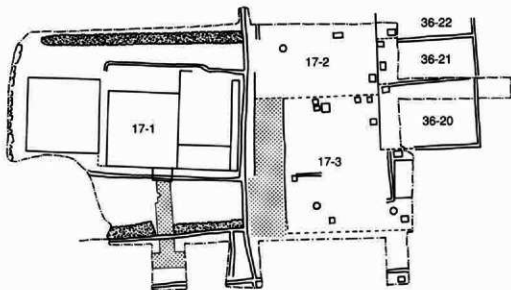
調査区は南北方向の溝 S D500 によって東側部分と西側部分に分割される。遺構の状況はこの東部と西部でかなり異なり、西部では土塁・石垣・門・建物等が良好に検出され、東部では多数の建物・井戸・石積施設が検出された。調査区の西側部分の遺構は大きく3期に分けられるが、下層遺構は上層遺構を残した部分的なトレンチにより一部検出されたにとどまる。これを下層から順にⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期とし、この部分全体を17-1区画と呼ぶことにする。

次に調査区の東側部分については、西側部分のⅢ期に対応する遺構は井戸 S E562 と礎石建物 S B556、掘立柱穴列 S A561 などわずかで、その他井戸や石積施設の一部がⅢ期の遺構に関係していたと想定されるが、天端の石が残っておらず、確認はできなかった。これら以外のほとんどの遺構は下層遺構であるが、西側部分の下層遺構とどのように対応するかの解明は今後の検討課題として残った。

なお本調査区の東側部分について、その東端部分は第36次調査の結果から石列 S X543 を境として36-20、36-21、36-22の3区画に分割されることがわかっている。また17-1区画とこれらの区画の間の部分については、道路 S S498 の北端部を境にして南北に分けることが出来、この北側を区画17-2、南側を区画17-3と呼ぶことにする。

町割・屋敷地にかかわる遺構

S A487 調査区の南端部に西側の山際から続く東西方向の土塁である。区画17-1の南端を限る。東西方向の道路 S S493 に南面し、時期の異なる門 S I520・521 を開く。この門 S I520 から西側の約8mほ



挿図15 第17次調査区区画割図

ど、門から東側の10.9mを検出した。この土塁の幅は、門から西では1.7~2.0m、門から東は1.2~1.4mである。門から西の部分では土塁表面の石がよく残っており、その南面と門に接する部分は長さ1.0m以上の大きな石を積み、北面はそれより小さな石を積んでいる。門より東側は土塁の残存がよくないが門の近くでは南面に長さ0.8m程度の石が積まれている。この土塁の西方、調査区全体の西南端の一部は未買収であり、調査できなかった。この土塁の下層の門S I 521はI期の遺構であり、この土塁はI期からIII期にわたって機能していることが確認された。この土塁は南北方向の溝S D 500に至って止まる。つまりこの土塁は調査区西側部分の区画17-1の敷地南端を限る施設である。

S A 488 調査区西側部分の北端に位置する東西方向の大きな土塁である。区画17-1の北端を限る。この土塁の西端部には山際に門S I 522が開き、東端は南北方向の溝S D 500で止まる。幅約1.8m長さ約32mの規模で北面には長さ1.0~1.5mの大きな石が連続して並べられており、敷地の北端を明確に限っている。南面には長さ0.3~0.4mの小ぶりの石が並べられる。この土塁の東端部7mほどの部分には幅1.0mあまりに狭めた改造のあとが見られ、東端は幅1m高さ0.8mの大きな石で溝S D 500に面している。この改造はII期からIII期に移る時であろう。

S V 489・490 北側土塁S A 488の南側、すなわち敷地側に造成された階段状の石垣である。上段のS V 489は幅0.5m長さ約18mあり、下段のS V 490は幅0.4mで長さ9mほどを検出した。この付近から五輪塔や石仏等の出土をみたことにより、この石垣によって作られた施設は石仏等を並べて供養するなどの用途に供されたと考えられる。

S V 491・492 調査区西端の山際部分にある南北方向の石垣である。西端のS V 491には巨大な石を配し、その約1.5m東側に石垣S V 492がある。この石垣S V 492は建物S B 527の礎石列にほぼ並行して南から北へ約13.0m続き、北部でゆるく東へ折れている。これら2つの石垣の間の部分は、北で門S I 522に通じ、そこで東に折れてなだらかに下って屋敷面に通じている。

S S 493・494 調査区の南端を東西に走る幅8.0mの1本の道路である。本次調査では3箇所のトレンチで砂利面や側溝などを検出した。その後の第40次調査で全面発掘され、東西に連続した道路であることが確認された。この道路は、北側の土塁S A 487との間に側溝S D 499があり、南側にも側溝S D 501がある。中央部に幅2.4mの砂利敷面S X 605を持つ。この砂利敷面は調査区東端部までつながり、またこれと直交して門S I 520の南面からも幅2.4mの砂利敷面が延びてこれにつながっている。これらの道路の規模や構造については、すでに第36次調査で報告されており、それにゆずる。

S S 495 調査区の東端から長さ18.0mにわたって東へ拡張したトレンチ内に検出された南北方向の道路である。その後の第36次調査と第42次調査によって一乗谷の町割の基本となる南北幹線道路のひとつであることが確認された。西端は側溝S D 518で限られ、そこから2.4mの幅で砂利面があり、その東には石列S X 544が見られた。ただそれは後世の水田に伴うものであろう。この道路についても、すでに第36次調査で報告済みである。

S S 498 調査区の中央部に南北方向に走る砂利敷きの道路である。長さ21.0mにわたって検出した。東側は建物S B 551の石列によって区画され、西側には石列S X 541がある。路面上には溝S D 510が見られる。この道路のレベルは南端部と比較すると東西方向の道路S S 493より約0.5m低くなっており調査区の西側部分のIII期の遺構より下層の遺構である。この道路の上は焼土、炭でおおわれていた。またこの道路の北端部には幅0.1m長さ1.4m深さ0.015mの浅いくぼみS X 592が残されていた。

S D 499 土塁S A 487の南側石列にそって東西方向に流れ、南北方向の溝S D 500に流れ込む溝で、道

路 S S 493 の側溝である。約 21m を検出した。この溝の側石の積み方は 3 時期にわたっており、最上の III 期の溝側石より下 0.2m に II 期の石列があり、その下 0.25m に I 期の石列がある。溝の幅は第 III 期で約 0.5m である。

S D 500 調査区を東西に二分するように南北

方向に流れる大きな溝である。調査区の南端部と北端部にトレンチを入れ、その結果約 42m を検出した。この溝の上部は現代の農業用の溝により一部破壊されたと見られるが、深さは約 0.5m で多量の遺物が出土した。この溝に流れ込む東西方向の溝 S D 499・503・504 によって、この溝は 4 つの部分に分けられる。その長さは南から順にそれぞれ 8m、8m、16m、10m である。南端の 8m はやや不規則な石の並べ方で溝の幅は 0.3~0.4m 程度、その北側の 8m はしっかりとした側石が積まれており、幅は 0.5m である。その北側の 16m すなわち溝 S D 503 と S D 504 の間の部分は、方向をその両隣の部分と比べてそれぞれ約 5 度ずらしており、III 期の建築遺構と同じになっている。この部分の幅も 0.5m だが、側石は小ぶりのものが多い。最後にその北側の部分 10m は再びしっかりとした大ぶりの側石が積まれ、幅は 0.4m 程度になっている。この部分の溝の方向は北側土塁 S A 488 と直角に交わる。この溝 S D 500 は II 期 III 期の溝であろう。I 期の溝としては、トレンチ下層に後述する溝 S D 502 が検出された。

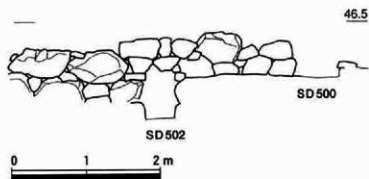
S D 501 調査区南端に設けた 3 本の拡張トレンチ内で道路 S S 493・494 の南側に側溝を検出した。この溝はその後の第 40 次調査で全面的に検出されたが、東端トレンチ内の溝は連続しない可能性もある。

S D 502 溝 S D 500 の南端部でその西側に検出された南北方向に流れる下層の溝である。トレンチにより土塁 S A 487 をはさんで長さ 7m と 2m の 2 箇所検出した。幅は約 0.3m で溝底のレベルは並行する S D 500 と比べて 0.6m 低い。東西溝 S D 499 の I 期の石列に対応することから、この溝も I 期の遺構である。
S D 509 南北溝 S D 500 の北端部の東方 2m に検出された下層の南北方向の溝である。2m ほど検出し、これより南については不明。側石と底石がよく残っており、幅 0.4m で、残存する側石からの深さは 0.8m である。溝底の深さは溝 S D 500 より 0.4m 低い。北隣の第 44 次調査区内に連続する。

S D 510 調査区中央の南北方向道路 S S 498 の路面に残る溝である。側石は残っておらず、後世の掘乱でなくなった可能性もある。L 字型に曲がり、長さの合計は約 10m、幅 0.4m、深さ 0.5m で内部は炭で埋まっていた。

S D 516 調査区東北端近くにある石積施設 S F 576 に接する南北方向の溝である。幅 0.2m で長さ 0.3m を検出した。

S D 517 調査区東端北よりに設けた拡張トレンチで検出された東西方向の溝である。区画 36-20 と 36-21 の境界溝になっている。一部しっかりとした天端の石が残っており、幅 0.3m 深さ 0.3m で約 12m 分検出した。この溝の中央部南に入り口らしきシャクダニの板石が敷かれている。



挿図16 S D499北側側石立面図

S D 518 同じ拡張トレンチ内で検出された南北方向の道路 S S 495 の側溝である。幅 0.3 m 長さ 3.0 m 検出。これらの溝 S D 517・518 については第 36 次調査で報告されている。

S X 543 調査区東端部に南北 13 m にわたって連なる石列である。一対の石が面をあわせて接しており、東側の石は約 0.1 m 低い。敷地の境界施設と考えられ、区画 36-20、36-21 の西端と区画 17-2、17-3 の東端を限っている。

区画 17-1

S S 496 調査区の西南部、門 S I 520 から建物 S B 523 の前の溝 S D 503 にかかる大きな石 4 個に向かって延びる砂利敷きの参道である。幅約 2.4 m で両側を石で区画する。

S S 497 建物 S B 523 の下層で一部検出された砂利敷きの通路である。両側を石で区画し、幅は約 2.4 m。路面の高さは建物 S B 523 の検出面より 0.5 m 低く、I 期の遺構と考えられる。

S D 503 土塁 S A 487・488 によって囲まれた敷地の内部を東西方向に流れる排水溝のひとつである。西端部は調査区外のため不明だが、礎石建物 S B 523・524 に並行してその南約 1.0 m のところを東に向かって流れ、南北方向の溝 S D 500 につながる。幅 0.3 m 深さ 0.25 m で長さ 24.0 m を検出した。Ⅲ期の遺構である。

S D 504 同じ敷地内部の北よりを東西方向に流れ、南北方向の溝 S D 500 に流れ込む排水溝である。流路は溝 S D 503 のように直線ではなく、石組み S X 540 の北側に沿って曲がっている。幅 0.2 m 深さ 0.15 m の浅い溝でⅢ期の遺構。西端部は南に折れて 1.5 m ほど続く。この西端部から南北方向の溝 S D 500 までの長さは約 22 m である。この溝内に幅 0.4 m 深さ 0.2 m の柱穴 4 個からなる S A 599 を検出した。

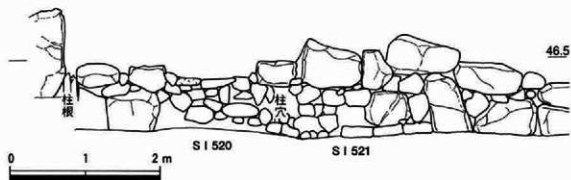
S D 505 溝 S D 504 の西方に検出した東西方向の溝。幅 0.3 m、深さ 0.15 m で長さ 4.5 m。Ⅲ期の遺構である。礎石建物 S B 525 の北隣に位置し、並行する。その礎石の端からの距離は 0.1～0.2 m で、小規模な建物の雨落ち溝である。

S D 506 礎石建物 S B 525 の南に位置し、並行する東西方向の溝。深さ 0.2 m、幅 0.2 m で長さ 8 m ほど検出した。この溝底のレベルは北にある溝 S D 505 と比べて 0.15 m ほど下にあり、Ⅱ期の遺構である。

S D 507 調査区西側部分の深堀トレンチ内で検出された東西方向の溝である。2箇所のトレンチによりそれぞれ 8 m と 7 m ほどの長さを検出した。0.2～0.3 m 程度の大きさの小ぶりの側石が一石分残っていた。幅は 0.2～0.3 m あり、溝底の高さは北にある溝 S D 504 より 0.5 m 低い。I 期の遺構である。

S D 508 同じ建物 S B 524 内部のトレンチで検出された下層の東西方向の雨落ち溝で 5 m ほど検出した。側石のほか到底石もよく残っており、幅 0.4 m 深さ 0.2 m である。この溝に接するように礎石建物 S B 533 が建ち、石列を並べている。溝底の高さは並行する東西方向の溝 S D 503 より 0.2 m 低く、Ⅱ期の遺構である。

S I 520・521 調査区南端の土塁 S A 487 に開けられた門である。南面し、外側は東西道路 S S 493 に面し内側には参道 S S 496 がある。この参道の幅は 2.4 m で南端部に 1 対の柱穴が検出された、その約 1.5 m 南に 1 対の門礎石があり、ここに柱間 2.4 m の門建物があったと考えられる。これより下層に掘立柱の柱根 1 個とその 2.8 m 東方の位置に柱穴 1 個を検出した。柱根は 0.24×0.27 m のケヤキの角材で長さ 1.02 m 分残存しており、その上部は朽ちていた。下部には 0.03×0.04 m のいかだ穴と思われる穴があいている。これらの同じ位置にある上層と下層の門遺構を S I 520 とする。その時期はⅡ期とⅢ期である。この門 S I 520 から東へ 1.8 m ずれた位置に I 期の門 S I 521 がある。この S I 521 に対応する道路が一部検出さ



挿図17 S I 520・S A 487南面立面図

れた道路 S S 497である。幅は S S 496と同じ約2.4mである。

S I 522 調査区の北端の土塁 S A 488の西端部に設けられた門である。幅3mにわたって土塁石垣がみられず、門の開口部の痕跡と考えられる。

S B 523 調査区西部の石垣 S V 491、土塁 S A 487・488、溝 S D 500によって囲まれた敷地のほぼ中央部に位置する大きな礎石建物である。礎石は大型のものとやや小さいものと2種あり、上面に十等の除刻線を切り柱据付け位置を定めた跡が見られる。東西約11.25m、南北11.55mの三間×三間のほぼ正方形の建物で、柱間は東西方向は東から4.6m、3.7m、3m、南北方向は南より3.7m、3.7m、4.2mである。東・西・南面にはこの柱間の間に1個ないし2個のやや小さな礎石があり、また南から2列目の柱列にも柱間の間に礎石がある。こうしたことから南を正面とする三間堂のような建物と想定される。門 S I 520から参道 S S 496を通り、東西方向の溝 S D 503を越える部分に上部が平らな大型の石4個が配されている。これはこの建物 S B 523の東1間の中央部に位置し、向拝様の庇の可能性が考えられる。

S K 591 S B 523の内部に残る2つの円形のピットで東側は直径0.7m、深さ0.2m、西側は直径0.6m、深さ0.15mだった。

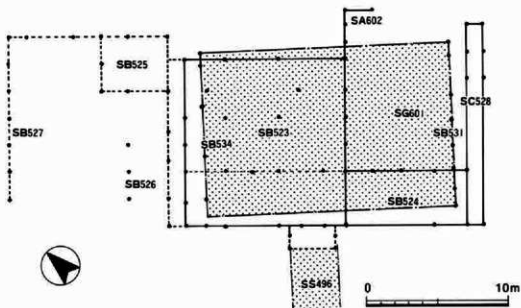
S B 524 S B 523の南1間分を東に延長して形成される東西8.45m南北3.7mの礎石建物である。内部に水利用の施設と考えられる遺構 S X 536を持つ。

S B 525・526・527 S B 525は S B 523の西北に位置する東西4.7m南北3.75mの礎石建物で、礎石の高さは S B 523より0.15m高い。北側に雨落ち溝 S D 505を持つ。S B 526は S B 525の南に位置する礎石建物である。S B 527は S B 535の西側約1.5mにある礎石建物である。以上の建物 S B 525・526・527の礎石は高さがほぼ同じで一体であった可能性も考えられる。

S C 528 S B 524の東に接する東西1.1m、南北14.1mの廊下の建築遺構である。この遺構と S B 523・524で囲まれた空間 S G 601は S B 523の中庭と考えられる。

S B 529 S B 523の敷地内部にあった東西4.4m南北4mの掘立柱建物である。黒く焼けた直径0.1mの柱材が一部残っていた。柱穴の底は S B 523の礎石の高さより約0.45m下にあった。

S A 530 S B 526の敷地内にあった柱穴の跡で直径0.14mの柱穴を約2.2m間隔で4個検出した。穴の底



挿図18 区画17-1主要建築遺構配置図

はS B526の礎石の高さより約0.45m低い。

S B531 廊状建物S C528の西隣に検出された下層遺構である。礎石建物でその一部南北12m東西2.0mあまりを検出した。礎石の高さはS C528や建物S B523・524より約0.2m低く、かつ方向が西に2°30′振れている。Ⅱ期の遺構である。

S B532 S B531のさらに下層に検出された礎石建物である。S B531より0.3m低い。方向はS B531と同様で東西4.3m、南北4.2m分検出した、この建物の北側には幅0.4mの縁がある。また南側には雨落ち溝S D508がある。Ⅰ期の遺構である。

S B533 S D508の南にそって並ぶ礎石列である。約6.0mにわたり礎石5個を検出した。東から2つめの礎石には十字の印が残っている。礎石の高さはS B532より約0.1m高い。

S B534 S B531の西約17.5mに位置する南北方向の礎石列で、礎石の高さはS B531よりわずか0.06mほど高いが、これは敷地自体の傾斜によるものとみられS B531に対応する遺構と考えられる。また東西方向の溝S D507はこれらを一体のものとした建物の雨落ち溝と考えられる。

S B535 S B523の西隣にある東西11.5m、南北11.5mの大型の礎石建物である。礎石の高さはS B523より0.15mほど高いが、敷地の傾斜によるもので、S B523と同時期の建物と考えられる。

S B604 S B524の南側は広い砂利敷きとなっており、その南端に礎石とその抜き跡がある。長さ3.4m分検出した。

S A602 S B523の東北端から北に延びて東に折れる柱列である。

S G601 S B523・524、廊S C528によって囲まれる中庭である。

S G603 門S I520から入ってすぐ左手にある広場状の空間である。その西隣の未調査部分と関連するものと思われるが未詳。

S X536 調査区西西部の建物S B524の内部にある1.3×2.6mの石敷きの施設である。まわりを石列で囲い、中に小砂利が敷かれる。

- S X 537 建物 S B 532 の西約 2.4m に位置する築地様の遺構。I 期の遺構である。
- S X 538 溝 S D 503 の東端南側にある砂利敷きの西端を限る小さな石列である。
- S X 539 建物 S B 535・525・526 の間に位置する下層の石列である。これらの建物の礎石より 0.25m 低い位置にあり、約 6m にわたって 8 個の石が並んでいる。その方向は I 期の道路 S S 497 に並行する。
- S X 540 中庭 S G 601 の北部に検出された III 期の遺構である。0.8×1m の大型の石を小さな石 9 個で取り囲む。東西溝 S D 504 はこの遺構付近でこれにそって流れを少し変えている。
- S X 600 調査区西半部の門 S I 520 の内部の東にある幅 1m 長さ 3m の段状の施設で、側面を石列で押さえ、上には細かい砂利が敷かれる。

区画 17-2

- S E 562 調査区東北部に位置する井戸である。天端の石 9 個が完全に残っており、III 期の遺構である。上部に大きな割石を縦長に使用する特殊な形態を示している。口径 0.75m で内部は径が広くなり、最大 0.8m、深さ 3.1m である。
- S F 571 調査区東北部の東よりに位置する 1×1.1m の石積施設。2 石程度残存する。
- S F 574 調査区東北部の北端にある石積施設。規模は 0.8×1.2m。深さは 0.4m。
- S K 582 調査区東北部の北よりにある円形の土壌。直径 1.4m、深さ 0.9m である。
- S K 583・584 調査区東北部にある 2 つの土壌。北側の S K 583 は直径 0.7m の円形。南側の S K 584 は 0.7×1.1m の長円形。いずれも深さ 0.2m で底のレベルは同じ。窪ビットかと思われる。
- S X 595 調査区東北部西よりの溝 S D 510 の東側に位置する石敷きである。

区画 17-3

- S B 550 調査区東部の中央西よりに位置する下層の掘立柱建物である。規模は東西 4m ほど、南北 6m ほど。
- S B 551 調査区中央の南北道路 S S 498 の東側に南北約 13m にわたって並ぶ石列上に建つ礎石建物である。東西の規模は不明。
- S B 552 道路 S S 498 の南端部の東に位置する礎石建物である。礎石 4 個を検出した。おそらく道路 S S 498 に面する小規模な建物であろう。
- S B 553 この区画のほぼ中央に位置する上層の礎石建物。礎石の高さは後述する南隣の S B 554 より約 0.1m 高い。
- S B 554 この区画の東南部に位置する東西 3m 南北 4m の礎石建物である。南北方向の石列 S X 542 の東隣にあり、この石列より下層の遺構である。建物の方向は道路 S S 498 に並行している。後述の建物 S B 555・556 と同じ向きである。
- S B 555 建物 S B 554 の東隣に位置する東西 2m 南北 4m の礎石建物である。建物の方向は S B 554 に一致するが、礎石の高さはわずか 0.05m ほど高い。
- S B 556 S B 556 の東隣に位置する南北約 6m の礎石建物で東へ延びるが削られている。方向は S B 554・555 と一致し、礎石の高さは S B 555 よりも 0.25m ほど高く、上層の遺構と見られる。
- S B 557 この区画の北よりに位置する礎石建物。方向は西隣の S B 550 と同じで南北 6m、東西 3m 以上の規模を持つ。

- S B 558 建物 S B 557 の南隣に重複して残る礎石建物。方向、高さとも S B 557 と同じ。規模は南北 4m 以上、東西 4m 以上とみられる。
- S B 560 調査区東北部の北端で検出された礎石建物で長さ 4m にわたって礎石を検出した。第 44 次調査区に連続しており、その遺構として述べられる。
- S D 511・512 調査区東半部南よりの石積施設 S F 565 につながる東西方向の溝。幅 0.1～0.2m で時期の異なる溝 2 条が同じ場所に作られている。長さは約 4.5m。
- S D 513 同じく調査区東半部の南よりにある建物 S B 554 の南部と東部に位置する雨落ち溝である。延べ 6m ほど検出した。石組みが 2 段残っており、幅 0.2m 深さ 0.3m である。
- S D 514 同じく調査区の東南部にある建物 S B 555 の南隣に位置する溝である。幅 0.3m で石は残っておらず、内部は焼土で充填していた。低部の高さは西隣の溝 S D 513 より約 0.2m 高い。建物 S B 555 の雨落ち溝である。
- S D 515 調査区東端南よりにある建物 S B 556 の西に沿って南北に流れる雨落ち溝である。幅 0.2～0.3m でしっかりした備石が一部残っている。長さ 8m 検出した。
- S A 561 調査区東南部にある上層の遺構である。約 1.9m の間隔で掘立柱穴が南北に 5 個並び、北端部で東に折れて約 1.7m の間隔でもう 1 個残る。この方向は西 4.2m に位置する S X 542 と同じで、Ⅲ期の遺構である。
- S E 563 調査区東南部、道路 S S 498 の南端部の東側に位置する井戸である。直径 0.6m。西隣の建物 S B 552 に関連する遺構である。
- S E 564 調査区東南部に位置する井戸で直径 0.8m である。
- S F 565 調査区東南部の道路 S S 498 の東隣に位置する石積施設。大きさは 0.7×0.8m、深さ 0.7m。溝 S D 521 がつながっている。
- S F 556・557・558 この区画 17-3 の北辺中央に位置するたがいに隣り合った 3 組の石積施設である。S F 567 と S F 568 の間と、S F 568 の南面では 2 石残るところもあるが、外は大体 1 石残るに過ぎない。上層遺構で大きさはそれぞれ 0.8×0.8m、0.6×0.8m、1.2×1.4m である。
- S F 569・570 前項の石積施設の東に東西に並ぶ石積施設である。西側の S F 569 は 0.7×0.9m、東側の S F 570 は 0.7×0.8m の規模で、それぞれ 1～3 石残る。
- S F 577 調査区東端の中央に位置する 0.7×0.9m の規模の石積施設。深さは 0.4m。
- S F 578 調査区東南部の建物 S B 556 の北隣に位置する 0.9×1.2m の石積施設である。およそ 3 石積み、深さは 0.8m、天端の石の高さから見て建物 S B 556 と溝 S D 515 に関連する遺構であろう。
- S F 579 調査区東南部に位置する 0.8×0.9m の石積施設である。深さ 0.6m で、底からおよそ 4 石を積む。
- S F 580 調査区東南部にある建物 S B 552 の東方に位置する 0.7×1m の石積施設である。建物 S B 552、井戸 S E 563 と関連する遺構であろう。
- S X 541 調査区中央部の溝 S D 500 の東に位置して並行する石列である。石の大きさは 0.3m 前後で小ぶりだがよくそろっている。道路 S S 498 より高い位置にあり、かつ西側に面がある。
- S X 542 調査区東南部にある南北方向に並ぶ長さ 6.0m ほどの石列。建物 S B 554 やその雨落ち溝 S D 513 より上層の遺構で 0.3m 高い。この石列は北から南へと低くなっているため、つきあたる石積施設 S F 580 と関連する遺構であろう。
- S X 594 調査区中央の溝 S D 500 の南端部、溝 S D 499 の北側備石の延長上に残る長さ 1.8m の 5 個の石列。

上層の区画石列と思われる。

S X 608 この区画の北東部にある石敷き遺構で範囲は0.8×1mである。

S X 609 S X 608の南東に位置するそれより下層の石敷き遺構。0.1～0.2m程度の砂利を1×1.8mの範囲に敷く。

S K 586 調査区東南部の柱列S A 561の北端から約2.0m北に位置する一対の堯ビット。東側のビットは直径0.8m深さ0.35m、西側直径0.7m深さ0.3m。北隣の砂利敷きS X 609より上層の遺構である。

区画36-20

S B 559 調査区東端の東方に設定された拡張トレンチ内で検出された礎石建物である。南北方向の溝S D 518の側石から0.5m、また東西方向の溝S D 517の側石から0.8mずらして建てられている。

S F 573 この区画の西北端に位置する0.8×0.8mの大きさの石積施設。1石しか残っていないが、底部の高さは、西隣にある区画17-2の石積施設S F 571より一段下がる。

S D 519 同じ拡張トレンチ内で検出された南北方向の溝。側石1石のみ残る。幅0.2mで長さ1.1mのみ残存する。

S X 606 調査区東端のほぼ中央に位置する1.3×2mの砂利敷きの遺構。下層の遺構で、高さは南隣の建物S B 556の礎石より0.6m低い。

区画36-21

S F 572 調査区の北東部に位置する石積施設。規模は0.7m×1.2mで3石分残り、深さは約0.5m。底部の高さは36-20区画の石積施設S F 573と同じである。

S F 576 幅1.1mの石積施設で、全体の規模は不詳。2石分検出した。

区画36-22

S F 575 調査区北端にある石積施設で、規模は0.8×1mで、2、3石残存する。

3. 遺物 (第42~60図、P.L. 43~72)

第17次調査で出土した遺物の総数は40,214点に上る。その内訳は表3・挿図19に示したとおりである。

器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%	器種	点数	%					
日土部	甕	4,168		青	碗	93		鉄	釘他	565		石	バンドコ	21					
	壺	5,570			皿	193			堀止	2			火舎	1		その他	埴土	41	
	鉢	541			壺	67			板	1			火鉢	6			種子	19	
	摺鉢	1,370			香炉	88			火箸	6			和壇石	3			焼米	3	
	お南無壺	1			瓶	24			網	4			鉢	1			炭化紙片	1	
	その他	7			鉢	16			包丁	1			盤	1			骨	3	
	計	11,726	29.16		蓋	8			鉋	1			臼(茶臼)	9			陶他	1	
	皿	21,589			蓋	6			斧	1			硯	43			雲母片	1	
	土釜	91			水指	1			手斧	1			砥石	21			布片	1	
	土鈴	60			その他	1			小柄	5			石仏	26			計	70	0.17
杯	1		計	497	1.24	鉄	1		花立	2		合計	40,214	100					
小壺	1		碗	10		鈿	1		水晶玉輪塔	1									
灯芯押え	2		皿	1,121		鏡	1		丸石	2									
その他	6		杯	45		毛抜き	1		礬石他	15									
計	21,750	54.09	香炉	4		金其他	10		笏谷石他	3									
木質	碗	524		壺	1		計	602	1.5	不明	1,024								
	皿	23		その他			鉄	326		計	1,179	2.93							
	壺	131		計	1,181	2.94	鍔	3		黒漆碗	13								
	茶入	23		碗	293		釘隠	1		黒漆皿	1								
	香炉	21		皿	680		鍔	2		黒漆茶入	5								
	仏花瓶	14		杯	27		甲冑金具	1		黒漆容器	1								
	水指	12		壺	4		刀装具他	3		朱漆碗	6								
	水滴	4		香炉	4		日貫	1		朱漆茶入	2								
	黄瀬戸碗	1		鉢	1		火縄挾	2		朱漆棒	1								
	計	753	1.87	その他	1		弾金	1		朱塗盆	2								
鉄製	碗	36		計	1,010	2.51	紅皿	1		稚朱片	1								
	皿	280		瑠璃輪碗	3		金其他	7		漆魂(?)	1								
	鉢	7		碗	8		水滴	2		櫛	2								
	香炉	14		鐵輪茶入	5		不明	1		曲物	2								
	壺	8		華南三彩皿	1		計	351	0.87	折敷	2								
	茶入	5		壺	8		彈丸	15		箱板材	1								
	計	350	0.87	鉢	5		壺	1		蓋	1								
	火鉢	18		鐵輪茶入	5		地金	6		高杯	1								
	火舎	1		華南三彩鉢	14		計	22		障子棧	1								
	風か	10		紅玉鉢鉢	1		鉋	1		柱材	1								
香炉	28		不明	17		不明	16		人形	2									
鉢	2		計	62	0.15	計	17		加工木櫛	4									
陶製	仏師具	1		小計	3,380	8.84	小計	992	2.46	竹材	4								
	その他	2		壺	167		計	17		竹製網代	1								
	計	62	0.15	そば茶碗	30		鉋	1		片木板	1								
	国内陶器-その他	126		鉢	8		その他	1		木片他	5								
	近世-その他	158		その他	1		計	206	0.51	炭化材	2								
	計	284	0.71	壺	21		計	25	0.06	草塔蓋	1								
	小計	34,925	86.85	鉢	3		計	231	0.57	その他	4								
				その他	1					計	67	0.17							
				計	25	0.06				小計	1,246	3.10							
				小計	231	0.57													

表3 第17次調査出土遺物一覧表

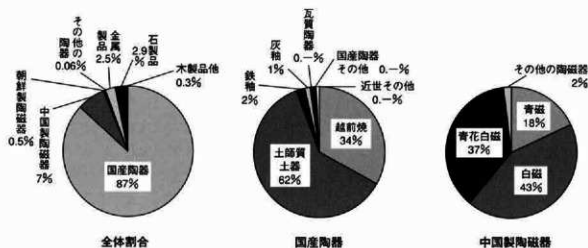
越前焼11,726点 (29.16%)、土師質土器21,750点 (54.09%)、瓦質陶器62点 (0.15%)、瀬戸・美濃陶器1,103点 (2.74%)、その他の国産陶器284点 (0.71%)、中国製陶磁器3,380点 (6.84%)、朝鮮製陶器206点 (0.51%)、その他の外国産陶磁器25点 (0.06%)、金属製品992点 (2.46%)、木製品1,246点 (3.16%)、石製品1,179点 (2.93%)、その他70点 (0.17%)であった。

これを陶磁器の割合で見ると、挿図19の国産陶器、中国製陶磁器割合表である。国産陶器の割合では、土師質土器が63%と大半を占め、次いで越前焼34%が続く。瀬戸・美濃製陶器、瓦質土器、国産その他の陶器は合計しても1割にも満たない。また、中国陶磁器の割合では白磁、青花白磁の割合が高く、両者の合計は8割となっている。次いで青磁が約2割で、その他の陶磁器となる。本調査区での出土遺物の割合は、赤淵地区における寺院・町屋での出土比率に近似しており、最も良く一乗谷の城下町の遺物割合を示すパターンであると言える。

調査区内における層別出土分布は、挿図20～23に示した如くである。整理の都合上、寺院の礎石建物が確認された遺構面、寺院と町屋区画を分ける南北溝SD500及び溝以東の整地層、木炭層をひとつの目安と考えて遺物の分布をみてみた。グリッド毎の量数を示す度数分布とはなっていないが、遺物の面的広がりがある程度示されており、南北溝以西では、図は省略したがほぼ均一に建物下より遺物が散見される状況となっている。ところが、同じ遺構面でも南北溝以東になると、溝と道路状遺構、あるいは井戸、石積施設等の遺構に遺物が集中していて、均一な状況とはなっていない。

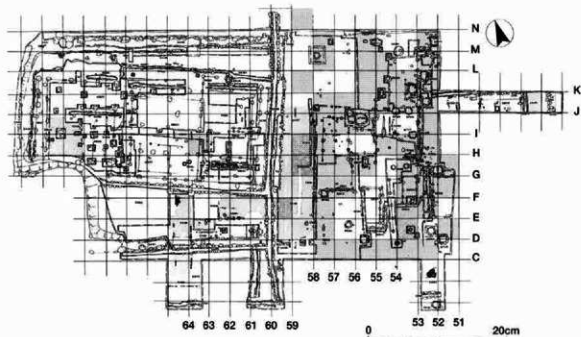
これは調査時点から確認できた事柄でもあったが、遺構の遺存状況と軌を一にしているものと考えられる。遺構の節でも触れたように、土塁で囲まれた南北溝以西の礎石建物群は、非常に遺存状態が良く水田耕作による擾乱は最小限に止められていたようである。それに対して溝以東の「車裏」的な空間とみられる一角は、遺存状況が良くなく、礎石建物の配置等は鮮明には伺えなかった。

しかし、整地層と見られる褐色土層や木炭層、あるいは山土混じりの整地層では、遺構毎にまとまって遺物が出土する傾向が見られ、そのエリアも分散していない。分布図には示せなかったが、これらの整地層の更に下層である、青色整地土層や南北溝下層においてもまとまった遺物の出土が見られた。これらの遺物群は、石積施設(タメマス)や井戸出土のものは例外として、その大半が2次加熱(火災等によるものか)によってかせた状態のものが多く、また黒く変色するか、煤を吸っていたりするものが目だった。

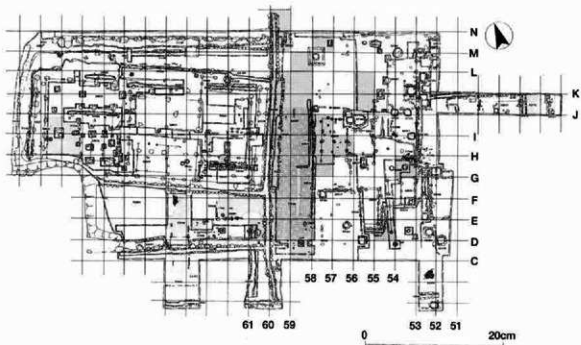


挿図19 出土遺物割合

越前焼 調査区では壺ビットが検出されていないせいか、表3も示しているように器種別割合は壺、壺が約4,000～5,000点の近い数値を示す。しかし播鉢は1,300点余となっている。この数値は通常埋蔵施設を伴う町屋、寺院などの割合からみて、かなり低い数値である。全体を復元できる資料はないが、破片資料からみると、その形態分類は一応、本調査区でもⅡ、Ⅲa、Ⅲb、Ⅳ類それぞれの器種がある。まとまった面積で下層の遺構検出を行なわなかったこともあり、Ⅰ期の、いわゆる古手のタイプは出土していない。形態的に豊富なバリエーションを見ることができたのは壺である。例外として93のような肩



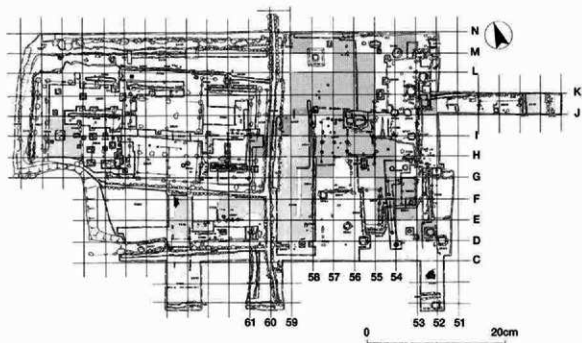
挿図20 遺物分布図（南北溝以东褐色土中）



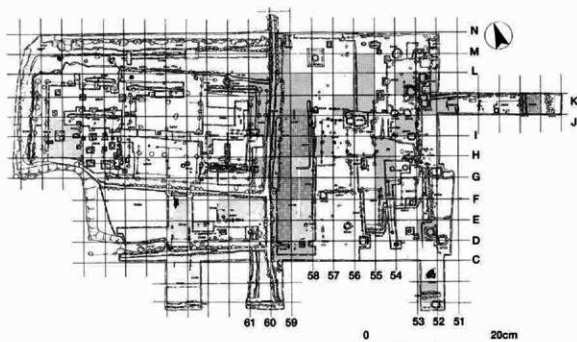
挿図21 遺物分布図（南北溝以东整地土）

に張りのあるタイプで、くの字に外に折り曲げる口縁部の壺がある。また、遺構的な性格を反映して、蔵骨器として転用された壺、いわゆる口縁部打ち欠きの壺（66、386など）が目立った。

播鉢はその成形技法、器型の形態的特徴から多くの問題点を指摘できる。器型には、その法量からみて、口径約30～40cmの大型品と20cm内外の中型品、そして10cm内外の小型播鉢とに大きく3分類できる。播鉢の間隔はこれに比例せず、また、播鉢の数も比例していない。大雑把な傾向としては、口径の大き



挿図22 遺物分布図（南北溝以東木炭層）



挿図23 遺物分布図（南北溝以東遺構面）

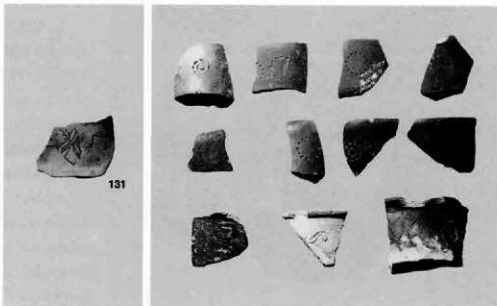
いものなかに、罫目の数が8～10本のもが多く、口径の小さなものには罫目が10本のは殆ど見当たらない。そして罫目の間隔も口径の大きいものは、密に引くものが多い傾向にある。

成形技法の問題としては、基本的に輪積みで、横ナアによって表面調整している。そして口縁部外面(20mm幅ほど)をヘラ削り成形し、底部表面を研磨し、平に調整するものが多い。罫目は鐮状工具を下から上へ向かって引き上げるのは通常の技法で、ここでも例外ではない。ただ、底部内面の罫目の引き方には一定のパターンが見られ、甕や壺の肩に刻まれるヘラ記号、例えばE、J、Xなどに酷似しているものがある。

どれほど鐮跡を使い込んでいるかを、罫目の磨耗度(=使用痕)で観察すると、その殆どが内面下半部までであって、口縁部まで磨耗が見られるものはない。そして当然のことであるが、いわゆる生焼け状態の人肌色から褐色を呈するものは、その磨耗度は大きく罫目がなくなっているものさえある。土師質土器 器種構成をみると皿が圧倒的に多い。次いで土釜、土鈴と続く。灯心押さえ、杯、小壺はごく少量の出土に止まった。こうした傾向ほどの地区でも指摘できる傾向で、その生産量や使用量を考えると当然でもある。

形式分類区分(南1999)によるとC、D類が多く、特にC類が多数を占める。C類には口径が6cm前後のC1類が目立つ。底部穿孔の皿の出土も今回目立っている。第40次、第46次調査区ではこれを上回る資料数が認められるが、いずれにしても寺院跡の調査という性格も要素のひとつと考えられる。今回目立ったのは皿B類である。ほぼ全調査区でまんべんなく出土しているが、注目すべきは、通常のB類はナア成形を施さない粗雑な成形である、という形態のイメージを新たにすべき点が2、3観察された。それは内面を布(編布)で押しつけるだけでなく、丁寧に横ナアを施しているものが、少なからず見られたことである。口唇部は平滑に仕上げられ、あたかも「ボテタイプ」⁽¹¹⁾とB類の中間形態であるかのような印象を受けた。即ち、ボテタイプは内外面に横ナアがあり、B類は全くナアを施さないものであるが、この種の皿がそのままナア省略でいきなりB類に変化したものとは考えられなかった。しかし中間的にナアが見られるものがあることが判明し、やはり一乗谷内でボテタイプからナアの省略と器形の矮小化が行なわれてB類へ変遷を遂げたものという見通しを裏付けることができるものと思われる。

更にB類で付け加えるべきは、いわゆる丸皿とB類皿との中間的なものが見受けられたことである。丸皿は耳皿の原形の皿形態である。しかし、口



挿図24 線刻文土器、瓦質香炉類(一括)

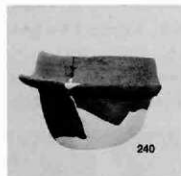
縁部に横ナデ成形を加えず、粗雑な仕上げとなっている。しかし、プロポーシオンはまぎれもなく丸皿のそれであり、口縁部は直角に折れ曲がり、見込みも浅い。生産工人のくせとも考えられ、性急にタイプ別分類には至らないと判断されるが、注意すべき資料である。

土釜は破片数では91点出土しているが、器形がまとまったのは2点だけである(挿図25)。体部下半部に葦の付着があり、煮炊きで使用された痕跡を残す。しかし、内面には煮炊きの内容物の痕跡を殆ど残さず、何を煮炊きしたのかは、今もって不明である。

瓦質陶器 器種構成からみて、そのバリエーションは少なく器型を伺えるものは香炉、仏華瓶、火鉢の3種である。挿図24には瓦質香炉スタンプ文の各種のタイプを示した。横S字、丸文、菱文などがあり、いずれも横一段に連続的に押捺している。

瀬戸・美濃製陶器 瀬戸・美濃製陶器は器種構成において鉄軸が碗、灰軸が皿という出土傾向は本調査区でも同様である。特に鉄軸碗の資料は、破片数で524点と他の調査区と比較しても多い。その大半は口縁部が緩く外反するタイプで、釉軸も黒褐色の胎軸が厚く施されたものや、褐色がかかった鉄錆色もしくは柿渋色のものがあり、量的には後者が多い。腰部には鉄を塗って露胎部を隠す手法＝「鬼板」が一般的であるが、胎軸を施すタイプのものは露胎のままとするものもある。鉄軸には467(挿図25)の仏華瓶も出土している。本資料はその脚部である。焼成はあまく、表面はザラザラしている。

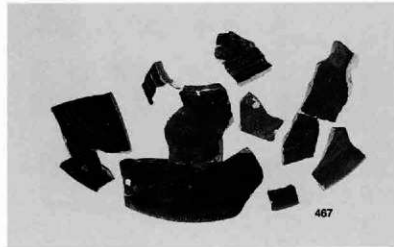
灰軸皿にはその内面見込みに通常スタンプ文が見られるが、殆どが植物文をあしらったもので梅花、菊花、カタバミが大半である。軸付けはズブ掛けで、小さな高台のつくタイプが主流を占めるが、本調査区では、口縁部で一旦屈曲して外反するタイプもいくつか散見される。この場合は腰から高台部にかけてが露胎となる。また高台も削り出し高台となる。内面が放射状に沈線や刻む菊皿タイプ211が見られる。



240



186



467

挿図25 土釜、仏華瓶

碗タイプも見られ、線描連弁文青磁碗を模したものの134がある。ザックリとした見込みの深い碗で、器壁は厚手である。高台裏に輪トチン痕を残す。軸調は浅い灰緑色で少し表面はザラついている。向付皿には157の魚形皿がある。同様な例には第44次調査区出土の魚形皿がある。鳥の餌にでも使用したのか、餌皿タイプの小型杯156がある。

その他の国産陶器 表土及び耕作土で信楽焼壺(25、69)がまとまって出土している。いずれも天正元年の焼き討ちによる2次加熱を受けているらしく、器面の軸はほとんどかかせており、遺存状態は良くない。胴部破片が散逸し全体の復元は困難であ

った。内面は全体に煤を吸い込んだものか黒くなっている。胎土は灰白色で堅く、いわゆる長石の吹き出しが顕著に見られる。

珠洲焼壺70は木炭層からの出土である。珠洲焼福年というV期の壺であろう(吉岡1987他)。これもまとまった量で破片が出土しているが、全体の器形復元には至らなかった。一乗谷では以後の調査においても類例は殆ど見当たらず、本調査区で出土しているのみである。

中国製陶磁器 器種構成は青磁、白磁、青花白磁ともに碗、皿がある。鉄釉碗も少量ながら見られる。少量ながら瑠璃釉碗片、華南彩釉皿(交趾三彩)、中国南部、いわゆる福建・広東省周辺で生産されたと見られる黒褐釉四耳壺などもある。

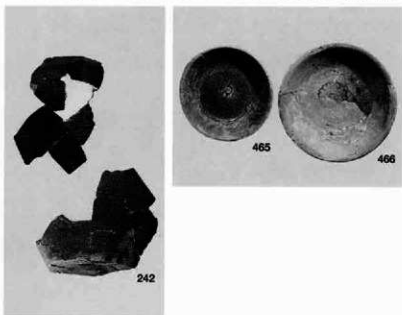
青磁は線描蓮弁文碗・無紋の皿の他に盤、袋物と呼称される花瓶、香炉、酒会壺蓋などがある。いずれも断片、小片に止まる。204は徳利形の青磁壺である。挿図27には青磁香炉各種について示した。468は薄手に仕上げられた香炉で、軸調はスカイブルーを呈す。469は大振りの香炉と見られるが底部に孔が穿たれており、植木鉢かも知れない。472はいわゆる袴腰香炉のタイプである。口径寸法からみて2器種に分かれるが一括して示した。471は蓋付き壺で、口縁部は露胎とし、丁寧に研磨されている。

白磁は、ここでも景德鎮系の皿が大半を占める。特殊な器型では木瓜形もしくは鐔形をした皿403が5枚まとまって出土している。井戸SE564の下層からの出土である。かつて第42次調査区では青花白磁皿10枚と青磁鉢、大皿が一括出土した例がある。またこの鐔または木瓜形の皿は、同様な例が根来寺坊院跡で出土しており、こちらは高台裏に青花で「天文」年の銘がある(上田1983)。一乗谷のものにはそうした銘は見られない。440・441は白磁の花弁皿である。軸調は青味がかっており、類例が第40次調査区に見られる。

青花白磁には、外反する皿に大小のバリエーションが見られる。いわゆる宝相華唐草文の皿を中心に芭蕉文、見込みに壽字文の莖筒底皿161などがある。碗には外面及び内面見込みに蔓草文をもつマントーシタイプ253や内外面共に團線以外は無紋とするもの162がある。

鉄釉碗には、破片も加えると3個体分の出土があった。そのうち、完型に復せるものは1点であった400。ザックリとした内湾タイプの碗で、口唇部はつまみナデによってとがり、直立する。底部高台はいわゆるベタ高台で、露胎である。軸調は黒褐色で、軸流れが見られる。細く未目風の筋が走り、兎毫蓋と呼ばれるものに該当しよう。

朝鮮製陶器 器種構成からみて、象嵌青磁、焼締陶器、その他に分類できるが数量的には極めて少なく、特記すべきものは見当たらない。雑釉陶器に分類される山茶碗、焼締陶器に分類される徳利形の壺も出土数は少なかった。今回目立ったものには象嵌青磁の



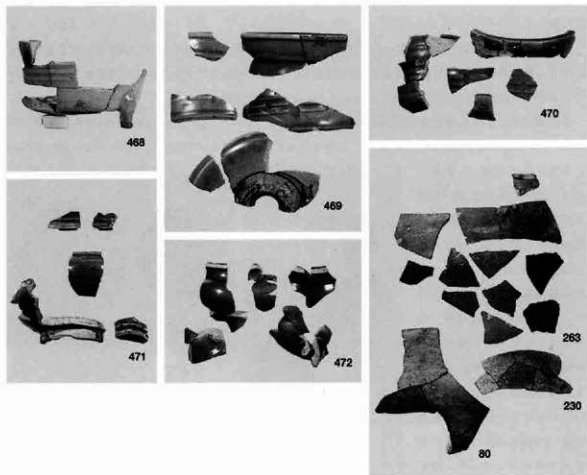
挿図26 瀬戸・美濃製品(碗・皿)

高麗壺(挿図28-473)がある。2次加熱によって軸は黒くくすんでおり、断片的に細かく破碎された状態である。器型復元には至らなかった。

その他の外国産陶磁器 華南彩釉陶器、いわゆる交趾三彩の水鳥型水滴73がある。惜しくも2次加熱を受けて色調は失われているが、羽や頭部の造作は写実的な表現となっている。かすかに褐色の部分に光沢を残す。腹部が欠損しているが、概ね全体の器型は何える。背中と嘴の下部に注入孔が穿たれている。動物をあしらった交趾三彩水滴としては、その他に第35次調査区の魚形水滴がある。また、かつて熊本県「浜の館」跡では3点まとまって、この手の水滴が出土している⁴⁸²⁾。華南彩釉陶器、とりわけ三彩の陶器は端反りの小皿が通有タイプとして見られたが、第18次調査区の盤や、第104次調査区で出土した小型の仏像⁴⁸³⁾も含めて、バリエーションが見られるようになってきている。

昨今、国内産陶器、特に一乗谷においては越前焼等の範疇に該当せず、また中国製褐釉もしくは黒褐釉四耳壺等の範疇にも該当しない、いわゆる産地不明陶磁器についての見直しが進められている。本調査区においてもこうしたものが少なからず存在する(80、230、263など)。多くはタイ、ベトナムなど東南アジア地域の生産にかかるとの見方がある一方で、国内産陶磁器との比較も並行して図られている。一乗谷全体のこれらの実態は把握できていないが、他にも第35次、36次、42次、46次、100次、102・104次等々で出土が確認される。こうした確認例の検討は今後の課題としたい。

金属製品 器構成としては、鉄砲玉・地金一括出土品、鐙、水滴、鉦、鉞、銅製蓋、輪花鉢などの特殊な製品に加えて釘、掘り止め、笠釘等の建築用材や、飾り金具等の家具部品、小柄、鎌、笠袴等の武



挿図27 青磁香炉、産地不明陶器

器・武器類などがある。これらはいずれも2次加熱により融着していたり、煤やタール状の付着物が目立つ。

このうち、鉄砲関連遺物は出土地点が前項第44次調査にかかることから、第44次調査・遺物の項で概略紹介している。また金属製品の大半はPL53で一括して紹介している。

建築関連の金具に廻り止めがある(272、281、282)。280は5弁の花びらを象った銅製笠釘の飾り金具である。表面に針描きの輪郭が見られる。釘は大小併せて総数565点の出土を見た。井戸や溝から出土したものは概して遺存状況が良く、整地土等から出土したものは錆付いて原形を保っていないものが多い。

武器には292の鏃がある。一乗谷の出土例では通常先端が鑿状になった、いわゆる丸根タイプのものが多い。本例は木の葉形のもので、他地区ではあまり出土例がない。鈎293は一部に欠損が見られるものの、ほぼ完品である。南北溝以東の褐色土中の出土である。15弁の菊花透かしで小柄櫃、弁櫃がないタイプである。朝倉館出土の車透かしの鏢には小柄櫃、弁櫃があり、同じ透かしの鈎でも2者が用いられていたことがわかる。またこの鏢は茎櫃孔が修理されており、サイズが少し狭められている。2次加熱で表面は荒れているが、本来象嵌が施されていたであろうという指摘がある。東西溝SD504からは鉦が2点出土している(427、428)。口径は下端部分で8.7cm前後で少し小型である。これについては、サイズは異なるが福井県埋蔵文化財調査センターの調査による、福井市「法土寺遺跡」で土壌中から同様の鉦が出土した例がある⁽¹⁸⁾。

特記すべきは274の金製目貫で、細部の獅子の作り出しは極めて精巧であり、柄本体は失われているが、傷や歪みはなく完品である。一乗谷では他にも目貫が見られるが、大概は木瓜形、蔓草文、菱文など幾何学的なモチーフを用いたもので、本例のような動物文をあしらったものはまだ追加例がない。

銅銭の出土状況、及び遺構別出土状況については銅銭一覧表に示したとおりである。整理の都合上、南北溝SD500を基準に東西に分けてカウントされているものを一括してそれぞれの遺構面、及び層位別に統括した。青色整地層・暗褐色土からの出土が多く、計104枚を数える。次いで溝SD500木炭層の97枚、下層南北溝表採35枚と続く。資料はいずれも下層からの出土が多いことから遺存状況も良好で、銘の判読は比較的容易であった。銭種銘は銅銭一覧表にも示したとおり、42種であった。うち1枚は寛



挿図28 朝鮮製壺・砥石類

永通宝を含む。一乗谷の他の地区と同様、ここでも開元通寶と北宋銭が大半を占め、残りは洪武通寶が目立つ割合となっている。

木製品 器種構成は、板材・柱材の他に茅の炭化したものや、杭、障子棧、棒状製品などの建築部材がある。またへら、曲げ物、折敷等の台所用品や漆器椀・皿、盆、或いは貼、包丁の柄など類例の種なものや、編布も見られる。その他に卒塔婆類がある。しかし、全体では67点余と0.2%に満たない。

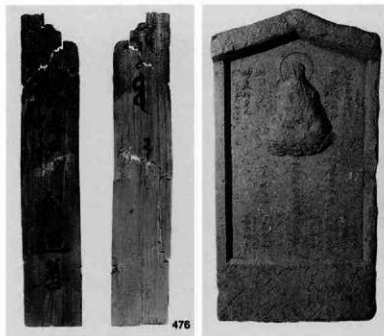
出土した漆椀・皿(PL.61)は、いずれも破片資料に止どまる。黒漆に朱ないしは赤色漆による図柄をもつ椀・皿と内外面共に朱ないしは赤色漆による上塗りを施したものが見られる。遺存状態は脆く、



挿図29 卒塔婆類一括

黒漆の膜が剥離しかけているものが目立つ。

罽462は、ほぼ完品で杉または松材を加工して製作した手製のものと見られる。塗彩や彫刻などは施されていない。貼460は全身が炭化しており、元の材質の色合いは残っていない。しかし、器形はほぼ完存しており、使い込んだものか中心部が磨り減っているのが観察される。なお、包丁423の柄はスギ材の棒状のものを長さ10.0cmで両端で切り、刃を差し込んだ筒素なつくりのものと見られ、断面は径3.0cmのほぼ円形に削って成形している。



挿図30 卒塔婆



挿図31 供養木板



供養木板圖文

柱材459は、遺構でも触れたように、南北溝以西の南土塁SA487中央に位置する門SI520の掘立柱である。上部は燃え落ちており、辛うじて地中に埋まっていた部分が土塁石垣下から検出できた。短辺24.0cm、長辺27.0cm、残存長110.0cmであった。下端にはアンカー棒（横木）を通して柱を固定するための「いかだ穴」が見られる。展示に供するため、PEGによる保存処理を施している。

卒塔婆類（挿図29・30）は礎石建物の南面を区切る東西溝SD503から出土している。概ね天正元年の焼き討ちによるものか、火を受けているものが多い。472は「…憲法橋／盆迫善」と書かれており、裏は梵字である。同様な例は474にも見られる。五輪塔形の刻みが見られ、梵字は「キャ・カ・ラ・バ」が墨書される。473は「南無妙…」、一括資料のなかには「…佛果菩…」、「八月…」などの墨書が見られる。こうした卒塔婆類は第40次調査及び第46次調査で明らかにされた墓地と、これに伴う石組の地下式倉庫から多量の出土を見るに至って、一乗谷における卒塔婆類の大まかな類別が可能になった。即ち孟蘭盆供養や初七日供養のために造立されたものとみられる卒塔婆、法華経を薄い片木板に書写したこけら経、頭部を山形に切り、20枚前後を把にして法華経題目を書き込んだ盆塔婆である。このうちこけら経は時代の新旧によって幅の広いものと狭いものとに分類され、一乗谷出土のものは幅で2cm前後のものが大半を占める。卒塔婆は頭部に五輪型の刻みをもつもので大小、あるいは板の厚みなどによってバリエーションがある。今後は、一乗谷の既往の調査区における供養塔婆類の整理・分類を急がねばならない。

石製品 器種構成には石仏・石塔類、茶臼・粉挽臼、盤・火鉢・バンドコ・炉壇石・釣り手（鉤）・硯・碁石などの他に建築部材として井戸枠や、板石などがある。石仏、石塔類、茶臼、粉挽臼についてはPL. 62～64に一括して示し、その他の石製品については逐次、遺構別にそれぞれの図版で示した。

バンドコは23、54、78、262、264～266のD型、79のO型があり、長方形や特殊な形のものは見られない。いずれも使用された痕跡を残し、内面に煤が付着するものが目立った。身は完璧に復せるものが少なかったが、蓋の形状から開口幅14～16、20cm前後のもの、22cm内外、28cmの大型サイズなど大小のバリエーションがある。蓋だけでは基準寸法の置き方に異論があるかも知れないが、使用する際の規格的なサイズが大小揃っていたことを伺わせる。石材はすべて笏谷石である。粉挽臼は安山岩製、花崗岩製などの他に笏谷石製のものもある。茶臼にも稀に笏谷石製が見られる（28、32）。磨目は8分割のものが主となっている。

石仏・石塔類については寺院跡であることもあってか、北土塁の裾から発掘で出土したものや調査区の西側に露出して遺存していたものなど、数量的にはこれまでの町屋地区、武家屋敷の調査に比べて多くなっている。特に一石五輪塔及び板碑五輪塔の銘は多くが「南無妙法蓮華経」を示すものが多いことが挙げられる。その他には地藏仏の基台部分が据え置き型のものと、地中に突き出すものとの2タイプあるが、量的には据え置き型のほうが多い。地中に突き出すものは、現に西山光照寺の大型石仏群に多く見られる通りであり、概して大型のものに用いられるようである。

挿図31には供養板碑を示した。中央上部の如来坐像を中心にして、「三界万靈六身眷属等」や一族と見られる法名が並ぶ（朝倉氏遺跡調査研究所編1976、同資料館編1998）。文字には金箔が貼られていたらしく、その痕跡が確認される。

表4 遺物観察表

*法量は基本的に陶磁器の口径、器高を示したが、適宜、胴部最大径や底径値を加えた。陶磁器以外の資料については、それぞれの寸法を示した。破片で計測不能のものは現存寸法を示した。

*胎土は色、砂粒の混入度合、肉眼観察上の粗密を記した。

*焼成はしっかり焼き上がっているかどうかを肉眼的に観察した。焼きまてずラザラしていたり、トロトロしているものをラザラした。

*色調、釉調は陶磁器を基本に外表面の色合いを観察した。素焼の土質土器については、胎土とほぼ色調が同じなので色調は示さなかった。また完品が破片か、断片的な破片かを区別して記した。

*備考では、その他の特徴について記した。

図号No	PL.No	遺物No	大 小 別	器 種	法量(口径×器高cm)	胎 土	焼 成	色 調(釉 調)	備 考	
第42図	PL.43	1	鉢前焼	大甕	————	緑灰色、磨密	良、堅焼	口縁から胴に自然反輪	断片	
		2	中甕	中甕	————	————	————	————	————	
		3	中甕	中甕	20.4X6.4	————	————	————	————	
		4	中甕	中甕	28.0X9.0	若干粒状含有、灰色	————	————	灰色、ナメ調整	————
		5	中甕	中甕	15.2X7.0	緑灰色、磨密	————	————	————	————
		6	中甕	中甕	25.6X9.4	褐色	あまり	褐色、使用痕少ない	————	断片、底面に丹柱状反輪、器目10
		7	土師質土器	甕(口縁)	6.5X2.0	————	良	————	————	完品
		8	中甕	甕(口縁)	6.7X1.8	人肌色	————	————	————	————
		9	中甕	甕(口縁)	9.2X2.0	————	————	————	————	半欠
		10	中甕	甕(口縁)	9.6X2.3	褐色	不良、生焼け	————	————	1/4欠
		11	中甕	甕(口縁)	9.5X2.2	人肌色	良	————	油痕多	完品
		12	中甕	甕(口縁)	9.4X2.0	————	————	————	————	————
		13	中甕	甕(口縁)	9.4X2.3	————	————	————	油痕多、傷ける	————
		14	中甕	甕(口縁)	11.2X2.5	褐色	不良、生焼け	全体傷ける	————	半欠
		15	中甕	甕(口縁)	10.4X2.0	暗褐色	————	クラック、油痕多	————	完品、D2種
第43図	PL.44	16	石製品	碧玉石	————	————	————	————	「一、器物・」断片	
		17	中京製陶磁器	青磁	大甕	高台径13.9X1.8	灰色、磨密	良	暗青緑色	断片
		18	瀬戸・美濃製陶磁器	鉄胎	大甕	底径4.1X3.1	人肌色	良	紅褐色、底面裏面切	断片
		19	タイ製陶磁器	甕	長径4.8X底径4.5	人肌色、黒色粒状含有	生焼け	褐色、内面褐色	内輪	断片
		20	鉢前焼	甕	長径5.0X底径4.7	灰色、磨密	良	赤褐色	内輪	断片
		21	石製品	碧玉石	長径16.0X底径16.0	灰色、磨密	堅焼	紫灰色	————	ヘラ形石、門鎖
		22	石製品	成石	幅3.5X奥行2.7X高6.7	————	————	————	————	一段欠
		23	中甕	バンドコ	甕	幅19.0X奥行16.5	褐色	————	灰白色、磨行裏	D型、一段欠
		24	鉢前焼	漆器	21.4X7.0	————	不良、生焼け	暗褐色	————	口縁断欠、器目10
		25	埴土焼	甕	17.0X底径6.5X高4	灰色、磨密	良	緑灰色、上至部細2文加飾でかせる	————	————
		26	土師質土器	甕(口縁)	9.7X2.3	————	————	————	油痕	D2種、半欠
		27	土師質土器	甕(口縁)	7.7X2.2	人肌色	————	————	油痕	布目痕、半欠
		28	中甕	甕(口縁)	7X1.2	灰白色	————	————	傷ける	断片
		29	中甕	甕(口縁)	7X1.5	人肌色	————	————	————	断片
		30	中甕	甕(口縁)	7X1.3	————	————	————	————	断片
31	中甕	甕(口縁)	高5.2X幅4.1X高1.5	————	————	————	————	一段欠		
32	中甕	甕(口縁)	6.7X2.3	————	————	————	————	完品		
33	中甕	甕(口縁)	7.5X2.2	くすんだ人肌色	————	————	油痕多い	完品		
34	中甕	甕(口縁)	9.3X2.0	くすんだ人肌色	————	————	油痕多い	完品		
第42図	PL.45	35	土師質土器	甕(口縁)	8.8X2.0	人肌色	不良、トロケル	円形穴ハジ、油痕多い	完品	
		36	中甕	甕(口縁)	10.7X2.5	————	————	やや分厚い作り、油痕多い	一段欠	
		37	中甕	甕(口縁)	10.2X2.3	————	良	円形穴ハジ、油痕多い	半欠	
		38	中甕	甕(口縁)	9.2X2.2	褐色	————	円形穴ハジ、油痕多い	完品	
		39	石製品	碧玉石	35.0X4.0	————	————	————	————	断片
		40	瀬戸・美濃製陶磁器	灰地	7X1.1X高台径6.0	人肌色、モグサ土	————	————	灰褐色、磨入、密花メタンプ	断片
		41	灰地	磨入	7X1.1X高台径5.0	————	————	————	灰褐色、磨入、密花メタンプ	断片
		42	鉄胎	磨入	7X本径11.8X2.9	————	————	————	茶褐色、磨入後焼	断片
		43	灰地	香伊	9.0X2.2	人肌色	————	————	灰褐色	底面片
		44	中京製陶磁器	白磁	7X1.3X高台径2.4	灰白色、磨密	————	————	灰白色	「実地半通」焼
		45	中甕	甕(口縁)	7X2.0X高台径2.5	————	————	————	灰白色、見込地の目焼きより	底面片
		46	中甕	甕(口縁)	7X1.7X高台径2.4	————	————	————	灰白色、見込地の目焼きより	底面片
		47	中甕	甕(口縁)	7X1.7X高台径11.4	灰色、磨密	————	————	灰色、見込にヘラ焼き風調整	断片
		48	中甕	甕(口縁)	9.3X2.2	————	————	————	灰色、磨入、内外表メタンプ	断片
		49	中甕	甕(口縁)	7X1.7X高台径4.7	灰褐色	良	————	灰褐色、内面調整、内面輪花	底面片、高台露伴
50	産地不明	水碓	20.0X11.0	灰色	不良、生焼け	————	緑灰色、内外面ナメ調整	一見鉢前焼の主視風、実地割文2種		

部品No.	PL No.	建物No.	大 別	小 別	部 種	数量 (口徑×高さmm)	塗 士	塗 成	色	調(輪 調)	備 考
第42図	PL_45	51	資材その他	青花白磁	輪	7×3.0×高さ4.8	陶灰色	真	陶灰色、外面青磁		
		52		白磁	小巻(線)	4.9×1.9	白色	真	白色、ツマミ青磁		近代
		53	石製品		柱	高さ8.8×幅3.5×0.9			灰色		磨理品、一部欠
		54		バンドコ	覆鉢	幅19.0×奥行15.2			内面覆付置		D形、一部欠
第43図	PL_45	55	扉前埃		覆鉢	31.4×11.2	人肌色	不真、生埃け	陶褐色、使用痕跡著		扉前、扉前D
		56			覆鉢	37.0×15.0	褐色	不真、生埃け	褐色、使用痕		扉前、扉前D
		57	扉戸・扉渡製陶器	緑釉	皿	11.1×3.3	灰色	真	黄色、高台裏側、2次加熱ゾラ付		平次
		58	中置製陶器	青磁	梅花皿	12.6×3.5	灰色、磨理		褐色、内面磨理、高台裏側縁まより		磨片
		59		白磁	覆鉢	5.8×3.5	灰色、磨理		灰色、裏入、口縁部D形		
		60			皿	11.3×2.7	灰色、磨理		灰色、高台裏側縁まより		
		61			皿	8.0×1.5	灰色、磨理		灰色、高台裏側縁まより		
		62	扉前埃		覆鉢	26.0×8.0	灰色		褐色、使用痕なし		扉前部目、扉前、磨目10
		63			鉢	24.8×6.0	陶灰色、磨理		内面陶褐色、外面赤褐色、口縁部磨理、覆付置		扉前穿孔、磨片
		64	土師質土器		皿 (C輪)	8.0×1.9	人肌色		人肌色、油痕なし		磨片
		65	中置製陶器	白磁	皿		灰色		灰色、高台裏側縁まより		
		66	扉前埃		皿	11.6×25.1×磨理幅25.0	灰色		口縁部から磨理に物、全体に陶褐色、内面陶褐色		口縁部打り欠き、ナゲ丁摩、ほげ完成
第42図	PL_46	67			皿	7×磨理幅26.2×26.4	灰黄色、磨理	真、磨理	内面陶褐色		中置陶器部
		68			覆鉢	43.4×7.2	人肌色	不真、生埃け	トロナル、使用痕跡著		扉前欠
第43図		69	扉前埃		巻	17.0×磨理幅42.0×43.2	灰白色、青石粒 吹き出し	真	灰褐色、口縁部から磨理に自然釉		2次加熱でかきている、内面一部に覆付置、磨理一部欠
		70	扉前埃		巻	19.0×磨理幅31.2×44.0	灰褐色、灰黄色、磨理均一6mm	やや不真	灰褐色、灰黄色、全面均目		磨理欠、裏に印花文
		71	中置製陶器	緑釉	香炉	10.4×5.6	真	真	2次加熱による青磁		三層
		72		緑釉	茶入	2.7×磨理幅1.1×6.5	褐色、磨理、磨理2-3mm	真	黄色		磨理に流線1本
		73	扉前埃	水漬	水漬	5.4×7.5×幅3.7×高さ4.4	灰色、磨理	真	赤褐色、一能光沢あり、くすんだ黒灰色		水漬1、裏下と真中に孔、流付丁摩、写実的
		74	扉前埃	小巻	小巻	8.7×10.8	灰色、磨理	真	灰黄色、口縁部ナゲ、磨理に磨理方向へ丸割り		受斗品?
		75	扉前埃	水漬	水漬	11.0×10.2	灰色、均一	やや不真	灰色、口縁下に2本の流線、磨理		内面ナゲ、磨理一部欠
		76	扉戸・扉渡製陶器	黄瀬戸	皿	12.0×2.8	灰色	真、全弁2次加熱、吹き出し	灰黄色、ズブげ、高台裏側トロン		平次
		77		緑釉	鉢	13.1×6.0	灰白色、磨理2-3mm	真、全面釉	覆付置、裏褐色、磨理		平次、磨理は青花白磁マントーシタイプに似る
		78	石製品	バンドコ	輪	幅29.4×奥行12.2×高さ12.0			内面一部磨		平次、D形、吹き流2.3×2.0
		79		バンドコ	皿	幅22.4×奥行16.0×高さ4.0			外面磨き仕上げ		一部欠、磨理付置
		80	扉前埃		皿	27.0×17.0	灰黄色、白色粒	真、磨理	陶灰色、無釉、ロウロ目、へら割り		内面欠ハジ多し、磨片
		81	扉前埃		皿	9.2×12.0					へら割り
第44図	PL_47	82			巻		人肌色、砂粒含む	不真、磨理生埃け	灰褐色、内面にタール付置		磨片
		83			覆鉢	43.0×13.0	褐色、砂粒目立つ	真、磨理	褐色、磨理		使用痕、磨片、磨目11
		84			皿	7.8×6.0×高さ14.0	灰色、磨理	真	褐色、磨理磨理		磨目12、磨片
		85			覆鉢	33.0×10.8	人肌色、砂粒	生埃け	褐色		使用痕跡著、磨目12、磨片
		86			皿	32.0×10.2	人肌色、白色粒目立つ	生埃け	陶褐色		使用痕跡著、磨目9、磨片
		87			鉢	20.0×5.6	灰黄色、均一	真、磨理	灰黄色、無釉、内面覆付置		磨片
		88			皿	16.8×磨理幅19.4×5.4	灰色、磨理、一部はチヨコレート色	真、磨理	陶灰色、水かけ付置		内外面ナゲ磨理、磨理以下磨理方向へ丸割り、磨片
		89			覆鉢	41.0×16.8	褐色、白色粒	真、磨理	褐色、磨目9		使用痕跡著、平次、扉前一部欠
		90			皿	36.0×11.0	灰褐色、均一	真、磨理	陶褐色、ナゲ磨理、口縁部自然釉		使用痕、磨目13、磨片、磨理に井桁状痕
		91			皿	7.8×11.2×高さ17.4	灰色、白色粒	真、磨理	内面陶褐色、外面灰黄色、使用痕		磨目9、平次、白磁磨文
		92			鉢	30.6×磨理幅32.0×14.2	灰色、均一	真、磨理	黄褐色、内面に自然釉、水ハジ		へたナゲ、平次、磨理欠
		93			皿	10.2×磨理幅19.0×22.8	灰黄色、磨理	真	黄褐色、裏に自然釉		磨理に磨理方向へ丸割り、扉前裏側磨目、平次
	PL_48	94	土師質土器		皿 (A輪?)	6.2×1.4	人肌色	真	油痕なし		完成、の字ナゲ、口縁部生埃
		95			皿 (C輪)	6.2×1.6			油痕あり		完成、の字ナゲ
		96			皿 (C輪)	6.3×1.7			油痕なし		完成、の字ナゲ
		97			皿 (C輪)	7.0×1.8			陶灰色、油痕、油かけ多量に付置		完成
		98			皿 (C輪)	6.6×1.7					
		99			皿 (B輪)	7.0×1.7	灰色		灰黄色、内外面覆付置、見込みに磨のこぎ、覆付置		
		100			皿 (B輪)	7.4×1.8	褐色		褐色、油痕あり、毛付置		
		101			皿 (B輪)	7.5×2.0	人肌色		油痕あり、水目痕、一部灰黄色		
		102			皿 (B輪)	7.8×2.0	人肌色		油痕あり、毛目痕、口縁部に流シ、磨ナゲ磨理		

図面No.	PLNo.	建物No.	大 別	小 別	部 種	油量(口径×高さcm)	給 水	給 圧	色	備 考(注 記)	備 考
第44図	PL 49	103	土間貫土層		皿(口)	8.4×1.7	人尿色	良	油痕なし、見込み中央に油かす付着		円形割離、口縁部戻り、完成
"	"	104	"		皿(口)	8.6×1.9	人尿色	良	油痕多い、見込み中央に油かす付着		完成
"	"	105	"		皿(口)	8.7×2.0	灰色	良	円形割離		ナテ割離、完成
"	"	106	"		皿(口)	8.6×1.8	灰色	良	油痕多い、ターム状付着		円形部戻り、完成
"	"	107	"		皿(口)	8.8×2.2	人尿色	良	油痕多い、円形割離		口縁部周辺キズあり、完成
"	"	108	"		皿(口)	9.0×2.0	人尿色	良	油痕なし		ナテ割離、ほぼ完成、一部欠
"	"	109	"		皿(口)	8.5×1.7	灰色	良	油痕、円形割離		円形部戻り、完成
"	"	110	"		皿(口)	8.6×1.8	人尿色	良	見込み、油かす多い、円形割離		見込みナテ割離、完成
"	"	111	"		皿(口)	9.0×2.0	人尿色	良	油痕なし		口縁部一部欠、の字ナテ割離、完成
"	"	112	"		皿(口)	9.0×1.8	人尿色	良	油痕なし		見込みナテ付着、油か、完成
"	"	113	"		皿(口)	8.6×1.8	人尿色	良	油痕		見込みナテ割離、の字ナテ、完成
"	"	114	"		皿(口)	9.0×2.0	灰色	良	油痕		口縁部戻り、完成
"	"	115	"		皿(口)	9.0×2.0	灰色	良	油痕、円形割離		口縁部戻り、完成
"	"	116	"		皿(口)	9.1×2.0	灰色	良	油痕多い、円形割離		完成
"	"	117	"		皿(口)	8.7×1.8	褐色	良	油痕、油かす多い		完成
"	"	118	"		皿(口)	9.0×1.9	褐色	良	油痕		円形部戻り、口縁部ナテ割離、完成
"	"	119	"		皿(口)	8.6×1.8	人尿色、砂粒含む	良	油痕、油かす付着		円形割離、直部外面にターム状付着、油か、完成、CG 種
"	"	120	"		皿(口)	9.2×2.0	灰褐色	良	油痕多い、円形割離		の字ナテ割離、完成
"	"	121	"		皿(口)	9.2×2.1	人尿色	良	油痕なし、円形割離		見込みニ割離(油か)付着、完成
"	"	122	"		皿(口)	8.5×2.0	人尿色	良	油痕		口縁部戻り、完成
"	"	123	"		皿(口)	8.5×2.0	灰色	良	油痕、油かす付着		の字ナテ割離、完成
"	"	124	"		皿(口)	8.9×2.1	灰色	良	油痕なし		完成
"	"	125	"		皿(口)	8.8×2.0	灰色	良	油痕なし		見込みニ油かす、完成
"	"	126	"		皿(口)	9.1×2.0	褐色	良	油痕、油かす多い		見込みニ付着、口縁部一部欠
"	"	127	"		皿(口)	10.2×2.1	人尿色	良	油痕なし		見込みニ付着、完成
"	"	128	"		皿(口)	9.0×2.1	褐色	良	油痕多い		の字ナテ割離、口縁部戻り、完成
"	"	129	"		皿(口)	13.3×2.1	褐色	良	油痕なし		ナテ割離、半等出か、完成
"	"	130	"		皿(口)	12.7×1.8	褐色	不良	油痕なし		ヒレ割離、取付口周辺汚染、ナテ割離、完成
—	神宮24	131	"		枠? 楕円	楕円6X縦2.5	人尿色	良	—		草花の樹立文、断片
第45図	PL 47	132	雑戸・兼運動施設	鉄軸	輪	12.6×5.6	人尿色、モグサ土	良	茶褐色油膜、光沢あり		口クロ目、膠着状態、裏面欠
"	"	133	"	鉄軸	輪	11.8×6.2	人尿色、モグサ土	良	茶褐色、茶目油、沢沢あり		ベタ高台、膠着状態、半欠
"	"	134	"	鉄軸	輪	12.0×6.3	人尿色、モグサ土	良	くすくす汚染		縁部戻り出し、縁部割離、完成、集合異輪トタン、半欠
"	"	135	"	鉄軸	輪	11.3×2.2	灰色、密着膜	良	反緑色、黒人多い、ズブガ付		縁部合回り出し、見込み割離、一部欠集合異輪トタン
"	PL 49	136	雑戸・兼運動施設	鉄軸	輪	12.0×3.4	人尿色、モグサ土	良	鉄錆色、輪ちみ		膠着状態、裏面欠
"	"	137	"	鉄軸	輪	12.2×3.4	人尿色、モグサ土	良	茶褐色油膜、沢沢あり		膠着状態、裏面劣化縁、裏面欠
"	"	138	雑戸・兼運動施設	鉄軸	輪	12.2×5.8	人尿色、モグサ土	良	茶褐色油膜、沢沢あり、ザラつく		膠着状態、輪合回り出し、裏面片
"	"	139	"	鉄軸	輪	11.8×6.0	人尿色、モグサ土	良	鉄錆色、沢沢あり		膠着状態、ベタ高台、断片
"	"	140	"	鉄軸	輪	9.2×3.0	灰色、密着膜	良	鉄錆、光沢なし、輪溝れ		膠着状態、断片
"	"	141	"	鉄軸	輪	11.8×4.8	人尿色、モグサ土	良	鉄錆、沢沢あり		膠着状態、断片
"	"	142	"	鉄軸	輪	8.0×2.8	褐色	良	茶褐色油膜、沢沢あり		鉄錆油膜、断片
"	"	143	"	鉄軸	輪	9.6×3.6	褐色、密着膜	良	茶褐色油膜		つくり違い、裏面割離、断片
"	"	144	"	鉄軸	輪	長さ5.0X直径4.4	人尿色、モグサ土	良	茶褐色油膜		ベタ高台、膠着状態、円筒
"	"	145	"	鉄軸	輪	4.6×4.6	人尿色、モグサ土	良	茶褐色油膜		膠着状態、ベタ高台、トタンまき、円筒
"	"	146	"	鉄軸	輪	7.2×3.0集合径5.0	褐色、密着膜	良	鉄錆色、両面ザラつき		膠着状態、輪合回り出し、裏面片
"	"	147	"	鉄軸	輪	7.1×1.6集合径4.4	人尿色、密着膜	良	茶褐色油膜、輪合回り出し、裏面片		茶褐色油膜、輪合回り出し、裏面片
"	"	148	"	小鉄	輪	3.6X鋼線径8.0X4.8	灰色、モグサ土	良	灰色、表面ザラつき、輪はげ		つくり違い、裏面欠、半欠
"	"	149	"	鉄軸	輪	8.2×5.6	人尿色、灰色、モグサ土	良	茶褐色油膜、一部欠ハジ、光沢あり		付着量、断片
"	"	150	"	鉄軸	輪	10.6×2.6	人尿色、モグサ土	良	鉄錆色、沢沢あり		つくり違い、断片
"	"	151	"	鉄軸	輪	11.4×2.2	人尿色、モグサ土	良	反緑色、沢沢あり		つくり違い、小さな高台、異輪トタン、黒人あり、見込み厚花トタン付、半欠
"	"	152	"	鉄軸	輪	5.6×2.0	人尿色、モグサ土	良	反緑色、沢沢あり		つくり違い、裏面欠、断片
"	"	153	"	鉄軸	輪	7.2×1.0集合径6.4	灰色、モグサ土	良	反緑色、沢沢あり		接合部あり、高台異輪トタン、断片
"	"	154	"	鉄軸	輪	5.8×1.8	灰色、モグサ土	良	反緑色、沢沢あり		小さな高台、集合部
"	"	155	"	鉄軸	輪	9.0×2.2	灰色、モグサ土	良	反緑色、沢沢あり		小さな高台、高台異輪トタン、半欠
"	"	156	"	小鉄	輪	4.2×3.2	反緑色、モグサ土	良	反黒色、沢沢あり、輪ハジ、内面割離		両方、裏面劣化の端、完成
"	"	157	"	鉄軸	輪	5.0×1.1	反緑色、モグサ土	良	反緑色、沢沢あり		小さな高台、裏面欠、縁部合回り、一部欠
"	"	158	"	鉄軸	輪	5.6×1.3	人尿色、モグサ土	良	反緑色、沢沢あり		裏面劣化ナテ、完成
"	"	159	土間貫土層		皿(口)	長さ4.0X直径3.6	灰色	良	油痕なし		口縁部戻り、裏面穿孔、断片

原価No	PL No.	通称No.	大 別	小 別	部 種	寸法(口径×長さcm)	組 立	焼 成	色	調(輪 調)	備 考	
第45号	PL 49	160	土師製土器		土鉢	幅12×高さ3.4	灰褐色	真	真		真10、完品	
		161	中国製陶磁器	青花白磁	皿	11.6×2.8	灰色、磨密	真	光沢あり、ヒビ割れ		高台蓋附、磨密底タイプ、断面マントンタイプ、「直産直製」鉢、半欠	
		162			鉢	11.6×6.5	灰白色、磨密	真	光沢あり、一部傷付量			
		163	朝鮮製陶磁器		鉢	7×1.5×底径6.4	灰褐色、砂粒含む	真	灰色、褐色		2次加熱タイプ多い、直産直製	
		164	石製品		礎石	高さ4.3×幅0.6×長さ1.4	—	—	—		4面が丸面、一面欠	
		165				長さ2.4×幅2.2×高さ10.2	—	—	—		4面が丸面、縁が直(右側)、直産	
		166				高さ3.6×幅2.2×長さ7.5	—	—	—		1面が丸面、側面のこぼり目、直産	
第46号	PL 49	167	朝鮮焼		蓋	—	灰褐色、砂粒含む	真、堅硬	真に自然釉		口縁部片	
		168			—	—	灰褐色、砂粒含む	真、堅硬	真に自然釉		口縁部片	
		169			—	—	灰褐色、砂粒含む	真、堅硬	真に自然釉		口縁部片	
		170			—	—	灰褐色、砂粒含む	生焼け	内面灰色、外面褐色		口縁部片	
		171			内蓋	高さ4.0×幅4.0×長さ1.0	灰色	真	表面自然釉、内面褐色		断面片	
		172	朝鮮焼		蓋鉢	—	人肌色	生焼け	褐色		断面片	
		173			—	—	人肌色	生焼け	褐色		断面片	
		174			—	—	灰色、砂粒含む	真、堅硬	灰褐色		使用痕、断面12、口縁部欠ける、断面	
		175			—	—	灰褐色、砂粒含む	真、堅硬	褐色		使用痕、断面9、断面	
		176			—	—	人肌色	生焼け	褐色		断面10、断面	
		177	朝鮮焼		鉢	—	灰色、白色粒目立つ	—	褐色		口縁部にヘラ傷付量	
		178			—	—	灰色	真	紫褐色、内面自然釉		断面	
		179			—	—	灰色、密度疎	生焼け	灰褐色		断面	
		180			—	—	灰褐色、磨密	真	褐色、水あかり量		真にヘラ取等、断面	
		181			蓋鉢	29.4×11.0	人肌色	生焼け	褐色		直産直製にヘラ取等付量、半欠	
	PL 50	182			—	—	人肌色、磨い	生焼け	灰褐色、僅け量		直産直製、口縁部打ち欠る、2次直産、直産時焼、断面10	
		183			—	—	褐色、砂粒少量	真	褐色、内面自然釉		使用痕、断面2単位、半欠	
		184			—	—	灰褐色、磨い	生焼け、直産	灰褐色		使用痕跡等、断面9、直産時焼、半欠	
		185			—	—	灰褐色	真、堅硬	灰褐色		使用痕なし、断面13、断面	
		186	土師製土器		土蓋	9.0×底径11.6×7.0	人肌色、砂粒少量	真	素焼		断面欠なし、け完品	
	PL 50	187			(D)類	7.0×1.4	褐色	真	素焼		断面状江崎、油痕なし、完品	
		188			(C)類	6.4×1.7	人肌色	真	素焼		油痕なし、水アかり量、完品	
		189			(C)類	5.5×1.8	人肌色	真	素焼		油痕多い、口縁部欠り、完品	
		190			(B)類	6.6×1.7	人肌色	真	素焼		油痕なし、有目寸す、完品	
		191			(B)類	7.1×1.6	人肌色	真	素焼		断面平仕上げ、有目寸す、完品	
		192			(B)類	6.7×1.4	人肌色、部分褐色	真	素焼		見込み悪い、丸皿風、内面ナツ、完品	
		193			(B)類	8.3×2.0	人肌色	真	素焼		油痕あり、有目寸す、完品	
		194			(B)類	7.8×1.7	人肌色	真	素焼		油痕なし、有目寸す、完品	
		195			(C)類	9.2×1.9	人肌色	不真、焼きムラ	真	素焼		油痕あり、口縁部欠り、完品
		196			(C)類	8.8×2.4	褐色	真	素焼		油痕なし、ややトロケル	
		197			(C)類	8.0×2.1	褐色	真	素焼		油痕あり、ややトロケル	
		198			(C)類	8.9×1.9	人肌色	真	素焼		油痕多い、口縁部欠り、見込みに水アか、円形割断、完品	
		199			(C)類	9.1×2.1	人肌色	真	素焼		油痕なし、ややトロケル	
		200			(D)類	10.5×2.4	褐色	真	素焼		油痕多い、ヤマトケル	
		201			(D)類	11.0×2.3	人肌色、部分褐色	不真、焼きムラ	真	素焼		油痕あり、ヤマトケル
		202			(C)類	8.6×1.9	人肌色	真	素焼		油痕あり、ほぼ完品	
		203			(B)類	7.0×1.7	人肌色	真	素焼		油痕あり、有目痕あり、完品	
		204	中国製陶磁器	青磁	蓋	5.6×底径11.5×12.3	灰白色	真	灰緑色、釉流れ、灰沢あり		口縁部片	
		205	瀬戸・美濃製陶器	灰釉	皿	9.2×2.4	人肌色、磨い	真	灰青緑色、細かい貫入		小さい底面、真に輪トチン、見込みにカタバシ、スタンプ、ほぼ完品	
		206	中国製陶磁器	青磁	蓋型焼	7.4×5.3	灰色、却一	真	暗青緑色、灰沢あり、高台蓋附、使用痕なし		半欠	
		207	瀬戸・美濃製陶器	鉄釉	鉢	10.5×2.5	人肌色、モザナ土	真	紫褐色(鉄釉)、灰沢あり		断面、見込み自然、高台蓋附トチン、高台蓋製成	
		208			鉄釉	11.0×3.7	灰褐色、密度疎	真	紫褐色、釉流れ、高台蓋附		真に自然釉、断面片	
		209			灰釉	7×1.4×底径6.6	人肌色、モザナ土	真	灰緑色		見込みに菊花スタンプ、小さな高台、高台蓋附トチン、断面片	
		210				7×1.1×底径6.5	人肌色、モザナ土	真	灰緑色		見込みに菊花スタンプ、小さな高台、高台蓋附トチン、断面片	
		211				11.0×2.6	人肌色、モザナ土	真	灰緑色		真に自然釉、断面片、紫磁	
		212				9.6×2.4	人肌色、モザナ土	真	灰褐色		真に自然釉、断面片	
		213			小鉢	7×2.3×底径3.4	灰褐色	真	灰褐色、磨密		断面欠切等、内面口縁口目、断面片	

図番No.	PL No.	建物No.	大 別	小 別	部 種	法量(口徑×高さcm)	材 士	施 工	色	備 註(調 子)	備 考		
第46図	PL 50	214	中国製陶磁器	白磁	皿	11.2×3.0	灰色、青磁緑	良	灰色、光沢あり、全面釉	底面片			
		215				7.×1.8×底面径6.6	灰白色、青磁緑	良	灰白色、光沢あり、全面釉、裏付難物	裏面片			
第47図	PL 51	216	鉢形鉢	鉢	鉢	14.5×胴径深34.7×高さ23.2	灰白色、青磁緑	良	口縁から胴部に自然釉、2次加飾少し	ほぼ完成品			
		218				42.0×15.8	灰白色、青磁	良	内外面とも灰色、表面ツラツキ、外面保存釉	裏目3、ほぼ完成品、一部欠			
—	PL 52	219	—	—	—	24.0×7.5	褐色、磨面	良	灰褐色、横溝み	底面研削、使用痕なし、磨面ツラツキ、見込みの磨面ヘア記号無し			
		220				15.2×6.2	灰白色、磨面	良	裏面、磨面、内面自然釉、2次加飾ハシ	底面研削、内面ヘアあり、ほぼ完成品			
		221				12.0×10.4?	灰白色、磨面	良	裏面、磨面、内面自然釉、2次加飾ハシ	口縁部片			
		222				—	人肌色、砂粒含む	不良、生焼け	内面灰褐色、外面人肌色	口縁部片			
		223				—	灰白色	不良、生焼け	灰褐色、磨面ツラツキ	口縁部片			
		224				—	灰白色、白色粒多い	不良	灰褐色、磨面ツラツキ	口縁部片			
		225				—	灰白色	不良	灰褐色、磨面ツラツキ	裏面片			
		226				—	黒	23.8×4.8	褐色	不良		赤褐色、褐色、内面に自然釉	裏目3、裏面研削、磨面
		227				—	青緑	30.0×6.2	褐色	不良		灰褐色、灰色	使用痕、裏形磨面2粒、磨面
		228				—	青緑	—	褐色、砂粒含む	不良、生焼け		灰褐色	裏目10、口縁部片
		229				—	青緑	19.2×6.8	人肌色、砂粒含む	不良、生焼け		赤褐色	使用痕なし、内面にツラツキ、口縁部片
		230				—	産地不明	22.4×3.2	人肌色、白色粒含む	不良、生焼け		灰褐色、磨面ツラツキ	裏面ツラツキ、口縁部片、裏面研削
		231				土師質土器	皿 (A類)	6.4×1.4	人肌色	良		油痕あり	内面自然釉、完成品
		232				—	(B類)	6.9×1.6	人肌色	良		油痕あり	内面自然釉、完成品
		233				—	(C類)	6.7×1.9	くすんだ人肌色	良		油痕なし	内面自然釉、内面研削、一部欠
		234				—	(C類)	8.7×2.0	くすんだ人肌色	良		油痕多い	口縁部ツラツキ、内面研削、完成品
		235				—	(C類)	9.1×2.2	人肌色	良		油痕あり	油けす多量に付着、の字ナナ切、一部欠
		236				—	(C類)	7.6×2.0	人肌色	良		油痕なし	水あけ付着、完成品
		237				—	(C類)	9.2×2.3	人肌色	良		油痕多い	の字ナナ切、完成品
		238				—	(C類)	9.1×2.2	人肌色	良		油痕多い	口縁部ツラツキ、完成品
239	—	(D類)	10.5×2.2	人肌色	良	油痕あり	口縁部あり、内面研削、完成品						
240	土師質土器	土釜	10.7×胴径深14.7×7.8	人肌色	良	表裏下部厚多量付着	磨面ア、平次						
241	陶片・青磁陶磁器	鉢	9.0×4.5	灰褐色、モグサ色	良	裏面釉、光沢あり、横ハケ、裏面発色	2次加飾表面させる						
第48図	PL 52	243	中国製陶磁器	青磁	鉢	12.8×6.4	灰白色、磨面	良	灰褐色、光沢あり、横付難	磨面ツラツキ、裏面ツラツキ、見込みにスタンプ、平次			
		244				9.5×2.0	灰白色、青磁緑	良	灰白色、光沢あり	高台磨面砂目録、サクラ高台、磨面片			
		245				11.2×2.2	灰白色、青磁緑	良	灰白色、光沢あり	口縁部片			
		246				13.5?×2.3?	灰白色	良	灰白色、ツラツキ、裏付難物	裏面片			
		247				15.8×3.7	灰白色	良	灰白色、光沢あり、横付難、裏付難物	3/4、一部欠			
		248				15.4×3.8	灰白色	良	くすんだ灰褐色、2次加飾少しかせる	ほぼ完成品、一部欠			
		249				8.5×2.0	灰白色	良	裏面発色良	見込み横溝、平次			
		250				8.7×2.0	灰白色	良	裏面発色良、2次加飾表面ツラツキ、横付難	ほぼ完成品、一部欠			
		251				9.5×2.3	灰白色	良	裏面発色良、2次加飾表面ツラツキ	平次			
		252				12.2×2.6	灰褐色	良	裏面ツラツキ、2次加飾表面ツラツキ	一部欠			
		253				13.3×5.3	灰白色、青磁緑	良	横付難(一部)	見込み横溝、裏付難目録、一部欠			
		254				土師質土器	耳瓶	長径5.0×胴径3.8	人肌色	良		裏面ツラツキ、完成品なし	平次、水方付着
		255				—	(D類)	高径1.6×胴径0.7	人肌色	不良、あまい		薄いつくり、油痕なし	1/4残
		第47図				PL 53	256	裏内製品	響子	響子		長径1.6×胴径1.6	—
257	長径2.0×胴径1.6		—	—	白色		平次、小倉重?						
258	長径2.0×胴径1.8		—	—	白色、光沢あり		厚4mm、裏面に横溝、一部欠、穿孔						
259	長径2.0×胴径0.8		—	—	くすんだ灰褐色		厚3mm、平次、穿孔						
260	—		—	—	—		中国産品						
第48図	PL 54	260	産地不明	磨面四耳尊	尊	12.2×39.1×底面径15.3	—	—	—	—			
		261				文鉢	37.0×14.0	—	—	—		—	
		262				パンドコ	幅28.0×奥行20.4×高さ16.6	人肌色	不良、あまい	—		—	
		264				パンドコ	幅14.2×奥行12.8×高さ3.2	—	—	—		—	
—	—	265	産地不明	—	—	幅16.8×奥行13.0×高さ3.2	—	—	—	—			
		266				幅20.0×奥行18.0×高さ4.4	—	—	—	—			
		267				幅20.0×奥行18.0×高さ3.0	—	—	—	—			
		268				幅20.0×奥行18.0×高さ3.0	—	—	—	—			
図番No.	PL No.	建物No.	大 別	小 別	部 種	法量(口徑×高さcm)	グリット	層 位	材質・形状	備 考			
							—	—	外庄による磨面、縁ど削れ	ほぼ完成品			
第52図	268	真鍮製	輪花皿	—	—	7.1×2.1	—	外庄による磨面、ヒド削れ	外表面に磨、五分、中央に打孔、完成品				
—	269	—	小鉢・鍋	—	—	長6.5×幅1.4×高さ0.15	—	仕上げ磨き、刃部縁け直し	健全				
—	270	—	取り金具	—	—	全長7.2×幅1.1×高さ0.02?	JS51	褐色土中	陶器打孔				

図面No.	PL No.	建物No.	大 別	小 別	部 種	法量 (口徑×長さcm)	グリット	層 位	材質・形状	備 考
第51図	PL 54	271	鋼製品	鉄道金具	取止金具	全長8.3×幅2.4×厚0.1	—	鋼製区一括	鋼製区一括	清浄度良好、完成
—	—	272	鋼製品	鐵道金具	取止	全長4.8	JC51	鋼製区一括	鋼製区一括	鋼製区一括
—	—	273	鋼製品	刀鎖具	小柄ノ鎖	全長9.6×幅1.4×厚0.3	—	鋼製区一括	刀鎖掛け用	—
—	—	274	金製品	刀鎖具	鎖	幅4.2×幅1.7×厚0.1	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	275	鋼製品	平野金具	平野	幅1.4 幅0.5	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	276	真鍮製	鐵道金具	鎖止金具	全長4.0 幅0.6	—	鋼製区一括	両面に締通し孔	—
—	—	277	—	刀鎖具	鎖止金具	全長4×幅1.85×厚0.3	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	278	真鍮製	—	打鎖し7	幅3.3 打孔径0.8	JC51	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	279	鋼製品	鐵道金具	鎖止金具	幅3.9 厚0.2	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	280	—	鐵道金具	鎖止金具	幅3.0×幅2.0×厚0.1	J147	ステンレス鋼	窓枠取動金具 (5枚)、中央に打孔	—
—	—	281	鋼製品	鐵道金具	取止	幅0.8	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	282	—	鐵道金具	取止	幅0.8	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	283	鋼製品	鐵道金具	鎖止金具	幅3.05×幅0.7	JD59	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	284	真鍮製	鐵道金具	鎖止	幅4.2×幅1.2×高さ0.2	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	285	—	鐵道金具	鎖止	幅0.8	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	286	—	鐵道金具	鎖止	幅0.8	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	287	—	—	鎖	幅7.8 鎖部幅0.9	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	288	—	—	鎖	幅7.6 鎖部幅0.8	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	289	—	—	鎖	幅5.5 鎖部幅0.8	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	290	—	—	鎖	幅4.0 鎖部幅0.5	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	291	—	—	鎖	幅4.7 鎖部幅0.8	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	292	—	—	鎖	全長7.8 長さ9.7	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	293	—	—	鎖	幅6.2×幅0.6	JH54	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	294	—	—	火塞	幅20.0 太8.5	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	295	—	—	火塞	幅21.3 太8.0	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	296	—	—	火塞	幅15.5 太8.3	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
第49図	PL 55	297	鉄板	壁	鉄板	18.0×21.4	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	298	—	—	鉄板	15.0×6.5	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	299	—	—	鉄板	24.0×11.4	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	300	—	—	鉄板	18.0×5.0	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	301	—	—	鉄板	7×10.7×厚部厚14.0	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	302	—	—	鉄板	34.2×11.4	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	303	土質異土層	土 (0層)	土	6.7×1.5	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	304	—	—	土	6.5×1.7	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	305	—	—	土	7.1×1.7	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	306	—	—	土	7.7×2.2	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	307	—	—	土	7.4×2.0	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
図面No.	PL No.	建物No.	大 別	小 別	部 種	法量 (口徑×長さcm)	材 質	層 位	色 調 (備考)	備 考
第49図	PL 55	308	土質異土層	土 (G層)	土	8.4×2.2	灰色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	309	—	—	土	8.8×2.2	褐色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	310	—	—	土	9.0×2.2	褐色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	311	扉・美濃製陶器	鉄板	扉	11.7×6.3	人肌色、モグサ土	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	312	—	鉄板	扉	7×1.4×高さ白銀5	人肌色、モグサ土	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	313	—	—	扉	9.4×2.5	人肌色、モグサ土	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	314	—	鉄板	扉	7×1.2×高さ銀3.9	灰色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	315	—	白磁	扉	11.2×2.9	灰白色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	316	—	—	扉	15.0×3.3	灰白色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	317	崖地不明	崖	崖	7×2.2×高さ銀9.8	青味がかった灰色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	318	中国製陶磁	白磁	扉	7×1.2×高さ白銀19.9	灰白色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	319	—	—	扉	7×1.5×高さ白銀7.8	白色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	320	—	—	扉	12.0×3.0	灰白色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	321	—	—	扉	7×1.3×高さ白銀10.9	灰色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	322	—	—	扉	7×1.7×高さ白銀16.2	灰色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	323	—	—	扉	12.0×2.5	灰色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	324	鉄板	扉	扉	—	灰褐色、白色粒	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	325	鉄板	扉	扉	—	灰褐色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	326	鋼製品	扉	扉	幅10.8×高さ33.3×幅2.2	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	327	石製品	扉	扉	33.0×6.4	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	328	中国製陶磁	白磁	扉	11.2×4.7	灰色、青灰色	鋼製区一括	鋼製区一括	—
—	—	329	崖地不明	崖	崖	17.2×5.2	—	鋼製区一括	鋼製区一括	—

図例No.	PL No.	建物No.	大 別	小 別	部 種	造 量 (口徑×長さcm)	物 土	物 成	色 質 (調 剤)	備 考
第50回	PL 58	330	織物機		機	6.0X鋼線径11.8X7.8	青味がかった灰色、黄緑	良、堅固	赤褐色、内面鉄屑付着	裏面欠、平次、お前裏面
		331			小機	7X鋼線径7.8X6.5	灰色、黄緑		黄褐色、裏に自然物	口縁部ヘラ割り及線粒、口縁部欠
		332			附属	19.4X2.0	灰色		灰色	口縁部子ナラ、黄斑、裏面裏板目張、裏目?
		333			機	裏板6.0X鋼線6.4X厚1.3	灰色		褐色	褐色、裏目張りヘラ割り
		334			車組	径10.4X厚3.8	白色粒	・堅固	灰色、緑地使用痕、一部自然物	平次
	PL 57	335			機	13.4X鋼線径20.6X13.0	人肌色、灰濁	不発、生焼け?	灰以下、水アカ付着、[]ヘラ割り、沈積物	
		336			機	42.0X14.8	灰褐色、白粉粒多い	良	灰色	使用痕、水アカ、鉄以下ヘラ割り、磨11、磨片
		337			機	22.4X5.9	灰色、好気食		褐色	褐色、外周子ナ、磨片
		338			鉄	15.4X5.4	灰色、黄斑、白色粒		灰色	裏面裏板目張、平次
		339			機	16.0X鋼線径17.8X7.0	青味がかった灰色		灰褐色、褐色	内外面丁字ナセテ、裏面裏板目張、平次
		340	産地不明			20.6X17.4	灰色、黄斑	・、緑色夏み、リゾム	黒褐色、磨粒状付着2段、ターム状付着	水垢、口縁部に自然物
	PL 56	341	土器黄土器		皿 (白磁)	5.7X1.1	くすんだ人肌色		土の付着、造痕、白目、磨粒状付着、完品	内外面鉄屑付着
		342				6.5X1.6	くすんだ人肌色		内面磨粒付着、完品	
		343				6.7X2.3	人肌色		内面磨粒付着、内面水アカシミ、完品	
		344				7.2X1.9			内面磨粒付着、かかへ油シミ、完品	
		345				6.2X1.4 (C調)			油漬	の字ナラ不明、外周面鉄屑、完品
		346				長径5.7X短径3.6 (白磁)	灰色、人肌色		油漬	内外磨粒付着、灰状付着、平次
		347				7.3X1.9	人肌色		油漬	内面磨粒付着、完品
		348				9.1X2.0 (C調)	くすんだ人肌色		油漬	油かす、口縁部磨り、完品
		349				9.2X2.0	人肌色		油漬	油かす、水アカ、の字ナラ、完品
		350				9.1X2.2	くすんだ人肌色		油漬	灰以下に油かす、口縁部磨り、完品
		351				9.1X2.1			油漬	灰以下にターム付着、口縁部磨り取り戻つまみナラ、完品
		352				8.6X2.0	赤褐色		油漬	油かす付着、の字ナラ、完品
		353				8.8X2.5	くすんだ人肌色		油漬	口縁部磨り、の字ナラ不明、完品
		354				8.0X2.4			油漬	油かす付着、の字ナラ、完品
		355				8.7X2.0			油漬	油かす付着、の字ナラ、完品
第51回		356	瀬戸・美濃製陶器	鉄物	皿	12.4X6.9	人肌色、モブサ土		黄褐色、輪染、光沢あり、磨粒附着	ヘラ割り、平次
第50回		357				8.5X2.1			灰色、くすみ	高台裏面、小さな高台、平次
		358	中京製陶磁器	青磁	皿	9.4X3.0	青味がかった灰色		暗灰色、くすみ、高台裏面	黄文、平次
		359	瀬戸・美濃製陶器	鉄物	茶入	7X1.8X高台径5.5	人肌色、モブサ土		茶褐色、くすみ	内外面鉄屑、磨片
		360				10.7X2.8	灰色、黄斑		黒色、2次加熱でかせる、ザラツキ	磨片
		361				7X1.0X高台径6.0	赤褐色、モブサ土		黄味がかった灰褐色、かせる	磨片、集合用スタンプ
		362				7X1.0X高台径5.5	赤褐色、モブサ土		灰褐色、光沢あり、磨入	磨片、集合用スタンプ
		363				7X1.6X高台径5.4			灰褐色、光沢あり、くすみ、磨入	磨片、カタバミスタンプ
		364				12.5X2.6			灰褐色、光沢あり、磨入	磨片の集合用、青花スタンプ、高台裏面トナシ
		365				7X1.1X高台径6.6			灰褐色、光沢あり	磨片、青花スタンプ、高台裏面トナシ
		366							灰褐色、光沢あり	
		367				11.6X2.9			くすんだ灰色、かせる	・、内面青花状染
		368	中京製陶磁器	白磁	皿	11.6X2.5	灰色		灰白色、全面物、光沢あり	磨片
		369				16.0X3.1	灰色		くすんだ灰白色、光沢あり、黄斑物	
		370				12.0X2.7	灰色、黄斑		灰白色、全面物、光沢あり	
		371				12.2X3.1	灰白色		灰白色、全面物、光沢あり	
		372				11.3X2.9			灰白色、全面物、光沢あり	・、高台部磨粒
		373				7X2.3X高台径2.8			灰白色、全面物、光沢あり	・、磨粒附着
		374				13.3X2.7			灰白色、全面物、光沢あり	・、つり薄目、内型押し文
		375				11.6X2.9			灰白色、全面物、光沢あり	・、高台部磨粒
		376	中京製陶磁器	白磁		5.0X1.3	灰白色、黄斑		光沢あり	裏面欠、全子ナ
		377				7X2.0X高台径6.0			灰白色、光沢あり、磨粒付着	磨片、口縁部欠
		378				11.5X2.9	灰色		くすんだ灰白色、光沢あり	磨片、高台部磨粒
		379							暗灰色、くすみ	磨片、高台部磨粒付着
		380	瀬戸製陶磁器	鉄	鉢	16.2X5.9	茶色味をおびた灰色、炒り食		茶褐色	内面口ワリ目、口縁部磨り面、磨片、裏面アツカ
		381	中京製陶磁器	黄瓦白磁	片皿	18.8X3.8	灰白色、黄斑		灰褐色、光沢あり、裏面にしみナシ全面物	裏面鉄屑、磨片
		382	瀬戸製陶磁器	鉄	鉢	20.2X4.2	灰色、黄斑		灰褐色、外周面灰褐色	口縁部磨り面、口縁部片
		383	瀬戸・美濃製陶器	鉄物	皿	4.6X3.6	人肌色		茶褐色	磨片
		385	石製品	磨石	輪	6.0X長8.4X厚4.0			全面磨削	平次
第51回	PL 58	386	織物機		機	9.2X鋼線径23.0X15.4	灰色	良	茶褐色	口縁部打り文、裏面磨、裏部種ナラ、磨粒以下ヘラ割り、磨粒【裏面文?】
		387				11.5X14.0	灰色		茶褐色	全面ヘラ割り、磨粒小粒、(大)ヘラ割り、裏面磨、磨粒

図番No	PLNo	建物No	大別	小別	種	仕様	動土	構成	色	調(種調)	備考		
第51図	PL58	388	*		鉄柱	360X132	人肌色	不真、生焼け	反白色、内面付丹	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		389	*		鉄柱	—	反白色	—	真鍮板、口縁自然物	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		390	*		鉄柱	368X149	反白色、白色粒	—	反白色、表面セラツキ	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		391	*		鉄柱	7X52X底面径15.4	反白色	—	真鍮板、内面自然物、内面付丹	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		392	*		鉄柱	—	褐色	—	赤褐色、内面セラツキ、真鍮板	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		393	石製品	鈔手		欄	幅11.1X高さ9X厚4.0	反白色	—	水アガ、一部付丹	欄目8、真鍮板		
		394	鉄製機	鉄柱		鉄柱	7X54X底面径15.0	反白色	—	茶褐色、全面付丹	欄目8、真鍮板		
		395	*		鉄柱	431X19.1	反白色、人肌色	不真、生焼け	—	内面人肌色、外面反白色	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		396	*		鉄柱	148X6.8	人肌色	—	—	内面反白色、外面反白色	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		397	*		鉄柱	301X5.7	反白色	—	—	内面反白色、外面反白色	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
398	*		鉄柱	124X8.0	反白色、茶褐色	真	—	内面自然物	欄目8、真鍮板				
399	*		鉄柱	—	反白色、白色粒	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	欄目8、真鍮板				
第47図	PL58	400	中国製陶磁器	鉄物	欄	12.5X5.8	反白色、褐色	—	真鍮板、欄目8	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		401	瀬戸・美濃製陶磁器	鉄物	欄	12.8X7.0	人肌色	—	真鍮板、先スアリ	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		402	中国製陶磁器	白磁	皿	11.7X9.0	反白色	—	—	反白色、くすみ	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		403	中国製陶磁器	*	皿(研皿)	8.5X1.4	—	—	真鍮板、光沢あり	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		404	土師製土器	皿	耳皿	長径5.3X短径4.2X高1.5	—	—	—	下等土仕上げ、真鍮板	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		405	陶磁器	皿	耳皿	高1.8X口縁3.5	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		406	瀬戸・美濃製陶磁器	反物	巻	10.9X2.4	人肌色、モザク土	—	—	反白色、光沢あり、輪渡り	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		407	*		鉄物	巻	5.0X真鍮板6.8X4.5	—	—	鉄柱色、くすみ	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		408	*		鉄柱	巻	7X3.0X高さ2.0	—	—	鉄柱色、光沢あり	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		409	*		鉄柱	巻	16.6X4.6	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
PL59	410	瀬戸・美濃製陶磁器	反物	巻	11.1X2.4	人肌色、モザク土	—	—	反白色、光沢あり、輪渡り	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		中国製陶磁器	白磁	皿	7X2.3X高さ6.6	反白色	—	—	反白色、くすみ	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		土師製土器	皿	耳皿	8.5X1.6	人肌色	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		413	*		鉄柱	6.9X1.4	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		414	*		鉄柱	6.9X2.2	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		415	*		鉄柱	9.2X1.9	褐色	—	—	油染し、水アガ	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		416	*		鉄柱	6.3X2.0	くすみ人肌色	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		417	*		鉄柱	9.0X2.0	—	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		418	*		鉄柱	8.8X2.1	—	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		419	*		鉄柱	8.1X2.2	—	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
420	*		鉄柱	9.1X2.0	—	—	—	内外茶褐色、全面付丹	真鍮板、欄目8、口縁細欠				
第50図	421	鉄柱	鉄柱	鉄柱	9.3X2.1	人肌色	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		鉄柱	鉄柱	鉄柱	9.3X2.0	くすみ人肌色	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		423	鉄製機	鈔手	幅20.8X高さ6.1X厚0.2	—	—	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		424	*		鉄柱	幅19.0X高さ4.4X厚7.0	—	—	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠	
		425	石製品	巻	巻	36.6X14.9	—	—	—	—	油染し	真鍮板、欄目8、口縁細欠	
		426	瀬戸・美濃製陶磁器	鉄物	巻入	5.2X真鍮板9.0X2.0	人肌色、モザク土	真	—	反白色、表面セラツキ	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		427	真鍮板	鉄柱	鉄柱	上層径7.5X下径7.3X高3.5	—	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		428	*		鉄柱	上層径7.5X下径6.6X高3.5	—	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		429	鉄柱	鉄柱	鉄柱	7X5.6X底面径14.6	反白色	真	—	内面茶色、外面反白色、内面付丹	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		430	鉄柱	鉄柱	鉄柱	34.0X14.2	—	—	—	内面反白色、外面茶褐色	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
第52図	PL60	431	*		鉄柱	37.4X8.8	人肌色	不真、生焼け	内面反白色、外面反白色	真鍮板、欄目8、口縁細欠			
		432	*		鉄柱	31.0X9.0	褐色	—	—	内面褐色、外面反白色	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		433	*		鉄柱	33.8X8.8	人肌色	—	—	内面褐色、外面反白色	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		434	瀬戸・美濃製陶磁器	鉄物	巻入	6.0X真鍮板9.1X5.4	人肌色、モザク土	真	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		435	*		鉄物	高さ16.4X厚0.8	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		436	*		鉄物	7X1.0X高さ10.0	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		437	*		鉄物	7X1.1X高さ10.0	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		438	*		鉄物	10.9X2.0	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		439	*		鉄物	3.8X1.2	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
		440	中国製陶磁器	白磁	皿	6.7X1.8	反白色	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠		
441	*		白磁	長径7.5X短径5.5X厚1.9	—	—	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠				
442	*		白磁	7X0.9X高さ2.2	—	—	—	反白色、光沢あり、真鍮板の目黒域まで取	真鍮板、欄目8、口縁細欠				
443	*		白磁	7X2.2X高さ1.0	—	—	—	反白色、光沢あり、全面物、真鍮板	真鍮板、欄目8、口縁細欠				
444	中国製陶磁器	白磁	皿	13.5X3.4	—	—	—	反白色、光沢あり、全面物、真鍮板	真鍮板、欄目8、口縁細欠				
445	*		白磁	14.6X2.9	—	—	—	反白色、光沢あり	真鍮板、欄目8、口縁細欠				
446	土師製土器	皿	耳皿	7.0X2.0	人肌色	不真、焼ムラ	—	真鍮板、欄目8、口縁細欠	真鍮板、欄目8、口縁細欠				
447	*		皿	7.0X1.8	くすみ人肌色	真	—	内外茶褐色、付丹	真鍮板、欄目8、口縁細欠				

図号No.	PL No.	遺物No.	大 別	小 別	器 種	容量 (口径×器高)cm	胎 土	焼 成	色 調 (陶 質)	備 考
第52図	PL 60	448	瀬戸・美濃製陶器	磁物	茶入	7×7割厚底6.6×4.8	人肌色、モゾサ土	良	緑褐色、くすみ	断片、大断面
		449	*	*	灰物	7×1.4×高台径5.4	*	*	くすんだ灰緑色、断面以下黄緑	見込み目録、断片
		450	中国製陶磁器	白磁	皿	19.6×3.9	灰白色	*	灰白色、光沢あり、全面焼、骨付黄緑	高台身びら、砂目録、断片
		451	*	*	杯	7×1.9×高台径5.4	*	*	灰白色、くすみ、見込みは焼色、骨付黄緑	断片
		452	*	*	皿	---	---	---	灰白色、光沢あり、全面焼、骨付黄緑	断片
図号No.	PL No.	遺物No.	大 別	小 別	器 種	容量 (口径×器高)cm	出土グリップ	層 位	材質・採取地	備 考
	PL 61	453	漆器	碗	長10.8×2×高7.5	J059	J059	溝内	内内外黒・漆製陶磁、漆器	高台径5.87、平文
		454	*	*	---	長10.0×高5.2	---	---	三ツ雲文	平文
		455	*	*	---	長12.7×高4.0	---	---	内内外黒	野矢、赤い雲ばかり
		456	*	*	碗	口径8.0×高台径6.0	---	---	内内外黒、漆木文	---
		457	化粧道具	漆	横3.7×縦4.2×厚0.6?	---	---	---	---	断片
		458	*	*	漆	横5.0×縦3.5×厚0.7?	---	---	---	---
		459	漆製漆器	社村	全長10.5×幅2.0×厚19.0	---	---	---	---	平ノ貝6.0×5.0
		460	漆器	仏	全長30.3×太3.6	---	---	---	---	柄長13.3×太2.4(丸)、全身磨光している
		461	漆器	漆物(重)	横4.5×縦4.4×厚0.4	---	---	---	---	完成
		462	漆器	漆	横6.4×縦5.2×厚0.4	---	---	---	---	切羽孔幅0.8×縦2.6、一筋文
		463	漆器	紙製	横7.4×縦9.5×厚0.7?	---	---	---	---	断片
		464	漆製品	漆生	---	J056	J056	木製	---	一筋
図号No.	PL No.	遺物No.	大 別	小 別	器 種	容量 (口径×器高)cm	胎 土	焼 成	色 調 (陶 質)	備 考
第50図	第26	465	瀬戸・美濃製陶器	皿	9.5×2.4	人肌色、モゾサ土	良	良	灰褐色	完成
		466	*	*	---	11.9×2.0	*	*	*	平文
	第25	467	瓦葺土器	仏屋敷	---	---	---	---	くすんだ灰褐色、ザラツキ	上平文欠損
	第27	468	中国製陶磁器	青磁	青砂	7×7.8×厚底径10.2	灰色、均質	*	くすんだ灰褐色、光沢あり、貫入	1ノ3割
		469	*	*	---	---	---	---	緑褐色、光沢あり、底部黄緑	断片、底部に丸一様欠損
		470	*	*	---	7×厚底径8.2	灰褐色、黒粒流石	良、堅硬	緑褐色、光沢あり、内面下半部黄緑	断片
		471	*	*	---	7×5.6×高台径5.0	灰白色、やや緑	良	緑褐色、黒入、光沢あり、口縁黄緑、底部黄緑	1ノ3割、骨付少量
		472	*	*	---	---	---	---	緑褐色、底部内面黄緑、一筋文欠損	断片
	第28	473	朝鮮製陶磁器	青磁	香(瓶子)	---	---	---	くすんだ灰褐色、2次加熱?貫入?	※、香筋による疑似字文
図号No.	PL No.	遺物No.	大 別	小 別	器 種	容量 (口径×器高)cm	出土グリップ	層 位	材質・採取地	備 考
	第29	474	木製品	平塚漆	---	---	---	---	南無妙...	断片
	第30	475	*	*	---	---	---	---	梵字	*
		476	*	*	---	横4.4×縦22.5×厚0.3	---	---	---	上平文欠損
		477	石製品	供養石	---	---	北土製	---	---	完成、一筋文
図号No.	PL No.	遺物No.	大 別	小 別	器 種	容量 (口径×器高)cm	胎 土	焼 成	色 調 (陶 質)	備 考
	PL 62	E01	一石五輪塔	火、水、地輪	輪	横18.5×奥行18.0×高48.0	JH73・JH83	SV489	天文十八年 □面神門	火、水、地輪
		E02	磨練瓦輪塔	---	輪	横26.5×奥行11.0×高27.7	---	SV491	經 砂入夢	下半部
		E03	一石五輪塔	地輪	輪	横13.3×奥行13.3×高20.3	OK68	石製	水塚八 年 梵字 (4面)	梵字 (4面)
		E04	茶臼	上臼	輪	横14.0×高11.5	JA・BS2・53	南トレンチ	砂塔摩忍 二月四日	断片は了りなきガキ、赤変、磨目のこも、1/4残
		E05	地蔵仏	---	輪	横23.3×奥行12.5×高31.0	JL70	S522	□重灰色 三月□□	磨面欠
		E06	一石五輪塔	地輪	輪	横17.8×奥行17.8×高26.0	JM80	SA488	梵字 天文十三年 自願寺寺神定門	下半部
		E07	茶臼	上臼	輪	横19.1×高12.5	JM80	SA488	□月五日	磨目磨、平文、裏面やや赤変、ザラツキ
		E08	茶臼	下臼	輪	横14.8×高10.0	東トレンチ	---	---	磨目のこも、異辺欠損、1/4残
		E09	一石五輪塔	地輪	輪	横18.3×奥行17.8×高23.2	JH85	SA488	天文十七年 ?	梵字 (3面)
		E10	磨練瓦輪塔	---	輪	横18.2×奥行16.5×高25.6	JH85	SA488□面□神門	断片
		E11	一石五輪塔	地輪	輪	横16.0×奥行16.0×高18.5	JM83	SA488二月八日	下半部
		E12	茶臼	下臼	輪	横21.8×下径20.5×高8.0	JJ48トレンチ	---	---	磨目のこも (8分刻)

図録No.	PL No.	遺物No.	大 別	小 別	器 種	法量(口径×器高cm)	胎 土	層 位	銘 文 他	備 考
—	PL63	E13	板状瓦輪埴		水・地輪	幅23.6×奥行7.8×高26.5	—	SD506	大木四年 妙法蓮華經 九月廿□□	染漆残る 下半部
—	"	E14	"			幅22.4×奥行12.3×高25.3	—	SD506	經・経緯	2体のうち左半部
—	"	E15	"			幅21.5×奥行9.2×高21.8	—	SD506	…天文十三年 …妙淨堂 …□月□日	2体のうち右半部
—	"	E16	蓋目		下目	直径30.7×下径18.5×高10.5	J46トレンテ	SD516		使用痕、周辺文様、磨目(8分割)、半文 やや中央、周辺文様、半文
—	"	E17	"			幅31.0×高15.5	埴区西縁・一様			使用痕、周辺文様、半文
—	"	E18	"			直径20.7×高13.5				キズなし、周辺文様、半文
—	"	E19	板状瓦輪埴		水輪	径22.5×高15.2	"		2面梵字・経前目録漢石様	キズなし、1/4残
—	"	E20	蓋目		上目	幅14.3×高14.0	"			研削石、1/4残
—	"	E21	蓋目		下目	幅37.3×高10.3	"			研削石、半文、磨目(8分割)、びび割れ、使用痕
—	"	E22	三尊仏			幅34.0×高22.0	"			中央、左側流石、上縁・下縁文様
—	"	E23	地蔵仏			幅37.0×奥行12.5×高18.0	J463	石埴	……定后 天文六年… ……定門 天文四年… ……警風	体部のみ
—	PL64	E24	"			幅26.5×厚6.0×高18.6	J464トレンテ内	青色髹漆上下邊積造		背面(目輪)漆、金箔、銅製磨片
—	"	E25	"			幅21.6×厚8.8×高17.3	J461	邊積造	…□字□…	1/3段、文字透残り
—	"	E26	"			幅18.8×厚9.5×高19.3	J051	邊積造	…□廿日 六月廿一日 □□日 梵字	下半部残
—	"	E27	"			幅20.8×厚10.6×高22.8	J463	邊積造	□神尼色 □年…	磨片
—	"	E28	蓋目		上目	幅12.5×高10.3	J46	邊積造		研削石、磨目(8分割)、1/4残
—	"	E29	蓋目			幅16.0×高14.1	J469	SD500		研削石、使用痕跡、磨片、磨片
—	"	E30	板状瓦輪埴			幅30.5×奥行11.2×高14.6	J457	SE560	右半 ……天文九年 ……神定門 ……月九日	左半文、基台部、文字金箔かすかに残る
—	"	E31	一石瓦輪埴		火・水輪	幅19.2×奥行18.8×高19.7	J457	SE562		4面梵字、文字金箔
—	"	E32	蓋目		下目	幅26.5×奥行13.5×高10.6	J457	SE562		研削石、周辺打ち欠り、半文
—	"	E33	地蔵仏			幅24.0×奥行9.5×高25.2	—	SD500	……童子 ……門月五日	磨削欠
—	"	E34	"			幅24.1×奥行11.5×高26.5	—	SD503	□神門 ……日	磨削欠
—	"	E35	"			幅22.3×奥行10.5×高39.7	J466	SD603	……色 ……月廿三日	文字跡金箔のこる、下半部残
—	"	E36	石亀			幅36.0×奥行16.0×高15.5	J465	SD504		左右に花草、ネズミ、藤葉、童子彫

表5 銅錢一覽表

図章No.	PL No.	遺物No.	銭 種	遺存状態	整理No.	備 考	図章No.	PL No.	遺物No.	銭 種	遺存状態	整理No.	備 考
第53図	PL 65	銭01	觀寧元宝	良	199	南北漢以前遺物類	第54図	PL 66	銭59	景徳元宝	〃	117	〃
		銭02	〃	〃	200	〃			銭60	〃	〃	118	〃
		銭03	元豊通宝	〃	201	〃			銭61	祥符元宝	〃	119	〃
		銭04	元祐通宝	〃	202	〃			銭62	〃	〃	120	〃
		銭05	宣徳通宝	〃	205	〃			銭63	祥符通宝	良	121	以西青色鑿地層
		銭06	元祐通宝	半欠	203	〃			銭64	元祐通宝	〃	122	〃
		銭07	景徳元宝	良	204	〃			銭65	元祐通宝	〃	123	〃
		銭08	元祐通宝	〃	205	〃			銭66	元祐通宝	〃	124	〃
		銭09	〃	半欠	275	〃			銭67	元祐通宝	〃	125	〃
		銭10	開元通宝	良	204	南北漢以前遺物類			銭68	天聖通宝	〃	126	〃
		銭11	元祐通宝	〃	209	〃			銭69	景祐元宝	〃	127	〔裏面に「L」〕
		銭12	元祐通宝	〃	212	〃			銭70	景祐通宝	〃	128	〃
		銭13	觀寧元宝	〃	214	〃			銭71	〃	〃	129	〃
		銭14	祐和通宝	〃	220	〃			銭72	〃	〃	130	〃
		銭15	嘉祐通宝	〃	223	〃			銭73	〃	〃	131	〃
		銭16	景祐元宝	〃	213	〃			銭74	〃	〃	132	〃
		銭17	元祐通宝	半欠	246	〃			銭75	〃	〃	133	〃
		銭18	開元通宝	良〔裏面に「J」〕	247	〃			銭76	〃	〃	134	〃
		銭19	景祐通宝	〃	249	〃			銭77	〃	〃	135	〃
		銭20	咸亨元宝	〃	250	〃			銭78	〃	〃	136	〃
銭21	元祐通宝	〃	258	〃	銭79	〃	〃	137	〃				
銭22	〃	〃	269	〃	銭80	〃	〃	138	〃				
銭23	元豊通宝	〃	195	以東鑿地層	銭81	〃	〃	139	〃				
銭24	景祐通宝	〃	196	〃	銭82	〃	〃	140	〃				
銭25	天聖通宝	〃	197	〃	銭83	〃	〃	141	〃				
銭26	元豊通宝	〃	198	〃	銭84	〃	〃	142	〃				
銭27	觀寧元宝	〃	273	〃	第55図	PL 67	銭85	〃	〃	143	〃		
銭28	嘉祐元宝	〃	261	以西鑿地層	銭86	〃	〃	144	〃				
銭29	〃	〃	252	〃	銭87	〃	〃	145	〃				
銭30	景祐元宝	〃	253	〃	銭88	嘉祐元宝	〃	146	〃				
銭31	景祐元宝	〃	256	〃	銭89	嘉祐通宝	〃	147	〃				
銭32	觀寧元宝	良	257	以西鑿地層	銭90	祥符元宝	〃	148	〃				
銭33	元祐通宝	〃	229	以西青色鑿地層・緑褐色土	銭91	景祐元宝	〃	149	〃				
銭34	觀寧元宝	〃	230	〃	銭92	〃	〃	150	〃				
銭35	元豊通宝	良	259	〃	銭93	〃	〃	151	〃				
銭36	元祐通宝	〃	260	〃	銭94	景祐元宝	良	152	以西青色鑿地層				
銭37	元豊通宝	〃	261	〃	銭95	〃	〃	153	〃				
銭38	〃	〔唐鈔裏「L」〕	272	〃	銭96	〃	〃	154	〃				
銭39	〃	〔唐鈔裏「L」〕	274	〃	銭97	〃	〃	155	〃				
第56図	〃	銭40	開元通宝	〃	99	〃	銭98	〃	〃	156	〃		
〃	〃	銭41	〃	〃	99	以西青色鑿地層	銭99	元豊通宝	〃	157	〃		
〃	〃	銭42	〃	〃	100	〃	銭100	〃	〃	158	〃		
第54図	PL 66	銭43	〃	〃	101	〃	銭101	〃	〃	159	〃		
		銭44	〃	〃	102	〃	銭102	〃	〃	160	〃		
		銭45	〃	〃	103	〃	銭103	〃	〃	161	〃		
		銭46	〃	〃	104	〃	銭104	〃	〃	162	〃		
		銭47	〃	〃	105	〃	銭105	〃	〃	163	〃		
		銭48	〃	〃	106	〃	銭106	〃	〃	164	〃		
		銭49	〃	〃	107	〃	銭107	〃	〃	165	〃		
		銭50	乾道元宝	〃	108	〃	銭108	〃	〃	166	〃		
		銭51	崇寧元宝	〃	109	〔裏面に「C」〕	銭109	元祐通宝	〃	167	〃		
		銭52	淳化元宝	〃	110	〃	銭110	〃	〃	168	〃		
		銭53	天祐通宝	〃	111	〃	銭111	〃	〃	169	〃		
		銭54	景祐元宝	〃	112	〃	銭112	〃	〃	170	〃		
		銭55	景祐元宝	〃	113	〃	銭113	〃	〃	171	〃		
		銭56	〃	〃	114	〃	銭114	〃	〃	172	〃		
		銭57	〃	〃	115	〃	銭115	〃	〃	173	〃		
銭58	〃	〃	116	〃	銭116	〃	〃	174	〃				

図章No.	PL No.	建物No.	品 種	遺存状態	整理No.	備 考	図章No.	PL No.	建物No.	品 種	遺存状態	整理No.	備 考
"	"	棟117	船橋元室	"	175	"	第57回	PL 69	棟177	船橋通室	真	41	清中水取層
"	"	棟118	船橋元室	"	176	"	"	"	棟178	船橋通室	"	42	"
"	"	棟119	"	"	177	"	"	"	棟179	京和元室	"	43	"
"	"	棟120	大船通室	"	178	"	"	"	棟180	葛城元室	"	44	"
"	"	棟121	船橋通室	"	179	"	"	"	棟181	船橋元室	"	45	"
"	"	棟122	"	"	180	"	"	"	棟182	"	"	46	"
"	"	棟123	"	"	181	"	"	"	棟183	"	"	47	"
"	"	棟124	"	"	182	"	"	"	棟184	"	"	48	"
"	"	棟125	船橋通室	真	184	以西西急急地層	"	"	棟185	"	"	49	"
"	"	棟126	"	"	184	"	"	"	棟186	"	"	50	"
第56回	PL 68	棟127	正徳元室	"	185	"	"	"	棟187	"	"	51	"
"	"	棟128	慶子通室	"	186	"	"	"	棟188	"	"	52	"
"	"	棟129	葛城通室	"	187	"	"	"	棟189	元徳通室	"	53	"
"	"	棟130	船橋通室	"(横面上(元))	188	"	"	"	棟190	"	"	54	"
"	"	棟131	船橋通室	"(横面上(元))	189	"	"	"	棟191	"	"	55	"
"	"	棟132	京和通室	"	190	"	"	"	棟192	"	"	56	"
"	"	棟133	"	"	191	"	"	"	棟193	"	"	57	"
"	"	棟134	"	"	192	"	"	"	棟194	"	"	58	"
"	"	棟135	"	"	193	"	"	"	棟195	"	"	59	"
"	"	棟136	元徳元室	"	194	"	"	"	棟196	"	"	60	"
"	"	棟137	船橋通室	"	1	清中水取層	"	"	棟197	"	"	61	"
"	"	棟138	"	"	2	"	"	"	棟198	"	"	62	"
"	"	棟139	"	"	3	"	"	"	棟199	元徳通室	"	63	"
"	"	棟140	"	"	4	"	"	"	棟200	"	"	64	"
"	"	棟141	"	"	5	"	"	"	棟201	"	"	65	"
"	"	棟142	京和通室	"	6	"	"	"	棟202	"	"	66	"
"	"	棟143	大平通室	"	7	"	"	"	棟203	"	"	67	"
"	"	棟144	常化通室	"	8	"	"	"	棟204	"	"	68	"
"	"	棟145	"	"	9	"	"	"	棟205	"	"	69	"
"	"	棟146	"	"	10	"	"	"	棟206	"	"	70	"
"	"	棟147	葛城通室	"	11	"	"	"	棟207	"	"	71	"
"	"	棟148	船橋元室	"	12	"	"	"	棟208	船橋元室	"	72	"
"	"	棟149	"	"	13	"	"	"	棟209	葛城元室	"	73	"
"	"	棟150	"	"	14	"	"	"	棟210	"	"	74	"
"	"	棟151	"	"	15	"	"	PL 70	棟211	船橋元室	"	75	"
"	"	棟152	葛城元室	"	16	"	"	"	棟212	"	"	76	"
"	"	棟153	"	"	17	"	"	"	棟213	大船通室	"	77	"
"	"	棟154	"	"	18	"	"	"	棟214	船橋通室	"	78	"
"	"	棟155	"	"	19	"	"	"	棟215	"	"	79	"
"	"	棟156	"	"	20	"	"	"	棟216	"	"	80	"
"	"	棟157	神符元室	真	21	清中水取層	"	"	棟217	"	"	81	"
"	"	棟158	"	"	22	"	"	"	棟218	"	"	82	"
"	"	棟159	"	"	23	"	"	"	棟219	"	"	83	"
"	"	棟160	"	"	24	"	"	"	棟220	大平通室	"	84	"
"	"	棟161	"	"	25	"	"	"	棟221	神符元室	"	85	"
"	"	棟162	"	"	26	"	"	"	棟222	葛城通室	"	86	"
"	"	棟163	"	"	27	"	"	"	棟223	葛城通室	"	87	"
"	"	棟164	元徳通室	"	28	"	"	"	棟224	船橋元室	"	88	"
"	"	棟165	"	"	29	"	"	"	棟225	京和通室	"	89	"
"	"	棟166	元徳元室	"	31	"	"	"	棟226	京和通室	"	90	"
"	"	棟167	"	"	32	"	"	"	棟227	"	"	91	"
"	"	棟168	"	"	33	"	"	"	棟228	"	"	92	"
"	"	棟169	"	"	30	"	"	"	棟229	京和通室	"	93	"
第57回	PL 69	棟170	"	"(備)	34	"	"	"	棟230	京和通室	"	94	"
"	"	棟171	"	"(備)	35	"	"	"	棟231	?	"	95	"
"	"	棟172	神符元室	真	36	"	第58回	"	棟232	葛城元室	"	96	"
"	"	棟173	葛城元室	"	37	"	"	"	棟233	"	"	97	"
"	"	棟174	京和通室	"	38	"	"	"	棟234	船橋通室	"	244	京和通室
"	"	棟175	"	"	39	"	"	"	棟235	京和通室	"	268	"
"	"	棟176	"	"	40	"	"	"	棟236	京和通室	"(折丸龜島)	254	以西水取層

図録No.	PL No.	遺物No.	品 種	保存状態	整理No.	備 考	図録No.	PL No.	遺物No.	品 種	保存状態	整理No.	備 考		
第58図	PL 70	残237	元龜通宝	真	239	以西木皮層	"	"	残297	慶宗通宝	"	297	"		
		残238	慶宗通宝	"	240	"	"	"	残298	咸平元宝	"	298	"		
		残239	天聖元宝	"	241	"	"	"	残299	元祐通宝	"	299	"		
		残240	天聖元宝	" (半文)	242	"	"	"	残300	咸平元宝	"	300	"		
		残241	開元通宝	" (半文)	227	以西木皮層上中	"	"	残301	慶宗通宝	"	301	"		
		残242	?	" (半文)	228	"	"	"	残302	景德元宝	"	302	"		
		残243	慶宗通宝	"	231	"	"	"	残303	治平元宝	"	303	"		
		残244	元龜通宝	" (真)	232	"	"	"	残304	祥符元宝	"	304	"		
		残245	淳化元宝	" (真)	233	"	"	"	残305	祥符通宝	"	305	"		
		残246	洪武通宝	" (半文)	234	"	"	"	残306	聖宗元宝	"	306	"		
		残247	慶宗通宝	"	213	南木溝	"	"	残307	元祐通宝	"	307	"		
		残248	洪武通宝	"	215	"	"	"	残308	淳化通宝	"	308	"		
		残249	元祐通宝	"	216	"	"	"	残309	元祐通宝	"	309	"		
		残250	咸平元宝	" (磨耗面 <small>し</small>)	217	"	"	"	残310	開元通宝	"	310	"		
		残251	?	"	218	"	"	"	残311	元龜通宝	"	311	"		
		第59図	PL 71	残252	元龜通宝	"	206	"	"	"	残312	開元通宝	"	312	"
				残253	祥符通宝	"	208	"	"	"	残313	太平通宝	"	313	"
				残254	元龜通宝	"	263	"	"	"	残314	元龜通宝	"	314	"
				残255	聖宗元宝	"	264	"	"	"	残315	元龜通宝	"	315	磨損
				残256	聖宗元宝	"	265	"	"	"	残316	慶宗通宝	"	316	土質磨損 青西漢工層
残257	元龜通宝			"	266	"	"	"	残317	"	"	317	"		
残258	聖宗元宝			"	267	"	"	"	残318	治平元宝	"	318	J D ~ J F 50 - 51		
残259	開元通宝			"	271	"	"	"	残319a	天禧通宝	" (銀多しい・磨損)	319	J554米皮層		
残260	聖祐元宝			"	276	"	"	"	残319b	祥符元宝	" (銀多しい・磨損)	320	"		
残261	元祐通宝			"	277	"	"	"	残320	聖宗元宝	"	321	J66漆樹層		
残262	祥符通宝			"	207	"	"	"	残321	聖宗元宝	"	322	J65		
残263	慶宗通宝			"	208	"	"	"	残322a	聖宗元宝	" (銀多しい・磨損)	323	磨損		
残264	慶宗通宝			"	209	"	"	"	残322b	元祐通宝	" (銀多しい・磨損)	324	"		
残265	天聖元宝			"	210	"	"	"	残323	開元通宝	" (半文・銀多しい)	325	一筋		
残266	祥符通宝			"	211	"	"	"	残324	聖祐通宝	"	326	"		
残267	?			"	219	"	"	"							
残268	咸平元宝			"	221	"	"								
残269	開元通宝			"	222	"									
残270	太平通宝			"	229	"									
残271	聖宗元宝			"	235	"									
残272	元龜通宝	"	236	"											
残273	治平元宝	"	237	"											
残274	元龜通宝	"	245	"											
残275	洪武通宝	"	248	"											
残276	慶宗通宝	"	262	"											
残277	祥符通宝	"	272	"											
残278	聖宗元宝	"	278	"											
残279	元祐通宝	"	279	"											
残280	元祐通宝	"	280	"											
残281	永樂通宝	"	281	"											
残282	開元通宝	"	282	"											
残283	咸平元宝	"	283	"											
残284	咸平元宝	"	284	"											
残285	慶宗通宝	真	285	"											
残286	開元通宝	"	286	"											
残287	元祐通宝	" (真)	287	"											
残288	皇道元宝	"	288	"											
残289	天禧通宝	"	289	"											
残290	嘉祥通宝	"	290	"											
残291	祥符元宝	"	291	"											
残292	聖宗元宝	"	292	"											
残293	"	"	293	"											
残294	皇道元宝	"	294	"											
残295	永樂通宝	"	295	"											
残296	元龜通宝	"	296	"											

4. 小 結

建築的考察

第17次調査区においては比較的良好な状態で遺構が検出されており、他の調査区とは異なる特徴ある遺構も見られる。調査においては、南の東西方向道路 S S 493・494 と中程の南北方向道路 S S 498 が検出されており、調査区は、基本的に、この南北方向道路 S S 498 によって、大きく東西に二分されると考えられる。この二つの区画の内、東半分については、トレンチ調査によって一乗谷川沿いでもう一つの南北方向道路 S S 495 が検出されており、この二つの道路の間に屋敷の背面に並ぶことの多い石積施設群が背中合わせするように南北二列に並ぶことなどから、この二本の道路に面した小規模な屋敷が背中合わせとなっていることが知られる。こうした道路に面する小規模の屋敷については南北方向道路 S S 495 などを含む調査区を扱う別の報告書に譲り、ここでは、西の山麓にあって、東西方向の道路とこれから北に延びる南北方向の道路に面した西半分の17-1区画に見られるこの調査区を特徴付ける遺構について、若干の検討を加えてみることにしたい。

最初に、この区画内で検出されている遺構は、他の調査区とどのような点で異なるのかを指摘してみよう。まず、目につく事は、検出されている多くの建物礎石が比較的大きくてしっかりしており、想定される建物の規模も比較的大きいことである。そして、この礎石の配置を見てみると、その間隔が広く、かつ、これまでの調査で知られているこの遺跡の建物の基準柱間寸法、一間6.2尺とは異なり、10尺とか12尺といった柱間が想定できることも大きな特徴といえる。加えて、この場を考える時、重要なことは、この区画内では、比較的広い面積を有しているにも関わらず、東半分で見られるように、通常の居住空間として必ず検出されてきた井戸や多くが便所であることが判明している石積施設がまったく検出されていないことである。こうした事実から、この区画は、これまでの調査で知られている通常の屋敷が有している居住空間とは機能が異なることが想定されよう。

この場の特異性を考える上で参考となるのは、この場所は、地元住民に「サイゴージ」という寺の伝承が伝えられており、また、「一乗谷古絵図」にはこの付近にいくつかの寺の名が記されていることであろう。そして、発掘調査により出土した遺物には、石仏、塔婆、柿経、仏具など、仏教に関わるものが多数見受けられることなどを合わせ考えた時、この区画は、寺としての宗教的な場であったとして良いと考えられる。また、出土遺物の中の石仏などに法華題目として知られる「南無妙法蓮華経」の文字が見られることから、この寺の宗派としては日蓮（法華）宗が想定できよう。この宗派は中世後期において、特徴として、都市部における町衆の寺としての性格が強かったことが良く知られている。しかし、宗派としての確立、発展期ともいえるこの時期において、こうした市中寺院がどのような建物を有し、その構成がどうであったのかといった点については十分な解明はされていない。そこで、参考までに、この宗派の寺院の状況がある程度知られている近世の状況を見ておきたい。宗派特有の建物の内、本堂などにおいては、正面の1間を吹き放しとするなど比較的開放的な外陣とし、奥の2間を内陣とするのが一般的であるとされている。また、その内陣は、両脇1間を脇陣として区分することが多いことも知られている。そして、本山などの大規模な伽藍を構成する寺院においては多くの建物が見られるが、本堂（釈迦堂）と祖師堂（御影堂）の二つの建物が並び立つ例が多いことも指摘されている。

では、この場が日蓮宗の寺院であった可能性が高いことを踏まえた上で、個々の遺構について若干の

検討を加えてみよう。

まず、屋敷の構成について検討する。この屋敷は、前述したように、南・北二つの土塁 S A487・488 と西の自然地形としての山で区切られ、東は南北方向の道路が境界となる。二つの土塁の内、南土塁は東西方向の道路に面し、北土塁は屋敷境となっている。道路に面し、門が設けられている南土塁が正面と考えてよいものと思われる。北土塁は、基本的に二つの屋敷を仕切るものであって、北隣屋敷側の石垣は直線的であり、また、使用する石も大きく、その石垣面もしっかりしているが、この屋敷に面する南面は、山寄りの西半は幅が広がり、かつ階段状になっていることが特徴的である。この階段状の部分からは石仏がいくつか検出されており、また、蔵骨器も検出されている。この土塁が寺院と推定される屋敷の背面となることも考えれば、こうした階段状の部分の墓地和と考えて良いのではなかろうか。なお、西の山裾については発掘調査を実施していないが、北土塁に設けられた墓地とは形状が異なるが、大きな段状の造成がなされており、石仏も散見されることなどから、墓地の可能性が想定されるのではなかろうか。このように明確な境界施設の見られる南・北・西の三面とは異なり、東面については、道路とこれに沿う溝以外に境界となる明確な遺構は見当たらない。では次に、こうした土塁などによって比較的厳密に区画された屋敷の内部の建物について考えてみたい。建物遺構は大きくは3期に分けられ、下から順にⅠ、Ⅱ、Ⅲ期としている。最上層であるⅢ期の遺構の保存状況が良好なため、その下層となるⅠ、Ⅱ期の遺構はトレンチによる断片的な検出にとどまることから、不明な点が多い。しかし、礎石配置などから、若干の検討が可能である。

Ⅰ期の建物遺構である S B 532を見ると、礎石は比較的小さく、かつ、その間隔も狭く、基準柱間を1間6.2尺とする建物と考えられる。この区画内においては、この基準柱間をとる建物はこれ以外に見られない。先に指摘したこの屋敷の特徴とした点と異なり、従来から知られる居住建物と共通するものである。また、このⅠ期で検出された数少ない遺構として通路 S S 497があるが、これは屋敷の中央付近において検出されており、後述するⅡ、Ⅲ期の遺構に共通するように、屋敷の中心部に大規模な建物が存在したとは考えられないことも注意する必要がある。このように、Ⅰ期は後のⅡ・Ⅲ期とは大きく異なることを指摘できる。

これに対し、Ⅱ期の遺構を見てみると、Ⅰ期とは様相が異なる。ここで目を引くのは二つの礎石列 S B 531・534である。この二つの礎石列は、方向が一致しており、レベルは S B 534 に対し東の S B 531 が 0.05m 前後低いが、これは地形に基づく傾斜と考えることも可能であろう。また、この礎石列の配置間隔が非常に良く対応している。また、Ⅱ期の門とこれから延びる通路はほぼこの二つの礎石列の中程に位置している。こうした点から、この二つの礎石列は一つの建物として良いものと考えられよう。この建物はその位置や規模から、屋敷内の中心的な建物と考えられ、その東西端の礎石列と考えられるのではなかろうか。このように考えた時、この建物は、東西17.3m、南北11.7mと比較的大きな規模を持つ、横長の建物となる。東西方向の溝 S D 507 の位置などから考えると、この建物の基本は、その主体部を、南から10尺、12尺、10尺の間隔の礎石で構成された部分とし、この南面（正面）の4尺、北面（背面）の3尺を縁とするものと考えられるのではなかろうか。この建物は、比較的大きな柱間を持ち、かつ、その基本寸法も通常の居住建物と異なり、Ⅰ期の建物遺構とは大きな変化が現れている。なお、この建物は、東西端と考えられる二つの礎石列を除き、中間の礎石を検出していないことから、詳細な平面の検討はできないが、横長の平面が想定されること、屋敷の中央に位置することなどから、方丈系の本堂を想定することも可能であると思われる。

次に、ほぼ全体の様子が知られるⅢ期の建物について考えてみよう。中央に位置するのがS B 523である。この建物は、東西11.2m、南北11.5mとほぼ方形の平面を持つ。礎石配置から、東西方向については、東から15尺、12尺、10尺の柱間配置、南北方向については南から12尺、12尺、14尺の柱間配置が想定できる。また、東西方向の礎石列の中では南端と第2列の礎石列が良く残り、この正面の12尺の1間と奥の2間に区分があった可能性が想定できる。こうしたことから、この建物の正面の1間を先に述べた日蓮宗本堂に特徴的な外陣に当てることも可能であろう。また、東の15尺間は5尺と10尺に分けられていた可能性も考えられ、その場合は東の5尺間は縁であったと考えられよう。この中央に位置する建物S B 523を挟んで東西に少し異なった建物礎石群が見られる。東部にはS B 523の前面の12尺間をそのまま東に延長した建物S B 524とこの東端から北に延びる南北方向の溝S D 500に沿って設けられた幅4尺程度の廊状の建物S C 528が検出されている。この二つの建物は少し特異な形状である。これを考える上で重要になると思われるのが、これらの建物によって切り取られた場であると考えられる。この建物で囲まれた部分では砂利が検出されているほか、他の遺構は設けられておらず、広い中庭的な場を形成している。その意味などの解明が今後の課題であるといえよう。

西部は、東部と異なり、多くの礎石群が見られる。これらは必ずしも明確に一つの建物の礎石とすることはできない。これは、Ⅲ期の中での改造があったと考えることも出来るが、Ⅱ期の遺構が混じっている可能性も否定できない。西端の石垣に沿う礎石列、建物S B 523の西に並行する礎石列は軸線がS B 523と同じであり、北端を繋ぐ礎石列も見られることなどから、これを一つの建物と考えることも可能である。その場合は、S B 523とほぼ同規模の建物となることが注目される。この場合は、二つの同規模の建物が並ぶこととなり、この宗派の特徴である釈迦堂と祖师堂の関係などを考慮する必要も考えられよう。なお、若干の考察を加えた建物群は屋敷の中程から後方に見られるが、こうした建物群の前に設けられた東西方向の溝S D 503と正面の土塁との間は、東の一部を除き、ほとんど遺構は見られない。ここは、基本的に前庭的な空間を構成していたものと考えられるが、詳細についての検討を行うためには、西山裾の未調査となった一角の解明などが必要であろう。

以上、今回の発掘調査により検出された遺構について若干の検討を行った。これを整理し、まとめたい。この屋敷の建物を見たとき、Ⅰ期の建物は通常の居住建物に見られるように礎石を比較的密に配し、その基準寸法は1間6.2尺程度であり、これに続くⅡ、Ⅲ期では基準寸法は10尺とか12尺という大きなものとなり、礎石配置も疎らであり、大きな変化が見られる。これは、Ⅰ期とⅡ期以降に機能の変化があったことを示すと考えられ、その一つの解釈として、この区画は、当初、通常の屋敷であったものを、Ⅱ期以降、寺院に変更した可能性が考えられるのではなからうか。また、Ⅱ、Ⅲ期の寺院の可能性が高い建物について見てみると、前面に1間の外陣と考えられる平面が推定出来、そこには近世において知られる日蓮宗寺院の建物との共通点も考えられること、また、この寺院としての性格を共有するⅡ、Ⅲ期においても、建物規模やその配置には変化が見られることなども知られる。

このように、この屋敷で検出された遺構は、これまでにほとんど詳細が知られていない中世後期の市中寺院の状況を知る上で貴重な資料といえる。しかし、この寺院であったと考えられる時期において、庫裏などに当てられる居住建物は検出されておらず、また先に指摘したように井戸や石積施設は存在しない。どのようにして寺院が維持されていたのかという疑問が生じる。これに対する回答を得るためにも、今後、周囲の屋敷との関係の解明など、周辺も見回した全体的な調査、検討が必要であろう。

出土遺物

遺物の出土状況は遺物の項でも触れたように、4万点余の出土があり、土師質土器の比率が高いことは既に述べたとおりである。また、その出土の態様についても、南北溝を挟んだ西側の礎石建物の区画については、整地層、遺構とともに良好な出土を示すが、東側については、水田耕作その他の理由により、出土状況にバラツキが見られ、必ずしも安定的ではない。こうした状況は南隣の第40次、第46次調査区等でも指摘され、山際ほど遺構の依存度が高く、一乗谷川に寄った比較的平らな部分ほど後世の削平が進んでいて遺構の不明瞭な状況が観察される。

個別に見ると、越前焼については、大甕の資料はそれほど多くはないが、壺についてはバリエーションが豊富であった。採録も資料的には豊富な量が得られた。瀬戸・美濃製品では鉄釉碗の資料が多く、灰釉皿の量を凌駕しているような印象を受ける。瀬戸・美濃製品は、通常、鉄釉碗に灰釉皿の組み合わせで少量出土するが、本調査区では茶器類としての向付皿、小壺等の製品も目立った。また青磁線描蓮弁文の写しと見られる灰釉碗や青磁稜花皿の写しと見られる腰折れタイプの皿なども出土している。土師質土器、とりわけカワラケについては量的、質的にも内容は豊富であった。その一例としてB類皿にいくつかのバリエーションが指摘でき、将来のB類の分類に新しい基準を設定しうる展望が得られたことが挙げられる。

外国産陶磁器とりわけ中国製陶磁器には、青磁、白磁、青花白磁に加えて中国南部産と見られる褐釉（黒褐釉）四耳壺がある。また華南彩釉陶器やタイ、ベトナムなど東南アジア産陶器、あるいは朝鮮製陶磁器も出土していることが挙げられる。この点については、近年の中国、タイ、ベトナムなど周辺諸国の調査事例の増加に伴って、資料も多く提示されてきており、産地不明陶磁器として区別がはつきりしなかったものを見なおしつつ、産地別、時期別の類型化を進める作業が進んできている⁴⁸⁾。

従来の青花白磁碗・皿類には、それまで国内において輸入陶磁器の主流であった景德鎮産のものに加えて、16世紀以降には中国南部あるいはベトナム等東南アジアで焼かれたものが混じるようになり、一乗谷においてもいくつかの調査区でその類例が散見されている。いわゆる「漳州窯系」の青花白磁はその一例であろう（森村1991）。また一般に中国産と見られている黒褐釉または褐釉の四耳壺にもタイ製のものが含まれることが指摘されたり、素焼きにちかい叩き目文壺（いわゆるハンネラ）の出土も確認されている。更に焼締陶器（概して無釉の壺が多い）にも、タイあるいは近辺で焼かれたものが混じることが明らかにされてきており、一乗谷でも第35次、第36次調査区等で確認されている。産地不明陶器としてついでに挙げるならば、一乗谷、博多、湯築城跡でも出土している口禿の白磁皿類がある。（朝倉氏遺跡資料館1999）。第51次調査区でまとめて出土し、その後の検討により朝倉館、第31次、第78次、第104次調査区等々で出土が確認されたものである。いわゆる青白磁（影青）の口禿皿とは、その胎土・焼成が軟質、脆弱である点で一線が画され、主として見込みを描かれるへら描き草花文などは定窯白磁を写している様にもみえる。これも一乗谷で主体をなす景德鎮系白磁皿に混じって、微量ながら出土し、明らかに伝世品と見られる定窯白磁輪花皿（鉢）、青白磁皿等と対をなす存在として注目される。

こうした資料の産地別・時期別分類作業を進めることは、今日的課題のひとつでもありと同時に、一乗谷における陶磁器の体系的分類化作業を進めることの重要なファクターとなっている。

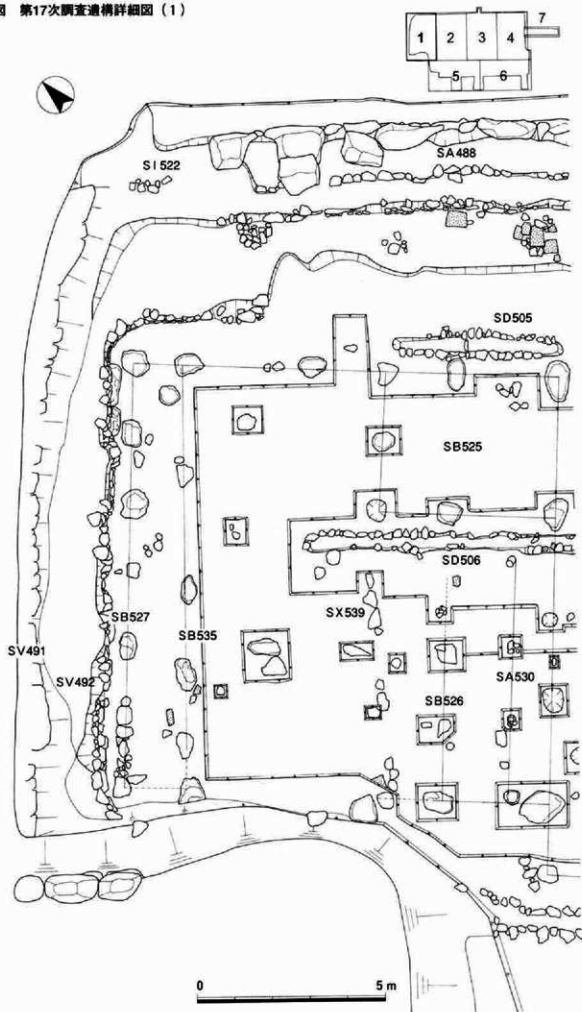
【註】

- 註1 一乗谷で出土する土師質土器のうち、最近の成果から器型分類のなかで特にB3類として区分している皿を、便宜上呼称しているものである。(南洋一郎1999「V考察 一乗谷出土のカワラケ分類基準の検討」【特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅴ】参照)
- 註2 浜の館跡出土の資料は4点いずれも水注で、高さは13~14cmと比較的大型である。東京国立博物館編1978『日本出土の中国陶磁』他
- 註3 第104次調査で出土したもので、胴下部半部を欠損しているが、概ね像容の全体を把握できる資料である。2次加熱により、表面は荒れているがすかに褐色の釉調が残る。(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館【特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡30—発掘調査・整備事業概報】参照)
- 註4 平成9年度の調査で遺跡北半部の約1.8m四方の大型土壇中から出土した。上端部口径18.4cm、下端部口径20.5cm、高さ5.4cmを測り一乗谷出土のものよりかなり大サイズである。同じ土壇からは金属製の板状破片と棒状木製品が併存しているという。(福井県教育庁埋葬文化財調査センター—郷部正典氏のご教示による。同センター編1998「法土寺遺跡」【第13回発掘調査報告書資料—平成9年度に福井県で発掘調査された遺跡の報告】参照)
- 註5 日本貿易陶磁研究会では1990年代以降、こうした地域の陶磁貿易の実態を明らかにするため、発掘調査事例を基礎に報告が行われ、その都度テーマを設けて研究会を続けており、多くの成果を蓄積しつつある。

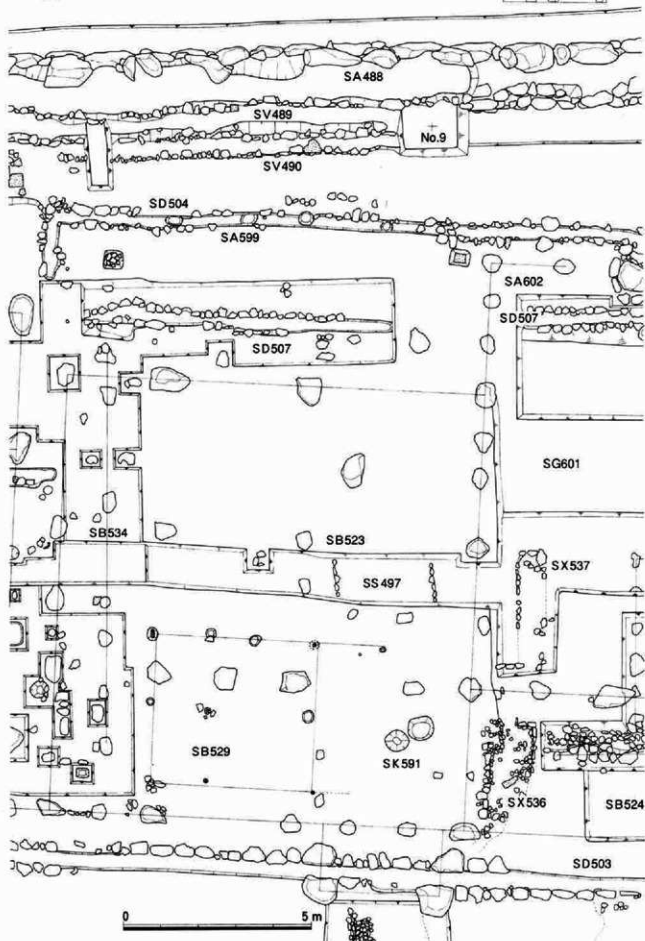
【引用・参考文献】

- 朝倉氏遺跡調査研究所編1975『一乗谷石造遺物調査報告書Ⅰ—銘文集成』
- 朝倉氏遺跡調査研究所編1976『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅴ—昭和50年度発掘調査・整備事業概報』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館編1983『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅳ—昭和57年度発掘調査・整備事業概報』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館編1983『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 東道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館編1984『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅴ—昭和58年度発掘調査・整備事業概報』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館編1985『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅵ—昭和59年度発掘調査・整備事業概報』
- 福井県立朝倉氏遺跡資料館編1990『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡—平成2年度発掘調査・環境整備事業概要(22)』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1997『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡—平成9年度発掘調査・環境整備事業概要(29)』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1999『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡—平成11年度発掘調査・環境整備事業概要(31)』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1999『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅴ—第35次 第56・85次 第61・62次調査』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1994『第7回企画展 海を越えて来たやきもの』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1996『第9回企画展 日本海交易と一乗谷』
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編1998『特別展 眼りからさめた戦国の城下町—越前朝倉氏・一乗谷』
- 小野正敏1982「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」【貿易陶磁研究No.2】日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫1983「根来寺第Ⅲ地区出土の元染付とその他の中国陶磁」【貿易陶磁研究No.3】日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏1984「福井県一乗谷における陶磁器の組成と機能分担」【貿易陶磁研究No.4】日本貿易陶磁研究会
- 小野・水藤編1990「よみがえる中世6 実像の戦国城下町・一乗谷」平凡社
- 森村健一1991「畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器—新政権成立を契機とする新輸入陶磁器の採用」【貿易陶磁研究No.11】日本貿易陶磁研究会
- 岩田 隆1997「一乗谷出土の埋納陶磁器」【貿易陶磁研究No.17】日本貿易陶磁研究会
- 吉岡康暢1987「中世陶器の生産経営形態—能登・珠洲窯を中心に—」【国立歴史民俗博物館研究報告第12集】他
- 森本朝子2000「日本出土の東南アジア産陶磁の様相」【貿易陶磁研究No.20】日本貿易陶磁研究会
- 日本貿易陶磁研究会2002「産地不明の貿易陶磁器(12~16世紀)—消費地と生産地から」第23回研究会資料集

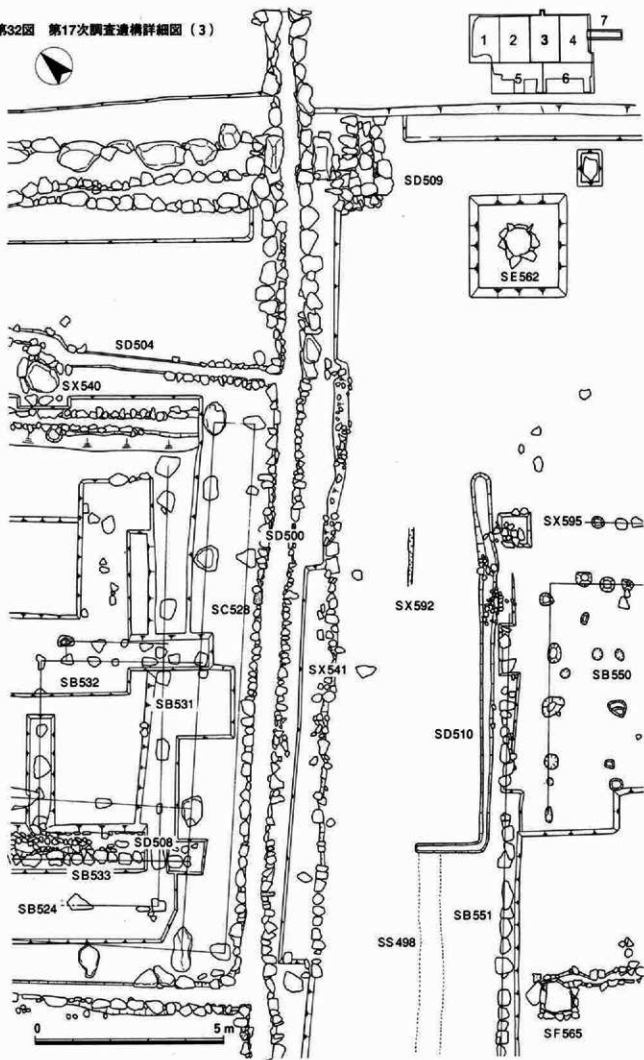
第30図 第17次調査遺構詳細図(1)



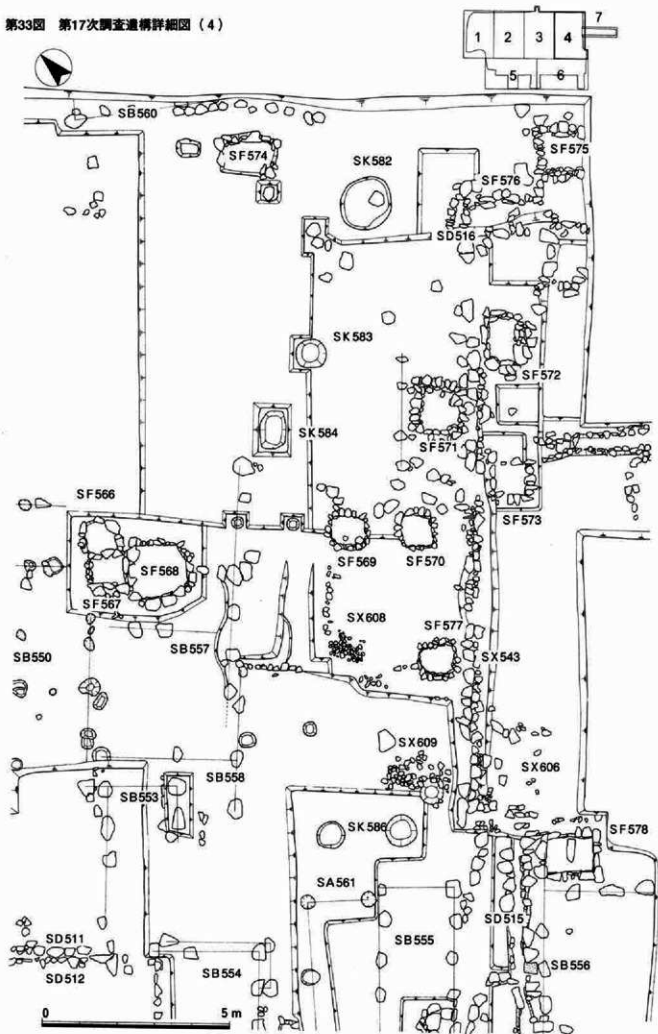
第31回 第17次調査遺構詳細図(2)



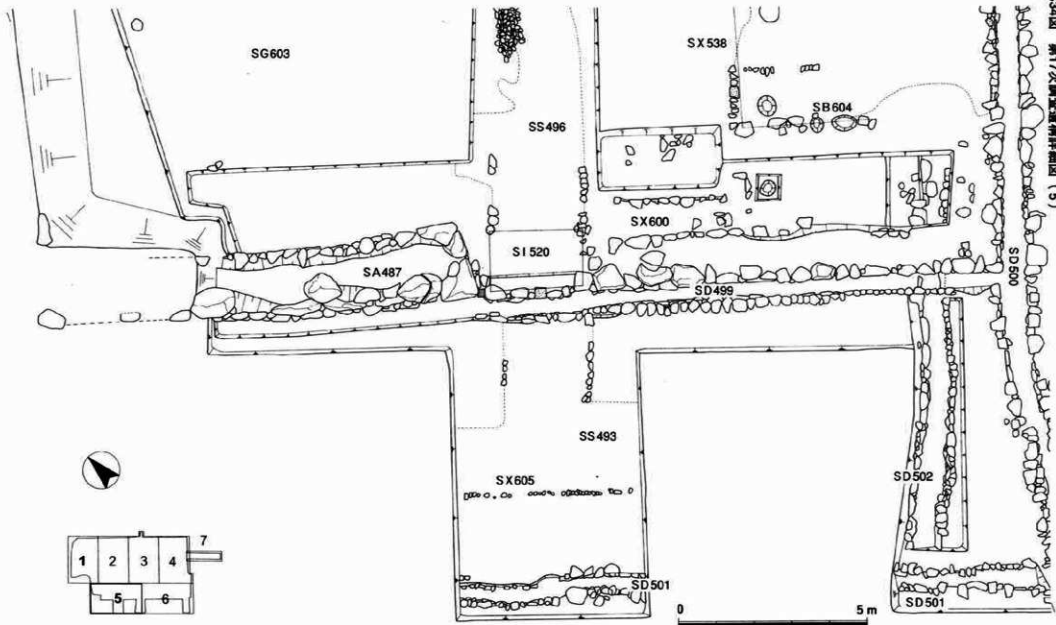
第32図 第17次調査遺構詳細図(3)

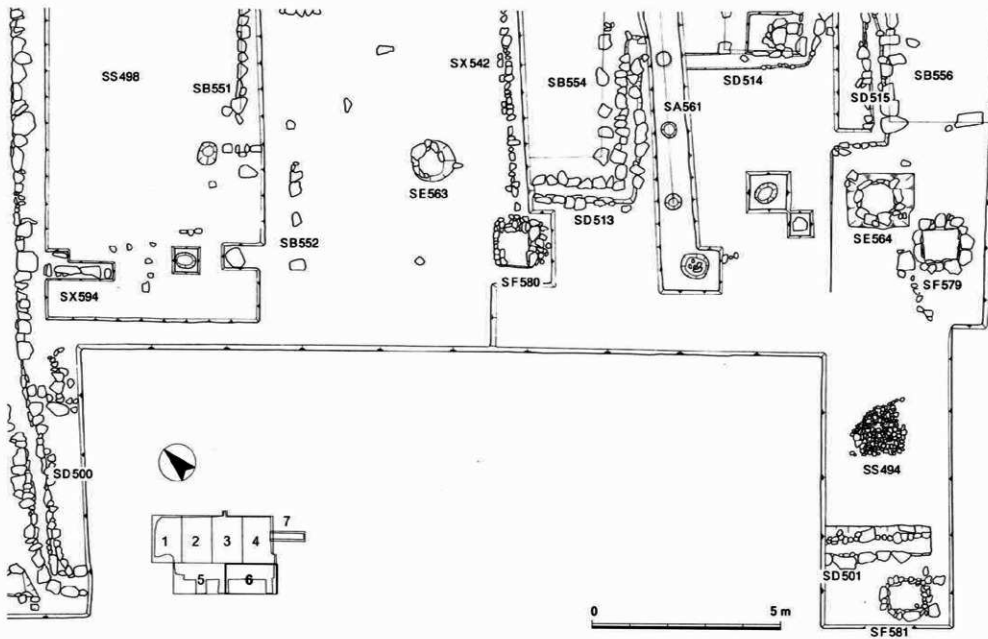


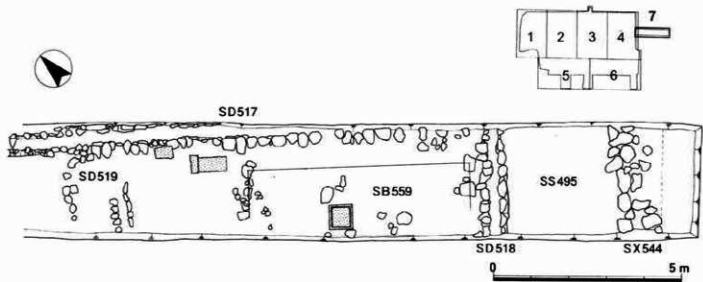
第33圖 第17次調査遺構詳細図 (4)



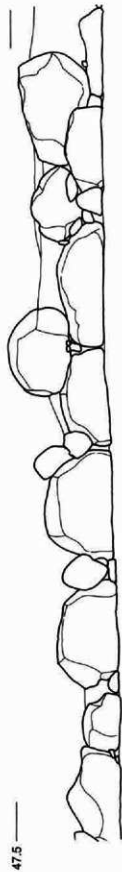
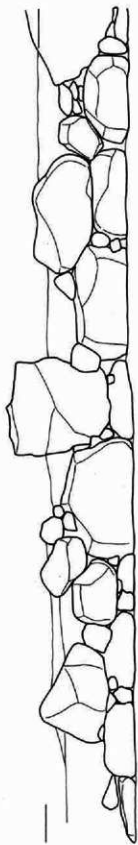
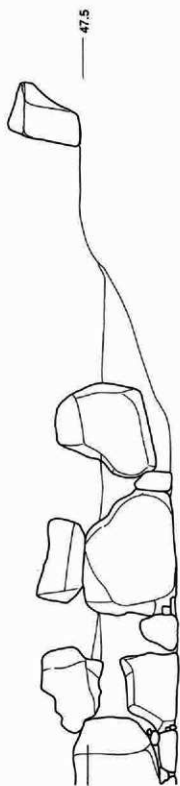
第34図 第17次調査遺構詳細図(5)







第37圖 第17次調査遺構立面図(1)



SA 488北面立面図

第38図 第17次調査遺構立面図(2)

47.5



47.5



SA487北面(上)・南面(下)立面図

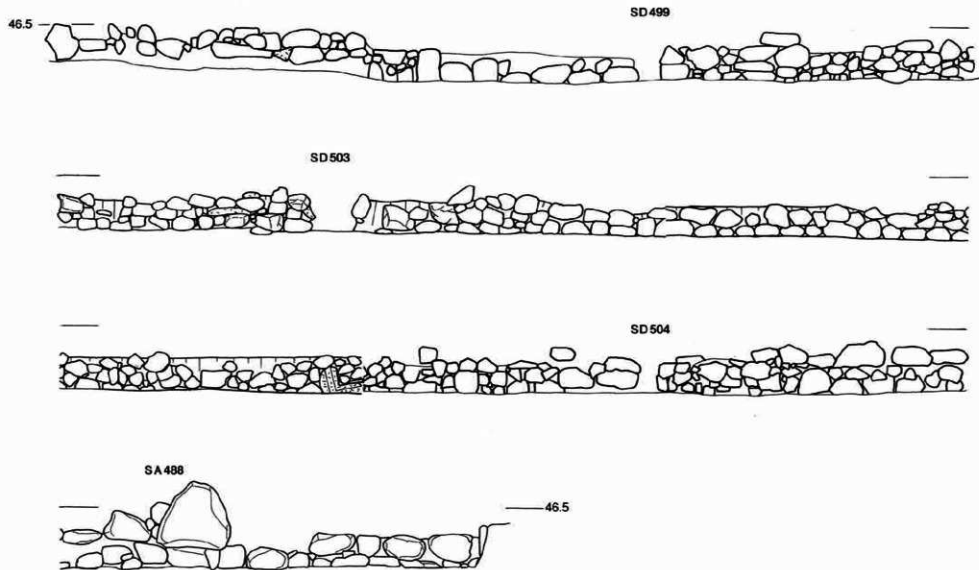


SI 522南面立面図



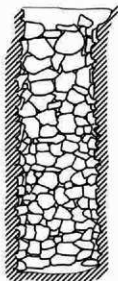
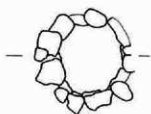
SV492立面図





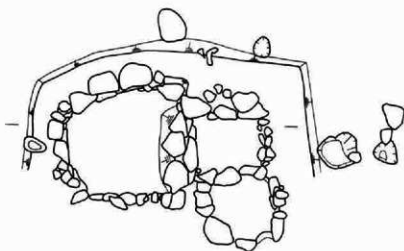
SD500西側側石立面図





SE 562平面・立面図

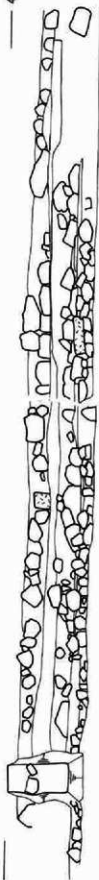
SE 564平面・立面図



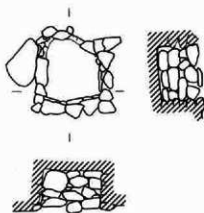
SF 566・567・568平面・立面図



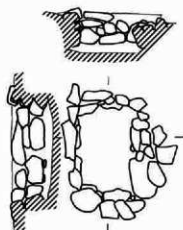
47.5



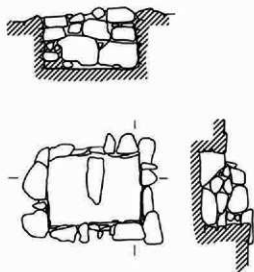
SV 489・490立面図



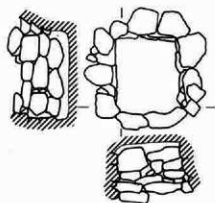
SF 565平面・立面図



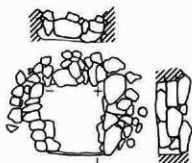
SF 572平面・立面図



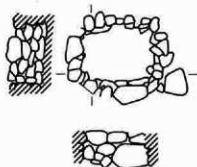
SF 578平面・立面図



SF 579平面・立面図



SF 580平面・立面図



SF 581平面・立面図



(東から)



下層
(東から)



(南から)





石垣 S V491・492
礎石建物 S B 525・527・535
(東から)



◀土塁 S A487
溝 S D499
(東から)



▶土塁 S A488
(東から)

第17次調査主要遺構

溝 S D 500・502
(北から)溝 S D 500
(北から)溝 S D 500・509
(南から)



(北から)



(東から)



(南から)

第17次調査区画17-1

土屋 S A 487・道路 S S 496
門 S I 520
(南から)



同上
(北から)



◀溝 S D 503
(東から)

▶溝 S D 504・507
(東から)





土塁 S A 486 及び
礎石建物 S A 523・525・
526・527
(北東から)



礎石建物 S A 525・526・
527・535
(北から)



礎石建物 S A 523・524・
525・526
(西から)

第17次調査区画17-1

全景
(南東から)



◀ 礎石建物 S B 523・524
(東から)
▶ 礎石建物 S B 527・535
(北から)

下層礎石建物 S B 531・532
(南から)





(東から)



(北から)



(西から)

道路 S S 498
(北から)



◀石列 S X 543と石敷 S X 606
石積施設 S F 571・572・573・577
(南から)



▶石積施設 S F 571・572・
573・575・576
(北から)

◀溝 S D 517・518・519
石列 S X 544及び
礎石建物 S B 559
(西から)



▶礎石建物 S B 556と溝 S D 515
及び井戸 S F 564と
石積施設 S E 579
(南から)



第17次調査遺構井戸・
石積遺構

◀ S E 562
(東から)

▶ S E 563
(東南から)



◀ S E 564
(西から)

▶ S F 565
(北から)



▲ S F 566・567・568
(東から)



▲ 同右
(西から)

◀ S F 569
(北から)

◀ S F 570
(北から)

▶ S F 571
(東から)

◀ S F 572
(東から)

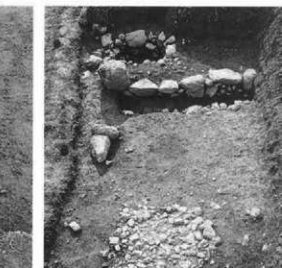
▶ S F 577
(東から)

◀ S F 578
(北から)

▶ S F 579
(南から)

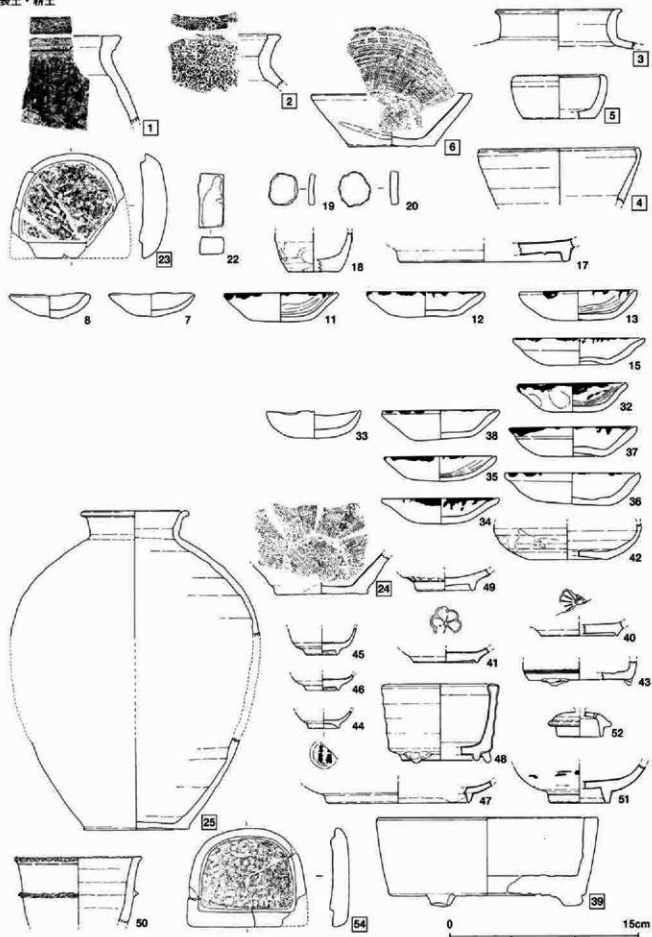
◀ S F 580
(西から)

▶ S F 581とS D 501
及びS S 494
(北から)



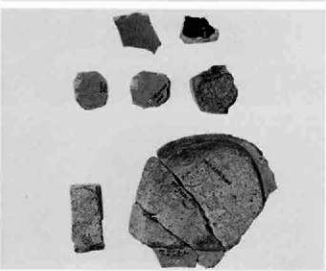
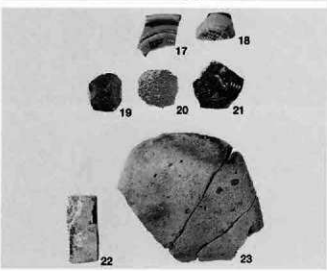
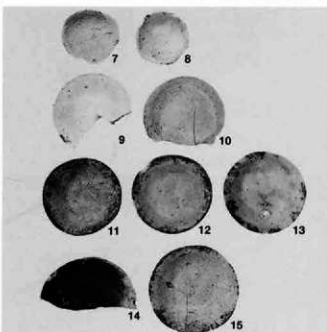
第42図 第17次調査出土遺物 (1)

表土・粘土

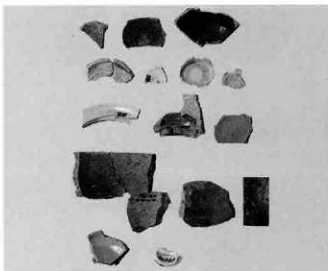
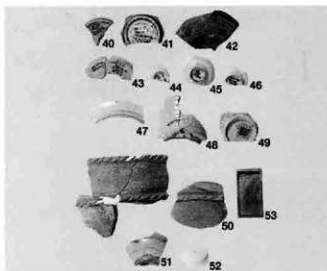
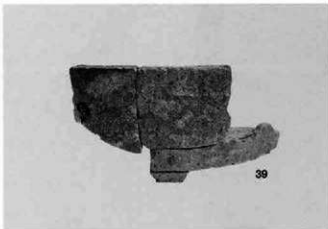
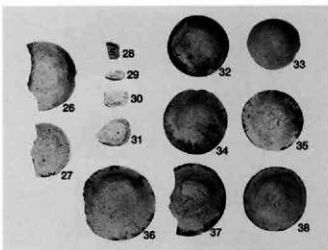
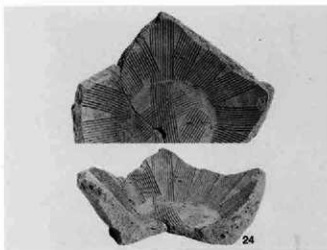


越前焼壺1~6・24 土師質土器皿7・8・11~13・15・32~38 鉄釉茶入18・42 灰釉皿40・41・43 信楽壺25 青磁皿17・49
白磁皿44~48 青花碗51 産地不明鉢50 近代産22 円板状加工品19・20 バンドコ蓋23・54 石製壺39 砥石22

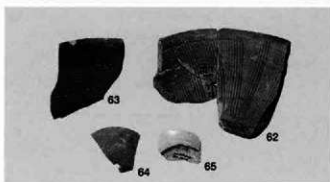
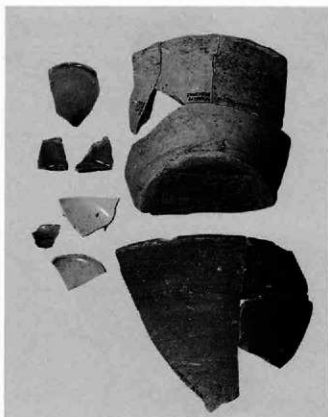
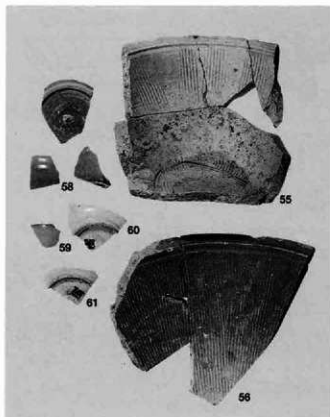
(図中口数字は縮尺1/6)



越前焼1~6 土師質土器7~15 石塔16 青磁17 鉄軸18 円板状加工品19~21 バンドコ蓋23 磁石22



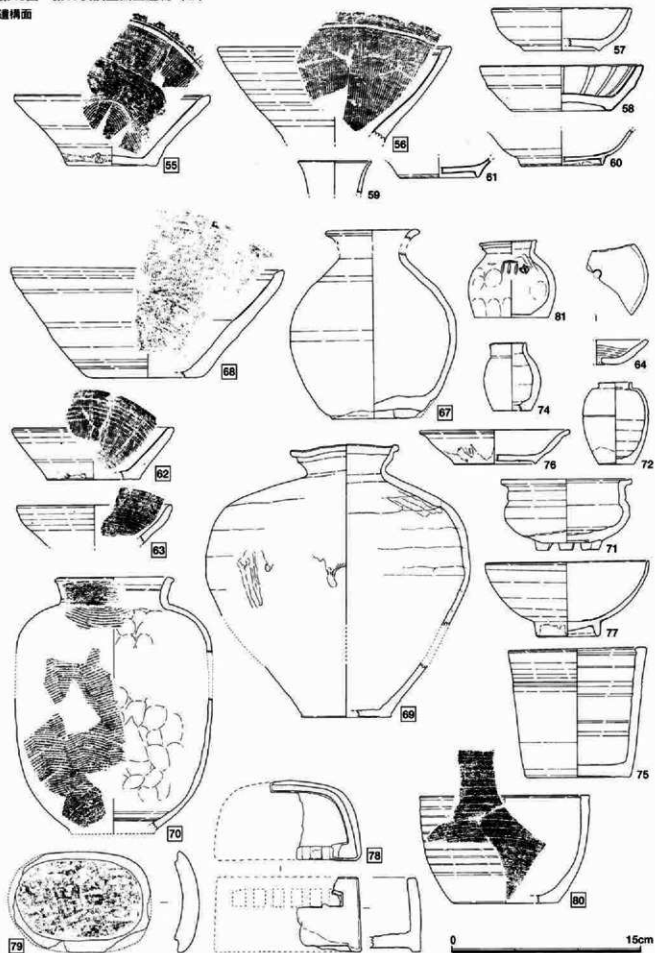
越前焼24 土師質土器26~38 信楽窯25 灰釉40・41・43 鉄釉42 青磁49 白磁44~48 産地不明50 青花51 近代52
紙石53 バンドコ蓋54 石製燈39



越前焼55・56・62・63・66 青磁58 白磁59～61・65 土師質土器64 鉄軸57

第43図 第17次調査出土遺物(2)

遺構面



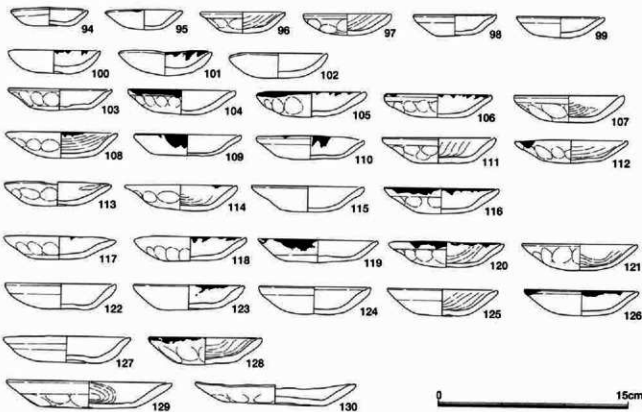
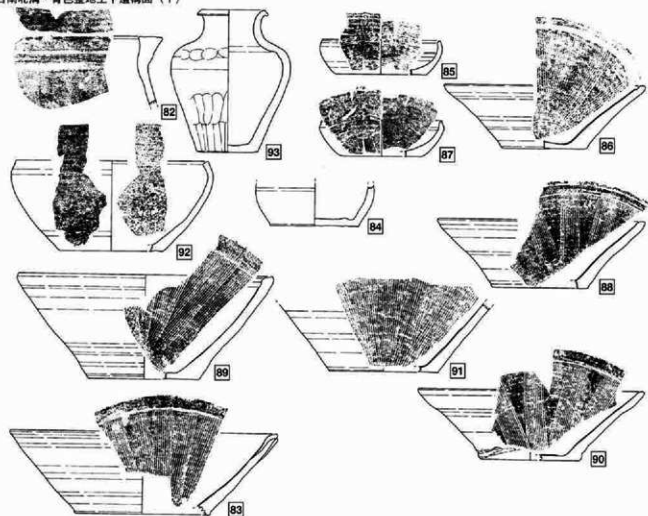
越前焼漆鉢55・56・62・63・67・68・74・81 土師質土器皿64 鉄軸皿57 鉛釉香炉71 信楽焼壺69 黄瀬戸皿76 珠洲焼壺70
青磁皿58 白磁杯、皿59~61 鉄軸茶入(中国)72 産地不明鉢75・80 バンドコ蓋79 身78 (图中□数字は縮尺1/6)



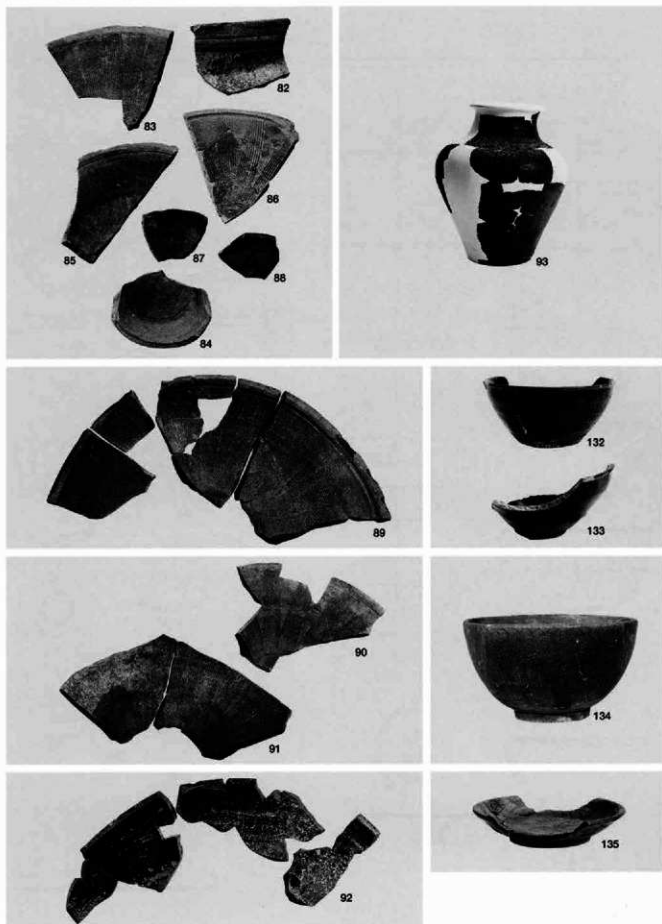
越前焼67・68・74 信楽69 珠洲焼70 鉛釉71 華南三彩73 鉄釉72・77 黄瀬戸76 バンドコ藍79 身8
須恵貫水指75

第44圖 第17次調査出土遺物 (3)

古南北溝・青色整地土下遺構面 (1)

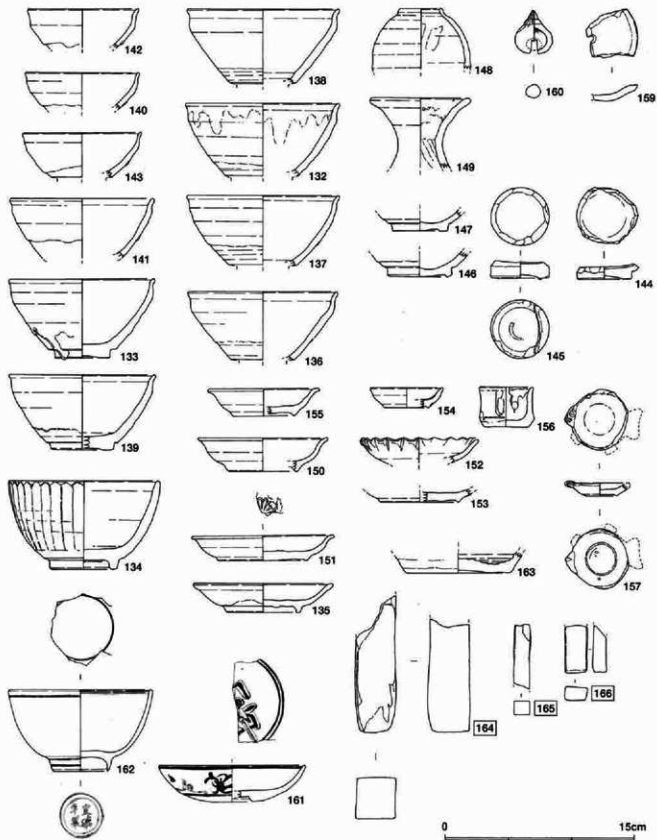


0 15cm



第45図 第17次調査出土遺物(4)

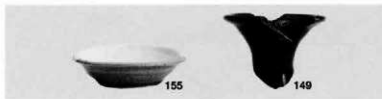
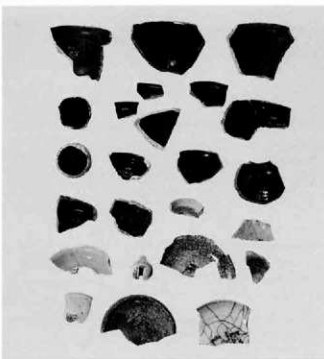
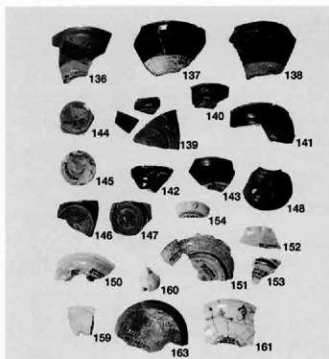
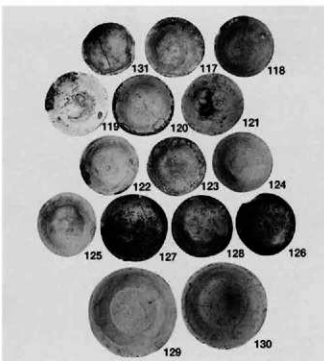
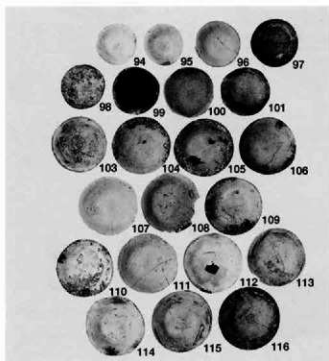
古南北溝・青色整地土下遺構面(2)



土師質土器皿・土鈴159・160 鉄輪碗・壺132・133・136~149 灰輪碗・皿134・135・150~157 朝鮮製壺163

青花白磁皿161・162 石製品砥石164~166

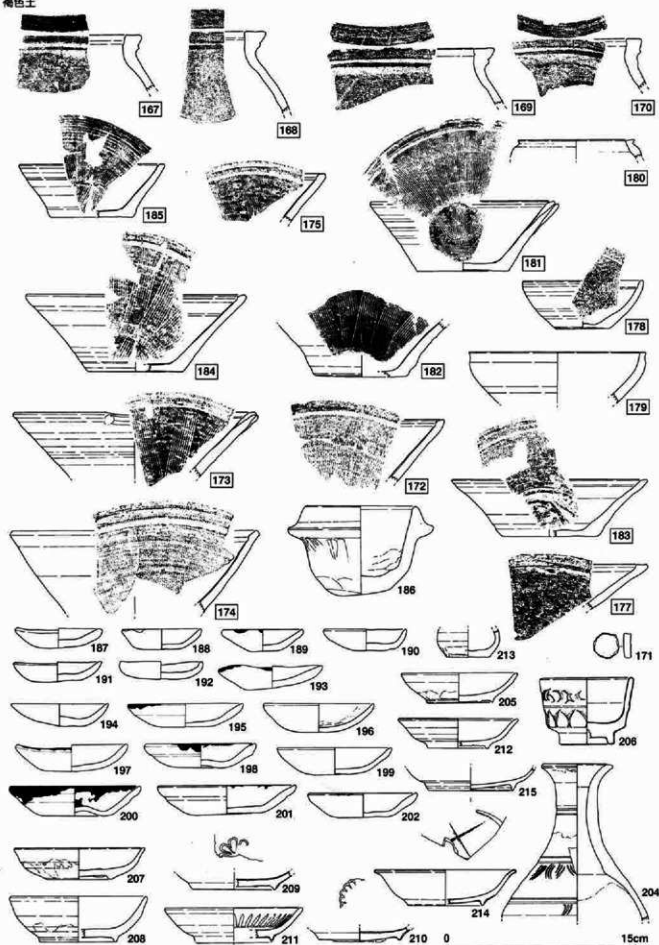
(图中□数字は縮尺1/6)



土師質土器94~101・103~131・159・160 鉄釉136~149 灰釉150~158 青花白磁161・162 朝鮮製163

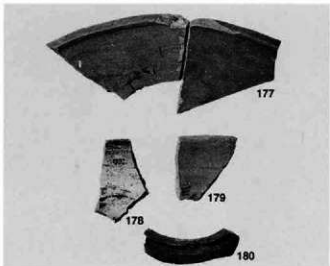
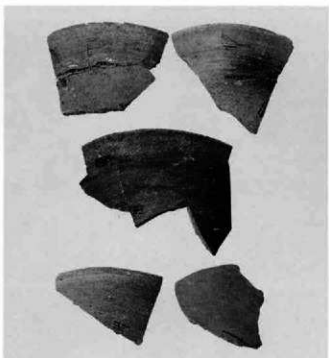
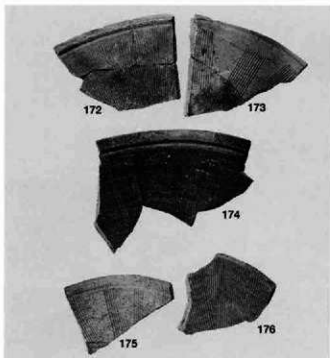
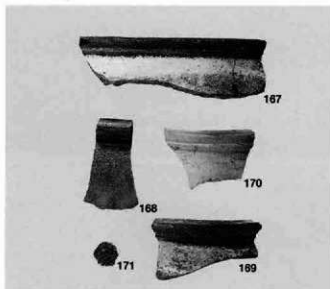
第46図 第17次調査出土遺物(5)

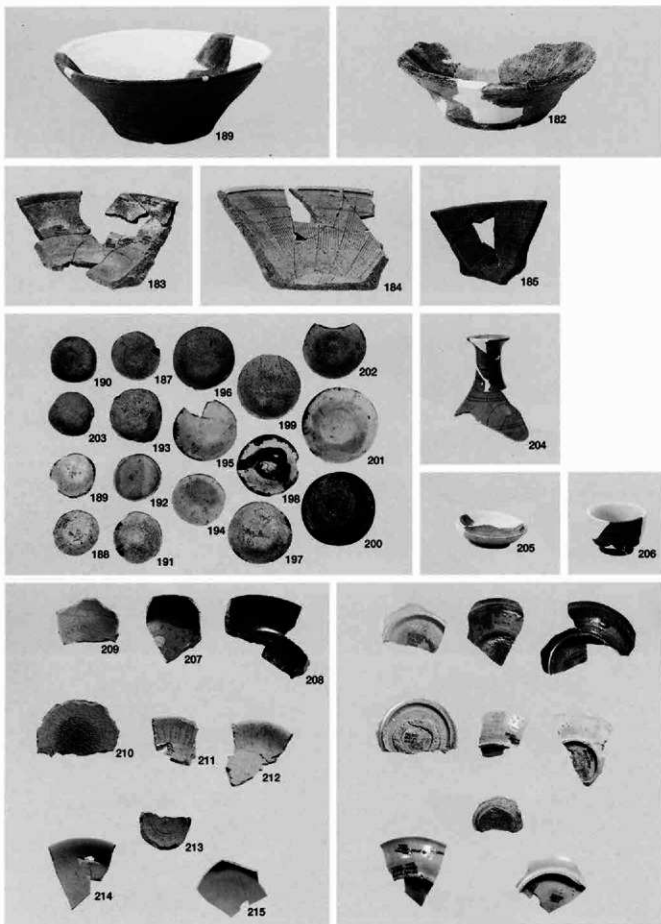
褐色土



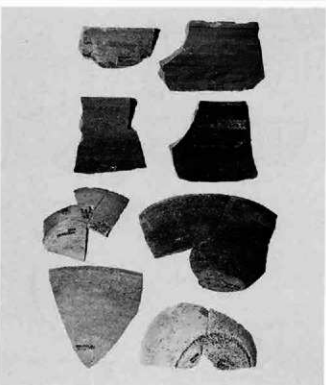
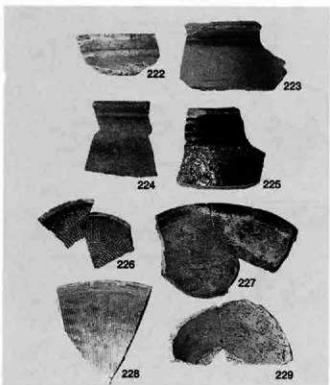
越前焼罎・鉢・播鉢167~175・177~184 土師質土器皿186~202 鉄釉皿207・208 灰釉皿205・209~212 青磁罎・杯204・206
白磁皿214・215
(图中口数字は縮尺1/6)

褐色土 (1)



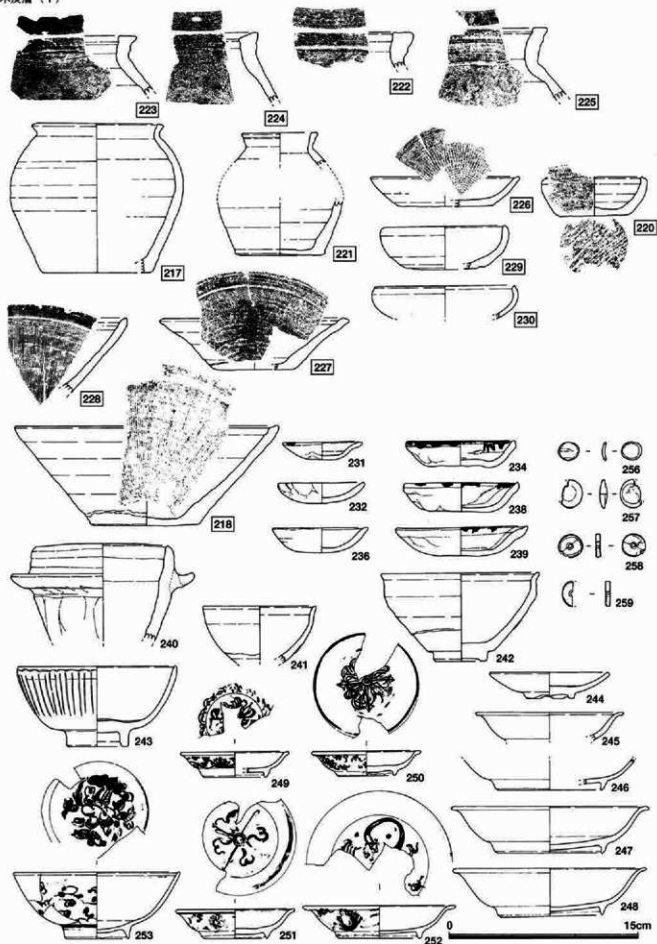


越前焼181～185 土師質土器187～263 鉄軸207・208 灰釉205・209～213 青磁204・206 白磁214・215

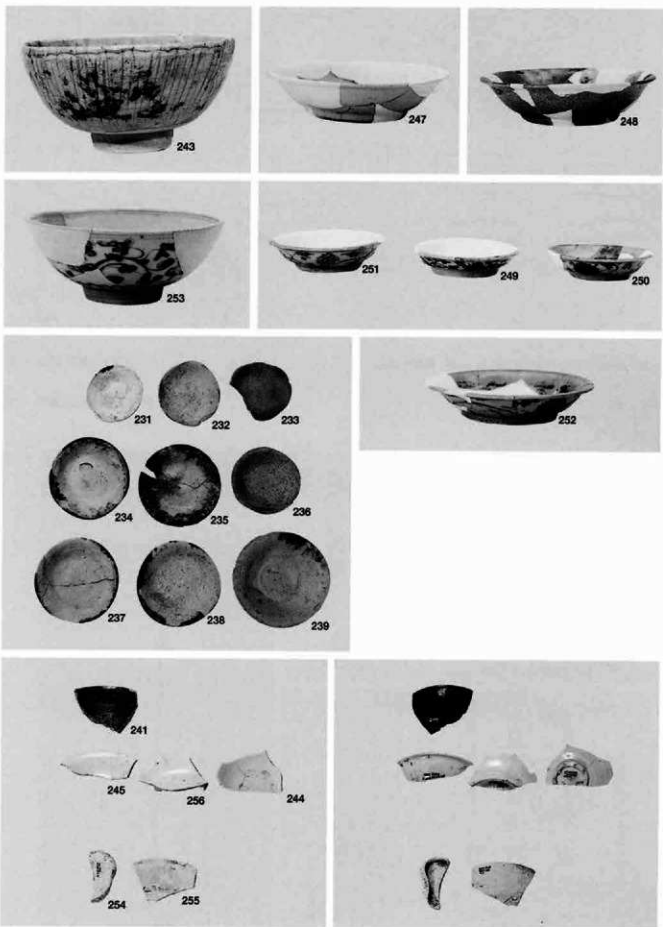


第47図 第17次調査出土遺物 (6)

木炭層 (1)



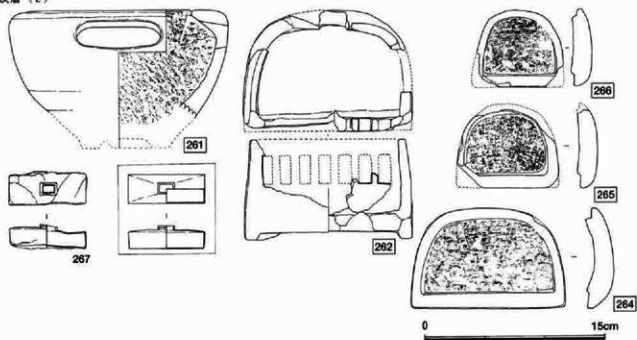
越前焼栗・窓・楕鉢・鉢217・218・220~230 土師質土器皿・土釜231・232・234・236・238~240 鉄輪碗241・242 青磁碗243
白磁皿244~248 青花白磁碗・皿249~253 骨製品蓋・壺子256~259
(図中口数字は縮尺1/6)



土師質土器231～239・254・255 鉄釉241 青磁243 白磁244～248 青花白磁249～253

第48図 第17次調査出土遺跡 (7)

木炭層 (2)



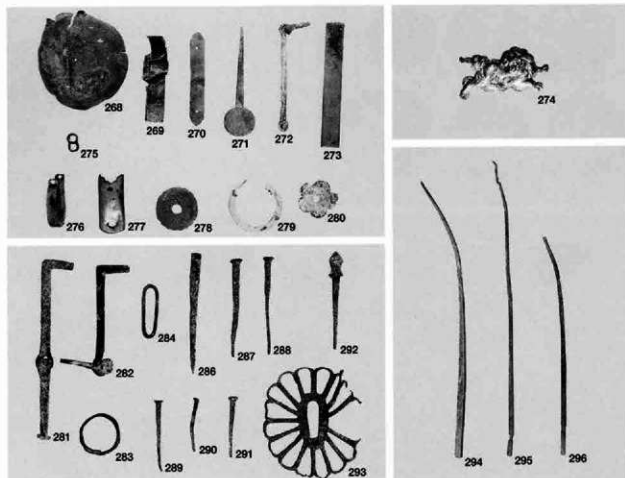
石製火鉢261 バンドコ身262 蓋264~266 銅製水筒267

(図中□数字は縮尺1/6)

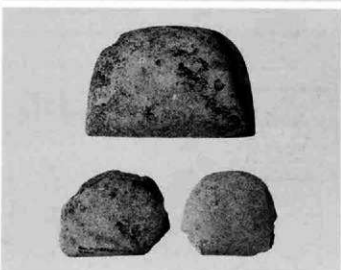
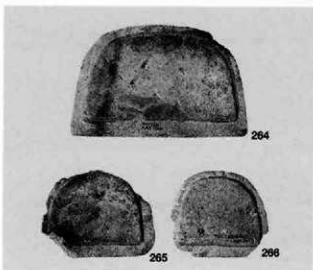
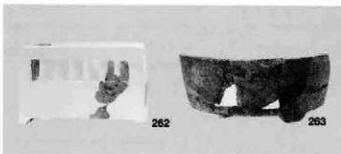
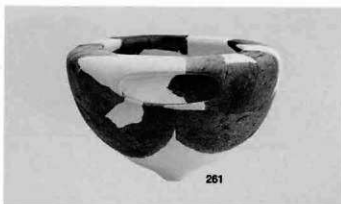
PL. 53

第17次調査出土遺物 (11)

金屬製品



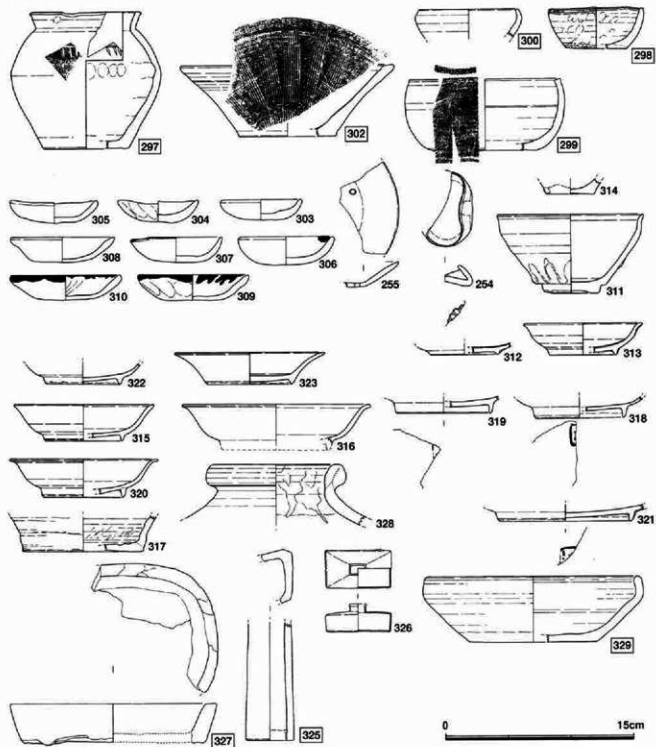
小柄269・273 飾金具270 備止272・281・283 金目貫274 寶剣275 寶金具276・283 縁金具277 不明278~280
鉄釘286~291 釘293 火箸294~296 口金物284



褐輪四耳壺260 石製火鉢261 バンドコ身262 蓋264~266 石製鉢263

第49回 第17次調査出土遺物(8)

整地層

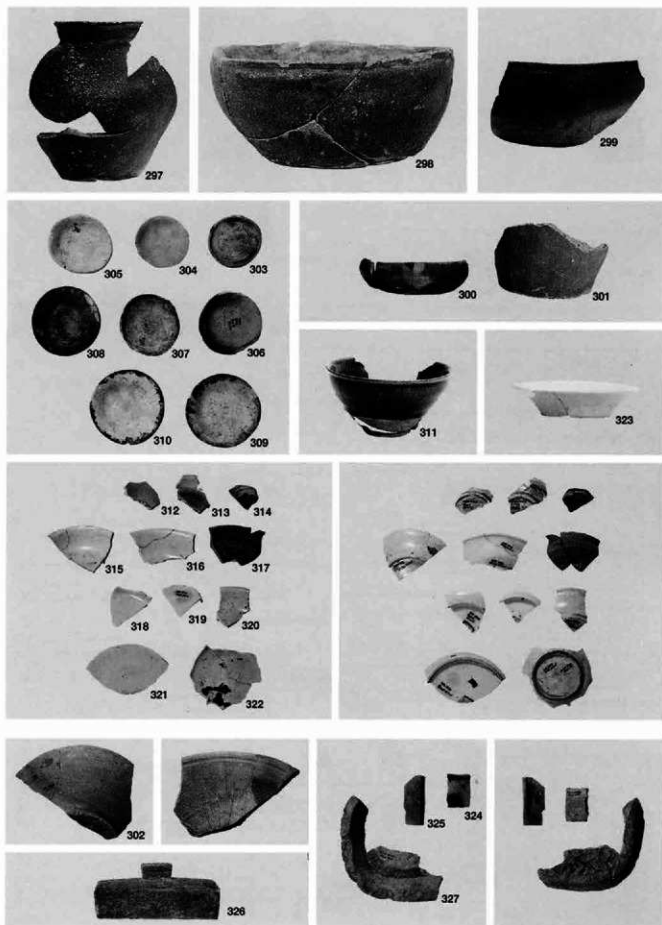


越前焼壺・搦鉢・鉢297~300・302・325 土師質土器皿303~310・254・255 鉄胎碗・茶入311・314 灰釉皿312・313

白磁皿315・316・318~323 産地不明壺・鉢317・329 石製盤327 銅製水滴326

(図中□数字は縮尺1/6)

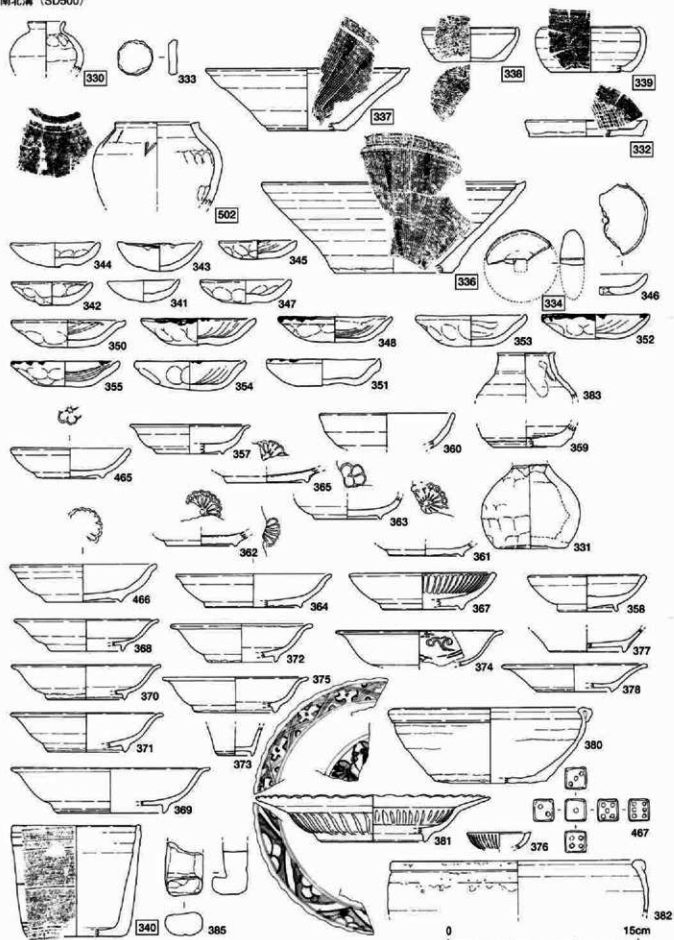
整地層



越前焼297~302・324・325 土師質土器303~310 鉄釉311・314 灰釉312・313 白磁315・316・318~322 産地不明317
石製盤327 銅製水滴326

第50図 第17次調査出土遺物(9)

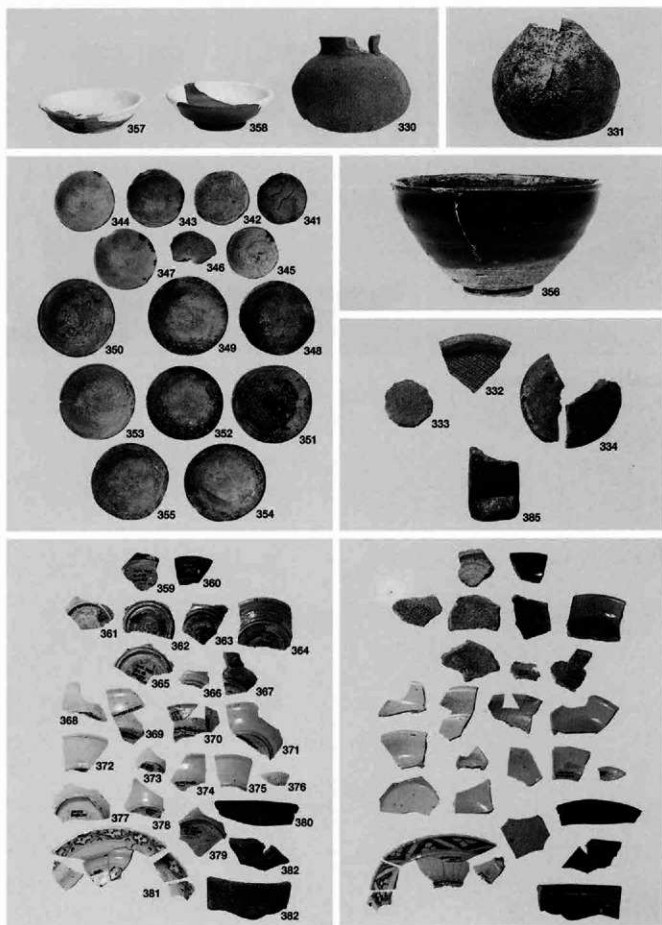
南北溝 (SD500)



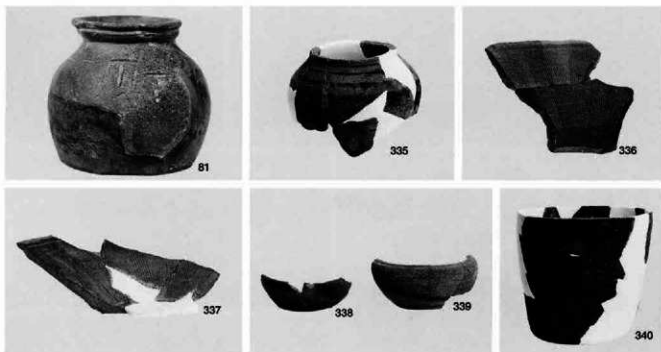
越前焼壺・楯鉢330～339 土師質土器皿341～355 鉄軸皿・窓357・359・360・383 灰釉皿357・361～365・367・465・466

青磁皿358 白磁皿368～378 朝鮮製鉢380・382 青花白磁皿381 産地不明水指340 石製品釣手385 サイコロ467

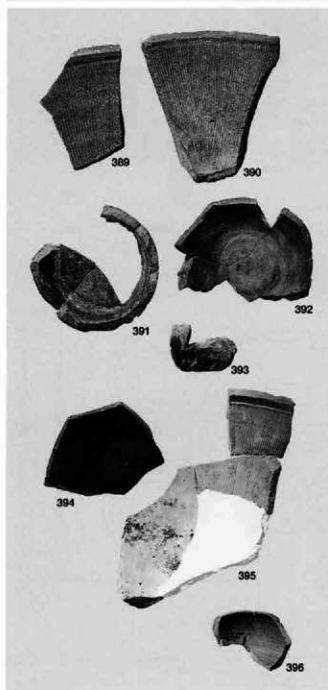
(図中□数字は縮尺1/6)



越前焼330~334 土師質土器341~355 鉄釉356・359・360 灰釉357・361~367 青磁358 白磁368~379 青花白磁381
朝鮮製380・382 石製品385



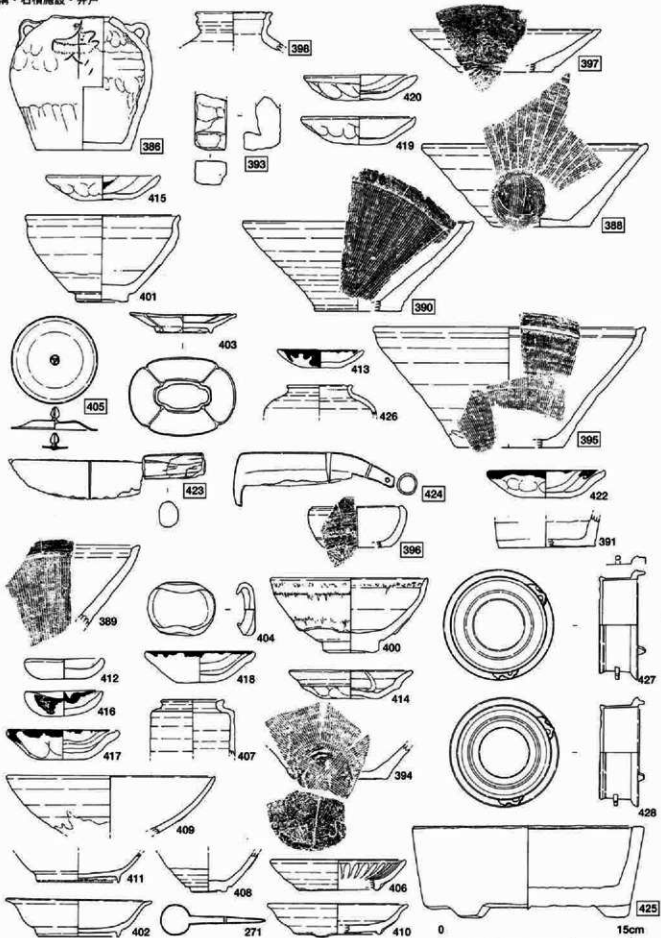
越前焼81・335～339 産地不明340



甗前焼386~392・394~396 石製の手393

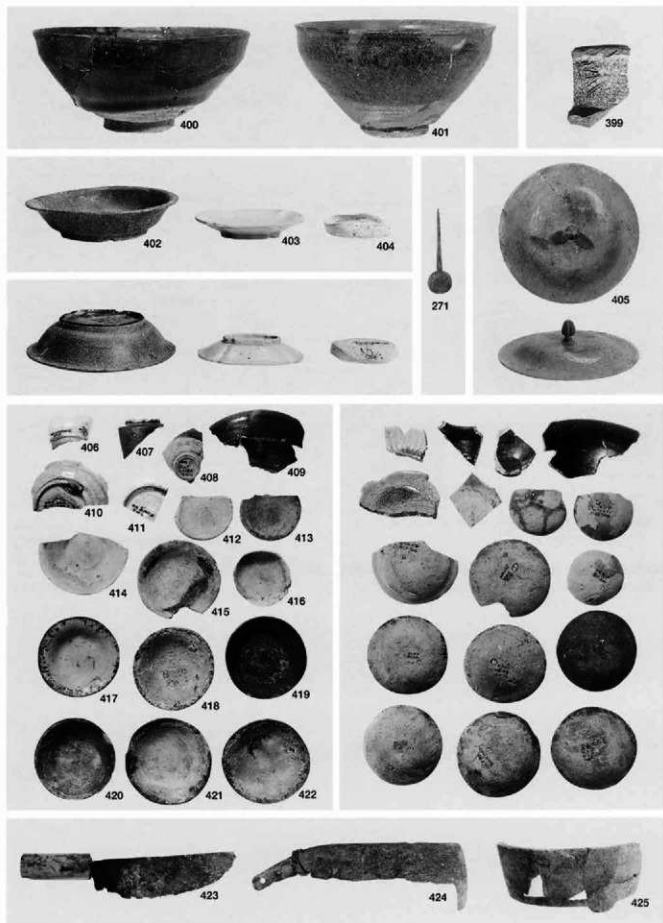
第51図 第17次調査出土遺物 (10)

溝・石積施設・井戸



越前焼壺・鉢・指鉢386・388～391・394～398 土師質土器皿404・412～420・422 鉄輪碗・茶入401・407・408・426
 灰釉皿406・410 白磁皿402・403・411 鉄輪碗(中国)400 銅製品匙271 鉗427・428 銅製蓋405 包丁423 鉈424
 石製盤425

(图中□数字は縮尺1/6)

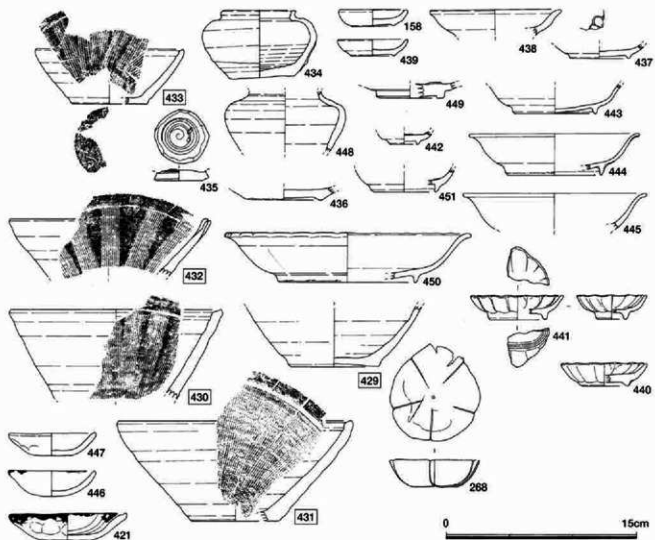


越前焼399 土師質土器404・412~422 鉄種400・401・407~409 灰種406・410 白磁402・403・411 銅製匙271

銅製蓋405 包丁423 鉈424 石製盤425

第52図 第17次調査出土遺物 (11)

その他の遺物

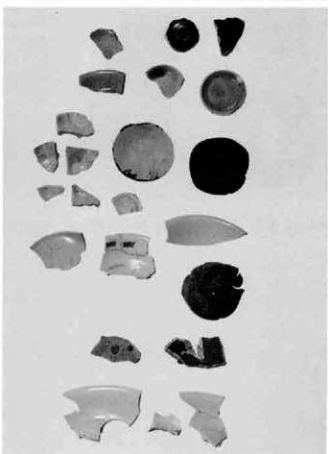
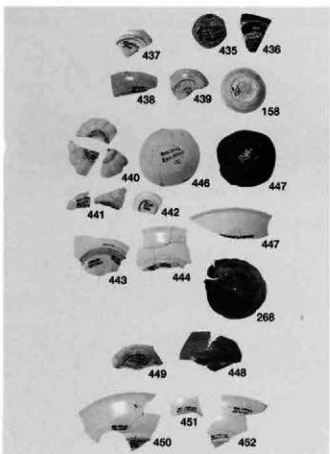
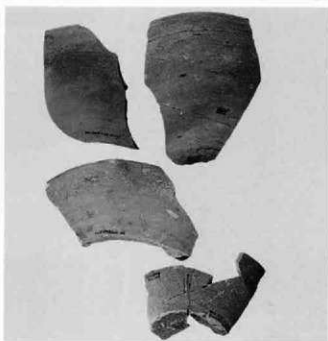
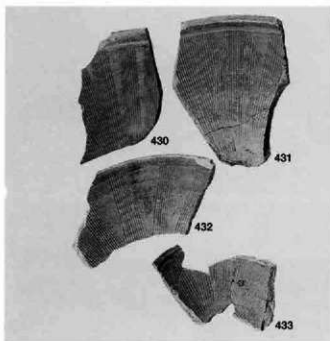


越前焼壺・摺鉢429～433 土師質土器皿421・446・447 鉄釉茶入・碗高台434～436 灰釉皿158・437～439

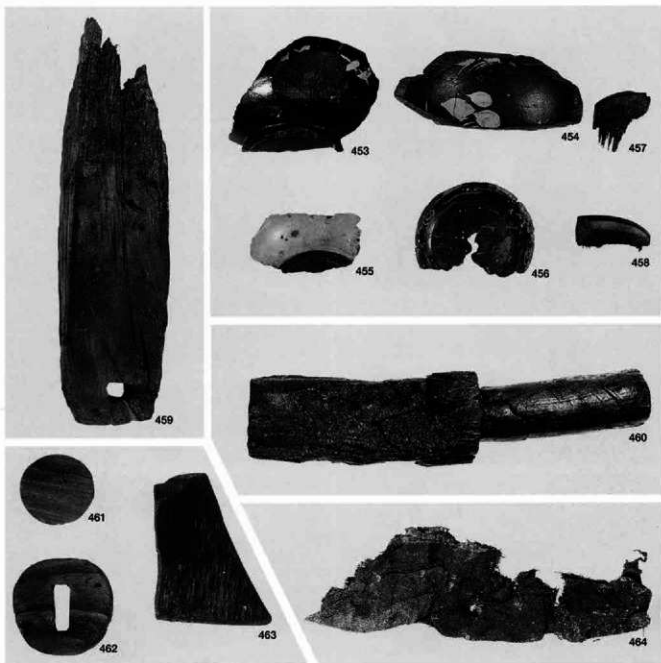
白磁皿440～445・450・451 銅製輪花皿268

(圖中□数字は縮尺1/6)

その他の遺物

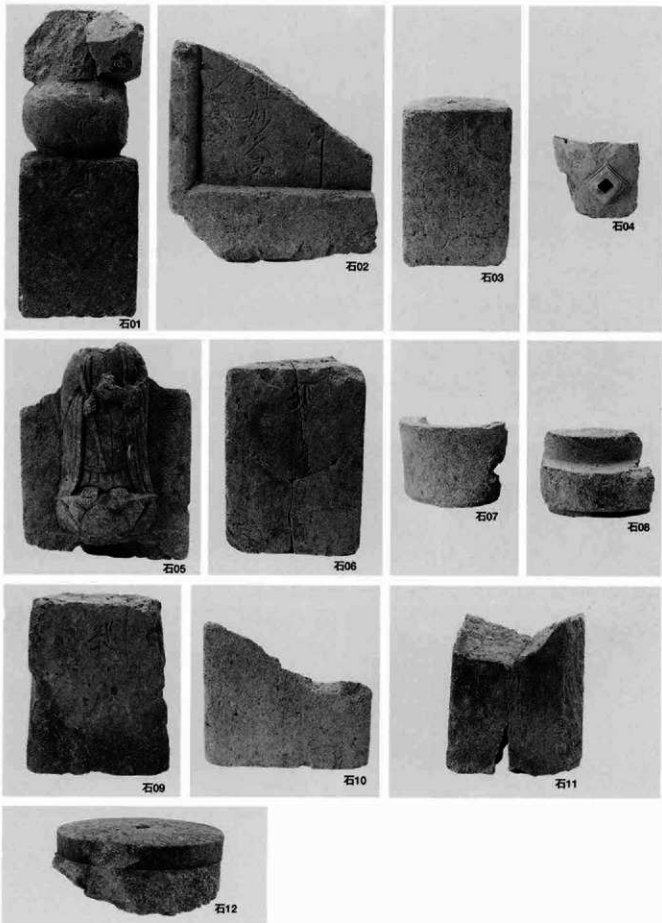


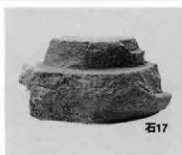
越前焼429～433 土師質土器446・447 鉄釉434～436・448 灰釉158・437～439・449 白磁440～445・450～452



柱材459 鉢460 曲物461 鐸462 鐸463 漆皿456 碗453~455 櫛457・458 編布464

石製品 (1)





板碑石13~15 組合五輪塔石19 地藏仏石22・23 茶臼石16~18・20・21

石製品 (3)



石24



石25



石26



石27



石28



石29



石30



石31



石32



石33



石34



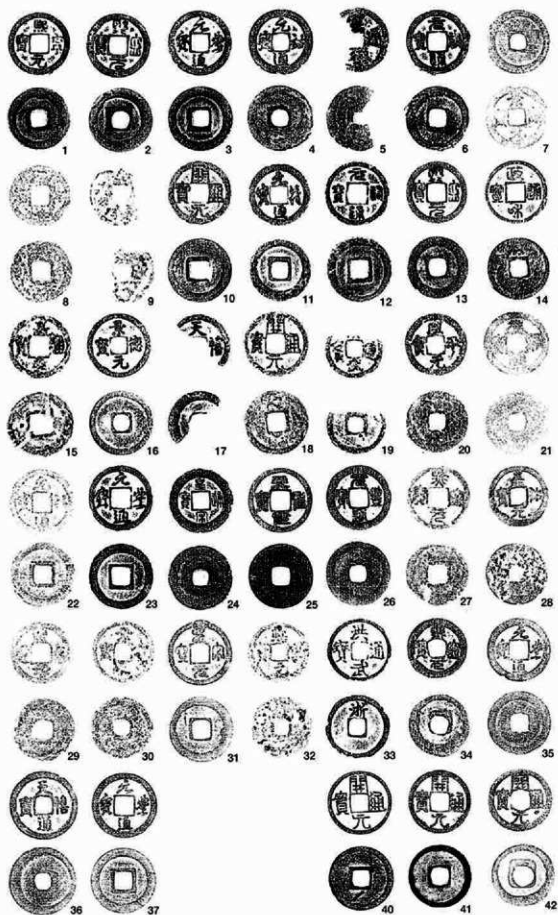
石35



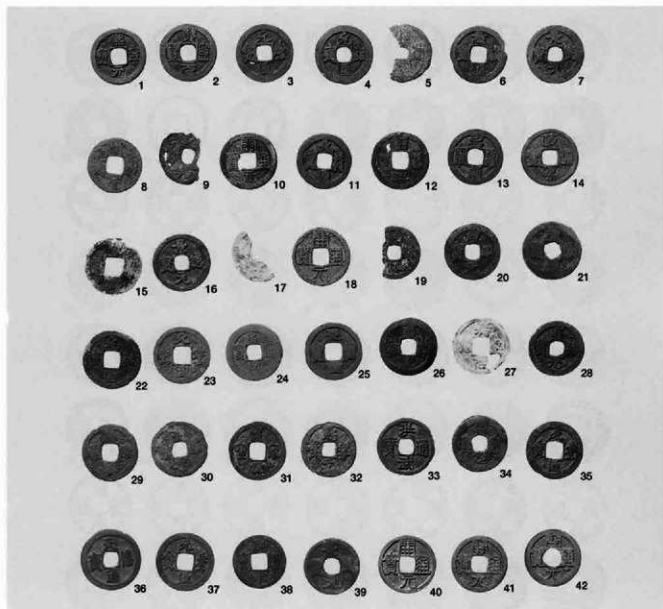
石36

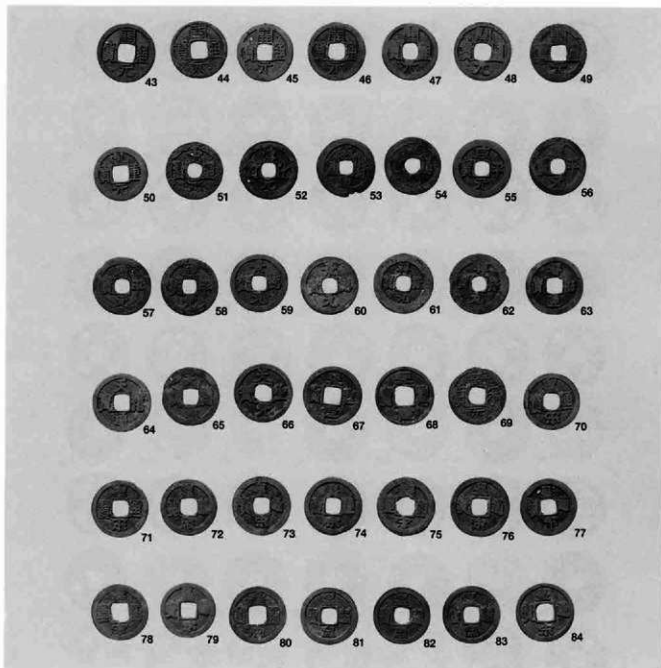
第53図 第17次調査出土遺物 (12)

銅錢拓影 (1)

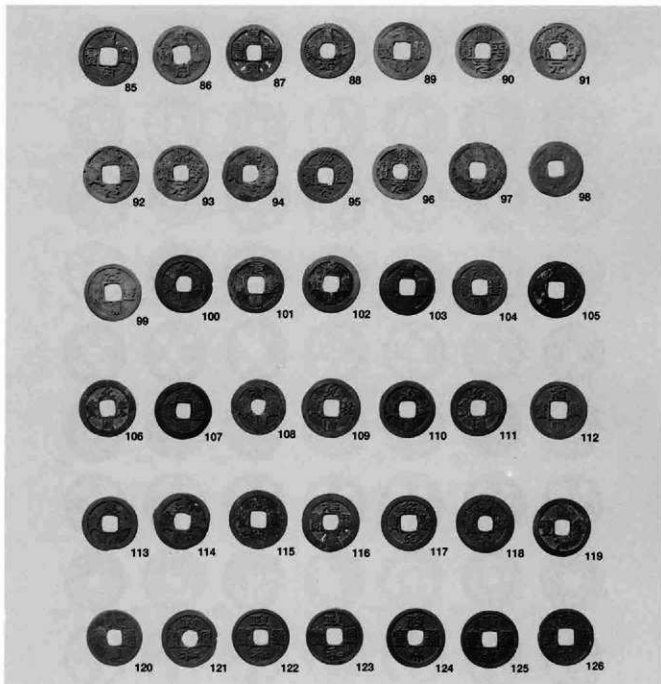


銅銭 (1)

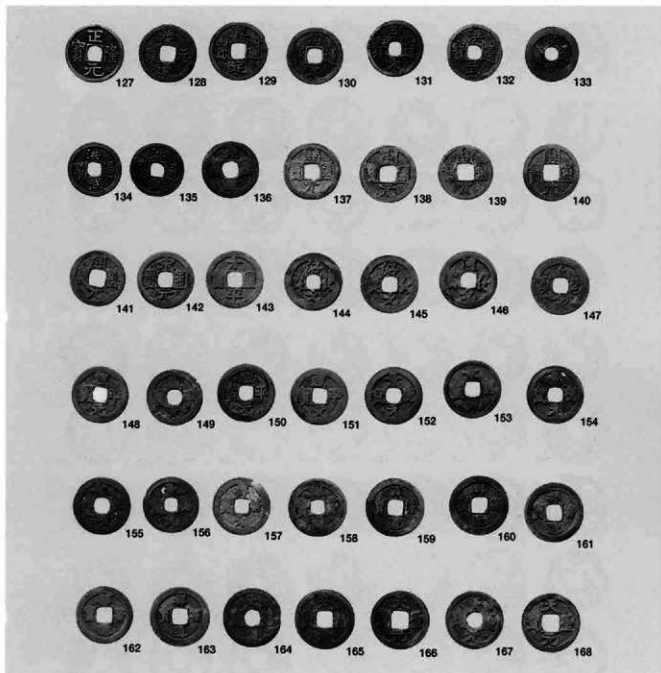




銅銭 (3)



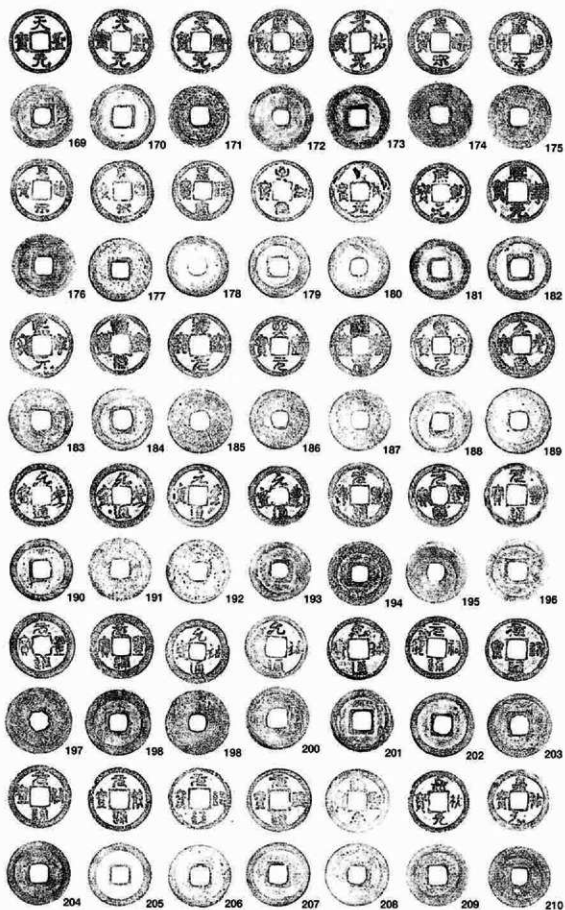
銅銭 (4)



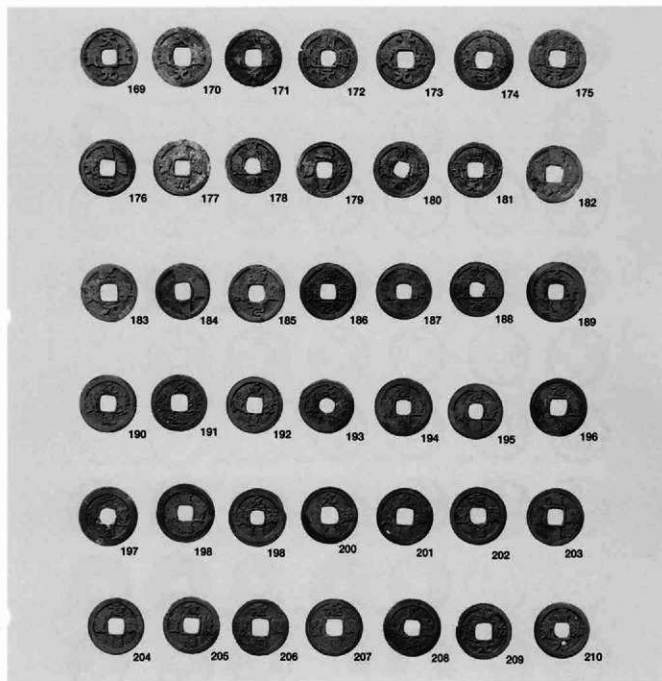
銅銭127～168

第57図 第17次調査出土遺物 (16)

銅銭拓影 (5)



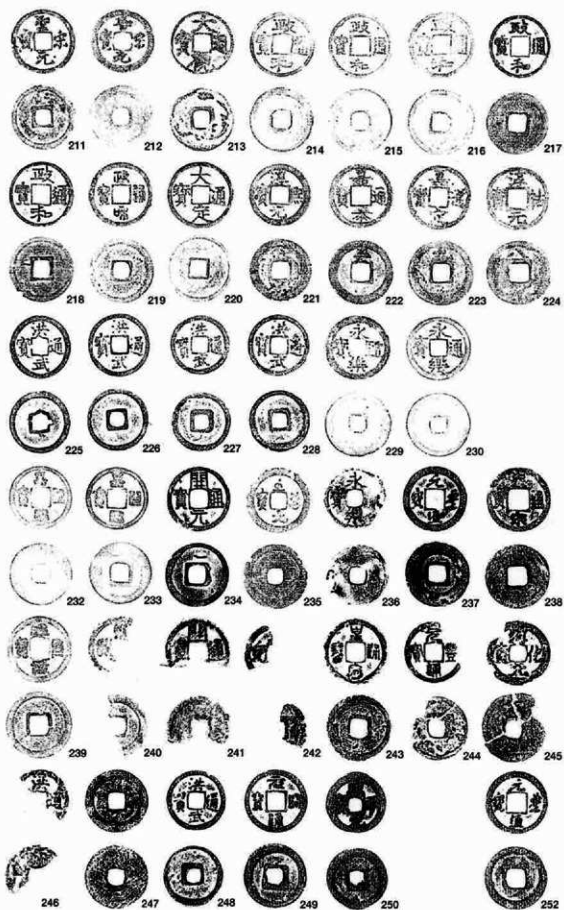
銅銭 (5)

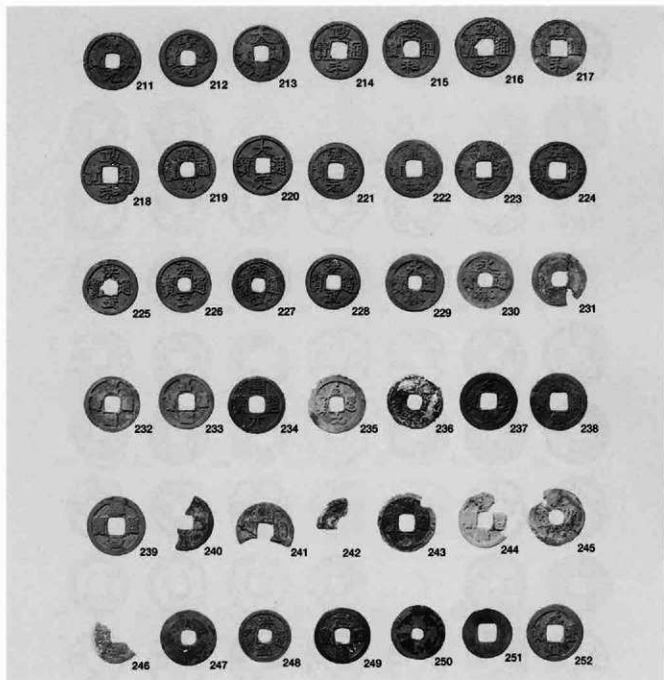


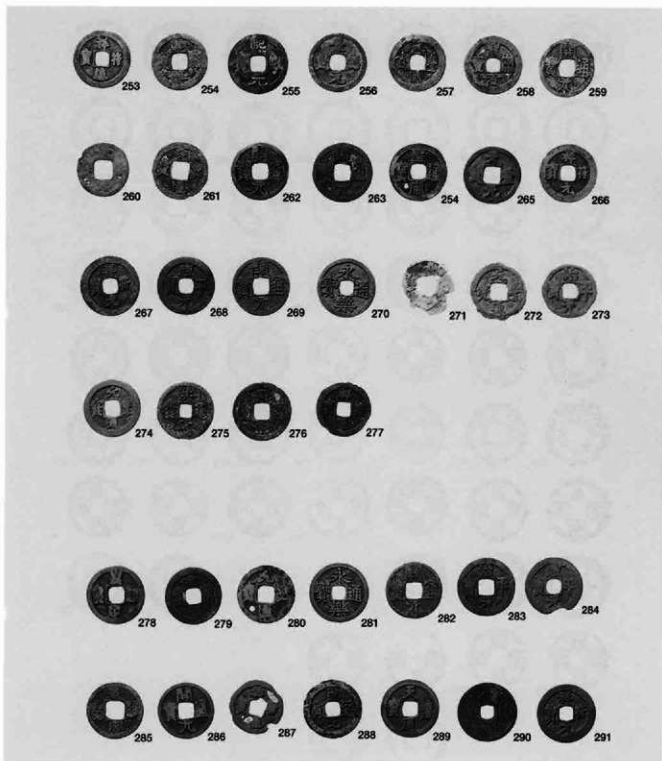
銅銭169~210

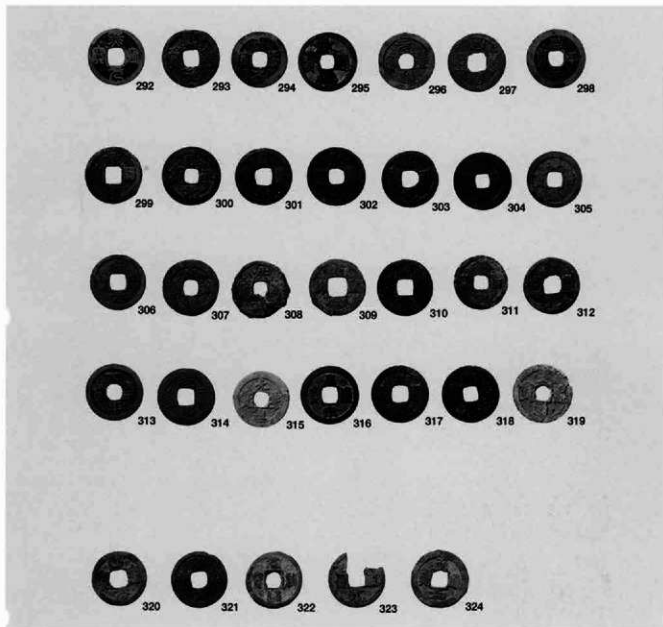
第58圖 第17次調査出土遺物 (17)

銅錢拓影 (6)









IV 考 察

Ⅳ 考 察

朝倉氏の信仰と一乗谷の社寺

はじめに

今回の報告書種から一乗谷の赤瀧・奥間野・吉野本地区の発掘調査の結果を報告することになった。この地区の地字の赤瀧・奥間野・吉野本の名称はそれぞれ赤瀧・熊野・吉野等神社地名に類似しており、また春日神社蔵「一乗谷古絵図」にはこの付近の山際にそって「遊国寺跡・赤瀧神社跡・天正寺アト・西光寺アト・法万寺アト」等の注記が付けられ、社寺の跡地の伝承が記されている。さらに第17次調査地は地元でも「サイゴージ」といわれている。そして発掘調査の結果、調査区の西側部分からは良好な寺院遺構が検出され、また宗教的な遺物が出土した。また南隣の第40・46次調査地からも寺院や墓地の遺構が検出され、こけら葺や卒塔婆、位牌をはじめとする多数の宗教遺物が出土している。その後平成元年には南陽寺跡が発掘調査され、平成6年から西山光照寺跡、同7年から安養寺跡の調査が行われ、引き続いて環境整備事業が実施された。この南陽寺・西山光照寺・安養寺は一乗谷の代表的な大規模寺院であり、発掘調査や石仏・石塔の再調査の結果、一乗谷の寺院に関する新たな知見を得ることができた。こうした調査の成果を視野に置いて、ここでは朝倉氏の信仰と一乗谷の社寺についてごく簡単に歴史的な考察を加えることにしたい。

1. 朝倉氏の神社崇敬

朝倉氏の氏神は但馬日下部氏の氏神である赤瀧大明神である。本報告書で報告する第17次・第44次調査地の字赤瀧の名称がこの赤瀧大明神に由来することはほぼ疑いないと思われる。その位置は詳らかでないが、前述の古絵図にもその注記があり、城戸の内のこの地区に伝承地があったようである。一乗谷ではこのほかに山城に赤瀧神社と観音屋敷の跡があったと伝えられ、また松雲院には赤瀧大明神を祀った小祠があった。ただこの松雲院内の赤瀧神社は朝倉氏滅亡以後に移されたものであろう。

越前朝倉氏が初めて赤瀧大明神を一乗谷に勧請したのがいつであるか記録がないので詳らかでないが、「春沢録」所収の朝倉前美作守左金吾空海覚性大禪定門二百年忌拈香の香語に、広景は「赤瀧明神の苗裔を承る」と記されているので越前入国早々から赤瀧大明神を崇敬したことは事実であろう。また大永3年(1523)11月朝倉孝景はその館の長に一寺を建立し、その鎮守として赤瀧大明神を勧請している。この時孝景が建立した寺院については詳らかでないが、このように新たに作られた寺院の鎮守として赤瀧大明神が祀られていることに注意される。また赤瀧大明神の本社である但馬の赤瀧神社に伝わった文書によれば、朝倉義景は「三社大明神」の神体を越前に勧請することを赤瀧別当坊に要請している。このように義景の代にはその本社も一乗谷に建立されていた。以上のように赤瀧大明神が一乗谷で最も重要な社寺であることは明らかであり、一乗谷の中に複数の赤瀧神社があったことが想像される。

次に朝倉氏と一乗谷に重要な関係を有したのが照野である。「熊野郡智大社文書」の応永2年(1395)11月12日しやうちやういん借錢状によれば、借錢の質として「あちぜんのみあさくら、かいのくにあさく

ら、おはりのあさくら、そうして日本のあさくらハ一糸んにミやうしちに入れ申すところ実なり」といわれ、越前朝倉氏の熊野参詣の檀那職が確立していることがわかる。応永11年(1404)に没した朝倉氏景が平生深く熊野を信仰し、一乗に熊野神社を建立したという所伝はこうした確実な古文書の存在によってその真实性はかなり高まるものと考えられる。この氏景が建立した熊野社の位置は詳らかでないが、「奥間野」という字名が熊野に関係するという推測は無視できないものと思われる。そして「吉野本」についても詳らかでないが、吉野修験に関係するという推測も可能であろう。

その他一乗谷には八幡・祇園・愛宕・諏訪などの神社が朝倉氏によって勧請されており、また安波賀には朝倉氏入部以前から春日神社が存在していた。この春日神社の勧請は社伝によれば平安中期の治暦4年(1068)のこととされ、おそらく近衛家領宇坂庄の荘園鎮守として本家の祇園家によって勧請されたものと想像される。このように一乗谷には朝倉氏の氏神の赤淵神社をはじめとしてその他京都近辺の有力神社があり、朝倉氏はあつくこれらを崇敬した。これらの神社の形態は、遺構的にはまったく確認されませんが、当時の神社のあり方が神仏混交の形態であったことを思うと、神社と別当寺が一体となったものであることが考えられる。また個別寺院にも鎮守として勧請されていたことが赤淵神社の実例からうかがえる。

2. 朝倉氏の寺院建立

但馬から越前に入国した朝倉氏景が創建した朝倉氏の氏寺が安居の弘祥寺である。その創建は康永元年(1342)であり、非常に早い時期にあたる。その地は当時の朝倉氏の根拠地の西端部に当たり、朝倉氏は以後歴代建仁寺洞春庵を中心とする曹洞宗安智派を宗旨とした。この弘祥寺は応永19年(1412)11月25日に十刹に列し、越前で最も格式の高い官寺となった。

広景の子高景は三尾野に大学寺を建立し、鵜の紫岩如琳を開山とした。三尾野は安居の南約8kmに位置する。この世代までは一乗谷の西約10kmほどのところに寺院を建立している。

一乗谷に建てられたことがはじめて知られるのが南陽寺である。南陽寺は高景の子氏景の室天心清祐が建立した寺で朝倉義景館の東北に大規模な寺地が残されており、平成元年の第64・65次調査でその主要部分が発掘された。また氏景の孫教景(心月)の弟頼景は坂南本郷に竜興寺を創建して檀那となった。

このように初代孝景以前に朝倉氏は多くの寺院を創建しており、それらは大体朝倉時代にわたって存続したとみられる。ただ一乗谷に集中的に寺院が作られていくのは初代孝景以降のことである。孝景は一乗谷に心月寺を創建した。この「心月」は彼の祖父教景の法名で孝景は父家景が早く没したため、祖父教景から跡を継いだのであり、心月寺はこの教景の菩提寺である。3代貞景は永正3年(1506)の北陸一向一揆の越前侵攻の時に討死した人々のためにその翌年に安波賀に経堂を建立し、法華経読誦の法会を毎年行った。また京都の清水寺に法華堂を建て不断経の行事を行った。その他一乗谷の南陽寺の仏殿と方丈を建てた。

4代孝景は弘祥寺の方丈・仏殿・僧堂を再興し、また英泉寺を建立した。その他英林寺・天沢寺・遊楽寺・経藏を建立した。英林寺・天沢寺はそれぞれ初代孝景・貞景の菩提寺で、遊楽寺は愛宕社の別当寺である。また孝景の男性安窟を寺号とする性安寺は彼の晩年の居所にちなむものであろう。このように4代孝景は37年にわたる治世の間に多くの寺院を建立し、その多くが一乗谷に作られたようである。これに対して最後の5代義景が建立した寺院については今のところあまり知られない。

以上のように朝倉氏当主とその一族は歴代寺院建立に力を入れ、氏寺・檀那寺・菩提寺などが整備されていった。一乗谷に朝倉氏の寺が集中的に建てられるようになったのは初代孝景以降で、特に4代孝景は造寺や神社の勧請に積極的だった。

3. 朝倉氏の仏教信仰

朝倉氏の信仰や宗教行事の具体相を語る資料は少ないが、最も盛大な宗教行事である歴代当主の遠忌法会の香語がいくつか残っておりその手がかりとなる。たとえば永正10年（1513）に行われた初代朝倉孝景の33年忌の法事では、時の当主4代孝景が、その本宅に道場を荘厳し、10人の僧侶にお経や呪文を唱えさせ、禪定を修し、虚空蔵菩薩像1体を作り、毘盧藏を転開し、法華経を頓写・漸写し、その他様々な作善を行い、7月26日の忌日当日に盛大な法会を執り行っている。ここで注目されるのが一切経転開と法華経書写である。前者は4代孝景の一切経蔵建立に直接関わることであり、後者は法華経信仰のあつさを物語っている。その他清水寺の観音に対する信仰や真盛上人の教え、また浄土宗、真言宗など広い信仰の形態があった。三国の滝谷寺には多くの4代孝景の書状があり、例えば「来る十五日吉日に候桑、祈禱の儀申し入れたく候、然れば十四日にお越しあるべく候」などと一乗谷に来ることを滝谷寺に命じている。一乗谷に天台・真言などの旧仏教の寺院が比較的少ないのは、こうした形で彼らの宗教活動が可能だったからであろう。朝倉氏の信仰の形態は実に多様であり、現在残っている朝倉氏当主の書状の大部分がそうした信仰関係の寺社文書であり、それらについて実体の説明が可能である。ただしそれらの文書は一乗谷の外部の寺社と往復したものが主であり、一乗谷に所在する寺院内部の具体的な宗教活動の詳細を示す文書は少ない。

4. 一乗谷の寺院

これまでの調査の結果、一乗谷の上城戸や下城戸の外部にはかなり大きな規模の寺院があったことが確認されている。まず上城戸の南約400mに位置する安養寺は浄土宗の寺院で寺伝によればもと武生にあり、文明5年（1473）朝倉孝景が一乗谷に建立したといわれる。足利義昭が一乗谷に下向した際、朝倉義景はこの安養寺に御所を造営して滞在させた。その故地が宇御所・御所口・安如寺・安養寺などの地でその規模は南北200m東西80mほどにも及んでいる。また下城戸の外約400mに位置する西山光照寺も80×160mもの規模を持つ大寺院である。この光照寺は朝倉氏景の外祖父島羽将景の菩提を弔うために再興された寺院で天台真盛宗の寺院である。上城戸の外約600mに位置する盛源寺とともに多数の石仏・石塔が現存している。これらの寺院は朝倉氏からあつい保護を受けたであろうが、朝倉氏の氏寺そのものとは一応別であり、より広い一族、および家臣団の帰依なくしてはこれほど大規模の寺院を維持していくことは不可能であっただろう。

天台真盛宗の外に一乗谷に積極的に進出したのが法華宗の各宗派である。まず正法寺は教賢本勝寺の日従上人が応永34年（1427）に一乗谷へ移り建立されたと伝えられる。また現在本能寺末の顕本寺は文明元年（1469）開山日崇上人が八地谷に建立したと伝えられるが、『松下集』には京都妙満寺末とみえる。善行寺は延徳年中（1489～92）に開祖通観が一乗谷に建立し、のちに京都妙顕寺末妙性寺となった。本園寺末本妙寺は日祝僧都が永正17年（1520）一乗谷に建立し、安波賢に寺跡があったといわれる。妙

経寺は京都妙満寺末で妙満寺22世日長上人が享禄元年（1528）ころ一乗谷に建立したという。教徳寺は京都妙覚寺末で開祖日心上人が天文6年（1537）一乗谷に建立したという。その他京都本隆寺5世日誦上人は今京浦の中屋の出で一乗谷に慶隆院を構えた。このように京都の法華宗の各本山がそれぞれ一乗谷に末寺を建てていった様子がうかがえる。

以上のように一乗谷にあった寺院は必ずしも当主朝倉氏のものだけではなく、かなり広い宗派の進出が許されていたとみられる。それは一乗谷の住人たちの宗教的な要求に応えるものであり、また朝倉氏の宗教観の多様性と寛容さを示すものであろう。

5. 検出された遺構について

本報告書で報告された第17次・第44次調査区の遺構について第17次調査地の西半分のⅡ・Ⅲ期遺構が建築的考察から寺院の可能性が高いとみられ、また第44次調査地の西部の道路を挟んで向かい合う2つの中規模屋敷や門S I 2532・2533から入る未調査の大規模な屋敷が寺院に関係するのではないかという想定が可能と思われる。また第17次調査区について地元で「サイゴージ」といわれていることも考慮しなくてはならない。この「サイゴージ」は古絵図の「西光寺」に相当し、また「慶長三年城戸内検地帳」の字「さいかうじ」に相当するものと思われる。ただし前者の古絵図は幕末の弘化4年（1847）以降に描かれたものであり、後者の検地帳なるものも現存せず、史料的な価値が高いかどうかは必ずしも判断できない。一方西山光照寺の末寺の西厳寺の名を刻んだ石裂盤が字奥間野の第49次調査地から出土しており、同寺は近世「さいこん寺」と表記されることから、「サイゴージ」が西厳寺に相当する可能性もでてきた。このように伝承地名「サイゴージ」の解釈は結論を見出せないが、いまのところ「さいかうじ」あるいは「西光寺」の歴史的性格に関する史料がみられない以上、こうした伝承から導き出される議論は不確定なものにならざるをえないといつてよいだろう。むしろ遺物による所見は、法華経信仰を示すものであり、天台真盛宗あるいは浄土宗のものからは遠い。第17次調査区の17-I区画について小結の建築的考察で指摘されているように、法華宗の宗派寺院との関連も想定されるところである。ただ今回の第17次・第44次調査区を含む字名である赤澤に注目するならば、これらの調査区の内部、もしくは近隣に赤澤大明神に関連する宗教施設があったことが確実であり、その解明は今後の検討課題として残るのである。

附記 本稿の史料的な根拠については平成11年発行の当館図録「第10回企画展 一乗谷の宗教と信仰」を参照されたい。

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせきはつちつちようきほうこく
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 発掘調査報告書
副書名	第44次 第17次調査
シリーズ番	8
編集者名	南洋一郎 佐藤 圭 水村 伸行 宮永 一美
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 Ⅱ0776-41-2301
発行年月日	平成13年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯 〇°〇′	東経 〇°〇′	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
第44次調査	福井市城戸ノ内町字赤沼	18210	史-31	35°59′35″	136°17′48″	2,600㎡	環境整備に伴う発掘調査
第17次調査	福井市城戸ノ内町字赤沼	18210	史-31	35°59′33″	136°17′46″	2,050㎡	同上

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第44次調査	町屋	15・16世紀	道路3、溝27、土塁及石列8、礎石建物15、門1、井戸17、石積施設7、奥壇設遺構1	越前焼、土師質皿、鉄輪壺、灰輪皿、青磁碗皿、白磁皿、染付碗皿、金属製品、石製品	南北主要道と、それに直交する東西道路際に整然と並ぶ町並を検出
第17次調査	町屋 寺院	15・16世紀	道路6、土塁2、石垣4、溝20、礎石建物20、井戸3、石積施設16、門3、掘立柱建物2	越前焼壺、壺、福鉢、土師質皿、羽釜、土鈴、小壺、鉄鉢、灰輪陶器、瓦質、青磁・白磁・素付、金属器、石製品	東西道路に面した山際に検出された寺院跡など

平成13年3月20日 印刷
平成13年3月31日 発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅶ

第44次 第17次調査

執筆・編集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4-10
印刷 河和田屋印刷株式会社



